



戦間期シベリア、モンゴルの政治・社会  
システムの改編：1917-1941年

課題番号 13571031

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）

研究成果報告書

平成16年 // 月

研究代表者 寺山恭輔

（東北大学東北アジア研究センター 助教授）

## 研究組織

- 研究代表者：寺山 恭輔（東北大学東北アジア研究センター助教授）  
研究分担者：栗林 均（東北大学東北アジア研究センター教授）  
研究分担者：岡 洋樹（東北大学東北アジア研究センター助教授）  
研究分担者：高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター助教授）  
研究協力者：パプコフ（С.А.Папков、ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所）  
研究協力者：ナウーモフ（И.В. Наумов、イルクーツク国立工科大学）  
研究協力者：クラス（Л.В.Курас、東シベリア国立文化芸術アカデミー（ウランウデ））  
研究協力者：ドゥビーニナ（Н.И.Дубинина、ハバロフスク国立教育大学）  
研究協力者：ペスコフ（В.М.Песков、ハバロフスク国立教育大学）

## 研究経費

平成 13 年度	3.100 千円
平成 14 年度	2.100 千円
平成 15 年度	2.000 千円
計	7.200 千円



## はじめに

本研究は 1920 年代から 1930 年代の戦間期を中心とする時期のソ連のシベリア・極東地域とモンゴル地域の政治体制、社会体制の状況、変容に焦点を当てようとしたものである。寺山、高倉がシベリア・極東地域、栗林、岡がモンゴル地域を担当し、各自が独自のルート・手法により現地でのフィールドワークを実施した。さらに寺山が訪問したシベリア・極東地域の 5 人の研究者、すなわちパプコフ（ノヴォシビルスク）、ナウーモフ（イルクーツク）、クラス（ウランウデ）、ドゥビーナ、ペスコフ（ともにハバロフスク）の各氏には研究協力者として加わっていただき、多忙な中にもかかわらず本研究報告にも寄稿していただいたことに謝意を表したい。すべてロシア語の論文であるがこのまま掲載した。特に海外の未知の土地におけるフィールドワークは、現地研究者の協力を得ることがきわめて有効であり成功の鍵でもあることを痛感したが、今回の科研費用でこれらの人的ネットワークを構築することができたので、今後の研究にも一層役立てるのではないかと考えている。以下に簡単に寄稿論文の内容を紹介することにする。なお、モンゴル語フォントを印刷するため、ロシア関連の論文 7 編のあとに岡、栗林論文を掲載した。

寺山は 1930 年代に強化されていく鉄道網の建設や国防・金採掘産業の拡大、それに利用された囚人労働の強化、様々な組織で極東問題にかかわった著名人物、戦後の日本人抑留者問題などについて、極東地方で収集したソ連崩壊後の新聞、雑誌史料に現れた新事実や極東現代史探求の傾向についてまとめようとした。

高倉は帝政時代から革命をへてソ連時代を通じたサハ（ヤクート）研究の歴史を概観し、ことに 1920-30 年代はサハ人の民族学者が始めて学術研究を展開し始めた時期として注目するが、近年再び脚光を浴びつつある代表的なサハ人知識人 3 人（スターリン時代の粛清で忘却の淵に追い込まれたものを含む）、すなわちニキーフォロフ、クラコフスキー、クセノフントフ及び体制派知識人の活動、生涯に焦点を当てて、サハ研究におけるこの時代の持つ意味を明らかにした。

パプコフは対独戦争時のソ連国内の司法体制の特徴について、戦争を勝利に導くための国内規律の強化を目指した組織の改編、刑法事案適用範囲の拡大、軍法会議やエヌカヴェデの特別会議など非司法機関による反革命罪適用の拡大などを列挙し、死刑の適用は緒戦の危機的な状況を脱すると、後方での労働力への利用のために減少していったことを、豊富なアルヒーフ史料を駆使して論証した。

ナウーモフは東シベリア地方のオゲペウ（1930-1934 年）、エヌカヴェデ（1934-36 年）の活動について、その組織構成、スタッフ、地域構成などを概括し、集団化や農民蜂起への対応、他地域から強制的に移住させられてきた元富農のスペツペレセレンツィへの対応、工業化への協力、企業や倉庫、備蓄物資の管理、密輸組織との闘い、反宗教活動や矯正労働ラゲリの管理など個別的な活動について FSB の秘密史料を利用して詳しく紹介している。

クラスは、特にソ連の諜報機関が収集した情報をもとに 1942 年にチタで編纂された三巻本の極秘文書「満州における白系亡命者」や地元の旧 KGB アルヒーフの一次史料を活用しながら、戦間期の満州におけるロシア人ファシスト団体について、リーダーであるロ

ザエフスキーをはじめとする幹部の人物像や組織の構造、構成メンバー等について論じている。

ドゥビーニナは 1930 年代の満州における日本人とロシア人の関係に関して、特に「満州国」政府の承認のもとに設置（1934 年）され、各種のロシア人亡命者団体を糾合した組織である「ロシア人亡命者問題局」の活動内容を概観し、それと日本の特務機関の相互関係にも焦点をあて、ロシア人亡命者の「満州国」における地位には限界があったことを示した。

ペスコフは 1920 年代末から強まる日本の大陸侵略政策から説き起こし、ナチスがドイツで政権をとったあと、独ソ不可侵条約、日ソ中立条約という双方にとって思いがけない結果を伴いながらも、ソ連をめぐって行われた日独間で政治的、軍事的な接近を第二次世界大戦終了まであとづけようとした。

岡は 1921 年に成立したモンゴル人民政府により実行に移され、清代のモンゴルの社会構造解体の画期となった行政統治制度改革について、佐領、随丁、タイジによって構成される旗の身分構造が改革の対象ではなく、近年岡自身が明らかにしてきたオトグ、バグと呼ばれるタイジ分枝集団の属民統治組織が、新たに編成されたソムへと受け継がれていったという点をアルヒーフ史料に依拠してある地方の具体的事例をもとに実証したところみである。

モンゴルではモンゴル文字からラテン文字、さらに現代のキリル文字へと文字表記が変遷したが、栗林は 1941 年のキリル文字の正書法作成に中心的な役割を果たしたダムディンスレン教授による論説を二点紹介している。モンゴル語をラテン文字化する際に弱化母音を表記しない方式を提唱した 1940 年の論説と、同様の原則によるキリル文字への全面的な移行を前にキリル文字正書法の特徴をまとめた 1945 年の論説である。

寺山 恭輔

(東北大学東北アジア研究センター)

平成 13 年度から 15 年度にかけての科研研究費による研究期間中、モスクワはもとよりシベリア、極東の諸アルヒーフ（ノヴォシビルスク、イルクーツク、ハバロフスク、ウラジオストック、チタ、ブラゴヴェシチェンスク等）で新たな史料を発掘することができたが、それ以外にもソ連時代に隠匿され或いは長い間忘却の淵に置かれていた事実が、ソ連崩壊後に訪れた報道機関による自由な報道により新たに見出されることもあった、という事実にも注目した。一般の新聞や雑誌に報道されることで読者の反響を呼び、それがさらに新たな事実の発掘へとつながっていったことも十分想定される。崩壊後の社会の激変により、過去を静かに顧みる余裕がペレストロイカ初期に比べロシア住民には十分なかった可能性もあるが、社会がソ連時代の真実を取り戻し、正常な社会へと変身を遂げていくプロセスがソ連崩壊後十数年にわたって地道に続けられてきたことも事実であろう。

このような問題関心から 1990 年代以降に出版されたロシア・ソ連極東の現代史に関する新聞、雑誌の記事を収集しようと試みた。この収集には筆者の 2001 年夏のハバロフスク滞在時間が限られていたことからハバロフスク国立教育大学のドゥビーニナ教授に全面的な支援をいただいた。ここに記して深甚なる謝意を表したい。先生には 2003 年 8 月にも 2001 年以降の資料収集に関してお願いした。今回の報告ではそれらを利用することができなかつたのでいずれまとめて発表することにしたい。

雑誌記事には、極東で忘却され、或いは途中で放棄された大規模プロジェクト地点を探訪し、過去に思いを馳せるといふもの、過去の歴史に立ち会った証人にインタビューを試み当時の様子を生々しく回想してもらおうとするもの、歴史家というよりはジャーナリストが多いが、彼らが自らアルヒーフ（公文書館）に入って隠されていたデータや歴史的事実を暴露しようとするものなど多岐にわたる。アルヒーフ史料をたとえ使っていたにしても、その出典が明示されることなく研究者が後追いで確認するといった作業が、時として困難になる可能性もあるが、生き証人に当時のことを語ってもらうのは、年月を経たため記憶違いにより誤った情報が伝達されるという可能性はあるにせよ、それらに細心の注意を払うのであれば、有無を言わせぬ命令や型どおりの報告など時に無味乾燥に感じられることもあるアルヒーフ史料を補完して歴史叙述を豊かにしてくれる可能性も秘めている。他方、これらの記事から改めてアルヒーフで史料を探索するということも可能になってくるのではなかろうか。

過去の暴露、事件、事実に関する証言という点から特に読者の関心を惹いたと思われるのは、その後のソ連社会にも多大な影響を与え、多くの負の側面を残したスターリン時代に関するものであろう。極東が国防の最前線基地でありながら、ヨーロッパロシアからの距離が遠大であったため、国防・動員政策に関してはその他に比べ特別な配慮、関心を向けられていた地域であったが、それゆえにスターリン時代の中央と地方の関係を調べる上でも極めてユニークな例を提供している。極東地方に関してまず注意を引くのはヨーロッパロシアとの連絡手段たる鉄道路線の拡充に向けた政策である。19 世紀末に建設の開始さ

れたシベリア鉄道、中国との協定に基づいて建設された中東鉄道問題に加え、満州事変が勃発するとシベリア鉄道が日本に奪取されたときに備えて、第二シベリア鉄道ともいべきバム（バイカル・アムール鉄道）建設も急遽開始されることになった。この路線は当初の目論見通りに建設は進まなかったが、ハバロフスクからコムソモリスク・ナ・アムールまで伸ばされた路線は、対日戦争に備えさらに東進して太平洋岸のソヴェーツカヤ・ガヴァニまで建設が進められた。さらにコムソモリスク・ナ・アムールから鉄道をサハリン対岸まで北進させ、トンネルを掘ってサハリンと接続する計画も浮上し、スターリンの死によってストップがかかるまで建設は進められたのである。囚人労働が大々的に利用されたことを含めこれらの鉄道建設に関しては長い間秘匿されてきた。造船所や飛行機工場などの大型プロジェクトにも鉄道建設同様、これらの囚人の労働力が活用された。スターリンの意を呈して極東でプロジェクトの遂行に従事した幹部や技術者による興味深い回想も発掘されている。利用された囚人はラーグリ（キャンプ）に収容され、自由を奪われていたが、そのラーグリの痕跡を探訪し、忘却されつつある悲劇を読者に再度認識させることもジャーナリストの仕事となった。1930年代後半の大テロルについてももちろん多く語られているが、スターリン批判後の名誉回復がなされた時期はあったとはいえソ連崩壊まで公然たる批判や援護を許されなかったその犠牲者や親族の現状、後世への記憶の伝達に向けた活動にも目が向けられることになった。他民族国家ソ連では民族的な指標をもとに弾圧されることも多かったが、極東でのその端的な例は朝鮮人集団の中央アジアその他への強制移住であろう。国境地区の例にもれずコサックも弾圧を蒙った。農業問題に関しては極東でももちろんクラク絶滅、強制的集団化政策が実行に移されその他の地域同様の悲劇を生むことになった。準戦時的な体制が敷かれていたのもひとえに国境を挟んで『満州国』という日本の傀儡国家が存在していたためだが、その対象も対日参戦と満州国の崩壊により消滅してしまった。しかし、日本人将兵の多くはシベリア、極東を中心にソ連領内に抑留され、囚人同様の強制的な労働に従事させられることになった。以上、新聞、雑誌の記事にある傾向についておおまかにまとめたが、このような内容について、ある程度それぞれのテーマに絞ってまとめていくことにしたい。本報告は論文というよりはあくまでも中間的な報告にとどまることをお断りしておく。

## 1. 1920年代までの極東における鉄道建設

ウスリー地方に鉄道を敷設しようという考えは1875年にまで遡る。地方政府がウラジオストックからハンカ湖まで「蒸気船の道 паровой путь」を提案した。これはハバロフカ Хабаровка（ハバロフスクは1893年からの名称）からの連絡を容易にするだろうと思われた。しかし他の数十の提案とともに葬られてしまう。1886年東シベリアとプリモリーエ（沿海）の総督が、トムスクからイルクーツクまで、バイカルからスレーテンスク、ウラジオストックからブッセ（今のブセエーフカ村 Бусеевка）港まで鉄道を敷設するという新たな提案を行い、1887年6月7日（旧暦）、この提案は閣僚会議の特別協議会で審議され肯定的評価を得た。続いてツァーリが中央シベリア、ザバイカル、南ウスリー鉄道の調査に関する特別遠征隊を組織するように命令した。ウスリー遠征はウルサッティ А.И.Урсатти が指揮したが、かくも大規模な調査に専門家が不足していることが判明し、

軍の測量専門家が加えられた。彼らは東部分、すなわち今日の極東鉄道とザバイカルの一部の測量を行うよう委任された。こうして最終的に 1891 年 2 月 15 日アレクサンドル 3 世は、ウラジオストックからニコリスコエ村（現在のウスリースク）、スパスコエ（現在のスパスク・ダーリニー）を通りコサックの集落グラフスコイまでの南ウスリー鉄道の建設に関する委員会の決定を承認した。続いて 1891 年 3 月 17 日の勅令で最終的に建設が決定され、ヨーロッパロシアからは建設に必要な資材すべてが持ちこまれた。木材を除けば極東で生産されるものはなく、金儲けに敏感な連中はすでに前年の 1890 年秋から木材伐採のために人を集めだした。アレクサンドル三世が望んだとおりニコライは日本からペテルブルグへの途上、ウラジオストックの駅で礎石を置き歴史的な起工に立ち会った。こうして始まった建設により、6 年後の 1897 年 8 月 31 日ウラジオストックからハバロフスクへ二日かけて最初の列車が到着し、1897 年 11 月半ばにこのウスリー鉄道は通常運行に入り、極東全体がこの出来事を壮大に祝った<sup>1</sup>。

ハバロフスクまで伸びた鉄道をさらに延ばす計画は日露戦争直後から活発化し、1907 年ストルィピン首相が閣僚会議でアムール鉄道を提案、翌 1908 年この鉄道の建設が始まった。その目的は極東への殖民である。1908 年までの 10 年間に沿海地方でロシア人が 40 万人から 65 万人へ増大した一方、朝鮮人、中国人は 3 万から 25 万へと増大し、極東を失う恐れが鉄道建設を促した側面もある<sup>2</sup>。

この時期より 1920 年代にかけてこの地域の鉄道路線探索において重要な役割を果たしたのが『デルス・ウザーラ』で著名なアルセーニエフ (Арсеньев, Владимир Клавдиевич) であった。沿海総督ウンテルベルゲル П.Ф.Унтербергер は、学術的、実際的かつ軍事的性格を有する研究のできる将校たちに関心をもっていたためアルセーニエフの活動を支持し、1906-10 年にウスリー地方を探検するよう三回にわたり委任したが、その目的は正確な地図の作成、好ましい交通路、要塞や、移住民に適した居住地を探索することであった。それぞれの内容は、①1906 年 5 月 20 日-11 月 17 日 (ウスリー地方の東南部)、ウスリー鉄道のシマコフカ駅から聖オリガ湾までの鉄道敷設を提案、②1907 年 7 月 13 日-1908 年 1 月 (北緯 45-47 度のシホテ・アリンの山岳部分、イマン川、ビキン川流域)、シホテ・アリン山脈を越えて軍事・戦略的な太平洋岸のいくつかの湾への交通路を発見、③1908 年 6 月 24 日-1910 年 1 月 21 日 (19 ヶ月と最長)、ハバロフスク=皇帝湾、ハバロフスク=デ・カストリ湾の鉄道路線の探索、ウスリー地方北部の全面的調査、アムール下流からタタール海峡まで、ホル川からキジ湖まで、山岳地帯を流れるいくつかの河川流域の調査、以上である。収集した資料をもとに彼は様々な提案を行った。革命後、アルセーニエフは「愛国者として」亡命せず党に協力し、1922 年 12 月彼は鉄道輸送の専門家とともに極東鉄道の復興、修復案を提案、極東革命委員会がそれを 1923 年初めに承認した。内戦、干渉戦争による被害から復興しつつ、1923 年 3 月、ウラジオストックからハバロフスクまでの本来のウスリー鉄道にアムール鉄道の一部であるアムール=スコヴォロディノ線を加え、ハバロフスクに中心をおくウスリー鉄道が設立された。同年 4 月のウスリー鉄道管理局の技術協議会でアルセーニエフは報告「極東地方の経済的展望における鉄道の役割」の中で、極東の発展にとって複線化の他、様々な支線の建設の必要性を強調した。その後アルセーニエフらのグループは、ハバロフスクから太平洋岸への鉄道路線、特にソヴェーツカヤ・ガヴァニへの路線敷設を主張、彼は多数の報告を行った。彼のプランはハ



バロフスクからデ・カストリ湾につなぐプランに比べ資金的にも優勢であったが、この時点で本格的な太平洋岸への出口をめざす計画は実施に移されず、基本的な資金は 1916 年から臨時的な使用にとどまっていたアムール鉄道の完成、強化やウラジオストック周辺の支線建設に注がれていた<sup>3</sup>。

アルセーニエフが 1928 年に提出した報告が最近になって発表されている。1933 年 1 月 8 日、極東地方党委員会書記ベルガヴィノフが、ダリビューロー（極東地方の最高権力機関）に送付したものである。以下にその内容をまとめる。

1898 年ロシアは旅順を奪取して中東鉄道と接続させたが、これは日本人にとってさらなる打撃となり、その結果日英同盟を締結するにいたった。日本にとって大陸に移住地が必要である。極東で農業に適している土地は一割で農地は現在すでに開発しつくされた。「われわれの植民は黄色諸民族の古来の土地に打ち込まれ末端で衰弱する楔の形を取っている。この衰弱しつつある末端がウスリー地方だ」。まわりに中国、朝鮮、日本が存在し約 6 億の黄色人種が居住している。交通については、中東鉄道には支線がほとんどなく唯一の連絡路は海である。これが利用できると、オホーツク、カムチャツカ、チュコト、アナドゥイル地区も経営が可能となる。極東には中国、朝鮮、日本の船が多数見かけられるが朝鮮との国境からチュコト半島までサハリン島を含めるとロシアの 2 万キロの海岸線を警備しているのはブリュハーノフ号一隻だけである。船がなければ塩や魚を輸送できず、この地方を経営できない。現在カムチャツカ株式会社は所有する 3 隻の蒸気船に加え 5 隻を購入中で、一方ソヴトルグフロート（ソヴィエト商船艦隊）は 18 隻の蒸気船を保有し、全部で 26 隻となる。アメリカ、日本、朝鮮の船は急速に増加しており、ソ連も早急に船舶の数を増やすべきだ。例えばオホーツクの住民は時計を修理のために日本へ送り、ベーリング海峡では病気を治療するべくアラスカまで出かけている。北方委員会の出現はカムチャツカ株式会社とともに時宜を得た文化的基盤である。サハリン島北部では人口 13000 人のうち農業に従事するのが 3693 人、日本支配下の南部には 23 万人が居住している（農業に 42000 人が従事）。将来日本人、朝鮮人 125 万人が移住する計画があり、日本人が東西海岸に沿って敷設した鉄道は現在 320 マイルまで伸びた。南部サハリンでは 7 隻の蒸気船が運航され、うち 2 隻は日本との間を毎日 8 時間で結ぶ。ソヴトルグフロートの蒸気船は 1 ヶ月ごとに通常は時刻表なしで運行される。日本の利権企業は最新設備で鉱山開発を進めているが、ほかにも様々な工場が存在する。したがって北部サハリンの植民化を急ぐ必要がある（サハリンの植民に関するユルケーヴィチ T.C.Юркевич の報告を見よ）。36 万 3000 平方キロの面積を有する満州で河川は 4 ヶ月凍結する。1500 キロのスنگリ川では 1400 キロまでジャンク船、900 キロまで蒸気船、880 キロの遼川はジャンク船のみ航行可能だ（ヤールー川も同様、270 キロまで）。アメリカが 1917 年から鉄の対日禁輸に踏み切ったため、日本は中国に注目し、需要の 64% を獲得するようになり、サハリン、満州、モンゴルの豊かな資源にも着目している。満州で日本人は 38 種の貴金属、南部では 55 億トンのオイルスレートを発見、綿花も中国から輸入し、さらに大豆からの燃料採取にも取り組んでいる。朝鮮で日本は 1245 マイルの鉄道、7463 マイルの道路を敷いた。日露戦争は満州を二つの勢力圏に分割し、1919 年以降日本は全満州への影響力拡大の絶好機とみなし、円もその他の通貨を駆逐し始めた。日本は周りを海に囲まれ絶好の条件下にあるが、ロシアは日本海から外に出られない。日本は極めて強力な諜報システムをもち、いかなる船も気

づかれずに航行することは不可能で、日本がすべての海上交通路を支配している。アメリカと戦争する場合、日本はすぐにサハリン北部を占領し、朝鮮、満州、ソ連の国境が交わる清津にある自分の基地を根拠にするだろう。この場合日本は生活や戦争に必要な後方から切り離されることがないので、長期間の大海からの封鎖を何ら怖がる必要はなくなる。

中国が興安嶺山脈北部を狙っているという確かな情報がある。すでに 14000 人の兵士、将校がそこへ送り込まれた。これは一種の中国のコサック軍である。満州の併合によってのみ日本がこの中国化を防ぐことが可能だ。日本はそのための口実を探している。ここ 25 年で満州の人口は 15 倍に増加した。日本は朝鮮半島を日本化し、南部ウスリー地区及びそれと接する満州東部を朝鮮化しようとしている。わが国への朝鮮人の移住と並んで満州、とりわけナンガン、琿春低地への朝鮮人の移住が強烈に進んでおり、この移住が中国にとって、我々以上の朝鮮問題を引き起こしている。東部満州への中国人以外の入植により日本は政治的に攻勢に出ている。日露戦争後、日本はツァーリ政府にポシェット、バラバシェフ地区への朝鮮人移住を許可するよう頼み、内戦や干渉戦争を利用して日本は特に精力的に朝鮮人をロシア領へ送りこむことを活発化させた。彼らに金を与え朝鮮の帆かけ船を動員した。土地を持たない 150 万の日本人、350 万の朝鮮人を今日の日本が抱えていることを考慮すべきだ。1923 年に奉天で発刊された雑誌に、満州と朝鮮の植民地問題が特集されていた。北部満州の川には海への出口がないため、ロシア人は、ポシェットとバラバシ地区を奪うことで北部満州を日本海から切り離した。したがって満州は海岸のこの地区を獲得すべきであり、この地域には朝鮮人が移住せねばならない。ウスリー南部は以前満州の一部だったが、ロシアが力づくで奪取した、したがって日本も中国との協定でこの地域にも権利を主張すべし、とも述べている。

日本人はいわゆる朝鮮人問題は朝鮮ばかりでなく、吉林地区の東、南部ウスリー地区にもあてはまるとみなしている。1926 年に中国人が満州へ逃げてきた朝鮮人反乱者の弾圧を始めたとき日本人は彼らの保護者として振る舞い、そのことで彼らより支持を得るにいたった。日本海岸で国際的な移住が組織され、ロシアに有利になると考えるのは過ちである。朝鮮人は中国人と性格が異なり、我々よりも日本人に近い。朝鮮人がすぐにソ連国民になると期待してはいけない。満州、朝鮮の住民と我々の住民がより親しく接することにより我々の領土が中国人、朝鮮人によって占領されてしまうという危険性はますます高まるだろう。これに対する闘争の主要な手段は、中国人、朝鮮人は断固として除き、民族に関係なくヨーロッパロシア、西シベリアからの移住民を中国、朝鮮と直接国境を接している空間にできるだけまなく入植させる一方、中国人、朝鮮人は国の奥深く、西部やアムール川の北側に移動させるということである。今日、軍事的な抵抗よりも経済的な国家防衛のほうがよほど重要なので、国境地域にはカムチャツカ株式会社のように、植民者には給与を与え農産物を供給するような強力な組織を作るべきである。我々の海上国境を強化する必要があるが、それは小さな沿岸航海の充実によってのみ可能となる<sup>4</sup>。

以上要点をまとめてきた文章から、アルセーニエフが抱いていた日本、中国、朝鮮に対する考え方がうかがえるが、彼が極東における充実した鉄道網の整備を強く主張していた背景にはこのように「黄色人種」に対する警戒心が強く存在していたことがうかがえる。この文章が満州事変の勃発した直後の 1933 年の段階で、当時の極東の最高責任者であったベルガヴィノフ党書記の指示で指導部に回覧されたという事実は、暗に彼らがアルセー

ニエフ同様の認識を共有していたことを示すもののように思われる。したがって、その後のソ連極東地域に住む朝鮮人の集団的強制移住にも影響を及ぼしたことは間違いない。今日の国境をめぐる中露紛争にもつながっていく問題であるように思われる。

## 2. バム建設

1920年代まで進展しなかった極東における鉄道建設は、1930年代になるとにわかには中央の関心を集めることになる。アルセーニエフの憂慮した通り、日本が「満州国」を作り大陸進出を始めたことが最大の原因である。満州国内では1935年に中東鉄道を売却して極東における自らの足場を日本に譲り渡したが、ソ連極東では日本の攻撃に備えて準備せねばならず、シベリア鉄道（極東ではザバイカル、ウスリー鉄道）の複線化を進め、まったくゼロの状態からバイカル・アムール鉄道（通称バム）の建設に着手し、第二次大戦中も建設が進められていたハバロフスクからの太平洋への出口は日本の降伏直前にソヴェーツカヤ・ガヴァニまで完成し、上述のアルセーニエフのプランが十数年を経て実現されることになった。しかもこれらの建設にはスターリン時代の例に漏れず、多数の犠牲者を伴った大々的な囚人労働が利用されたことが特徴であり、当然ながらソ連崩壊後にこれらの事実之光が当てられることになった。

ズーエフが特にこの問題について史料を集めている。筆者は未見だが、コムソモリスク・ナ・アムーレで1999年に出版されたズーエフ（Зуев, Владимир Федорович）の本、*Первопроходцы восточных магистралей России*（2001年に再販された模様。2001年版は352頁）の紹介が新聞に載っている。バム開発の歴史について記述したこの本は紹介者によれば、極東やモスクワのアルヒーフ、ベテラン設計者やバム建設者と絶えず接触し、事実を参加者の回想で補足、膨大な事実関係を見事にまとめあげ、これまで秘密とされ報道されてこなかったことについても触れたものとして高く評価されている。しかも著者は初めて、鉄道の最初の建設者アルセーニエフの知識、経験を表現、総合しようと試みたとする。彼の遠征がどのような課題のもとに行われたのかこれまで何も語られなかったからだが、彼がバイカル・アムール鉄道という名の鉄道についてコンサルタントしたというのはまったく知られていなかった作家アルセーニエフの活動だ。全体として、当地の鉄道建設の歴史、偉大な旅行家の伝記を埋めるものとして貴重な仕事であるとする。またバムの設計者、建設者について詳しく説明し、当時の雰囲気、興味深い人生など貴重な情報を提供した。言及されている人物には、Н.А.Френкель, И.Г.Петренко, В.И.Кучер, П.К.Татаринцев, М.М.Новицкий, В.В.Степанк, Юровские 夫妻, А.И.Кирич, Н.И.Макковеев, П.А.Станкевич, В.И.Ремерс, Б.И.Цвелодуб, А.П.Кузнецов, 地質学者 М.А.Павлов などが挙げられる。最後に評者は、ロシアにとって人数も削減されつつあるバムが必要なのかといった議論が出てきているなかで、本書の出版はタイムリーであり、その必要性を明らかにするものだと述べている。出典が明示されていない点、氏名リストがないことは欠点とされた（出版は沿海地理協会の後援による）<sup>5</sup>。

本報告では、ズーエフの書きたいいくつかの記事をもとに、ハバロフスクからコムソモリスク・ナ・アムーレまでの鉄道建設、さらに周辺への鉄道建設の展開、それに伴うラゲリ地点の増大などについてまとめることにする。

ズーエフは、1932年2月にアムール川のペルムスコエ村（後にコムソモリスク・ナ・アムールと名称変更）に造船、飛行機、機械製作工場を作ることを政府が決定し、これと関連し太平洋への第二の鉄道を作る計画が浮上、同年3月21日、ソ連ソヴナルコムが極東における鉄道建設への財政支出に関する布告を採択したあとの路線探索の動きを詳述している。これらの事実は筆者も知らなかった内容で、特に参考になった。探索のために特別東シベリア遠征隊が結成された。リーダーはジュス Д.Джус、主任技師はスミルノフ А.Смирнов がつとめ、バム建設管理局がムラチコフスキー С.Мрачковский 指揮のもとに設置された。1932年4月13日、ソヴナルコムは布告「バム建設について」でウルシャ＝トゥインダ＝ペルムスコエルトの建設を1933年に開始し、1935年末には運行開始することにした。1932年から33年という厳しい期限の中で探索が行われ、ヴォルク線と称されることになる自動車道路ヴォロチャエフカ＝ペルムスコエ線を並行して建設し鉄道建設に生かすことになった。1933年夏ヴォロチャエフカ＝ペルムスコエ線の探索についての政府決定が採択され、ヴォルク線建設は極東ラーグリ局に委任された。

ダリラーグ（極東ラーグリ局）の中には路線探索パーティーが結成されたが、その中では、経験豊かな運輸技師ピーリン И.Н.Пилин が指揮をとっていた。彼はペトログラードの鉄道官僚の家庭に生まれ、モスクワ高等技術学校（運輸学部）卒業後、アムール鉄道建設探索に参加し、1910-11年にかけてデジニョフカ駅からヴァندان山脈までの鉄道建設に従事した。1915-17年にはニコラエフスク鉄道建設、1917-23年にはウスリー鉄道の一路線建設、1924-25年にはヤクート自動車道路、ソフィイスク＝デ・カストリ湾道路建設、1928-31年ウスリー鉄道強化に関する建設組織などを指揮していた。ところが突如1931年末に逮捕されハバロフスクで裁判にかけられ、極東の鉄道と石炭産業における反革命、有害活動の罪で告発され、1932年初めオゲペウの参事会は彼をロシア連邦刑法第58条第6項で処刑から10年の刑に減刑された。ヴォロチャエフカ第二駅へ送られた彼はヴォロチャエフカ・コムソモリスク間の自動車道路、ついで鉄道の探索、建設に従事したが、1937年再度逮捕されエヌカヴェデ極東局 УНКВД のトロイカにより銃殺の判決を受け執行された。1956年に名誉回復されている。

ヴォロチャエフカ＝ペルムスコエ線の技術的探索にはコヴァリョフ Ковалев をリーダーとする遠征隊が組織され、1933年5月にはすでにいくつかのパーティーが現地へでかけた。同年6-7月には建設の総責任者であるオゲペウの極東全権代表デリバス自ら徒歩で視察、人材不足を認め探索パーティーの数を増やした。路線探索のあとで建設部隊が建設を始めたが1933-34年の冬には11000人、1934年夏には2万人が働いていた。囚人が大部分で自由労働者はわずか2500人とどまっていた。全体的な指揮は極東オゲペウのソロヴィヨフ、主任技師はジュコフがつとめた。建設の進め方について批判もなされたようだ。1934年7月ベルマンがヤゴダへの手紙の中で「ダリラーグは建設の状況を知らない」とデリバスを批判、バムラーグのフレンケリに任せるよう提案した。これに対し1934年8月8-23日、デリバスは運輸人民委員部 Востизжелдор の技術・経済探索部長である息子 А.Т.Дерибас を伴い鉄道、馬を利用したり、或いは徒歩で現地調査し状況をヤゴダに報告した。ヤゴダからの支援もあり、働きの良い囚人への特典、各種の道具が分配されることになった。34年10月時点でこのヴォルク建設では5区間、8強化拠点、38建設区で23800人の労働者・建設部隊が作業を行っていた。こうして34年11月7日までに道路は



完成、12月11日にハバロフスク＝コムソモリスク間を23時間で結ぶバス路線が開通した。年末には地方の党幹部のほか作家のファデーエフらがコムソモリスクを訪問して世論を喚起した。

1935年3月にはこの道路に依拠して鉄道建設が始められた。マルティネッリ **Мартинелли** が建設を指揮することになったが、主任技師はジュコフのままで、探索パーティーのリーダーには経験豊かな技師 **Тараченко В.П.**、主任地質学者は **Павлов М.А.** が選ばれた。早期釈放と10段階に分けられた食事が囚人たちへの刺激策として使われた。建設現場には売店、食堂なども作られた。中にはシャフトゥイ事件で裁かれたカラージン **Каразин** らいわゆる「人民の敵」も含まれていた。彼はシャフトゥイ事件で有罪となり極東へ送られていたが、ヴォロチャエフカから13キロのトゥングースカ川横断橋の建設に携わった。このような大建設では様々なデータを数年にわたって蓄積する必要があるが、その蓄積もなく必要な金属もヨーロッパから手に入るのは1年後という状況の中、木材による橋の建設をカラージンは委任された。デリバスは直接、建設が成功したときには自由を与えると約束した。こうして完成したのが、20000立方メートルの木材だけを利用した1111メートルの木造の橋である。自由を得た彼は後にヴォルガ・ドン運河の建設を担当する著名な技師となった。

こうして完成した鉄道は、1936年11月24日にハバロフスクから第一号の列車が出発した。完成を記念してデリバスは建設に参加した数百の囚人の解放、或いは刑の軽減を発表、多くはその後も自由労働者として現地に残留した。ところが翌1937年デリバスは逮捕され、ヴォルクの建設管理局でも60%以上の職員、技術者が弾圧された。マルティネッリ、ジュコフらも含まれる。そして1938年初め、ダリラーグヴォルク線建設局は改組され、この路線の完成はバムラーグに任されることになった。さらに1938年半ばには、バムラーグを基礎に極東エヌカヴェデグラグ鉄道建設局 (**ЖДСУ ГУЛАГ НКВД**) が設置された。これを統括したのがフレンケリ **Н.А.Френкель** で、組織の中には西部、南部、アムール、ブレヤ、東部、東南、沿海、ニジニアムールの矯正労働ラーグリが入った(1940年1月末、東南、東部、ニジニアムールが統合してニジニアムールラーグリとなる)。ヴォロチャエフカに本部をもつ東南ラーグリはヴォロチャエフカからコムソモリスクへの鉄道建設を遂行した。このラーグリには4ラーグリ支部(ヴォロチャエフカ、リトフコ、パローニ、パダリン)と95の建設コロニーが存在し、1938-40年には民間施設、給水塔、文化施設、住宅、車両庫などを建設した<sup>6</sup>。

このラーグリにまつわる話も記事に掲載されている。アムールスク(コムソモリスクの南約40キロ)に囚人追悼の記念碑を立てる計画が立てられ二つの石が持ち込まれた。このリストヴァンカには1932-56年にアムールラーグの女性ゾーンが存在していたが、著者レウトフ(プリアムール地理学協会正会員)によれば何年も前に女性ゾーンの元警備者が埋葬地を見せてくれた。モスクワでは作家ツヴェターエヴァ **А.И.Цветаева** と何度も話したが、彼女は今日のプーシキン美術館を設立し、1913年に死去した父 **И.В.Цветаев** がモスクワ大学教授であったという理由からラーグリへ送られ、このアムールラーグに17年、流刑をいれると27年の滞在を余儀なくされ、彼女は死ぬまでラーグリで適切とされた髪型＝短く刈る＝を維持していた。石にはツヴェターエヴァの名前、他の言葉を彫ることになった。2000年夏には6月の町の日(1日)にリストヴァンカで記念碑建立の式が開かれる



予定であると伝えられた<sup>7</sup>。

一方、ヴォロチャエフカからコムソモリスク・ナ・アムーレまでの鉄道建設に参加した女性 **Евгения Владимировна** にマルイツェヴァがインタビューしている。作業は 10 区間に分割され、さらにそれぞれが作業隊、作業班へと細分化されていた。各作業隊には参謀部が置かれ、売店、図書室、浴場、自主的な芸術組織などが存在した。彼女も囚人であった技師カラージンに言及しているが、ヴォロチャエフカでは建設に功績のあったと 100 人の囚人が緊急的に解放され、ほとんどが自由意志で労働者として残ったという。サラエフがスタハーノフ主義者に選ばれた他、建設中に労働者には各種の専門知識が教育された(36年11月始めまでに各種専門教育を受けたのは 12343 人、スタハーノフ主義者は 2275 人、ウダールニクは 10573 人)。ソヴェーツカヤ・ガヴァニまでの路線建設は 1945 年のことになるが、太平洋からの魚が極東を潤すことになったという。ことにオゲペウの責任者であったデリバスについて彼女は、「あらゆる鉄条網、自動小銃を取り払ったので囚人にとっては慣れないことだった。沼と道なきタイガの中での自由だった。デリバスは歩いてヴォロチャエフカからコムソモリスクまで行った。労働者の生活、食料、建設資材の供給が必要なことを知っていた。沼地の中で囚人に与えた自由が後にデリバスにとってルビヤンカと銃殺になって降りかかってくることになった」とかなり肯定的に述べている(デリバスについては以下にもまとめている)<sup>8</sup>。

以上ハバロフスクから極東の国防産業拠点コムソモリスク・ナ・アムーレまでの道路及び鉄道建設と囚人労働のそれへの動員についてまとめた。このコムソモリスクから太平洋への出口たるソヴェーツカヤ・ガヴァニまでの鉄道建設も続けて実行に移されていくと同時に、既に述べたラーゲリ再編に関する決定からもわかるように、スターリンによるラーゲリ群島は拡大を続けた。この問題についても 1990 年代初めに記事が書かれ歴史に光があてられた。

### 3. ソヴェーツカヤ・ガヴァニへの鉄道

ドイツのパウルス軍に包囲されていたときタタリンツェフ **П.К.Татаринцев** はスターリングラード近郊で設計・建設作業に従事し、ヴォルガ右岸に極めて短期間で建設した鉄道が重要な役割を果たしていた。その彼が 1943 年 4 月初め鉄道プロジェクト **Желдорпроект** の長官で、ソ連エヌカヴェデ鉄道建設ラーゲリ総局 **ГУЛЖДС** の長官代理 **Г.Воздефスキー** **Ф.А.Гвоздевский** 陸軍少将の協議会に参加するようモスクワに呼ばれた。鉄道プロジェクトの主任技師 **Челвяков В.А.Червяков**、鉄道建設ラーゲリ総局 **ГУЛЖДС** の長官 **Френкель Н.А.Френкель**、主任技師 **Бакин А.К.Бакин**、エヌカヴェデの鉄道建設人民委員代理 **Чернышев В.В.Чернышев** が出席していた。簡単な話の後 5 人がルビヤンカ(エヌカヴェデ本部)へ行くと、軍事的・作戦的、戦略的環境を考慮して極東のコムソモリスク・ナ・アムーレとソヴェーツカヤ・ガヴァニ間に急遽鉄道を建設するという政府の決定をベリヤより聞いた。ヴァニノ港には同時に大規模な港湾施設と選別ステーションを作ることになり、路線の探索は鉄道プロジェクト、建設を **ГУЛЖДС** が担当することになった。タタリンツェフは 1939-40 年にこの路線の探索に従事したためベリアからその責任者に任命された。チェルヌイシヨフ、グヴォズデフスキーには国家防衛委員会の布告を、

一方でタタリンツェフ、チェルヴァコフ、クズネツォフ А.П.Кузнецов, マッコヴェーエフ Н.Н.Макковеевはこの鉄道の建設に関する特別報告を2週間で準備することになった。5月21日ソ連国防国家委員会の会議が開かれた。報告したのがチェルヌィシヨフ、グヴォズデフスキー、タタリンツェフの3人で、タタリンツェフは建設の簡素化、迅速化のためシホテ・アリン、サヤン山脈にトンネルは建設せず、臨時の迂回路を造ること、アムール川は橋に代えて蒸気船で曳航すること、フンガリ川の二つの大きな橋、トゥムニン川の四つの橋に代えて壁に沿って「棚」を作り、線路を引くこと、大小の橋脚の支えとして木材で代用することなどを提案した。

彼の提案は建設プランに取り入れられ、戦前に作成されたプランよりかなり簡素なものとなった。作業には最終的な技術的設計の完成を前に取り掛かることになった。タタリンツェフの回想によればグヴォズデフスキーが報告の締めくくりに、1940年に計画が頓挫しなければ今日コムソモリスク＝ニコラエフスク・ナ・アムール路線について話していたであろう、と強調（すなわちソヴェーツカヤ・ガヴァニまでの鉄道に加えてアムール河口までの鉄道さえ建設が進んでいた可能性を指摘したものと思われる）した。注意深く彼をみていたスターリンは「当時は何人かのまじめな同志がソ連のヨーロッパ地区での鉄道建設を主張したのだ、しかし今日我々には別の課題が生まれた。君たちは22ヶ月で鉄道を建設せねばならない。鉄道プロジェクトの長官、ГУЛЖДСの長官代理というポストには残して、グヴォズデフスキーを建設の責任者に任命する。路線探索に関する彼の代理にタタリンツェフを任命する。ヴォルガで課された課題を見事に遂行したことに対して二人には感謝する。国家防衛委員会も二人がアムールで課題を遂行することを信じている」と述べたという。475キロの鉄道を1945年8月1日までに建設することになった。「我々はいかなる山が我々に襲い掛かってきたのか理解した」とタタリンツェフは回想した。第500建設という名称が冠せられた。

第一次世界大戦後彼は大学に戻り1923年に卒業、鉄道路線の探索に関する仕事について。参加した主な遠征は：ヴォルホフ建設(1925-26)、北部サハリン(1930-31)、バムの東部線(1932)、スーチャン・ナホトカ線(1933)、モスクワメトロの第一弾、アレル・スフミ線(1937)、イズヴェストコヴァヤ・ウスチ＝イマン・ウルガル線(1938)、トゥミ遠征(1939-1940)、そしてスターリングラード＝サラトフ線であり、この間多くの勲章を授与された。グヴォズデフスキーは決められた期間でできるだけ支出を減らし、橋やトンネルを作らずに建設するよう各責任者に命令し、タタリンツェフとクズネツォフをリーダーとする探索グループが短期間に技術プランを作成することになった。1943年8月10日エヌカヴェデ人民委員ベリヤもこのプランを承認した。

初期の建設者の1人であるスタンケーヴィチが回想するように、セメント1グラムは金1グラムほど大切にされ、金属とセメントはグヴォズデフスキーの許可があって初めて使用された。彼は失われたセメント、金属について責任者に厳しく問いただした。グヴォズデフスキーとタタリンツェフは短期間にバムなどで1930年代にともに仕事をしたレニングラードの設計者たちを呼び集めた(本文には多数の技術者の氏名)。コムソモリスク・ナ・アムールからの最初の250キロをニジニ・アムール矯正労働ラーゲリ、残りのソヴェーツカヤ・ガヴァニまでを東部ラーゲリが担当することになったが、山間部の作業の困難さからこの地域に第三のラーゲリが1944年5月に設置された。労働者の数は1944年、45年、

46年のそれぞれ1月段階で66000、92000、119000人に達し、うち線路で作業をしていたのが37000、67000、89000人であった（自由意志で働く労働者のほか、ドイツ人捕虜、ソ連のドイツ人なども含んでいた）。1946年には日本人捕虜49000人、捕虜から帰還したソ連兵士（敵軍への協力を疑われた）13000人が新たに加わった。

1944年にかけて特にシホテ・アニン山脈越えのルートの探索が行われた。運輸人民委員部の国防物資部はヨーロッパロシアからこの建設のために送られる貨物の厳重な管理を命じられたが、国は北フカース、ドンバス、ウクライナなどで戦争を戦っており、解放された土地では資材の多くが農業、工業の復興に投入されたため、建設資材が滞ることが多かった。1939・40年に策定されていたプランに修正を加え資材をかなり節約しながら建設が進められた。こうして1945年7月20日、国防委員会の要求した期限内にコムソモリスク・ナ・アムーレからソヴェーツカヤ・ガヴァニまでの鉄道が開通した。1947年1月8日政府はこの鉄道の通常運行を承認し、1947年5月1日にこの鉄道は極東鉄道の構成の中に入れられた<sup>9</sup>。「大洋への道」というプロパガンダ映画が撮影されたが、その撮影時の思い出について、「囚人は普段着を着せられ、白いテーブルクロスで覆われたテーブルのある清潔な食堂に連れてこられ、テーブルの前に着席させられた。周囲にはパンに手を伸ばそうとするものに発砲しようと銃が構えられていた」といった回想も伝えられている<sup>10</sup>。

以上の経緯からもわかるように、独ソ戦の形成が逆転したスターリングラード決戦後、極東の対日戦を意識して急遽建設が進められたことが明白である。1945年、この路線の全線開通を記念し、スターリンの肖像が掲げられた建物の前で開かれた集会の模様を写した写真を紹介したセドゥイフは、「今日国家は弾圧された人々に対して罪をあがなうことはできない。ソヴェーツカヤ・ガヴァニとスターリィ・ウルガル間にはたくさんのラーグリが存在し、多くが苦しみ死んでいった。ヴァニノ港からドゥッセ・アリニまで120、シホテ・アニン峠だけで3つもの墓地が存在する。タイガや道床でどれだけ死んだのかわからないが、残った墓場のほとんどは汚されており、多くはただ消えていった。地表からは悲劇的な過去が拭い去られようとしている。時間は我々から記憶する能力を奪っている。スイソコゴールナヤ駅にはすべての建設者に対する記念碑が建てられた」ことを紹介している<sup>11</sup>。

#### 4. ラザレフ岬からサハリンへ

一方でソヴェーツカヤ・ガヴァニよりさらに北、サハリンとの海峡が最も狭くなる地点にトンネルを掘り、サハリン島と鉄道を接続しようとする計画もあった。ハバロフスク地方誌博物館は、ニコラエフスク博物館でのスターリン時代の弾圧に関する展示に刺激を受けて、同様の企画を考え1998年よりスターリン時代の痕跡をめぐる遠征を計画し、コンサルタントとして参加したクジミナがその遠征について報告している。彼らは研究のため保存状態がよりよいという理由でスターリンの後期時代たる1950年代を選ぶことにした。そして選ばれたのがコムソモリスク・ナ・アムーレ近くのセリヒノとラザレフを結ぶ鉄道、そしてラザレフでネヴェリスコイ海峡（タタール海峡、日本名間宮海峡の一番狭い部分）に建設することを想定されたトンネルであり、それぞれ公式には建設507 и ИТЛと建設6 и ИТЛと呼ばれた。クジミナによればこの地方のマスコミ（Хабэкспресс, ПВ,

Интерфакс) がセンセーショナルな発見として一連の報道を行ったらしい。

このラザレフ近郊には第 6 建設に関するいくつかのプロジェクトが存在し(堅坑、人口島、爆発物倉庫など)、写真がマスコミに報道された。クジミナらが滞在したホテルの当直者が幼時に巨大な洞窟であった建設現場に降りたことがあるとわかり、彼女を通じて現場で働いたことのある女性にインタビューが可能となった。結局、トンネルの穴は約 10メートル掘り進んだだけで工事はストップした。この時点でクジミナは第 6 建設に関するアルヒーフ資料をまだ発掘できておらず、1998 年にメモリアルとロシア国立公文書館(ГАРФ)が出版した便覧(Система исправительно-трудовых лагерей в СССР. 1923-1960гг)を参考にしている。トンネル建設は運輸省が最初にとりかかり、次いでそれに従事していた労働者のほかすべてのスタッフをつけて内務省に引渡し、内務省が矯正労働ラーゲリを組織するよう命じられた。設立が 1952 年 11 月 14 日であり、解散は翌 1953 年 4 月 29 日である。1953 年 4 月 1 日現在 3700 人が働き、エルモラーエフ Ермолаев Н.А. が責任者であった。クジミナらはネヴェリスコイ湾からのみ見ることが出来るラザレフ岬を現地住民の協力も得て見学、報告している。一方、第 507 建設のほうは、立ち上がりは早く、便覧によれば 1950 年 1958 人、1951 年 3814 人、1952 年 11207 人、1953 年 1 月 1 日 13030 人が建設に従事していた。アムール川に沿って走る予定であったセリヒン・ラザレフ線について、クジミナはシマコフによる記事(В.Симаков «В железнодорожном тупике», Тихоокеанская звезда, 15 ноя. 1991.これもいくつかは Дальгипротранс の史料に拠っていた)に頼って、アムール川沿いにボートで検証を試み、文書に伝えられている 132 キロではなく、さらに北部ブイストリンスク付近までの約 220 キロにわたる盛り土を確認した<sup>12</sup>。

その後クジミナはサハリン横断トンネル建設のためラザレフ岬近くにあった発電所建設の跡地を訪れ報告している。彼女の前に現れたのは草むらで覆われた小山とサッカー場なみの広さを持つ水浸しの巨大な穴で、これは敵の空襲に備えて半分地下に作られる予定だった発電所のための土台穴であった。その建設に第 507 建設の第二部隊が派遣され、ここで働いた囚人は全部で 3700 人、参謀本部はノヴォヴォロチャエフカに置かれた。建設に参加したオスカル・デベは 1950 年代の初め、まずハバロフスクへ連行され、ついでコムソモリスクからキジ湖へ連れてこられた。森の中に通路を開き 1951 年 7 月 7 日にキジ湖での建設が開始された。最初は住居とラーゲリ地点が建設されたが、防寒設備は貧弱で、病院には収容能力を超える患者がいた。1952 年 5 月から発電所の建設が始まったが、スターリンの死で中断され 1953 年 3 月 27 日に恩赦された。サハリンとの最短距離にあるラザレフ岬から 9 キロも離れた地点での発電所建設について、クジミナもトンネルのための発電所ではなかったのではないかと疑問を呈している<sup>13</sup>。

パドペンコは 1999 年と 2000 年、アムール下流に広がるスターリン時代のラーゲリの跡を回り、囚人たちが残したものを探索した。そしてラザレフ村ネヴェリスコイ岬で、完全な形で残っていた囚人の部屋を発見し、近い将来にハバロフスクで一般公開すべく移設する予定であると報告している。彼もサハリンに向けてのトンネルの入り口に入ろうと試みている。専門家の意見として、当時の巨大建設の正確な規模を把握するにはモスクワの諸アルヒーフでの仕事が必要で、ルビヤンカ(旧 KGB)の近くに図面が残っているはずだ、という。ハバロフスク地方誌博物館は翌 2001 年にアルヒーフでの史料探索を計画してい



るとのことであった<sup>14</sup>（その後の展示や新史料発見の有無については今のところ筆者の知るところではない）。

「スターリン最後の偉大なプロジェクト」ともみなせるこのトンネルは 1952 年末に作業が開始されたことから、1953 年 3 月のスターリンの死によってわずか数メートルを掘り進んだだけで放擲されることになったのであり、セリヒノ以北のアムール川沿いの鉄道は 3 年以上四人労働力が投入されたにも関わらず、後の世代が少しでも恩恵を蒙るような成果を何らもたらすことなく現在では霧散霧消する運命にあるということだ。

## 5. アムール川横断トンネル

ハバロフスクで大河アムールを渡河するためのトンネルが戦前に掘られていたことについても最近語られ始めた。7 キロのこのトンネルは名称を「第 4 建設」といい、1936 年初めに建設が決定されたという。1936 年 9 月から 37 年 2 月にかけてのわずか 5 ヶ月で技師・地質調査が行われ、ハバロフスクに配置されていたソユーズトランスプロジェクト *Союзтранспроект*（地下鉄建設やクイブィシエフ名称軍事技師アカデミーの専門家が参加）の特別遠征隊が 37 年の 6 月から 11 月にかけてこの材料をもとに計画を立てた。その計画は 38 年 3 月ソヴナルコム、党中央委員会が承認したあと、空襲に備えて防備を増強する修正をソヴナルコムの経済協議会 *Экономсовет* が 10 月に行い、40 年 8 月ソヴナルコムが予算を承認した。建設を指揮したのは運輸人民委員カガノーヴィチ、設計はアカデミー会員ヴェデネーエフ *В.Е.Веденеев* の指揮の下に行われた。この建設は当時、世界で最も地下部分が長く（3600 メートル）、ソ連で最長のトンネルで、鉄の内張りの直径では世界最大を誇った。掘削は 37 年終わりに 15 の独立建設企業により開始されたが、軍の技術部隊も参加していた。10 個の切り場から斜坑を掘る手法は世界でも画期的であった。当初 42 年に完成される予定だったが軍部の要請で 1 年早められ、41 年 7 月にテストされ、42 年 5 月政府が運行を認めた。政府委員会にはヴェデネーエフのほか、赤軍軍事技術アカデミー教授ケルドゥイシ *М.В.Келдыш*、地下鉄建設の専門家、ハバロフスク地方共産党の幹部、プロムストロイバンクのハバロフスク支店幹部などが含まれていた。当時の建設水準の高さから今日にいたってもその堅牢さは維持されているが、記者はしかるべく注目もされず放置されていることを残念がっている<sup>15</sup>。ハバロフスクにかかるアムール鉄橋が日本軍の空襲で使用不能になれば、沿海地方が孤立することを恐れ万が一の時に備えて世界最長のトンネルが作られることになったのであろう。テストが実施された 1941 年 7 月は独ソ戦開始直後であり、ドイツと歩調を合わせての日本の攻撃を警戒して前倒しして行われたことは明らかである。

この建設に参加した人物に他のジャーナリストがインタビューを試みた。85 歳になるオセトロフ *А.А.Осетров* は建設の最初から完成まで参加した。建設開始時の集まりで演説したのが極東軍管区司令官プルカーエフ *Н.А.Пуркаев* 将軍とハバロフスク地方党委員会書記ナザーロフ *Р.К.Назаров* で、彼らは日本からの戦争の脅威、シベリア鉄道の間断ない運行のためにはトンネルが必要だと語ったという。深さ 37 メートルのトンネルは 1938 年夏に貫通した。オセトロフは軍隊勤務のあと建設に従事したが、人員は厳密に選抜され、建設自体は国防に関連した秘密事項とみなされた。指揮したのは 3 人の将軍エルモーロフ



С.Ермолов、副官のヤレムチューク Н.Яремчук、主任技師ヴォルコフ В.Волков であった。最初の参加者は15000人で4000人の軍事建設者のほかは一般の自由労働者が占めた。彼は第二次世界大戦へ志願したが許可されず、終戦後も極東に残ったという<sup>16</sup>。

戦争の陰は極東の鉄道に関して出された決定にも見ることができる。グラトキフは1941年に出された鉄道に関する決定を紹介している。1941年6月13日極東鉄道管理局対空防衛部長の命令が出た。また市ソヴィエトの決定に基づき、毎月5日に極東鉄道管理局の施設で防毒マスクのトレーニングを実施することになった。灯火管制の違反にも厳しく対処され、1941年8月9日、仕事を終えて消灯せずカーテンを閉めずに外出したため、管理局の管理人クルイロフが逮捕され批難された。規律の維持が特に厳しく求められた。例えば、1943年1月19日の極東鉄道軍法会議は不注意から貨車に衝突しけが人と4台の貨車に損傷を負わせた罪で、4人に6年間の自由剥奪、寝込んだため列車を10分遅らせた二人について4年と2年の自由剥奪を宣告した<sup>17</sup>。

## 6. リヴェロフスキー

シベリア、極東の鉄道と関わりの深い人物にリヴェロフスキーがいる。彼に対する弾圧を含め最近になって記事が掲載されるようになってきた。次の文章は彼の生誕130周年を記念して極東の国立運輸アカデミー教授がまとめた文章の要約である。

ケレンスキー内閣の運輸大臣として臨時政府の最後に関する覚書を残したリヴェロフスキーАлександр Васильевич Ливеровскийは、今日に至るまで国内外を問わず輸送学の世界で非常に敬意をはらわれている。シベリア鉄道、バイカル迂回線、ムルマンスク鉄道の設計、建設、モスクワ地下鉄の設計検討委員会、ラドガ湖通過の命の道路建設に携わった。彼は1893年夏、西シベリア鉄道の管区責任者として偉大な技師・建築家ミハイロフスキーК.Я.Михайловскийの指導のもと実践に参加した。運輸大学卒業後はエカチェリンブルグ＝チェリャビンスク線の管区責任者に任命された。最も困難なバイカル迂回線を建設する際、ロシアの鉄道建設史上初めて作業を電化し、同じくバイカルでのトンネル建設の経験がロシアにおけるトンネル学の基礎となり彼は世界的名声を得た。これらは日露戦争のために建設が早められたものであり、極東への軍事輸送に貢献した。1912年に東アムール鉄道の建設が開始されると1913年から15年にかけて、この鉄道とアムール鉄橋の建設を指揮した。1913年6月からハバロフスクでの生活を始めたアレクセーエフ通りの家はハバロフスクの文化の中心となった。アルセーニエフ、将来の学者、フォークロア学者で人類学者のアザドフスキーМ.К.Азадовский、極東の有名な社会活動家で医者、作家、チャーホフの医学部時代の同級生でもあったキリーロフ Н.В.Кирилловなどが彼を訪問した。1914年、リヴェロフスキーはロシア地理学協会に入り以後40年活動した。リヴェロフスキーと知り合い、彼の同伴でクラスノヤルスクからハバロフスクへ向かった著名な旅行家ナンセンは1913年9月に建設地を訪問し「労働者に病人は少なく状況はなかなかよい、衛生環境もよい、大きな駅には病院がある」と記しリヴェロフスキーについても言及している。このアムール鉄橋はロシア人技師が設計し、ロシア人が作った（設計はプロスクリャコフ Л.Д.Проскураков 教授、橋の左岸部分＝網目の陸橋はペレデーリー Г.П.Передерий 教授が設計、各桁は21m、径間は130m、橋の長さは2600m）。今日まで

運行可能なほど橋は強度を維持している。

リヴェロフスキーは1915年、ロシア運輸省の鉄道建設部長に、2月革命後の臨時政府では8月にケレンスキー内閣の運輸大臣に就任し、コルニーロフが反旗を翻したときその軍の移動を妨害した。デニーキンは亡命先で「リヴェロフスキーに邪魔」されたと回想している。10月革命後、新しい運輸大臣エリザロフはリヴェロフスキーに技術コンサルタントへの就任を要請したが、彼は休暇を求め妻とソチへ向かった。そこへシベリアで逃亡を助けたことのあったジェルジンスキーが1922年に訪れた際に二人で黒海を視察し、リヴェロフスキーはアブハジアでの鉄道建設に協力することに同意した。そして57歳の時にレニングラード運輸技師大学に招聘され、ロシアで最初の鉄道建設学科を設立し、死ぬまで勤めた。1932年にモスクワ地下鉄プロジェクトの審査に参加して、露独の技師による深度の異なる提案を検討、できるだけ深くする必要があるとのリヴェロフスキーと著名なトンネル建設者パセク А.Н.Пасекの主張が勝利しロシア技師の案が採用された。このころ1933年3-5月（モスクワ）、1933年9月-34年3月（レニングラード）の2回有害分子として逮捕されたが二度とも釈放されてもとの職場に戻っている。

第二次世界大戦が始まると前線への技術支援に関してレニングラード鉄道輸送技師大学に作られた特別委員会で仕事を始め、包囲されたレニングラードですべてのレニングラード市民とともに74歳の教授は奮闘し、ラドガ湖を通り、レニングラード市民を救ったいわゆる「命の道」の設計、建設にも携わった。リヴェロフスキーが関わった鉄道には、ドゥディンカ=ノリリスク、カラガンダ=アクチュビンスク、ノヴゴロド=スモレンスク、コムソモリスク=ソヴェーツカヤ・ガヴァニなどがある。ソ連政府はその仕事を高く評価し、レーニン勲章、赤旗勲章、その他多くのメダルを授与した。1951年12月19日84歳で死去し、サンクトペテルブルグのシュヴァーロフ墓地に葬られている<sup>18</sup>。

## 7. 造船工場

既に述べてきた通り、ハバロフスク北方の未開の土地ペルムスコエ（今日のコムソモリスク・ナ・アムーレ）にタイガを切り開いて鉄道を通すという無謀な試みは、国境から遠く日本軍の攻撃を受けにくい奥地に軍需工場を作ることが最大の目的であった。1932年初めにこの土地に造船工場を建設することが決定された。ソ連時代には、困難を克服しながらも、未開の土地に若者たちが「若者の町コムソモリスク」をいかに建設してきたのか、という点に焦点が置かれてきた<sup>19</sup>が、1990年代になると工場そのものについてこれまで秘匿されてきた事実が明らかにされつつある。

例えばこの造船工場の建設に重大な役割を果たした人物にコステンコ В.П.Костенко がいる。1931年8月初め、彼は設計組織「プロジェクトヴェルフィ Проектверфь」の主任技師に任命されていた。そして10年にわたり新しい造船所の建設、修理基地の設計、老朽化した造船企業の再建などに大きな役割を果たした。海拔より高い位置にある水のない造船ドックで垂直船台の上で造船するという、当時最新の技術を取り入れた極東の造船工場の設計プランはハバロフスクの党書記や労働国防会議の極東地方全権などが反対し常に支持されていたわけではなかったが、結局ソ連で初めて実行に移された。この工場は軽巡洋艦、駆逐艦、潜水艦の建造を想定し、1932年から開始された技術的な文書の作成と同時に

建設が開始された。夏を 0 とすれば春には増水のため 13 メートル水位が上昇することが問題であった。通常の作業を確保するのに必要な川面からの最低限 2.5m の高さを考慮すると、夏季の水位から 15.5m 高いところに工場を建設する必要があった。1930 年代、200 メートル以上の船は傾斜した造船台で造られた<sup>20</sup>。

このアムール造船工場が始まった戦艦の建造についてカーリーノフが興味深いレポートを書いている。1070/1366 トンの排水量、79.9×7.3×4.1m の寸法、2200/1300 馬力のディーゼル、13/8.1 ノットの速度、乗員 53 名、魚雷 8 個、533 mm 砲、100 mm 砲、45 mm 砲一つずつを備えた潜水艦 JL-11 は 1935 年 5 月 25 日アムール造船工場で起工され、38 年 11 月 6 日太平洋艦隊に配備されたが、ロシアでは著名な設計者（主任技師ゴイキンス П.Г.Гойнкис、製造主任クルィシェフ В.Е.Курьшев、引渡し責任者テルレツキー К.Ф.Терлецкий）が携わったことで有名である。設備のない中で当時の建造者たちが各種の潜水艦や駆逐艦をいかにして建造したのか想像すらできないし、今や当時を知る労働者にあつて話を聞くのは困難だが、ある人物と偶然知り合いになったという。彼は 1942 年にスターリングラードのある工場にでかけ、ドイツ軍による爆撃の跡から、それがなければ有名な巡洋艦ラーザル・カガノヴィチの建造をなしえなかった部品を発見、極東へ持ってきた経験があつたが当初カーリーノフへの説明を拒んだ。なぜベテランは黙して語りたがらないのか？1930 年代のアムール造船工場ではエヌカヴェデのグループ、国家安全保障・作戦全権が密かに活動し、工場長ジダーノフ Н.М.Жданов や、潜水艦の建造主任クルィシェフさえ容赦せず、工場勤務者は皆、誓約書を書きエヌカヴェデ要員の絶えざるプレッシャーのもとにいた、ということが最近になってわかってきており、このような圧力は今になっても忘れられないのだ、とカーリーノフは説明している。この元労働者によれば、最初はレニングラードその他の都市から技術者が派遣されていたが、後には若い技師や技術者が中心になっていた。当時のアムール造船工場は秘書箱 199 (п/я 199) と呼ばれ、ニコラーエフから派遣され 1937-43 年の最も厳しい時期に工場長を務めていたトカリオフ А.Л.Токарев は、1941 年にレニングラード、ニコラーエフが封鎖されたとき、工場に学校を作って教育を進めた。彼は労働者、技師と良好な関係を築き、コストンコシステムを応用し建造テンポを上げた。1942 年 5 月 18 日に浸水した巡洋艦カーリーニンは、別の工場で作上げた胴体を溶接して建造したことで新時代を画すことになった。その後も工場は戦艦の建造、修理に従事したが 1946 年 1 月 1 日、工場で働く 8000 人のうち 2733 人が女性であったという<sup>21</sup>。半世紀以上前の出来事についてさえ関係者に沈黙を守らせるほどのきわめて強い心理的な圧力を当時の体制が及ぼしていたことがわかる。極秘に進めていた軍備増強に関する情報漏れを当局が如何にして制御しようとしていたのかについては、治安関係のアルヒーフ資料の閲覧が必要となつてこよう。

この第 199 工場へ 1935 年にやってきた造船技師イヴォチキン В.Ф.Ивочкин について、娘の回想や友人が残した記録に基づいて地方誌研究家のフェフィーロフ П.Л.Фефилов が紹介している。イヴォチキンは 1906 年チュメニに生まれ、1929 年レニングラード造船大学に入学、造船技師としての専門教育を受け、バルト工場で働いていた。1935 年、レニングラードで水上クレーンを解体、分割しコムソモリスク・ナ・アムーレへ鉄道で送り、現地で組み立てるといふ任務を言い渡された。現地の第 199 号工場の仕事ぶりは非常に緊迫していたが、1942 年 11 月には軍需品担当の責任者に任命され、前線へ様々な軍需品を発

送した。娘は、父が造船所で戦艦を建造していたのは知っていたが、忙しくめったに会えず、母は工場の幼稚園での仕事に専念していた、という。大戦後の1946年7月、ゼレノドリスクで主任技師に任命されたためコムソモリスク・ナ・アムールから離れ、ヴォルガ、カスピ海で小型対潜哨戒艇の建造を命じられ1947年か48年には完成するころにはすでに工場長になっていた。第199工場の元工場長スギブネフ С.Г.Сгибнев は出版された本 *Амурские корабли* の中でイヴォチキンについてソ連で初めて新しい手法を用いたと評価しているという。その後イヴォチキンは1949年8月、ニコラーエフのアンドレ・マルティ造船工場長に任命されて巡洋艦を建造することになった。だが航空母艦の建造計画については、ロケット技術の発展で不必要になるとみなしたため彼は工場長から降り、レニングラードでタンカー建造に携わることになった。さらに原潜「レーニン」建造の主任に任命される予定だったが、1954年11月中国へ派遣され1959年12月にレニングラードへ戻るまで技術協力を行った。帰国後は小型の救助船の開発に取り組んだが（国際協定締結後に政府が建造を決定）、1968年7月に亡くなった。フェフィーロフによれば、コムソモリスクの造船所の現指導部はイヴォチキンについて知らなかったが、後世に回想を伝える義務あるとして情報提供を通じて求めている<sup>22</sup>。軍需生産と関わっていた技術者の活動はこれまで秘密のベールに覆われていたが、このようにそれも徐々に取り払われつつある。戦後の軍拡や中ソの蜜月時代の軍事協力にも関わってくるだけに興味深い。

ペルムスコエ村と同時に、ハバロフスクではオシポフ入り江（現在のキーロフ入り江）でも造船工場の建設が始まった。歴史を遡れば、1908年5月アムール川艦隊創設の責任者デ・リヴロン ДеЛиврон 提督がペテルブルグからハバロフスクを訪問し、艦隊の基地に適切な場所として市北部のオシポフ峡谷を選定、1911年までに埠頭として人口のオシポフ入り江を完成させ、兵舎、学校などアムール河川艦隊の活動に必要なあらゆる施設の整備が短期間に進んだ。1931年10月にはこの入り江に造船工場を建設することが決まり、1932年3月、記事によれば政治局員キーロフのイニシアチブと直接の指揮のもとにアムール川最初の造船所が起工され、キーロフ自身が集めたレニングラードの労働者、職人、技師の集団が派遣された<sup>23</sup>。いかにレニングラードから労働者、職人を動員して工場を建設したのか非常に興味深い。時期から満州事変への対応とみてよかろう。この記事が書かれたのは1989年といささか古いため、別の情報を探す必要がある。

コムソモリスク・ナ・アムールをはじめ極東に少ない女性を国家的に動員すべく推進された、いわゆるヘタグーロヴァ運動については愛国主義的な運動としてソ連時代には多数の記事が掲載されてきたものと思われる。最近の記事を少しだけ取り上げることにしたい。

ハバロフスクのカリーニン通り115番地にかつて住んでいたルドネフ С.В.Руднев は、軍政アカデミーを卒業後、黒海沿岸防衛の高射砲連隊の政治部長代理に任命されたあと、1932年タタール（間宮）海峡へ派遣され、デ・カストリ強化地区政治委員として沿岸防衛施設の建設を無事にこなして赤旗勲章を授与された。彼が、赤軍指揮官妻全軍協議会での演説をヘタグーロヴァに委任したことからヘタグーロヴァ運動が開始された。クレムリンや中央紙から「我々は、親愛なる女性の皆さん、極東であなたたちを待っています Мы ждем вас, дорогие подруги, на Дальнем Востоке!」という言葉が響き渡った。1937年秋には極東へ11500人のコムソモール女性が向かった。ところが、大テロルの時代に3人がルドネフを告発した結果、38年2月7日に彼は逮捕された。9ヶ月の尋問期間中に「自



白」したが、38年6月にリュシコフが逃亡し、エジョフからベリアヘエヌカヴェデのトップが交代すると状況が変化し、無実を主張した彼は結局無罪放免された。復党した彼は故郷ウクライナでオソアヴィアヒムの地区ソヴィエト議長をつとめていたが、戦争が始まると1941年9月パルチザン部隊を結成した。しかし1943年8月4日彼と息子は死亡した（一説によれば彼はベリヤの指示で銃殺されたとのこと）。1944年1月4日彼にはソ連邦英雄として表彰された。このような歴史をたどりながら、この記事の筆者は彼の元の居住場所に記念碑を設置するようハバロフスク行政府に提案している<sup>24</sup>。

一方で動員された女性たちに関する記事も掲載された。1937年ワレンティナ・ヘタグーロヴァ Валентина Хетагурова が女性の少ない極東へ行くよう全国の女性に呼びかける手紙がコムソモーリスカヤ・ブラウダに掲載されたが、ハリコヴァ М.Харькова もキエフから友達の女性コーガン Э.Коган と極東へ向かった。ハバロフスクまで長かったが駅でヘタグーロヴァが出迎え、コロンブス号に乗船しコムソモリスク・ナ・アムーレに1937年10月24日夕刻到着したが、暗くて街も見えなかった。通りはキーロフ、ピオネールスカヤの二つしかなく、不安で二人は泣いたという。建設中の第199工場へ向かったが、専門とする仕事はなく木材倉庫の記録係として働いた。マイナス40度の寒さはこたえフェルトの長靴は手放せなかった。演劇クラブに参加し熱心に働いたという。戦時中は新聞 Сталинский Комсомольск の編集部で無線通信士として、戦後は内務省軍の歌と踊りアンサンブルで働き、極東の各地方をめぐる<sup>25</sup>。官製のプロパガンダを信じてはるばる遠方から乗り込んできた女性たちが極東の現実を目の当たりにして感じた生の声が、これまでどれだけ掬い取られてきたのだろうか。

## 8. デリバス

極東におけるオゲペウ、エヌカヴェデの最高責任者デリバス Дерибас (Терентий Дмитриевич, 1883 - 1938) の役割は、囚人を大々的に利用した大型プロジェクトが極東で多かったこと、粛清とも関連して極めて大きかったといえよう。その彼についても詳しい論文が出ている。それを簡潔にまとめることにする。彼は1883年ウクライナのキロヴォグラード州に生まれ、1903年に地下活動家となった。煙草工場でストに参加して放校されたあと非合法ビラの配布などプロパガンダ活動に従事した。流刑を経てオレンブルグ県トロイツクで2月革命、10月を知り現地でソヴィエトの代表に選ばれた。1918年夏のチェコ軍団反乱のとき自ら部隊を結成、のちにブリュッヘルが指揮していた南ウラルパルチザン軍団に入った。1920年4月まで第三軍で、次いで第五軍で白軍と戦った。健康を害して1920年4月除隊したあとシベリアの革命委員会、次いでパヴロダールで仕事をした。8月にモスクワに呼ばれ、チェカー第四部（秘密部 СО ВЧК）のサムソノフよりデリバスを派遣するようジェルジンスキーに依頼があり、1920年12月チェカーでの経歴を始めた。1921年春のクロンシュタット反乱では負傷で働けなかったが、アントーノフの反乱では希望にこたえて蜂起鎮圧に成果を挙げた。このあとメンジンスキーの重要な補佐官の1人となり、サムソノフの後を継いでヴェチェカの秘密政治部長に就任、ボリス・サヴィンコフを捕えた1924年の重要な作戦「トラスト」の組織者でもあった。また白衛派のクテポフ将軍の二人の戦闘員ラドケーヴィチ Г.Радкевич、シュリツ Махарченко・Шульц



を排除するのにも貢献し、黒海では最大の密輸者フレンケリ Н.Френкель も捕らえた。オデッサの状況、二人の闘争について白衛派の作家シリャーエフ В. Ширяев が執筆している。彼の記述によれば恐ろしい人物に見えるが、ジェルジンスキーの姪、ゾーシャによればデリバスは若い教授に似て誰もチェキストとは想像できなかったという。彼は詩の朗読、哲学を好み極東でもインテリ的な振る舞いは続いた。

1930年にスターリンの個人的な委任で極東へ派遣された。1927年4月の北京ソ連大使館への襲撃、ハルビンの白系ロシア人によるファシスト団体の活動などに関してオゲペウの秘密部長として情報を得ていた。極東到着後、コサックのスイチェフ将軍の「ロシア真実の兄弟愛」、グラチョフの「勤労農民党」、ディテリフス将軍の「ロシア全軍ソユーズ」、その他の白派亡命組織にエージェントを送り込んだ。1929年の中ソ紛争後も国境地区の平穏は続かず、例えば1931年春ウーツコエ村ではシモーニンとトレチャコフの指揮のもとに反乱が起き、1932年10月の報告によれば反乱者の数は10人を越え、一部は銃殺され一部はラーグリへ送られた。1933年にはハバロフスクとビロビジャンで帝政時代の将校、コサック、富農など248人を摘発し、うち13人は刑務所で拷問により死亡、84人はトロイカにより銃殺の判決がくだされ、残りは年数は様々だがラーグリへ送られた。銃殺は時に集団的で1931年6月28日、ミハイロ・セミョーノフスキー村で75人のコサックが銃殺され、さらに46人が様々の年数でラーグリに収容された。

問題となる1937年に、ハバロフスクでは5月15日、エヌカヴェデ本部地下で11人の鉄道員、5月22日にも同数が銃殺されるなど5月にハバロフスクでは計37人のシベリア鉄道関係者が銃殺された他、極東地方党委書記クルトフ、ハバロフスク州委書記スリンキン、ウスリー州委書記フェーディン、極東検察チェルニン、その他リャーミン、ノヴォリャンスキー、「太平洋の星」編集シュヴェールなど、ソ連政権の強化に尽力した多数の極東の著名人が反革命のかどで銃殺された。ハバロフスク州委の部長プリガーリン、カムチャツカ株式会社社長アダモーヴィチ、沿海州委メンバーでトラスト・ダリトランスウーゴリ議長コーティン、エヌカヴェデダリラーグ長官補佐ソローキンなどは自殺した。デリバスが極東で起きている事件についてよく知っていたことは1937年4月2日クライコムビューロー会議のプロトコールからわかる(4月1日のレンベルグ極東鉄道長官の自殺について、出席はヴァレイキス、デリバス、ビリュコフ、ザハーロフ)。4月23日のビューロー会議でも前日のアダモーヴィチの自殺が話し合われ、自殺はトロツキスト的・敵対的なものと断定している。この文章の筆者ウソリツェフはエヌカヴェデのオフィスでデリバスの在籍中に逮捕者が拷問されたことを証明する文書を多数閲覧したというが、スターリン死後の1956年、以前ハバロフスクで勤務したことのあった警察陸軍大佐 полковник милиции のコヴシュン(当時はオデッサ УМВД 職員)は質問に、後任のリュシコフのときに縦横無尽に行われた拷問は、デリバスの在席中には極端な場合だけ許可されたと答え、別の証言者マリインは1955年にデリバスのときにすでに手錠をはめて拷問するようになったと証言している(リュシコフのときに抵抗するほど強く締め上げられるアメリカ製のプレスレットを使用)。圧倒的多数の「事件」の捏造の事実を証言する元チェキストのほかの証言がアルヒーフには保管され、極東におけるスターリンの弾圧犠牲者名誉回復委員会も同様の結論に達しているが、ウソリツェフはそれでもデリバスを擁護し、彼は鉄道建設など国家のために貢献し、国家に対して罪は犯していないという。

1937年4月モスクワよりハバロフスクへエヌカヴェデの代表団が派遣されデリバスらの仕事の調査を始めた。デリバスが6月にモスクワへ召集を受け、代わりにウクライナ内務人民委員バリツキーが極東と訪問していた間、アルノリドフの指揮で極東執行委員会議長クルトフ（スターリン自身彼をよく知り第七回臨時ソヴィエト大会で会話し、幹部会では隣に座った）のほか、ヴィトコフスキー、シーロフ、ミヘーエフなどが逮捕された。デリバスが極東に戻ると、彼の前にクルトフや木材人民委員部極東全権代表ゲルベクの自白が並べられ、さらに30人の党、ソヴィエト幹部の逮捕をデリバスに要求してきた。当時としては勇氣ある行為だったが、デリバスはこれを拒否したためアルノリドフはモスクワへクルトフ、ゲルベクの自白調書を送った。こうしてデリバスが逮捕されることになった。今日まで死亡した場所、埋葬場所は不明である。摘発されたトロツキー・右翼日本スパイ・有害センターには、ヴレンティエフ、クルトフ、デリバス、レンベルグ、アロンシタム、グレベク、ラーピン、シュミットなどが含まれていた。次いでデリバスの副官ザーパドヌイ、第二次官のバルミンスキー、日本のスパイとしてヴィーゼリ（アムール州エヌカヴェデ長）、ほかにプチャーヒン（ウスリー州エヌカヴェデ長）、ボグダーノフ（国境軍政治局長）（すべて銃殺）が逮捕され、陰謀への参加者として摘発されたのがスリンキン（ハバロフスク州委書記）、オフチニコフ（ウスリー州委書記）、ワシーリエフ（ニジニ・アムール州委書記）、イワノフ（アムール州委書記）である。極東の鉄道には日本のスパイ、エージェント、諜報部員がはびこっているとして、この間500人以上のスパイが銃殺された。デリバスの跡を継いだリュシコフ Г.Люшков は、デリバスの時と同様にモスクワからフリノフスキーのグループが派遣されたのを知り、1938年6月12日国境を越えた。フリノフスキー、アルノリドフも悲劇的な結末を迎えることになった<sup>26</sup>。ウソリツェフは、デリバスのように死刑執行人であり、犠牲者でもあった者が多数存在した、と結論づけている。

## 9. コリマ

極寒のコリマ地方は金の採掘に多数の囚人を利用したことで悪名高い。コリマについても多くの記事が掲載されている。

20世紀初めにオホーツクで金が発見されたことから、隣のコリマでもその可能性が指摘されていた。1920年代半ばに地質学者ビリビン Ю.Билибин とツアレグラツキー В.Цареградский がコリマの調査を計画した。二人を中心とする7人のメンバーは1928年6月にウラジオストックを出発、オレ（現在のマガダン）に到着、現地でヤクートの案内者や金採取人、馬を雇いコリマ川周辺の探索を開始、約1年後大規模な金鉱床を発見するに至った。これがもとになってダリストロイ設置へと道が開かれることになるのである<sup>27</sup>。

ビリビンはもちろん囚人労働の使用など考えていなかったが、ソ連の東端にあり交通の不自由なこの地方で自由労働だけに頼るのは非常に困難であった（このときまで囚人労働はエニセイ川のイガルカ港、ペロモルカナル、北ウラルのヴィシエルのセルローズ・紙コンビナートなどで実施）。1931年11月11日政治局がコリマ開発を決定し、そのために略称ダリストロイと呼ばれるトラストを設立、長官にはベルジン (Э.П.Берзин) が選ばれた。1932年2月にベルジンはナガエヴォ港に到着した。同年10月26日に党中央委員会はダ

リストロイにおける党、ソヴィエト活動の指導をベルジンに全面的に任せることを決定した。

現在残念ながら数部しか残っていないが 1933 年初めにコリマでは新聞「正しい道 Верный путь」が発行され始めた。その初期の号には、ダリストロイ長官ベルジンと東北ラーゲリの所長ヴァシコフ Р.И.Васиков が決めたダリストロイにおける規則を掲載している。一年以上働けばコリマでの開発を志す植民者としての権利を与え、彼らにはダリストロイの金で家族を呼ぶこともできること、囚人、自由労働者への給与支給、その食事の量、成績のよい囚人を早期に釈放することを含んでいた。1933 年末囚人は 27390 人、自由労働者は 2989 人であった。1933 年に新たにコリマを訪れた囚人は 21724 人で 3401 人がここを去り、他のラーグリへ 301 人が移り、釈放された囚人の 3 分の 1 (1015 人) が自由労働者としてコリマに残った。植民者は 403 人を数えた。給与は変動が激しいが囚人の場合月給が 475-650 ルーブル、自由労働者が 711-886 ルーブルであった。これは、「労働による再教育」「文化的・教育的作業」を主眼とするベルジン、ヴァシコフらの方針から生まれたものであった。

コリマで最大の問題は病気、特に壊血病であった。1933 年第一四半期には 7965 人が、第二四半期には 9856 人この病気に罹患していた。針葉樹の煎汁が効力を発揮し 1933 年第三四半期には 1248 人、第四四半期には 954 人と壊血病患者は減少した。初期の囚人労働者はナガエヴォ港の建設や鉱山を結ぶ道路建設に従事していたため、1932 年の金採掘は控えめな 500 キロ、1933 年には 800 キロにとどまっていた。1934 年夏にはウラジオストックから 6 キロ離れた移送基地からナガエヴォへの輸送体制が整いコリマを訪れる囚人の数が増えると金の生産も増大えた。1934 年春から夏にかけて 4000 人の囚人（自由労働者はその 4 分の 1）が送られたが、彼らは基本的な環境整備がすでに済んでいたことに加え、約束された早期釈放を求めて金採掘に積極的に参加したため 1934 年には 5.5 トンの純金が採掘された。1934 年末には 32304 人に増大したが、囚人の増大に環境の整備が追いつかなかったことから囚人による犯罪も記録されるようになった。こうしたことから、この文章の筆者コズロフは、1932-1937 年のベルジン時代を理想的に描く有名な作家シャラーモフに反して、犯罪も脱走もあったと否定するが、やはりその事実を率直に認めてラーゲリの規律のなさを書きとめているベルジンだからこそこのような「伝説」が生まれたのではないかと思われる。1935 年末の囚人数は 44601 人（全土で 72 万 5483 人）で夏秋のシーズンに 14.5 トンの金を採掘、1936 年末の囚人数は 62703 人で自由労働者とともに 33 トンの金を採掘した<sup>28</sup>。

このダリストロイ初代長官ベルジンについて別の記事がある。生誕 100 年（2 月 19 日）を記念して 1994 年にスモーリナが地元紙に記事を書いた。周囲からは純心、怜悯、強力な意思の人とみなされていたベルジンはマガダンには 6 年住み、コリマをソ連の外貨稼ぎの中心地に変えた。彼はコリマ道路、コリマ川橋、農業開拓、地方住民の子供のための学校開設、東北での航空路開設、地方誌博物館のための資料収集（34 年 3 月開館）など開発にも貢献している。1935 年にはレーニン勲章を授与されたが 1937 年 12 月人民の敵として粛清され、1956 年 7 月の名誉回復後もヴォルコフ Г.Волков の論文「エドゥアルド・ベルジン—革命の兵士」は、ベルジンはラーグリ関係者だという理由で州党委員会がマガダンスカヤ・プラウダへの掲載取りやめを命じるなど長い間その名は忘却されていた。とこ

ろが、マガダンソヴナルホーズ議長コロレフ С.Королев が貴金属坑の名称にベルジンをあてることを決定したと「Магаданский комсомолец」が掲載（1961年5月21日）すると編集部には多くの手紙、問い合わせが届き、その多くとスモーリナは会見し記録にとった。その材料の一部をまとめた文章の要約が次の文章である。

スモーリナはベルジンの妻 Эльза Яновна と 1965 年秋、モスクワで会見した。彼女はベルリンの美術学校卒業後に彼が好きな絵の道に戻ると考えていたが、ドイツでロシア通のある経済学者の話聞き、ロシア国内に製紙工場を作るプランに参画していく。操業しているウラジーミル州の川の他に、北ウラルのヴィシエル川にも工場を建設することになった。ドイツから最新設備を2年のクレジットで導入し、1930年4月に建設を開始、1931年11月には高品質紙の生産を開始した（この工場にも囚人労働は利用されている）。極東への派遣に妻は反対したが、ベルジンは党の命令にしたがった。トゥルケスタノヴァ Н.Д.Туркестанова の回想によれば、1931年の末ウラジオストックのホテルでコリマに向かうベルジンと会話し、雄弁ではなかったが人を説得する力、何でもできる人だとの強い印象を日増しに受けるようになり、一生思い出に残った、という。1931年7月にコリマ道路建設遠征隊の一員として到着していたサロマトフ К.Ф.Саломатов は、1932年2月にウラジオストックから「サハリン号」で到着したベルジンと道路建設に関して協議したが、控えめで注意深く、機転のきく人物として非常に好ましい印象を受けた。コヴァリョフ Н.Г.Ковалев もベルジンとの強烈な思い出を語った。セーミン Н.П.Семи́н は、自由労働者とも囚人とも分け隔てなく話していたベルジンを回想している。刑期を終えた囚人の中にはベルジンの説得を受け入れて現地に残る契約を結ぶ者もいた。ベルジンの死後、状況は悪化して専横が支配するようになった。刑期を終えた囚人は以前、村にコロニーを作って居住でき、契約でダリストロイの経費で家族を呼べたが、ベルジンに代わったパヴロフはコロニー居住者をゾーンに移し家族と引き離した。供給は悪化し囚人への給与支給は中止された。ベルジン名称坑を長年指揮してきたムリャール Л.М.Муля́р はベルジンについて最も暖かい思い出を抱いている。極めて文化的な人物で、人々に対して繊細でおべっか使いを嫌った。ヤクート人、エヴェン人、オロチはベルジンを自分たちの庇護者とみなして愛し、彼を際限なく信じた。まさに皆から愛された極めて魅力的な人物だったという<sup>29</sup>。

粛清されたベルジンに代わってモスクワから派遣されたグループによりコリマの悪名高い伝説が打ちたてられることになる。その中心人物に焦点をあてた文章がコズロフにより書かれている。それを紹介することにする。

1937 年末から始まったコリマでの流血の専横は東北矯正労働ラーグリ（УСВИТЛ = Управление Северо-Восточных исправительно-трудовых лагерей）局長ガラニン С.Н.Гаранин 陸軍大佐の名前と結び付けられて語られてきた。マガダン出版社から 1960 年代初めに出版されたヴァトキン В.С.Вяткин の小説「人間は二度生まれる Человек рождается дважды」でおそらく初めてガラニンについて客観的に説明しようとする最初の試みがなされた。そしてやっと 5 年ほど前（すなわち 1980 年代末）からコリマ時代までを含む伝記が掲載されるようになった。「東北金 Северовостокозолото 合同」のアルヒーフで幾人かの協力を得て探し出された伝記についてマガダンスカヤ・プラウダの 1988 年 5 月 25 日号、雑誌「極東 Дальний Восток」（1988 年第 10 号）、本「Магадан. Конспект прошлого」（Магадан, 1989г.）に重ねて発表してきた（コズロフによる）。彼自身の手に



なる 100 枚ほどの極めて短い伝記が、当時はほぼ唯一の彼に関する文書史料であったがペレストロイカの進行とともに史料の発掘が進んだ。マガダン州国立アルヒーフ (Гос.Архив Магаданской области) には例えば、1937 年末から 38 年 9 月終わりまでの彼の職務に関連した文書が存在した。1990 年にはマガダン州 KGB 職員の協力で、彼の全人生、逮捕の原因、審理、正確な死亡日時を知ることができた。

彼のマガダンへの登場はすべて、エジョフがグラーグ群島のうちで最も遠い島に「秩序を打ち立てる」ことを目指して指導部を替えたことと関係していた。したがってベルジンに休暇が与えられ 1937 年 12 月 4 日に蒸気船でウラジオストックに向かうと、その三日前に到着していたパヴロフ К.А.Павлов がダリストロイの長官になった。彼に同行したのは副長官で旅団長ホドゥイレフ А.А.Ходырев、政治部長ガウプシュテイン Ю.Г.Гаупштейн、検事メテレフ Л.П.Метелев、そしてラーグリの所長のガラーニンである。ダリストロイのエヌガヴェデ局長となる上級中尉スペランスキー В.М.Сперанский にはエジョフ自ら直接、コリマに秩序を打ち立てるようとの指示を授けていた。モスクワから派遣されたグループはパヴロフを指導者にモスクワ旅団と呼ばれた。

パヴロフはスモレンスク手工業学校卒業後、1918 年 23 歳のときにカザンチェカーの捜査員となりポリシェヴィキ党に入党、コリマまでの 20 年間各地で働いた。モスクワ旅団はマガダン到着後の 1937 年 12 月、いわゆる「コリマ地下反ソ右翼トロツキストテロ組織」をでっち上げた。この組織は金産業に被害を与え、ソ連政権を転覆させ日本へコリマを引渡す目的で、コリマで軍事蜂起を計画していたとされ、ダリストロイ関係者 100 人以上が逮捕された。この組織のリーダーとみなされたベルジンはモスクワ近郊のアレクサンドロフ駅で 1937 年 12 月 19 日 (1938 年 8 月 1 日銃殺) に、もとラーグリの所長だったフィリップов И.Г.Филиппов はその二日前にマガダンで逮捕された。肉体的、精神的な手段で彼や他の連中から自白を引き出した。スペランスキーらの拷問の果てにフィリップフはこの組織の活動、構造や陰謀者、反乱者、有害人物を自白して署名した。

一方でパヴロフは収容所の生活に制限を加えていった。囚人の仕事を 10 段階に分類して給与を決定、さらに収容所における扶養費用を計算、給与からあらかじめ差し引くことにした。また、すでに刑期を終えてダリストロイに残った自由労働者に対する関係が悪化、彼らを家族から引き離して再び有刺鉄線の向こうへ追いやった。また食事量も仕事量に応じて 160% 以上から 74% 以下まで数段階に分けた。そのほか生活に必要な衣類そのほかについても節約は徹底したため、1937 年末から 38 年初めにかけてダリストロイ関係者の生活条件は悪化し、罹患率も上昇した。

マガダンでチェキストとして働いた人物の回想によればほとんど根拠のない逮捕や処刑が横行した。実行後に署名をもらうこともあった。最も深刻な過ちはダリストロイの北部、西部、南部採掘所で公開銃殺を行ったことだが、ガラーニンはこれにはタッチしていなかった模様である。

アルヒーフ史料によればガラーニンは 1898 年 12 月 12 日ベチェンコヴィチ (今日のヴィテフスク) 近くの村で生まれる。臨時政府の時代に入隊し、1917 年 11 月ペテルゴフで赤軍親衛隊に、1918 年 4 月より赤軍に加わった。19 年 1 月入党しデニーキン、ポーランド軍との闘いに参加し、ワルシャワからの帰還途中捕虜となり 1921 年の春に帰国後、ヴェチェカ軍の参謀部へ送られた。モスクワの高等国境学校を卒業して国境軍で勤務した。



そして偶然にもパヴロフと知り合いになりその命令でコリマでの勤務を命じられることになり、フィリップフの仕事を引き継いだ。

1938年3月4日ソヴナルコム<sup>30</sup>の布告により、ダリストロイはソ連内務人民委員部の管轄へ移され「ソ連エヌカヴェデ極北建設総局 Главное Управление Строительства Дальнего Севера НКВД СССР」と名称を変更し、パヴロフの権限はますます増大していくことになる。以後、労働強化、ノルマの強化がダリストロイの命令で次々に打ち出され死亡率も上昇した。ダリストロイからの脱走も増加した。逮捕されたものを叩くなどということはベルジンの時代には考えられなかった（弾圧された経済学者ヤロツキー А.С.Яроцкий、 Главзолото の弾圧された労働者クルティコヴァ・オクシコ Г.А.Крутикова-Окушко、人類学者ガレン・トルン Н.И.Гаген-Торн、1937年からコリマにいたジャーナリストエデリベルグ А.А.Эдельберг などがガラーニンの抑圧体制を回想）。ガラーニンについては著名な作家シャラーモフ В.Т.Шаламов や、すでにガラーニンのいない時にコリマにやってきたギンズブルグ Е.С.Гинзбург でさえもその作品の中で冷酷な人物として描いている。ソルジェニーツィンが毎日 30-50 人は銃殺されたと記述していることから、コンクエストはセパランティンカの特別ラーグリでは 1938 年には 26000 人という途方もない囚人が銃殺されたと書いている。

しかし実際はどうだったのか。ガラーニンはスペランスキーの命令で 1938 年 9 月 27 日に逮捕された。これより数ヶ月前モスクワからはガラーニンがポーランドのスパイだという情報が入っていたが（ポーランドの捕虜であったことがその告発の原因であったと考えられる）、パヴロフはこれを知りながら彼には当分触れなかったようだ。ガラーニンは自分に着せられた罪を最後まで認めようとしなかった。モスクワでエジョフからベリヤにエヌカヴェデのトップが交代するとコリマでもスペランスキーが逮捕された。ガラーニンは 1939 年 5 月モスクワへ送られたが、彼はポーランドのスパイであるとの、フリノフスキーが強制された自白を聞かされてもそれを認めようとしなかった。1939 年 12 月終わりに行われた尋問で彼は、コリマでは 8 ヶ月の捜査で耐えられない拷問を受けた、ラーグリの状況悪化はスペランスキー、パヴロフの責任であって自分は関係ない、自分はパヴロフの命令である鉱床にいたと答えた。それにも関わらず 1940 年 1 月 17 日のエヌカヴェデの特別会議は 8 年（後に延長）の矯正労働ラーグリへの収容を決定した。ペチョララーグリの記録によれば彼は 1950 年 7 月 3 日に死去した。約 40 年たった 1990 年 2 月ガラーニンは名誉回復を受けた。コズロフは、これまでのガラーニンに関する逸話はすべて真実に基づかないもので、数十年にわたり彼は「コリマラーグリの最大の伝説」であったと結論づけている<sup>30</sup>。

まだベルジン時代のことだが、1936 年初めからトロツキーグループへの弾圧が厳しさを増し、流刑地にいるトロツキー派を 3-5 年にわたり遠隔地のラーグリに移送し、テロルへ参加したとみなされるトロツキー主義者は銃殺するという決定が下されるとコリマには多くのトロツキー主義者が送られてきた。彼らの中には旧帝政時代の流刑者のような待遇を求め、ハンガーストライキをする者もいた。コズロフは旧トロツキー主義者で回想録を残せた人物の回想やアルヒーフ史料を引用しながら、筋金入りの革命家が多く、旧時代の幻想を抱いていた彼らのハンストの試みを伝えているが、スターリン体制のもとでそのような待遇は望み得ないことは次第に明らかになり、多くは銃殺されることになった。トロ

ツキーと革命以前から親交が深く、ソ連時代には外交官として活躍したヨッフエの娘 Н.А.Иоффе は大学時代から父に倣って反スターリン的立場を明らかにしていたため、コムソモールを除名され同じくトロツキー主義者の夫ともにコリマに送られ結局は 10 年もこの地ですごすことになったが彼女についても地元に残されたアルヒーフ史料を交えながら紹介されている。トロツキーの秘書として活躍したセルムクス Н.М.Сермуks もコリマへ追放され銃殺された<sup>31</sup>。

マガダンの金探掘と関連してインディギルカ号の遭難に関する記事が載っている。クスルガーシェフ Кусургашев Г.Д. はヴォロネシの年金生活者だったが 1939 年 12 月当時彼もマガダンから 600 キロ離れた場所で金を探していた。インディギルカ号の遭難については噂に聞いていたが、北海道の猿払にインディギルカのための碑が作られたことを聞き、再び極東でアルヒーフの門を叩いた。しかしマガダンで何も見つけられず、モスクワの日本大使館に手紙を書き、当時の日本の新聞を送ってもらい、生存者を探そうとしたがうまくいかなかった。ところが、ウラジオストックのジャーナリストジュヌソフ О.Жунусов がついに一人の生存者を発見した。タラバニコ Тарабанько Н.М. という。彼は遭難時の様子、日本人による救助と厚遇について語った。その後ジュヌソフは沿海地方アルヒーフで資料を探索したが、連邦安全保障局 ФСБ に請願する必要がでてきたためイズヴェスチアが請願、モスクワで記者マクシモヴァが数日に渡って 6 巻の史料を読んだ。船長がレニングラードから高い賃金目当てに極東にやってきたこと、正確に何人乗っていたかは不明であること（政府委員会は 1134 から 1241 人としている）、うち 885 人は囚人であったこと、遭難した 12 月 13 日に 395 人救助され、16 日にさらに 25 人救助されたが、この間自殺する者もいたということ、政府の調査委員会は日本人がわざと 16 日まで救出しなかったと非難していたことなどが書かれているという。ラブシン船長は死刑になったが、最後に「エヌカヴェダリストロイでの仕事の最初から私は罪を犯し、一切何も尋ねずに命令を実行することを強いられた」という言葉を発したという<sup>32</sup>。

## 10. 日本人抑留者について

戦後、ソ連、モンゴルに抑留された満州の関東軍兵士を中心とする日本人将兵については、ゴルバチョフが 1991 年の来日時に不完全ながら死亡者名簿を日本政府に渡し、遺族の現地訪問、厚生労働省による発掘調査が本格化した。この問題についても極東の現地紙は少なからず報道している（カルポフ、クズネツォフの本、長瀬の翻訳 2 冊）。

1989 年より日本人捕虜（ロシアではほとんど捕虜 военнопленные という用語を用いるが、日本側はこれに反発し抑留者 интернированные という用語を主張している）の問題に携わるようになったクジミナは、アルヒーフでの文書探索、事件の目撃者との面談、埋葬場所の探索と確認、資料の出版、旧日本人捕虜協会との協力、記念碑の建立、親族による訪問への協力など徐々に段階を踏んできたという。そして 1996 年に「捕虜 Плен」という本を出版するにいたった。彼女は、今日ロシア人にとって最後の責務とは「遺骨を発掘し、茶毘に付して日本へ遺灰を引き渡すこと」だと述べる。1997 年 10 月、コムソモリスク・ナ・アムーレ市のソーネチヌィ地区で日露共同の 11 日間にわたる遠征が行われた。ハバロフスク地方慈善平和フォンド、露日協会市支部などの各種団体のほか日本側からは

厚生省代表が参加し、翌年どこで発掘が可能か認定することが仕事となる。すでに 1992 年より、チタ、イルクーツク、ユダヤ自治州で実行され、今回コムソモリスク・ナ・アムーレの番となった。調査した中から第 18 ラーグリと第 893 病院の墓地を選んだ。コムソモリスク・ナ・アムーレ市の硫酸工場だが、ここにはハバロフスク地方で最大の 1513 人が眠っている。2ha の敷地に 208 の墓地があり、うち 31 が合同墓地となっている。自然の影響と人工物によって墓地は形を変え発見は困難になってきている。1997 年、手の触れられていない場所を探り出し、そこで発掘したところ 2 週間で 94 名の遺骸が発掘された。ほとんどが 1 人ずつ、ときに二人ずつだが、ブーツや金歯のある顎が、棺おけなしに葬られていた。深さは平均 1.5m で、見つけ出すとすぐに日本人に場所を引き渡す。特別のスコップを使用しほうきで清めた白いシートに並べた。フルタ氏は 3 度目でやっと父の葬られている場所を探し出し、発掘に参加できて幸せだ、と述べた。次に火葬が準備されるが、日本では死者の魂が祖国に帰るとみなされているからだ。遺灰は包んで日本へ持ち帰られる。親族に戻るのは極めて稀で、だいたい国家墓地に葬られることになる。最終日に追悼の祈祷が行われ、出席者はみな白い菊を手向けた。1999 年にも発掘は続行されると結んでいる<sup>33</sup>。別の記事でクジミナは、日本の立場を説明している。斉藤六郎氏らは埋葬場所を永続化し、親族がそこを訪問することを主張、ハバロフスク地方に 16 の記念碑が建造されたが、多くは列車も止まらない鉄道近くに存在している上、親族による訪問ブームは終了し、もうすぐ誰も来ないようになる。したがって厚生省は遺灰はできるだけ祖国に持ち帰りたいと考えているとのこと。ロシア側の課題は正確に埋葬場所を特定することにある。コムソモリスク・ナ・アムーレ (1513 人)、コスグランボ (592 人) の集団墓地ならば簡単だが 20-30 人の少数の埋葬場所で、しかも痕跡がなければ探索は困難になる。1991 年極東航空測量 Дальзаэрогеодизия の専門家と想定される埋葬場所を特定したが、さらに手探りで探す必要がある。ソヴェーツカヤ・ガヴァニではモンゴフト Монгохто 以外に見つからず、ワニノでは 3 箇所にとどまっている。日本人には 1949 年に作成された地図しかなく、周辺の風景が変化したことも探索を困難にしているという<sup>34</sup>。

1999 年 9 月初めにフルムリ村から 90 人以上の日本人の遺灰が祖国に戻っていったことを報道した極東の地方紙は、それまでの経緯を説明した。国際法では当然のことながら日本は 50 年前に抑留死亡者の名簿を要求したが、1959 年に 4000 名のリストのみ渡されたこと、1991 年にゴルバチョフがリストを渡し、内務省のアルヒーフ史料によればハバロフスクの埋葬場所は 40 箇所だが、実際はそれと異なっていること、その探索という困難な仕事を極東航空測量が請け負っており、その結果完成したのが「ハバロフスク地方における日本人捕虜埋葬場所地図：1946-56 年」である。この地図に基づき、日本人グループは平和フォンドハバロフスク支部の代表の随伴で極東のタイガを旅している。地元住民を雇って木を切り、表面の土を取って遺骨を発掘するが多数のヤブが飛ぶ中でもくもくと日本人は作業している。国からは 3 分の 2 の補助が出るだけで、3-4 回も訪問することは驚きである。中国で父が戦死したハラ・ヨシヒロは、中国政府が日本人捕虜を茶毘に付すことを認めないので代わりに訪露していること、などを紹介している。鉄道建設で日本人を使ったロシア人にはよい思い出しか残ってないが、一方でロシア側が日本人代表団で儲けていることも特別のテーマであるし、遺灰を国外に持ち出すのにもいろいろな文書が必要なことも問題だと述べている。上記埋葬場所地図について、この筆者は探索作業と同じく、「日

本人はお金を払っていない、ロシアにとってこれは全くの慈善的行為、或いは善意のジェスチャーだ」と述べているが、不当に他国民を抑留し、しかも長期にわたって埋葬場所、人数等を知らせなかったロシア当局として、これらは当然行われるべき作業であろう<sup>35</sup>。

前述のクジミナの本について、1995年コムソモリスク・ナ・アムールを訪問した捕虜団体の議長タカハシ・ダイゾウが、この協会の資金で本が出版されるという吉報を彼女に知らせたとの報道がなされ<sup>36</sup>、出版されると日本人との膨大な手紙のやり取り、埋葬場所の特定のための努力など彼女の集めた材料の5分の1に過ぎないと、地元紙はこの本を紹介し、コムソモリスク・ナ・アムールで出たことが重要だと指摘した<sup>37</sup>。極東ではラーグリが各地に存在するため時には、誰が葬られているのか特定するのが困難な場合もある。ピヴァン地区にある墓地はアルヒーフ文書に基づいて1991年に地方行政により、日本人捕虜の墓地と確定されていた。7年にわたりもとの捕虜と死亡者の家族がここを訪問していた。1997年からピヴァン墓地でも試掘が始まり地下120センチから骨を発掘した。ところが翌1998年再度本格的に8つの埋葬場所を掘ったところ骨の長さから日本人ではなくピヴァンにあったラーグリ墓地の一つで囚人のものだと判明した、というようなことも起こっているのである<sup>38</sup>。1996年、沿海地方の代表団が新潟を訪問した際、知事ナズドラチェンコ Е.Наздратенко が日本の外務次官に渡した抑留死亡者の追悼本 книга памяти についても報道されている。これは沿海地方で1945-50年に死亡した日本人捕虜6000名の姓名、生年月日、死亡日時をまとめたもので、1991年にゴルバチョフが日本政府に渡した不正確なリストを沿海地方の歴史家アンドレイ・ポリカロフ Андрей Поликаров が補ったものである。戦時中彼はラーグリで通訳を務めていたが、この地方の内務省アルヒーフ史料を研究し、さらに約1000の墓を探すことに成功した。この最新のデータが本の第二巻に入った。氏名ばかりでなく、各種文書、墓の配置場所を知ることが可能であるという<sup>39</sup>。

元抑留者のミヤモトツトムについて極東の地方紙はたびたび紹介している。彼はハルビンで20歳のときに捕虜となり、エヴロン村近くの第306ラーグリに連行された。ラーグリの所長がスターリンの肖像を書けるものはいないかと尋ねたので彼は手を挙げた。自らドイツで捕虜を経験した将校ヴァシューチン Васюгин がその付き添いとなり、絵の具の調達に協力した。重労働が免除される幸運に恵まれた。1946年春からは木材の切り出し作業に従事し、ミヤモトも絶えず場所を移動したがその都度ヴァシューチンはあとから同行し、時には映画にも招待した。この間ミヤモトは厳しい極東の自然をテーマに描き続けた。ヴァシューチンは捕虜生活が終わったらロシア女性を探し出すから一緒に暮らそう、と提案しミヤモトも同意したが、ヴァシューチンには別の任務が与えられ二人は別れざるをえなくなった。ミヤモトは1949年の帰国までアムール州の炭鉱で働き、帰国後は長い間数学、物理を教え自由時間に絵を描き続けながらロシア再訪を希望していた。年金生活を送るようになり、ハバロフスク博物館には自作の絵画を寄贈し、1996年秋にも再訪を予定している。彼は厳しい青年時代をともに過ごし強い友情で結ばれた73歳になったはずのヴァシューチンとの再会を求めているのだ<sup>40</sup>。4年後の2000年にも、ハバロフスク地方誌博物館で開催されたミヤモトの個人展覧会の模様、ヴァシューチンを探していることが報道された。この博物館には元捕虜から手紙や、本の入った小包などが送られてくるという



ある村の 19 世紀末から 20 世紀終わりまでの歴史の中に日本人抑留者を位置づける記事もある。それはハバロフスクの南 30 キロにあるコルフ村である。現地住民はこの名称がコルフ男爵 (Корф А.Н.(1831-1893)、18 世紀にロシアに移住したドイツ人を祖先にもつ。1884 年東シベリアから沿海総督府が分割され最初の沿海総督府兼軍管区司令官に任命、1984 年 10 月 13 日ハバロフスクへ、全住民が花火で出迎えた。賄賂を取らず文化的で誠実な行政官として地方での問題解決につとめた) に由来することを知っている。彼は大規模な建設を始め、そのために花崗岩の採石場として開発したのがこの村だった。この村に日本人が存在したのは 1945-48 年で、長老の話では日本人は夜、皆が寝ているときに連れて来られ、3 年後には同様にひっそりと帰国していったというが、人数については 100 から 300 まで様々に伝えられている。内務人民委員部は村人に話さなかったし、ゾーンにも近寄らせなかった。極めてきれいな水源を発掘し、現在まで稼動している立派な水道を作ったし、木材伐採にも優れ、狭軌道の鉄道も作り、いわばコルフに日のいずる国の管轄範囲を残したことに、村人は日本人捕虜に感謝しなければならないことを知っている、という。当時 10 歳だった女性は前線から戻った兄が機械工としてこのラーグりに勤務した際に日本人捕虜サトウが兄を助けていたこと、ひそかに食料を分け与え、仕事の後にラーグリへ戻すのを目撃していた。彼女の夫によればラーグリは 1920 年代に政治囚が整備し、村と伐採場を結ぶ狭軌道の鉄道が当時建設されたが、戦時中彼らはどこかへ連れて行かれた。1960 年代にレールはずされることになる。ハバロフスク住民に人気のコルフ村の水源は夫の父が 1927 年に発見した。蒸気機関車用の水として重宝され、鉄道が電化されると飲み水として使われるようになった。ここで約 30 人の日本人が亡くなったと思われ、採石場の向こうにある墓地へマリア・パヴロヴナに案内してもらったが、現在のゴミ捨て場の下で消えている。彼女によれば「ここには何列かにわたって木の十字架が立っていた。十字架でなく板のついたただの柱の場合もあった。番号だけで名前は書いていなかった。彼らは仲間のために石を引いて道床を作り、整頓していたが日本人が去ると誰も墓守をしなかったので 49 年には崩れ始め墓標も最終的に 1 年後には消え小さな小山が残った」という。映画にあるようにドイツ人に子供が石を投げつけるようなことはなく、皆小さな兵士たちを不憫に思っていた。なぜそこに立てられたのか不明だが、採石場の近く、本当の墓地からは直線で 300 メートルほど離れたところに日本の記念碑が数年前に立てられた。ここにはハバロフスクからもピクニックに人々が訪れるが、あるときオベリスクから日露二カ国語で追悼文が書かれていた銅版が消えた。日本人の後にはソ連からの独立を目論んだ西ウクライナの民族主義者が連れてこられ、フルシチョフ時代に故郷に戻った。理由は不明だが、1950 年代初めに朝鮮人がこの村へやってきたことも歴史の空白である。彼らはラーグリ時代から残っていたバラックに住んだり、採掘場で働いたりあるものは一生この村で生活した。1960 年代になると村はほとんど毛沢東の中国への侵攻の基地になった。囚人もだれもいなかったが、軍人が有刺鉄線をはり、タンク軍を配備し、住民によれば昼夜構わず戦闘態勢に入っていたという<sup>42</sup>。

一般兵士の他に特別な立場にいた抑留者も注目された。1931 年以降の満州の最高権力者、最後の関東軍最高司令官を勤めた山田乙三 (1944 年 7 月 22 日-45 年 9 月 5 日) についても記事で紹介された。1881 年東京に生まれ 17 歳で陸軍幼年学校に入り 1901 年卒業、1904 年 5-9 月には大連で日露戦争に参加、その後陸軍士官学校で学び、主として参謀部



の将校として勤務(1930年陸軍少将、1937年陸軍中将)、満州の一精強部隊を指揮した後、1939年10月教育統監に就任、最終的に関東軍最高司令官をつとめた。山田は1945年8月14日午後、外国のラジオで日本が無条件降伏しそうだとなり、東京からは自衛のために武器をとってもよいと指示されるが、山田は天皇の意思に従って無条件降伏することに決した。16日深夜に準備され翌朝から第二航空軍の飛行機がピラをまいた。当日ソ連軍指導部も戦闘行動の中止について山田からの電信を受理している。山田は9月3日の日記にワシレフスキーその他多くの将校と会った、と書いている。9月5日ソ連軍の命令で関東軍参謀部は武装解除され、長春にある前線受け入れ・輸送ラーゲリ No.3へ13人の将官、12人の将校、21人の兵士が送られ、彼らは9月6日対諜報スメルシの将校が同行してハバロフスクへ連行され、近郊のヴォロネシ村にあるラーゲリに収容された。モスクワへ輸送される予定だったが10月に中止された。山田は10月11日ワシレフスキーと会見し、日本人捕虜への取り扱いに感謝するとともに、満州に残った兵士、家族についての懸念を表明した。11月6日に第45特別施設に収容されたが、ここには1946年初めまでに153人の日本人将官、6人の提督、11人の高官、16人の将校、200人のサービス要員が集められることになった。1946年1月20日にモスクワは内務人民委員部の係官を派遣し、東京裁判のために対ソ連戦争の準備に参加した将官を特定すべく資料を準備した。

石井の731細菌部隊について山田は1944年に関東軍司令官となってこの部隊を視察し、日記に驚愕したと記している。ソ連侵攻後に石井らは逃亡し、ソ連軍軍事検察スミルノフが米国に引渡しを求めたものの拒否された。1949年最後の週にハバロフスク裁判が開かれ、12月30日に山田らには25年の自由剥奪(1947-50年にソ連では死刑が廃止されていた)が宣告された。かくして戦争犯罪人とみなされた彼は1950年初め、イヴァノヴォ州の第48ラーゲリへ移送され、1956年12月までその地にとどまった。1950年半ばまでソ連には2500人の日本人が存在したが、日ソ間で特赦協定が締結され、1956年12月23日解放された。山田は帰国後8年以上生き、1965年7月84歳で死去した。1980年代終わりに息子の1人がハバロフスクを訪問している<sup>43</sup>。

ハバロフスクの極東裁判で主席翻訳官をつとめ、ハバロフスク地方では地方誌研究者として著名なプレマコフ Г.Пермяков が当時のことについて興味深い文章を寄稿している。彼は1970年代に「太平洋の星」紙で自然部門を担当していた。以下にその内容をまとめる。

ハバロフスクでの裁判(1949年12月25-30日の五日間)からちょうど50年が経過したが、731部隊の本拠平房には今でもツーリストの訪問が絶えない。満州を日本が占領したあと、コレラが蔓延したことがあり、あらかじめ注射していた日本兵が罹患せず日本人がコレラ菌を流したと言われていた。ソ連軍の情報総局(ГРУ)はすぐに平房に生物兵器生産施設があることを突き止めた。満州の諜報員からは、工場の上空で飛行が禁止され、工場からの強い風で中国人が病気になるなど不安にさせる情報が寄せられていたが、人体実験を行っていることが次第に判明してきた。731部隊は毎年600人以上、5年で3000人以上の丸太を殺した。日本人はこの巨大な犯罪の跡を消すのに成功した。あらかじめソ連軍の侵攻を知っていたのか石井部隊は桿菌の株や文書とともに無事に逃亡し研究所は爆破された。山田乙三も生物兵器を使っても敵よりも被害が出る可能性があったので廃棄を命じたと回想している。石井らは朝鮮を経由して無事に帰国したが、米軍にみづかり桿菌

の株などと米国へ連行され、秘密を明かすことで罪をまぬかれ 1959 年米国で死去した。ソ連軍が入ったときはすでにみな廃墟の中にあり、数年間、中国人は原因不明の病気で死んでいった。私（プレミャコフ）は革命後に父が連れてきた中国に住み、1939 年始めハルビンのソ連総領事で中国語、日本語を教えるよう招かれ 40 年からは翻訳にも従事した。戦後の 1945 年 10 月ソ連国内で中国語日本語の通訳をする仕事に誘われ、11 月初め妻とハバロフスクへ向かった。内務省の主任通訳として日本の高官が収容される第 45 特別施設へ行くと、山田のほか、3 人の細菌将官梶塚、川島、高橋などの幹部がいた。モスクワからの派遣者も含め多数の経験豊かな捜査官からなるグループが軍部の侵略を暴露する材料を探すべく戦争犯罪人を探し、将官らの発言を記録した。1946 年 5 月に東京で開始された裁判では 7 人に死刑、16 人に終身刑が宣告されたが、生物兵器については沈黙しゴルンスキー Голунский 陸軍大将の訴えも米国の反対で却下された。米ソに対する戦争で使用しなかったからというのが理由だが、自国の生物兵器開発に石井を利用するのが主眼であり、ソ連は対抗して彼らに対する裁判の準備を始めた。1949 年 10 月 20 日、ハバロフスク地方内務省局長ドルギフ Долгих のところに、ほとんどがハルビンから来た最良の通訳 20 名が集合した。ソ連内務省が裁判の遂行を委任したカルリン Карлин 陸軍大佐が会議を進行したが、個人的な安全のために彼は長い間秘密のままに伏せられていた（主任通訳としてのプレミャコフも名前が伏せられた）。そして 12 人の被告を尋問するというひどく疲れる仕事を開始した。皆が関与を否定したが陸軍中将高橋隆篤（神経質でロシア人に対して高慢だった）だけが、虚勢から生きた人間による人体実験の経験を話した。「もし犯罪者が死刑になるのなら、科学のためにそれを殺したほうがよい」と述べた。一方、1950 年にソ連で再度死刑が導入されるため、上司からは 1949 年末までにハバロフスク裁判を終了させるよう指示されていた。当時、モスクワ東京間では捕虜をめぐる複雑な交渉が行われており、日本側は関東軍、朝鮮軍幹部について心配していた。裁判は 49 年 12 月 25 日より 5 日、朝と晩、12 人に対する公開裁判が開かれ連日満員となった。告発文書を 2 時間にわたり国家検事チェルトコフ Л.Н.Чертков が読んだ（あらかじめ日本語に訳して被告に配布）。731 部隊がペスト菌を毎月 300 キロ生産し、凍傷実験などの人体実験で毎年 600 人が死亡したという事実が明らかにされた。沿海軍管区軍法会議の判決は厳しく、山田、梶塚、高橋、川島には 25 年、残りの将校には 20、18、15 年、若い役人は 2-10 年の自由剥奪という判決が宣告された。しかし 6 年後に彼らは日ソ基本条約に基づき自由を得て帰国したことにプレミャコフは不満を覚えている<sup>44</sup>。

一方でプレミャコフは、関東軍の幹部が収容されたハバロフスク教育大学の裏手に残る白二階建ての第 45 特別施設を紹介するとともに、ロシア語に堪能で関東軍の中央情報機関を指揮していた有名な対ソ連諜報員陸軍中将秦彦三郎（体重が重く頭が大きく耳も巨大だったので耳將軍と呼ばれた）、口数の少ない山田乙三（体格は平均的でバリカンで刈り上げ額は広い）、満州国から連行された「中国人の裏切り者將軍・大臣連」（金で祖国を日本人に売ったので中国に引き渡した）などについて紹介している<sup>45</sup>。そしてプレミャコフはある日、収容所長から溥儀の存在を知らされ彼の通訳になるよう指示され驚愕する。英国など欧州の君主国や米国大統領の妻が捨てられた君主溥儀に関心を持っていること、我々は完全で正しい溥儀の伝記を書く必要があるとの収容所長の話が聞かされた。溥儀は同意し、プレミャコフは彼の伝記執筆に取り掛かった。以下、溥儀の回想についての紹介が続

く<sup>46</sup>。1945年11月から50年9月までハバロフスクで生活した溥儀については、他にも報道された。ラヴレンツォフは1946年春に日本軍のヒライ トイチがいかにして溥儀が満州国の皇帝となったのか語った内幕を紹介している。溥儀はチタから22 km離れた赤軍のモロコフサナトリウムにある第30特別施設に収容され、11月初めに関東軍の幹部とともにハバロフスクの第45特別施設へ移された。1946年6月12-18日に公式に尋問され、6月26日これらの文書が東京へ送られたあと、7月31日溥儀は内務人民委員部職員5名とウラジオストックへ向かい、数日後に厚木へ飛んで8月16日、東京裁判で証言台にたった。そして9月6日ウラジオストックへ戻り、翌日ハバロフスクに帰還した。1949年に毛沢東が政権を握った翌1950年7月、中央からの指示で彼はポグラニチナヤまで列車で連行され中国側に引き渡された。スターリンに書いた手紙には卑屈に愛と敬意を、日本には敵愾心をあらわにしていた<sup>47</sup>。

おわりに

今回の報告では、極東におけるテロル全般に関する問題、農業、ことにクラーク絶滅政策と集団化に関する問題、強制移住や民族的な弾圧、さらに中国を中心とする東北アジア地域との関係、特にロシア人の亡命者とソ連との関係に関する問題を報告できなかった。特に最後の問題については、ロシア極東地域はロシア革命後にアジア・太平洋地域、アジアばかりでなくオーストラリア、アメリカへと反ソ勢力が亡命していく拠点であったと同時に、19世紀末から建設が始められ日本による満州支配とともに手放さざるをえなくなった中東鉄道という植民地拠点を維持していたことからハルビン、上海といった中国の拠点都市とのつながりが強く、ソ連崩壊後の極東現地紙にはこれら亡命問題が頻繁に取り上げられている。出版された文献も多く、極東住民にとっては看過されえない問題であるとみなせよう。いずれこれらの問題についてまとめることにしたい。

<sup>1</sup> Чупракова Л., «Как от Байкала до Амура царь «строил» магистраль : (Из истории строительства железной дороги на Дальнем Востоке) », *Хабаровские вести*, 1998. 28,30 апреля. ハバロフスクの木造の駅舎には1900年、ウスリー鉄道を建設した兵士に捧げる記念碑が建てられたが、1920年4月4日から5日にかけての夜、極東のすべての主要都市で攻撃を開始した日本軍が鉄道駅の近くでも戦闘を行い、駅舎に放火、記念碑は爆破されるという悲劇的運命をたどった。

<sup>2</sup> Нилов Ю., «Направление будущих дорог строго на север : (Из истории строительства железной дороги на Дальнем Востоке, в т.ч. Комсомольск-Хабаровск)», *Дальневосточная магистраль*, 1997, но.43, (ноя.). с.5, (1стр.).

<sup>3</sup> Зуев В., «Первооткрыватель будущих трасс : (О вкладе В.К.Арсеньева в изыскания будущих железнодорожных трасс в Приамурье и Приморье)», *Дальневосточная магистраль*, 1997, но.47 (дек.), с.7, но.48(дек), с.7. アルセーニエフによるハバロフスク=ソヴェーツカヤ・ガヴァニ (革命前はインペラートルスカヤ・ガヴァニとよばれる) 線建設の主張については、次の論文も参照のこと。Гончарова С., «Путь к великому океану : (О строительстве Амурской железной дороги от Хабаровска до Владивостока, 1913-1946гг.)», *Приамурские ведомости*, 1999, 26 окт, с.3. фот (4 ср.стб.).

<sup>4</sup> Арсеньев В.К., «Доклад В.К.Арсеньева Далькрайкому ВКП : (Об истории открытия, заселения, хоз.освоения и перспективах развития Дальнего Востока,

1928г.)», *Вестник ДВО РАН*, 1995, no.3, с.94-104.) 前文でこの文章に関する紹介がなされている。沿海軍管区のもと司令官ウンテルベルゲルは1881年、キャプタからカルガン、北京を経て日本へ行き、ドイツ帰りの参謀本部の若き将校大山巖と会見した。大山はウンテルベルゲルに陸軍士官学校の新しい建物を見せ、軍の再編、艦隊の設立などについて説明した。ウンテルベルゲルが何のために軍備を整備しているのか尋ねるとあなた方と戦争をするためだと回答した。それも1891年に開始されたシベリア鉄道がチタまで進んだ際に、その後の路線についてアムール沿いか満州通過か議論され、「残念ながら」他国の領土を通過することが決定され、それが後に複雑で危険な政治的問題を引き起こすことになった。日本は冗談でなく警戒を始め、ロシアは中国との新たな複雑な関係へ入ったと解説している。

<sup>5</sup> Фефилов П., «Нужная, полезная книга : (Из истории Комсомольск-на-Амуре и Тындин отделения Дальневосточной железной дороги), *Сов.Приамурье (Комсомольск-на-Амуре)*, 1999, no.42 (окт). С.7, (3 б.стб.). 例えば、1998年10月15日、ソヴェーツカヤ・ガヴァニ近くのヴァニノ駅にこの鉄道で仕事をしていたベテランが多数集合した際、コムソモリスクの鉄道博物館長ズーエフは、将来本を執筆するために回想を書いてくれるよう彼らに要請した (Седых Т., «Дальневосточное ожерелье : (О строительстве железных дорог, Волочаевка - Комсомольск, Комсомольск - Известковая, Комсомольск - Советская Гавань)», *Восход (Ванино)*, 1998, 14 нояб.). バムについては、未見だが次のような記事が多数掲載されている。 Комогорцев И., Фролов А., «Труд этот, Ваня, был страшно громаден...» : (Из истории БАМЛАГа (30-50 гг. 20 в.))», *Советская Молодежь, Байкал-регион*, 1994, 14 мая с.3,6., Денисова К.С., «Система БАМЛАГа в г.Свободном, 1933-1941гг.», *Амурские краеведческие информационные вестн*, no.2 (4), Благовещенск, 1992. с.21-24., Еланцева О.П., «Не подлежит распространению ...», *Периодические издания БАМЛАГа 1932-37г.*, *Амурский краевед, (информационные вестн)*, no.2(4), Благовещенск, 1992, с.24-29., «Кто погребен на БАМЛАГовском погосте ? (Репрессии в Свободном в 30-ые годы)», *Амурская неделя*, 1998, 5 нояб., Паршин Е., «БАМ - БАМЛАГ - Свободный : (Об образе БАМЛАГа и его столице - Свободный)», *Амурские Вестн*, 1993, 27 авг., Кузьмина М., «Дорога железная ... : (Малоизвестные факты из истории строительства БАМа)», *Дальневосточный Комсомольск*, 1990, 24 окт.

<sup>6</sup> Зуев В., «Бегут поезда, стучат колеса, молчит тайга... : (Из истории строительства дальневосточной железной дороги в т.ч.БАМа)», *Гудок*, 1996. 30 ноя. С.7. (1стр.), Зуев В., «Линия «Волк» : (из истории строительства дороги Волочаевка - Комсомольск-на-Амуре и судьбах строителей - репрессированных заключенных)», *Советское Приамурье (Комсомольск-на-Амуре)*, 1999, 5 фев, с. 6.10.

<sup>7</sup> Реутов А., «Камень на Лубянке - камень на Листвянке : (О памятном знаке репрессированным «Амурлага» на острове Листвянка, Амурский район)», *Приамурские ведомости*, 2000, 28 апр, с.2, Зср.стб.

<sup>8</sup> Мальцева Е.В. «Первый поезд из Хабаровска в Комсомольск шел почти двое суток : (из истории строительства БАМа)», *Амурская Заря (Амурск)*, 2000, 16 фев, с.3, (Зср.стб.). 次の記事にもラーゲリで働いた人々、それを見ていた人々の回想が掲載されている。 «По ком звонит колокол : (Текст городской экскурсии о г.Комсомольске на Амуре - рассказ о строителях, объектах, выполненные трудом репрессированных)», *По ком звонит колокол?*, 2000, НН5-11.

<sup>9</sup> Еланцева О.П., «Из истории строительства железных дорог Комсомольск - Советская Гавань (1943-1945), Хабаровский край», *Отечественные архивы*, 1995, no.3, с.90-99, エランツェヴァの論文は中央誌に発表された。彼女は文献の所在を明らかにしている。РГАСПИ のフォンド 644、ГАРФ のフォンド 9407(鉄道建設ラーゲリ総局)、ЦХИДК の捕虜関係フォンド 1、ハバロフスク地方アルヒーフ、その他記録映画や写真集である。Зуев В., «Из Комсомольска в Совгавань, Сихотэ-Алинский перевал : (Из истории строительства железной дороги Комсомольск - Совгавань)», *Советская*



звезда (Совгавань), 1994, 16,17,18,22,24 февр., Он же, «Первыми шли изыскатели : ( о строительстве железной дороги Пивань- Советская Гавань)», *Советское Приамурье (Комсомольск-на-Амуре)*, 1998, 4 сент. С.5. 11 сент, с.6, 18 сент, с.7., Ткачева Г., «Строительство но.500. : Из истории строительства железной дороги Комсомольск-Советская Гавань», *Дальневосточный ученый*, 1994, но.5, с.4.схем.などを主に参照。次のクジミナの文章は、地方アルヒーフの史料を利用して当時の囚人労働の内容を紹介したもの。Кузьмина М.А., «Хроника восточного лагеря : (О строительстве железной дороги Комсомольск-на-Амуре – Сов.Гавань в 30-40-е гг.)», *Советская звезда, (Советская Гавань)*, 1995, 23,24,25 марта. フェフィーロフは、特にシホテ・アニン越えの路線決定に貢献のあった技術者クズネツォフ А.П.Кузнецов について紹介しているが、ズーエフとの共著で彼についての本も出版したようだ。Фефилов П., «Магистраль, устремленная в будущее : (О строительстве железной дороги Комсомольск – Советская Гавань и ее проектировщике А.П.Кунецове : К 70-летию Комсомольского района)», *Советское Приамурье (Комсомольский район)*, 1995, 16.23 дек. 本の題名は、*Сердце остановилось на перевале*, Финиздат, Москва, 1995. これより早くフェフィーロフはクズネツォフに関する論文 «Перевал Кузнецова», *Дальневосточный Комсомольск*, 14 апреля 1992г.を書き、コムソモリスク・ナ・Аムール住民に彼の記念碑を建立するよう訴え翌93年7月1日に除幕されたとのこと(未見)。Кузьмина М., «Путь к океану :( О строительстве в 1939-1945 гг. железнодорожной линии Комсомольск – Совгавань)», *Советская звезда(Совгавань)*, 1990, 10 окт.によれば、この路線建設の指揮をしたグヴォズデフスキーについてはゼンジノフによる次の本がある。Н.А.Зензинов, *От Петербург-Московской до Байкало-Амурской магистрали*, Москва, Транспорт, 1986г. このクジミナの文章がかなり早い時期にこの問題を取り上げ、建設に参加した無名の囚人について知られていないとして、参加者に声を聞かせるよう頼んでいる。未見だが次の文章が、囚人の回想を集めたものだろう。Кузьмина М., «Нас к морю вывела дорога...»: (Из воспоминаний заключенных – строителей железной дороги «Комсомольск – Советская Гавань» в 40-е гг.)», *Тихоокеанская Звезда*, 1995, 21 июля . с.5.

<sup>10</sup> М.Кузьмина, «Строительство но.500: (О строительстве железной дороги Комсомольск · Совгавань Восточного участка БАМа)», *Дальневосточный Комсомольск*, 1991, 21 сент, 24 сент.

<sup>11</sup> Седых Т., «Артерия жизни : ( О строительстве железной дороги Комсомольск – Сов.Гавань, 1945 г.)», *Восход (Ванино)*, 1998. 31 окт.

<sup>12</sup> Кузьмина М., «Холодное лето пятьдесят третьего : (О завершившейся экспедиции по ГУЛАГовским местам, по маршруту Николаевск – Лазарев · Богородское)», *Молодой Дальневосточник*, 1999, Н.31 июль, с.8, 1с., она же., «Телеграфный код «Охота». Строительство 6 и ИТЛ . «Здесь будет город заложен»? : (экспедиция Хабаровского краеведческого музея собирала материалы о строительстве железной дороги Селихин-Лазарев и тоннеля под проливом Невельского)», *Дальневосточная магистраль*, 1999, но.31, (авг),с.7, но.34 (авг·сент.), с.7., она же, «Телеграфный «Кристалл» : ч.3. строительство 507 и ИТЛ : (строительство железной дороги Селихин – Лазарев : из истории Хабаровского края и ДВЖД)», *Дальневосточная магистраль*, 1999, но.36 (сент.), с.7., она же, «Последний вагон на Север : (О строительстве одной из последних «Великих сталинских строек», железной дороги Комсомольск-Лазарев в 1950г.)», *По ком звонит колокол ?*, 2000, но.5, с.1, (Зс.стб.)

<sup>13</sup> Кузьмина М., «В 9 км от Де-Кастри : Ново-Волочаевка : прошлое и настоящее : (О строительстве заключенными подземной электростанции для тоннеля на Сахалин в Ульч.р-не, в 1951-53 гг.)», *Приамурские ведомости*. 2000, 19 июля, с.14, фот. 6ср.стб.

<sup>14</sup> Подпенко Е., «Дорога к каторге :( Об экспедиции Хабаровского краеведческого музея по местам ГУЛАГа в Хабаровском крае)», *Хабаровский ЭКСПРЕСС*, 2000, 12



июля с.5, фот. 1 стр. 次の記事も探検時に撮影した6枚の写真を掲載し、この北方ラゲリで発見した遺物について報告している。Чернявский А., «Тайны северного ГУЛАГа: (Сотрудники краеведческого музея в очередной раз побывали в ГУЛАГах северных мест Хабаровского края)», *Тихоокеанская звезда*, 2000, 13 июля с.3. (4 б.стб.)

<sup>15</sup> Коробов А., «Амурский подводный тоннель : (О железнодорожном тоннеле под Амуром, построен в 1936-1942гг.)», *Дальневосточная магистраль*, 1999, но35.(сент.), с.7-8.

<sup>16</sup> Зачеса А., «Тоннель под Амуром : (Об А.А.Осетрове, работавшем на строительстве железнодорожного тоннеля под Амуром : 1937-1945)», *Хабаровские Вести*, 2000, 5 мая, с.2. портр. (5ср.стб.).

<sup>17</sup> Гладких Т. «Дан приказ...: (Из истории ДВЖД : по приказам ведомства периода 1941-1943 гг.)», *Дальневосточная магистраль*, 1997, но.44(нояб.), с.7, (1стр.).

<sup>18</sup> Даммер З., «И министр в правительстве Керенского : (К 130 летию со дня рождения известного строителя железных дорог России А.В.Ливеровского. С 1913 по 1915 гг. работал в Хабаровске)», *Приамурские ведомости*, 1997, 3 июля, с.3. (4 б.стб.). 1944-45年にリヴェロフスキーが行った講義からとくにアムール鉄橋建設にまつわる困難に関する部分を同じくダンメルが紹介している。Ливеровский А.В.«Мост выстроен быстро и хорошо» : (выдержки из стенографии лекций А.В.Ливеровского, касающиеся истории строительства амурского моста)», *Приамурские ведомости*, 1996, 22 окт, с.2.(6 с.стб.)

<sup>19</sup> 例えば、Чековитов Н. «Корабелы : (Воспоминания и свидетельства о труде, жизни очевидцев и участников строительства Комсомольского судостроительного завода)», *Дальний Восток*, 1986, но.7, С100-107.を参照。コロプキンはペルムスコエへ最初の有志とともにコロンブス号、Коминテルн号で到着、1932年から木材伐採に従事したこと、ソロヴィヨフは仕事のあとのアコーデオンをひいたこと、春が近づくにつれて恐ろしい壊血病が広まったこと、効き目はなかったが針葉樹の煮汁を飲んだこと、コスイギンは1933年6月12日の造船所建造開始時のブリュッヘルの挨拶、工場内で行われた競争、封鎖されたレニングラードやスターリングラードからも部品が戦火の中を運ばれてきたことなどについて触れている。

<sup>20</sup> Якушев В.И.«Вклад В.П.Костенко в разработку проектов судостроительных заводов в Комсомольске-на-Амуре и Северодвинске : (В.П.Костенко – главный инженер проектной организации «Проектверфь»)», *Судостроение*, 1999, но.3, с.76-78. この文章の後半では、1936年に開始されたアルハンゲリスク近郊セヴェロドヴィンスク造船工場についても述べられている。この工場はコステンコシステムによるコムソモリスク・ナ・Амурле工場の第二弾と呼べるものだった。その設計をしたヴァハロフスキー-Г.А.Вахарловскийはコステンコについて「要求は高いが公平で、魅力的な人物」として記憶している。コステンコについて述べた次のスミルノフによる文章は未見。

Смирнов Г.В., «Первенец «Проектверфи» : (В.П.Костенко и история судостроительного завода в Комсомольск-на-Амуре)», *Владимир Полиевктович Костенко. 1881-1956*, М,1995,с.123-126. また、彼に関する回想文書集も最近になって刊行された。»*Жизнь и деятельность кораблестроителя В.П.Костенко : (сборник статей и воспоминаний, СПб)*», 2000,202с.これも未見である。次のシャピロによれば、コステンコは日露戦争にも参加、ノヴィコフ・プリヴォイの『ツシマ』にも登場する。1955年には「対馬沖のオリョール号にて」*На «Орле» в Цусиме*を出版(1968年に再販)、生涯、日露戦争について考えていたという Шапиро С. «Кораблям-большое плавание : (О кораблестроителе В.П.Костенко, участнике русско-японской войны, 1904-1905гг.)», *Молодой Дальневосточник*, 1983,17 июня. この造船工場の最初の工場長は Каттери И.А, Каттель、次いで Б.К.Бикторовがつとめたが、3人目の工場長で工場建て直しに貢献したものの1938年に粛清されたジダーノフについても記事が出ている Кузьмина М. «Красный директор в интерьере эпохи : (О начальнике Дальпромстроя И.М.Жданове, впоследствии первом директоре Амурского Судостроительного

завода в Комсомольске-на-Амуре, репрессирован в 1938 г.)»,  
*Панорама(Комсомольск-на-Амуре)*, 1996 но. 29 июль. С.12. но. 30 (июль), с.12.)

<sup>21</sup> Калинов В., «В отсеках тишина : (О подводной лодке «Ленинец» и  
Комсомольском строительном заводе в годы войны 1941-1945  
гг.)», *Дальневосточный Комсомольск*, 1995. 17 марта, с.6.

<sup>22</sup> Фефилов П., «Ивочкины : (О кораблестроителях Комсомольска-на-Амуре,  
к-300-летию Российского Флота)», *Дальневосточный Комсомольск*,  
1996.14,21,28мая. 父の趣味が影響して娘の Нина Владимировна はエルミタージュで  
学芸員を務め、東方の硬貨システムに関する研究を行った。

<sup>23</sup> Сунгоркин Н., «Завод имени Кирова : (Из истории судостроительного завода им.  
Кирова)», *Тихоокеанская звезда*, 1989,31 мая. Кьероф暗殺後、工場にはキьероフの  
名がつけられた。

<sup>24</sup> Пелипас А., «Занесен в список «врагов народа» : (О партизане - ковпаковце  
С.В.Рудневе, в 30-х гг. жившем на Дальнем Востоке, в т.ч. в Хабаровске)»,  
*Приамурские ведомости*, 1997. 30 окт.с.2.

<sup>25</sup> Харькова М., «Романтика моей молодости : (Из рассказов хетагуровки,  
первостроителя г.Комсомольска-на-Амуре)», *Дальневосточный Комсомольск*, 1996,  
11 июня, с.3. (26.стб.)

<sup>26</sup> Усольцев В., «Палач или жертва?:( Очерк о комиссаре государственной  
безопасности 1-го ранга Т.Д.Дерibasе. Жил и работал в Хабаровске с 1930-1937 гг.  
Стал жертвой репрессий)», *Дальний Восток*, 1997. Но.3. с.230-253.

<sup>27</sup> Перминов Г., «Первопроходцы : (Об экспедиции  
Ю.А.Билибина-В.А.Цареградского, открывшей золото в Магаданской области в  
1928г.)», *Охот.эвен.правда(Охотск)*, 1998,24 нояб.с.2, ил. (1стр.) ツアレグラツキー  
は 1930-31 年の第二次コリマ遠征を指揮し、その後彼は 1938-55 年引退するまでダリス  
トロイの地質調査局を率いた。ビリビンは 1932-39 年に再度コリマに滞在した。1935 年  
からはレニングラード鉱山大学で働き著名な地質学者になった。彼の「鉱床地質学の基礎」  
は今日でもイギリスを失っていない。1946 年ビリビン、ツアレグラツキー他コリマ金鉱の  
発見者には第一級のスターリン賞が授与された。コリマの金発見に関する最初の本「金の  
コリマ Золотая Колыма」はゲフトマン И.Гехтман により 1937 年にハバロフスクで出  
版されたが、彼は「人民の敵」と宣告され、著書も禁止された。この文章の筆者ペルミノ  
フは、1948 年に中学校の地理の教師からこの本を読むように渡された。1972 年「Мысль」  
出版より、著名なマガダンの地質学者ウстиев Е.И.Устиев がコリマの最初の発見者  
たる地質学者についての本を出している「У истоков золотой реки」。

<sup>28</sup> Козлов Д.Г., «Во времена колымских лагерей.», *Колыма*, 1992, но.10-11, с.31-36.  
Козрофはまた、次の文章で特に 1931 年から 32 年にかけてのダリストロイ立ち上げ時の  
模様についてコズロフはアルヒーフ史料を使いつつ説明している。Козлов А.Г., «У  
истоков Севвостлага», *Колыма*. 1992, но.12, с.27-32. その中で彼は、ニコラーエフによ  
る同じくダリストロイ設立時の問題に関する次の文章の不正確さを指摘している。

Николаев К. «Чудная планета Колыма», *Наука и жизнь*, 1990, но1. с.48-54.

<sup>29</sup> Смолина Т., «Личность яркая, характер многогранный : (К 100 летию со дня  
рождения Э.П.Берзина, первого директора Дальстроя, Колыма)», *Колыма*, 1994,  
но.1. с.34-38.

<sup>30</sup> А.Козлов., «Гаранин: Легенды и документы : (О судьбе полковника  
С.Н.Гаранина - начальника управления северовосточных  
исправительно-трудовых лагерей (30-е гг. 20 в.)», *Магаданская правда*, 1993,  
9,12,14 окт.

<sup>31</sup> Козлов А.Г., «За колючей проволокой севвостлага : (Троцкисты на Колыме .  
Документальные материалы)», *Колыма*, 1993, но.1, с.33-37.

<sup>32</sup> Максимова Э., «800 человек погибло в ледяной воде Охотского моря : (О гибели  
советского парохода «Индирикка» в декабре 1939 г.с арестантами, которых везли на  
Колыму)», *Известия* 1999, 12 нояб. С.7. 1 стр. 猿払の記念碑は 1971 年 10 月に建てられ

シベリアからは石が送られた。救助に対してソ連のメダルが 10 人に授与された)。コリマの囚人の生活については、次のような随筆が書かれている。Воронская Г., «Серпантинка : (Рассказ о жизни репрессированных в лагере на Колыме)», *Воля*, 1995, no.4-5, с.101-111., Гаген-Торн Н., «Рукопись : (Рассказ о жизни в колымских лагерях)», *Воля*, 1995, no.4-5, с.313-327., Устиева В., «Подарок для вице-президента : (Воспоминания о колымских лагерях, Записано Б.Цыбиной)», *Воля*, 1995, no.5-6, с.124-130. 未見だが、コリマの金採掘について Вагнер Г.К., «Дорога в ад и обратно: (Воспоминания заключенного о работе на золотых приисках Колымы, 1937-1947 гг.)», *Российское золото*, сб.т.2, Ред.сост.В.И.Калугин, М.1994, с.365-385. *История Сибири и Дал.Востока*, 1994, вып 3, no.94. Даристроイとヤクート人の関係について Волченко В.П. «Дальстрой» в судьбах народов Якутии (1931-1953гг.), Региональные особенности межнациональных отношений : *Материалы межвузовской научной конференции, посвященной межнациональных отношений коренных народов (Якутский государственный университет 1993г.)*, Якутск, 1994, с.92-93. コリマでの政治的弾圧について次のような文章が書かれている模様。Горчаков Г., «Л-1-105 : Из воспоминаний узника : (Политически репрессированные на Колыме, в системе Берлага в конце 40-х годов)», *Российское золото*, т.3, М, 1994. с.323-342, Сведения об.авт. с.343. 次のピリヤソフの論文はダリストロイの構造をまとめたものだが、歴史的というより若干抽象的にまとめている観がある。ただしダリストロイの構造において囚人、自由労働者ばかりでなく現地住民 (集団化されたあとのエヴェン、カムチャダール、チュクチなど) のダリストロイへの関わりについても言及されており参考になる (Пилясов А.Н. «Трест «Дальстрой» как суперорганизация (1932-1956 гг.)», *Колыма*, 1993, no.8.9-10,11 (8号を除き、9-10号、11号を参照した。))。

<sup>33</sup> Кузьмина М., «Души усопших возвращаются на родину : (О поисках захоронений японских пленных в Комсомольском районе и для вывоза останков в Японию)», *Дальневосточный Комсомольск*, 1998, 1 сент, с.4-5.

<sup>34</sup> Кузьмина М., «Души усопших вернутся на родину : (О поисках могил японских военнопленных на территории Хабаровского края (Комсомольский район) для вывоза останков в Японию)», *Панорама (Комсомольск-на-Амуре)*, 1998, no.1 (январь), с.12 (1стр.)

<sup>35</sup> Подзноева С., «Раскопки на японском кладбище вместо урока истории : (В Хабаровском крае проходит эксгумация останков японских военнопленных)», *Тихоокеанская звезда*, 1999, 23 сент, с.2.(6 б.стб.)

<sup>36</sup> Акулич С., «Русский автор – о японских военнопленных : (О книге секретаря Комсомольского отделения общества «Россия - Япония» М.Кузьминой «Японские военнопленные в Хабаровском крае)», *Тихоокеанская звезда*, 1995, 5 сент.日本で 2000 冊以上出版された抑留者関係の本にさらに一冊加わると付け加えている。

<sup>37</sup> Андреева Г., «Правда нужна живым : (О книге комсомольского краеведа М.Кузьминой «Плен», посвященной японским военнопленным второй мировой войны в Хабаровском крае)», *Приамурские ведомости*, 1996, 12 апр. (1 б.стб.)

<sup>38</sup> Кузьмина М., «Загадка Пиванского кладбища : (При раскопках захоронений японских военнопленных в Комсомольском районе в поселке Пивань были обнаружены останки репрессированных)», *По ком звонит колокол? (Комсомольск-на-Амуре)*, 2000, н.2, с.1.

<sup>39</sup> «Мартиролог военнопленных:(О передаче книги памяти со списками захороненных японских военнопленных в ходе визита приморцев в Ниигату)», *Утро России*, 1996, 14 февр. 未見だが次の記事も知事による日本への追悼リストの贈与を報じている。Астикас Л., «Губернатор передает книгу памяти японцам : (О выпуске книги памяти в 2-х томах о захоронениях японских военнопленных в Приморье)», *Владивостокское время*, 1996, 8 февр.

<sup>40</sup> Колоколов В., «Японец, который рисовал Сталина : (О японце

Миямото, отбывавшем плен после советско-японской войны 1945 г. в лагере N306<sup>1</sup> Хабар. края)», *Дальневосточный Комсомольск*. 1996, 27 февр. с.6 (5б.стб.)

<sup>41</sup> Иванов В., «Грустные трофеи войны (О японском художнике Миямото Цутому, был в плену в Хабаровском Крае после войны 1945 г.)», *Приамурские Ведомости*, 2000, 12 июля с.14, Рус.Флаг, 2000, но.7, с.4. 未見だが、もと抑留者で現在ハバロフスクの中学で日本語を教えている日本人についての記事も掲載されている

(Чарторижский Д. «Свой среди чужих : (О японском военнопленном Танака Такэси, сейчас он преподает японский язык в Хабаровской средней школе но.32)», *Суворовский натск*, 2000, 2 сент, с.3.(3б.стб.)). (同じく未見 Серебrenниов В. «Свой среди чужих : (О бывшем японском военнопленном, ныне учителе японского языка в Хабаровской школе но.32. Т.Такэси)», *Хабаровские Известия*, 1999, 15 июля, с.1,3.)  
Остро-Австралия在住のトクラ氏は、1940年代後半にタンボフからハバロフスクまでソ連のラゲリを連れまわされ、ハバロフスク第二駅の病院で死亡した父の墓地を探すために訪問した。彼はハバロフスク地方知事にまで手紙を書き、あきらめきれずアルヒーフで探すことも望んだ (Николаева С. «В поисках отца по всему белому свету : (О поисках захоронений японских военнопленных на территории Хабаровского края)», *Тихоокеанская звезда*, 2000, 29 янв. с.2.(2м.стб.)

<sup>42</sup> Андриянов Д., «Японцы, вернитесь ! Мы вас полюбили ! : (О заброшенном кладбище японских военнопленных у поселке Корфовский, Хабаровский край)», *Комсомольская Правда в Хабаровске*, 2000, 22 сент, с.12. (1с.) コルフでは銅版がはがされた模様だが、他にも別の日本人捕虜の墓地で平和公園が作られるプランが出されている (Терехова А. «В Артеме будет Парк Мира : (На месте заброшенного кладбища японских военнопленных создается Парк Мира)», *Завтра России*, 1997, 30 окт. 6 ноя. Н.43, с.16. (未見)). 次の記事はこれよりも早く、1995年にハバロフスクに日本人捕虜に対するメモリアル・パークが建立されたことを報じている模様 (未見) Белиов А. «Символ мира : (В Хабаровске открыт мемориальный парк мира и памяти в память о японских военнопленных, погибших на территории СССР)», *Граница России*, 1995, но.44 (дек.), с.2)

<sup>43</sup> Лавренцов А., «Последний командующий : (Ямада Отозоо – генерал-командующий Квантунской армией 1945г.)», *Тихоокеанская звезда*, 1997, 15 авг, с.5.(3 б.стб.)

<sup>44</sup> Пермяков Г., «Зона смерти (Из личного архива. О знаменитом Хабаровском процессе 1949г. над японскими военными преступниками, проводившими испытания бактериологического оружия на людях в годы советско-японской войны 1945г. ?)», *Тихоокеанская звезда*, 2000, 11 февр. С.5. (4б.стб.)

<sup>45</sup> Пермяков Г., «170 генералов : (Из личного архива : о лагере японских военнопленных в Хабаровске, 1945г.)», *Тихоокеанская звезда*, 2000, 15 февр. С.3 (3 с. Стб.)

<sup>46</sup> Пермяков Г., «Император в Хабаровске : (О судьбе Айсингйоро Пуи, последнего императора Китая и последнего императора Маньчжурской династии Цин, который содержался в особом лагере для пленных японских генералов в Хабаровске в августе 1945г.)», *Тихоокеанская звезда*, 2000, 18 авг. С.6, (4 б.стб.)

<sup>47</sup> Лавренцов А., «Пять лет из жизни последнего императора : (Император Маньчжурии Г.Пу И с 1945 по 1950 гг.находился в Хабаровске в качестве военнопленного вместе с японскими генералами)», *Тихоокеанская звезда*, 1997, 13 фев. С.3, фот. (1с.)



## 1920-30年代におけるサハ研究と民族知識人についての覚書

Записка этнологических изучений саха (якутов) и национальные интеллигенции в  
1920–30гг.

高倉浩樹

ТАКАКУРА Широки

### I

シベリア東部のテュルク系民族サハ人(ヤクート)<sup>1</sup>に対する戦間期の民族学<sup>2</sup>的研究動向は意外と知られていない。1920～30年代において旧ソ連内でサハの民族学的研究に従事したのはロシア人以外にも幾人ものサハ人知識人が含まれていた。ところが、その多くが1930年代末には「反革命」「ブルジョワ民族主義者」という名の下に粛正されてしまったのである。加えて彼らの著作を研究対象として取り上げること自体がタブーとされた時期も存在した。こうした諸要因が、20～30年代のサハ人研究者によるサハ民族学研究を、外国人研究者にとって見えにくいものとしたのであろう。そのことに気がつかされるのは民族知識人への再評価が、ソ連崩壊以降の1990年代に著しく顕在化するようになったからである。復刻版の出版が行われたほか、サハ人研究者によって数多くの伝記的及びその歴史的背景に関する研究が急速に進んだのであった。

いうまでもなく、この状況はソ連崩壊前後からの民族主義の台頭、歴史観の問題、ソビエト民族学史の位置づけといったより幅広い諸問題に絡むものである。本稿はこうした諸問題を念頭におきつつ、近年蓄積されるこうしたサハの民族知識人に関する研究を参照しながら、1920～30年代におけるサハ民族学の進展と知識人の関係について考察を試みるものである。具体的にはまず1920～30年代のサハ民族学的研究がその前後の文脈のなかでどのような位置づけを占めるかを解明し、さらにこの時代の主たる民族知識人の個人史を紹介すると共に、彼らが輩出される歴史的背景とその相互関係を当時の政治社会的状況をふまえながら描写したいと思う。こうした作業を通して、戦間期のサハ民族学研究の担い手達とその意義について一定の見取り図を提示することが本稿の目的である。

### II

サハ人に対する民族学的研究は古くは帝政ロシア科学アカデミーによる調査にさかのぼる。18世紀初頭のアカデミー創設以来幾度となくサハ人の分布するヤクーチア地域にも及ぶ学術調査が繰り返された。1845年に帝政ロシア地理学協会が創設され、1851年にはシベリア支部が設けられ現地調査が頻繁に行われるようになったが、その多くは民族学的調査を含むより広い意味での博物学調査だった<sup>3</sup>。これが転換するのは長期にわたって現地に滞在することを余儀なくされたナロード

<sup>1</sup> サハとは民族自称であり、ヤクートとはロシア語による民族名称である。ヤクーチアはヤクートの土地という意味であり、本稿においてこの言葉が指し示す空間領域はソ連時代の「ヤクート自治共和国」、現在のロシア連邦における「サハ共和国」とほぼ同じである。

<sup>2</sup> 本稿における民族学とは特に断らない限り、帝政ロシア時代及び現在のロシアにおける民族学 этнология、その間のソビエト民族誌学 Советская этнография の双方を意味している。

<sup>3</sup> Ермолаева Ю. Н. Якутская комплексная экспедиция 1925 – 1930гг. Развитие науки в Якутии.



ニキ政治犯流刑囚らによる民族誌的調査が行われるようになってからある。19世紀末から20世紀初頭にかけては、ベルホヤンスク地域のサハ人とエヴェン人のフォークロアと民俗慣習を記録したフジャーコフ(И.А. Худяков)を筆頭に、サハ人の慣習法について考察したヴィタシエフスキー(Н.А. Виташевский)とレベンターリ(Л.Г. Левенталь)、ロシア人農民と定住化した先住民について書いた I.マイデル(И.И. Майдел)などがある。さらにサハ民族誌の古典的研究として日本人類学及び西欧・北米人類学でもよく広く知られるのはシェロセフスキー(В.Л. Серошевский)、ペカルスキー(И. В. Пекарский)、ボゴラス(В.Г. Богораз)、ヨヘリソン(В.И. Иохельсон)などである<sup>4</sup>。彼ら政治犯流刑囚達は比較的自由的な行動が許された流刑地において現地語を学び民族学の世界にはいった。そうした彼らが公式な立場で調査する機会を与えられたのが、帝政ロシア地理学協会東シベリア支部主催によるシビリャコフ調査である。1894-96年にかけて上述の政治犯流刑囚のほとんどを含む15人そして4人のサハ人が加わって民族学調査を含む総合調査が行われた<sup>5</sup>。その成果のいくつかは1910年代までに発表された。

ロシア革命(十月革命)以降から第二次世界大戦までの研究動向は大きく三つに分けられるといわれている。第一にシャマニズム研究である。これは当時のソビエト社会主義建設と関係している。というのも住民の宗教・信仰形態を明らかにすることは後の宗教政策とも絡んでいたからである。当初はサハ人自身の研究者はおらず、ロシア人研究者がその中心だった。先にも挙げたヴィタシエフスキーのほかに V.イオノフ(В.М. Ионов)、ドゥラベルト(П.Л. Драверт)らによって資料が収集された。1920年代に入るとサハの知識人による研究も成果となって現れている。特に重要なのは、クラコフスキー(А.Е. Кулаковский)、クセノフントフ(Г.В. Ксенофонтов)といった当時のサハの政治と文化に大きな影響を持っていた民族知識人の研究である<sup>6</sup>。とりわけクセノフントフはブリヤートやハカス文化などと比較する形でサハのシャマニズム研究を行っている。1930年代末には、その後ソビエト民族学を代表する一人になるロシア人研究者トカレフ(С.А. Токарев)が歴史文書を用いながら17世紀のサハのシャマニズム復元研究を行い、さらに1949年には A.ポポフ(А.А.

---

Новосибирск «Наука», 2001. С. 30-35. 具体的には以下の通りである。1725年のアカデミー創設以降、第一次カムチャッカ調査(代表: ベーリング В. Беринг)、メッセルシュミット(Д.Г. Мессершмит)によるシベリア調査(1720-1727年)、ミッレル(Г.Ф. Миллер)やグメーリン(И.Г. Гмелин)らが参加した第二次カムチャッカ調査(1733-1743)、イスレニエフ(И.И. Исленьев)とゲオルギ(И.Г. Георги)による調査(1768-1774年)、サリチェフ(Г.А. Сарычев)とメルク(К. Мерк)による調査(1785-1792年)等がある。19世紀に入ってからは1820~24年のブランゲリ(Ф.П. Врангель)による調査、1842-1845年のミッテンドロフ(А.Ф. Миддендорф)の調査が続く。19世紀後半以降はより地域を絞った調査が行われた。以下はヤクーチアの内部の地域対象とした調査である。1854-55年のマーク(Р.К. Маак)らによるヴェルイ地域調査、1866年クロボトキン(П.А. Кропоткин)によるオレクマ・ビッチム地域調査、さらに1868~70年にはマイデル(Г.М. Майдел)を中心とするチュコトカ調査隊がヤクーチア北東部について、さらに1873~75年にはチェカノフスキー(А.Л. Чекановский)らによるオレニョク地域調査が行われた。

<sup>4</sup> Иванов В. Н. К вопросу об изучении дореволюционной историографии истории народов северо-востока Азии // Сафронов Ф. Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск, 1971. С. 107; Гурвич И. С. и Пухов И. В. Е. К. Пекарский. К столетию со дня рождения // Советская этнография. 1958. №6.

<sup>5</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.35.

<sup>6</sup> 以下様々なサハ人研究者の名前が列挙されるが、そのほとんどはロシア人風の姓・名・父称である。こうした洗礼名に基づく姓名が普及したのは19世紀から20世紀初頭だったといわれている。同時にこの時期にロシア正教会の洗礼・葬儀法・復活祭の導入や民族衣装に十字架を付けるといった習慣が定着した。教育分野では、1903年にヤクート州において教会系の学校は77校あったのに対し、政府系のは17校にすぎなかった。20世紀初頭の知識人には教会系の学校出身者が多いといわれる(Николаев А. П. и Васильев Б. Е. Религиозный фактор в межэтнических отношениях: ретроспектива и современность // Этносоциальное развитие Республика Саха (Якутия). Новосибирск «Наука», 2000. С.243-244.)。

Попов)がヴェルイ地域の資料を報告している<sup>7</sup>。

第二の潮流はヤクーチアにおける民族構成つまり人口や民族分布に関する研究である。これは一番目の動向以上に当時の行政・民族政策と関連している。1922年ヤクート自治共和国がソ連邦内ロシア連邦共和国に設立されたあと、後に詳しく検討するが1925-30年にかけて自治共和国の領域に対する総合現地調査が当時の科学アカデミーによって行われた。この調査は当時の全ロシア中央執行委員会幹部会付属ヤクート共和国全権代表であったサハ人 М.アモソフ(М.К. Аммосов)のイニシアティブによって実行されたが、調査にはクセノフントフのほか、当時社会運動家・民族主義者として知られていたニキーフォロフ(В.В. Никифоров)などのサハ人も参加している<sup>8</sup>。残念ながらこの総合調査の成果は少なくとも民族学分野に関してはそれほど刊行されていない。その関係者のマイノフ(И.И. Майнов)や G.ポポフ(Г.А. Попов)らによる歴史的復元研究も含めたものがわずかに知られるほどである<sup>9</sup>。

第三の問題は、民族起源論である。ノソフ(М.М. Носов)、コズィーミン(Н.Н. Козьмин)、ペトゥリ(Б.Е. Петри)らによって1920年代後半に相次いで発表された論考では、サハの南方起源説が出された。さらに1930年代末にはこれを踏襲する形で、クセノフントフ及びボロ(С.И. Боро)によって、歴史・言語学・考古学・フォークロア資料を駆使したサハ人の起源と現在のレナ川中流域への移住の経路の問題について先駆的な考察がなされている<sup>10</sup>。なお、この時期にはホローシフ(П.П. Хороших)らによって帝政時代から20世紀初頭にかけてのサハ及びヤクーチア民族学に関わる広範な文献目録が作られていることも追記しておこう<sup>11</sup>。

第二次世界大戦をへて、1947年にはソビエト科学アカデミーに付属するヤクーツク科学研究センター(база)が設立されるが、これ以降より本格的な民族学研究が行われようになった。すでに1935年にはソ連時代のヤクーチア民族学研究の中核となる「言語・文学・歴史研究所(институт языка, литературы и истории)」が Р.オユンスキー(П.А. Ойунский)を初代所長として設立されていたが(当初は「ヤクート自治共和国人民委員会議付属言語文化研究所(научно-исследовательский институт языка и культуры при СНК ЯАССР)」、1947年にこの研究所はソ連科学アカデミー下に統合された<sup>12</sup>。同時に様々な学術雑誌出版体制も整えられた。たとえば先の研究所の紀要(当初は《Ученых записках》、後に《Труды институт языка, литературы и истории ЯФ СО АН СССР》と変更)、またヤクーツク郷土博物館(Якутский краеведческий музей им. Ем. Ярославского)やヤクート自治共和国中央公文書館(Центральный государственный архив ЯАССР)、さらにモスクワの民族学研究所(Институт этнография АН СССР)といった研究施設による出版物である<sup>13</sup>。

<sup>7</sup> Парникова А.С. Этнографическое изучение Якутии в советское время // Сафронов Ф.Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск, 1971. С. 33-35.

<sup>8</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.67,127; Макаров Д.С. М.К. Аммосов // Максим Кирович Аммосов. Биобиблиографический указатель. Якутск «Якутское книжное издательство», 1986. С.8.

<sup>9</sup> Парникова. Этнографическое изучение Якутии. С.35.

<sup>10</sup> Парникова. Этнографическое изучение Якутии. С.36.

<sup>11</sup> Хороших П.П. Якуты. Опыт указателя историко-этнологической литературы о якутской народности. Иркутск, 1924.

<sup>12</sup> Антипин В.Н. и т.д. (ред.) История Якутской АССР. Т.3. Советская Якутия. М. Издательство АН СССР, 1963. С. 190; Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 141. なお、ソ連崩壊後、この言語文学歴史研究所は「人文学研究所」と名称をかえ、ロシア科学アカデミーから独立し、サハ共和国アカデミー(1993年設立)付属となった。

<sup>13</sup> Парникова. Этнографическое изучение Якутии. С. 39.

制度的な充実の結果は、1950～1960年代にかけて相次いで現れるようになった。それらの多くはモスクワやレニングラードにおいて出版されたこともあり、日本・西欧・北米においてもよく知られている。キエフ生まれのサハ人であるイオノワ(О.В. Ионова)によるサハの伝統的牧畜と住居に関する物質文化研究があるほか、ノソフ、プリトウコワ(Н.Ф. Прыткова)、А.ポポフによっても伝統的衣類及び住居に関する研究が行われている。こうした物質文化研究の成果は、他のシベリア諸民族のものとも集大成され、1961年に刊行される有名な「シベリア歴史・民族誌アトラス《Историко-этнографический атлас Сибири》」となって結実した。またソビエト民族学のシベリア研究の黄金期を担うドルギフ(Б.О. Долгих)による「17世紀のシベリア諸民族における民族的・部族的構造」(《Родовой и племенной состав народов Сибири в XVII в》1960年)やグールヴィッチ(И.С. Гурвич)の「東北シベリア民族史」(《Этническая история Северо-Востока Сибири》1966年)など広域にわたる民族史的考察のなかでヤクーチア及びサハ研究も進められた。後にソ連考古学の牽引するオクラドニコフ(А.П. Окладников)は、サハの民族起源論を含めたロシア植民地化以前の先史時代について精力的に研究をおこなった<sup>14</sup>。

様々な意味で重要なのは17世紀末から18世紀前半のサハの社会構成とりわけ私的所有の始まりに関する議論——すなわち唯物史観的發展段階論におけるサハ社会の封建制の性質をめぐる諸問題——である。これは先に挙げたロシア革命前の政治犯流刑囚ヴィタシェフスキーやマイノフらの民族誌によって1910～20年代に先鞭がつけられた議論であったが、史的唯物論の立場からより本格的な検討をおこなったのはトカレフである。1945年に出版された「17～18世紀のヤクートの社会構成」<sup>15</sup>のなかで、著者はサハ社会の土地私有化は18世紀後半の毛皮税(ヤサク)の課税単位が土地に変わってから出現するのであると結論づけた。この問題は土地の封建的所有の変化がサハ社会内部から発生するのか否か＝サハの社会発展段階の規定に関わる極めて重要な問題であった。そのためこれはその後サハ人とロシア人研究者がほぼ対立する形で、すなわちドルギフやグールヴィッチらと、バフルーシン(С.В. Бахрушин)、イオノワ、バシャーリン(Г.В. Башарин)、Р.ソフロノフ(П.С. Софронов)、そしてV.イワノフ(В.Н. Иванов)と連なりながら1960年代まで続く論争となったのである<sup>16</sup>。

こうしてみると、ほぼ1940年代を境にして、サハ民族学研究はそれ以前と大きく性質を変えたことがわかる。それは所謂サハ人の文化と歴史に焦点をあてた民族誌的分析から、隣接する諸民族との比較を含むより広い史的唯物論的文脈に彼らの文化と歴史を位置づけようとする研究に転換したとことである。さらにモスクワやレニングラードなど中央の民族学者が牽引するかたちで研究の生成や論争が展開したことも注意すべきだろう<sup>17</sup>。

1920～30年代のサハ民族知識人による民族学的研究というのは、これまで描写してきた19世紀末から20世紀初頭の政治犯流刑囚らを中心とする古典的民族誌と1940年代以降のソビエト民族学によるシベリア研究の黄金期を形成する研究との間に位置するものである。そして着目しなければならないのは、この時期にサハの知識人による民族学的研究が始まるということだ。いわばサ

<sup>14</sup> Парникова. Этнографическое изучение Якутии. С. 40-42.

<sup>15</sup> Токарев С.А. Общественный строй якутов XVII – XVIII вв. Якутск, 1945.

<sup>16</sup> Софронов П.С. Изучение истории якутов первой половины XVIII века // Сафронов Ф.Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск, 1971.

<sup>17</sup> 先のサハの歴史的社會構造をめぐる問題もそうであるが、それ以外にも1950年代の「ソビエト民族学(Советская этнография)」誌上で論争された北西ヤクーチアの住民(エヴェンキ、サハ、ドルガン)の民族的属性(エスニシティ)をめぐる問題が挙げられよう。

ハ人最初の民族学の担い手の多くは 1930 年代末までにはスターリン治世下で肅正されている。そのこともあってだろうか(後の 1950 年代後半以降にその多くが名誉回復されるが)、戦間期を終えより制度的に確立されたソビエト民族学にあつて彼らの業績がこれまで十分に光が当てられてきたとはいえないのである。

この空白はいうまでもなく、ソ連体制時代の民族と文化をめぐる政治が大きく絡んでいる。たとえば、先に紹介した 17~18 世紀前半におけるサハの社会構成に関する論争のサハ側の主要な担い手であったバシャーリンは、彼の先達である民族知識人クラコフスキーらの研究及び芸術活動を評価する著作「啓蒙主義的かつ現実主義者であった三人のヤクート人(Три якутских реалиста-просветителя)」を 1944 年に出版した。これはクラコフスキー、А.ソフロノフ(А. Софронов)、N.ネウストロエフ(Н. Неустроев)という革命以前から活躍したサハ民族知識人の第一世代の役割——サハは無文字社会であり、豊富な口頭伝承があつたが、その伝統から「書記的文芸作品創造」への橋渡しを行った——を評価するものであつた<sup>18</sup>。しかしこのうちの一人クラコフスキーはすでに当時のソビエト政権にとって反革命的・ブルジョワ民族主義的と烙印が押されていた。1943 年 3 月 1 日にはソ連共産党ヤクーツク州委員会によって彼の研究・印刷・販売が禁止する決定がされていたからである<sup>19</sup>。当然の結果として、ややしばらく後だが、1951 年 1 月のソ連作家同盟会議上、さらに同年 12 月 10 日の全国紙プラウダ誌上の記事「ヤクート文学史の正しい解釈のために」でバシャーリンは公に批判される<sup>20</sup>。また同様の例として、先に紹介したサハ人のクセノフォントフは 1938 年肅正されたが、彼の代表的著作「ウランカイ・サハラル:ヤクート人の古代史概説」は一時期引用すら禁止されていたのである<sup>21</sup>。

状況が大きく変わるのは 1980 年代後半以降である。旧ソ連各地における民族復興現象はヤクーチアでも現れたが、そのなかで革命前から 1930 年代末に活躍した民族知識人を再評価し、その個人史研究と彼らの研究の復刻が行われるようになったからである。実際、先のバシャーリンの著作もさらにクセノフォントフの著作も 1990 年代初頭に相次いで復刻された。前者の復刻版序文を担当したスピリドノフは「この本は偉業であり、この本は伝説だった」と冒頭で述べている<sup>22</sup>。

1920~30 年代という時代は、サハ人自身によるサハ民族学研究が実際に出版という形で現れ始めた時期であり、同時にその担い手達は当時の複雑で激しい政治過程——より正確には 1905 年の第一次革命から続くものであるが——に自らをゆだねた時期でもあつた。以下ではそうしたサハ人知識人の個人史を紹介することで、彼らがいかなる歴史的背景のなかにあつて自らの研究とそして政治・社会活動をおこなっていたのか探っていきたい。

### III

ここで取り上げるのは、20 世紀初頭から 1920~1930 代に活躍した三人のサハ民族知識人であ

<sup>18</sup> Спиридонов И. Подвиг ученого // Башарин Г.П. Три якутских реалиста-просветителя. Якутск, Республиканское общество «Книга», 1994. С. 3-5.

<sup>19</sup> Алексеев Е.Е. Биобиблиография А.Е. Кулаковского // Алексей Елисеевич Кулаковский – Биобиблиографический указатель. Якутск «Национальная библиотека РС (Я)», 1996. С.5.

<sup>20</sup> Спиридонов. Подвиг ученого. С. 6.

<sup>21</sup> Иванов В.Н. «Ураанхай-Сахалар» Г.В. Ксенофонтова // Ксенофонтова Г.В. Ураанхай-Сахалар. Очерки по древней истории якутов. Том 1 в 2-х книгах. Якутск «Национальное издательство Республика Саха (Якутия)», 1992 (1937). С. 5.

<sup>22</sup> Спиридонов. Подвиг ученого. С. 3.



る。彼らはいずれも政治・社会的活動に従事しており、しばしば「サハ人最初の」という枕詞とともに語られる人々である。サハ人最初の劇作家といわれる V. ニキーフォロフ(V.В. Никифоров)、サハ文学の創始者である A. クラコフスキー(A.Е. Кулаковский)、さらにサハ人最初の歴史家である G. クセノフォントフ(G.В. Ксенофонтов)——この三人の個人史を年譜風に述べてみよう。

#### ・ワシリイ ワシリイヴィッチ ニキーフォロフ(1866-1928)

1866年ヤクーツク管区デュプシン郡(Дюпсинский улус)テビコフ郷(Тебиковский наслег)に生まれる。彼の父は郡役場の書記であったが、ニキーフォロフが4歳の時に死亡している。母の実家は裕福で、彼女自身は文盲であったが、子供の教育には熱心であった。ニキーフォロフ自身は彼の郡にいたナロードニキ政治犯流刑囚と交流しながら影響を受け、その後ヤクーツクの四年制中学校(прогимназия)に入学した。そこで彼と共にサハ民族知識人の第一世代となる K.ネウストエフやアフアナシエフ兄弟らと出会っており、彼らと共に政治犯流刑囚 P.ポドベリスキー(П.П. Подбельский)のサークルで勉強を続けた。このサークルは今日の研究者によって、将来のサハ知識人達が集って教育と政治的素養を身につけた最初の場合であったと評価されており、ニキーフォロフ自身もポドベリスキーなしには自分たちがロシア文学や社会科学を学ぶことはなかったと回想している<sup>23</sup>。

通信教育で法学をみにつけた後、1890年代前半には故郷のデュプシン郡の郡長として働き、1896年にはヤクーツクの統計委員会で勤め始めた。この間も、ナロードニキ政治犯との交流は拡大し、サハの英雄叙事詩オロンホのロシア語訳などを行うなど当時民族学・言語学的研究を行っていたペカルスキーに協力しはじめていた。また1894-96年にはシベリヤコフ調査隊に加わり、サハの民族学調査を行った。その成果は「ヤクートの家族に関する慣習」として発表された。1902年にはヤクーツク管区裁判所付き弁護士として働き始めていたが、1905年第一次ロシア革命後の十月詔書をうけて、1906年「ヤクート同盟 союз якутов」を結成した<sup>24</sup>。ヤクート同盟とは、帝政政府に対し、サハの土地権の回復と民族自治及び議会設置の要求を主とする綱領をもつ政治団体であった<sup>25</sup>。ロシア政府はこの団体を民族的革命組織と認定し、その後ニキーフォロフを含む10人の中央執行委員を逮捕した。これに対し彼は、獄中において自らの思想をよりわかりやすく広めるために、戯曲「マンチャーリ Манчаары」を執筆したのである。これは、帝政ロシアの圧政とこれに荷担する役割を果たしていたサハの富裕層トヨンに対して反乱を起こした19世紀中葉に実在した義賊の話である。ニキーフォロフは当時サハ人の間に流布していた民衆英雄の伝説を用いながら、民族の統一のシンボルを作り上げたのだった<sup>26</sup>。

その後釈放されたニキーフォロフは、反帝政政府活動を継続する一方で、サハ語新聞・雑誌の発行に関わったほか、トルストイやゴーゴリの翻訳なども行っている。1917年二月革命が起こると、

<sup>23</sup> Дьяконова Н.Н. Якутская интеллигенция в национальной истории. Новосибирск «Наука», 2002. С.54-55.

<sup>24</sup> Клиорина И. Возвращение Никифоров // Илин 1991 №2. С.7.

<sup>25</sup> Katsuki, H. The foundation of Soyuz Yakutov and the political exiles. In H. Takakura ed. *Indigenous ecological practices and cultural traditions in Yakutia*. Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University. 2003.

<sup>26</sup> Клиорина. Возвращение Никифоров. С.7; Гоголев А. И. История Якутии. Обзор исторических событий до начала XXв. Якутск «Издательство ЯГУ», 2000. С. 181; Diakonova, N. & E. Romanova, "The role of the Yakut intelligentsia in the national movement" in H. Takakura ed., *Indigenous ecological practices and cultural traditions in Yakutia* (Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2003), p.19.



中央の臨時政府はヤクーチアに地方自治(земство)を導入したが、そこでニキーフォロフは県地方自治庁のトップ(глава губернской земской управы)に任命された。十月革命をへて内戦期にはいり、1919年1月にはヤクーチアはコルチャク権力下におかれるが、ニキーフォロフは個人的にコルチャクの知古であったこともあり、彼が招集した国家経済会議(государственное экономическое совещание)にも参加した。その後1919年12月にヤクーツクがボリシェビキ権力下におかれると、ニキーフォロフは逮捕されたのであった。イルクーツクで獄中生活を送っていたが、その後恩赦となり、1922年ヤクート自治共和国が成立した後、彼はヤクーツクに帰還した。

ボリシェビキ体制下で、ニキーフォロフは政治的な要職につくことはなかったが、文化行政の仕事及び研究活動に従事するようになった。1924年中央東洋出版局(Центральное Восточное издательство)ヤクーツク支部が設立されると、当時自治共和国権力の中枢にいたサハ人 М.アモソフはニキーフォロフを支部書記に任命している。同年、当時中央の民族学者として有名だったボゴラスやシュテルンベルクも含まれていたシベリア・ウラル・極東研究協会の執行委員会のメンバーとなっている。さらに1924年には所謂北方委員会のなかの法・行政委員会で働いていたほか、第5回コミンテルン大会で国際プロレタリアート作家協会の中の「シベリア異族出身プロレタリアート作家」国際ビューローに招待されている。1925・26年には後述するソ連科学アカデミーのヤクーチア総合調査に参加し、イルクーツク大学の V. ポドゴルブンスキー(В.И. Подгорбунский)と共に民族学的調査に従事した。特にヴィルイ管区内部の15の郷(наслег)とオレクマ管区の7の共同体(общество)を対象にした人口学的情報の収集で、ニキーフォロフは698の居住地点の4538世帯、合計18606人の資料を収集したのだった。また1925年にはバクーで開催された第一回テュルク学会議に、個人の資格で招待されている。こうしてさまざまな学術活動・文化行政で活躍していたが、1927年9月18日、反革命容疑で逮捕され、強制収容所での10年の刑となったが翌1928年9月15日に62歳で獄死した<sup>27</sup>。

#### ・アレクセイ エリセエヴィッチ クラコフスキー(1877-1926)

クラコフスキーは、1877年3月6日ヤクーツク管区バトゥルース郡(Батурусский улус)第四ジョフソゴン郷(IV Жехсогонский наслег)の中流家庭に生まれた。両親は文盲だったが教育熱心で、1910年にはヤクーツクの神学校にすすみ、その後実科中学校で学んだ。そして歴史と文学に関心をもつようになり、とりわけロシア文学に親しんだ。1897年に卒業した後、故郷にもどって当初はバトゥルース郡異族管理部の書記官を勤めたが、まもなく辞め、その後教師をしながら、ヤクーチア各地を転々とする生活を送った。彼は、サハのフォークロア、言語・民族学的資料を収集しながら、民族の生活を題材にした文芸活動をおこなっていたのである<sup>28</sup>。

1900年にはサハ語による最初の文芸(詩)「バヤナイの呪文 Байанай алгыһа」を出版した。その後、ロシア文学(レルモントフ)のサハ語翻訳も手がけながら、自らのさまざまな作品を残した。そのなかにあって重要なのは1910年の詩「シャマンの夢 Ойун түүлэ」である。これは文字通りシャマンが自らの夢を人々に語るかたちで紡がれるが、そこでは帝政ロシア政府の圧政に対する批判が基本的なモチーフである。フォークロア・神話を利用しながら、シャマンが見ることのできる当時の社

<sup>27</sup> Клиорина. Возвращение Никифоров. С.7-8; Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.95.

<sup>28</sup> Дьяконова. Якутская интеллигенция. С.124-126; Алексеев. Библиография А.Е. Кулаковского. С. 8.

会状況を批判的に描き出しているのである。サハの伝統的世界観において、シャマンは現実の世界と天の世界とをつなぐ媒体であるわけだが、この作品のなかでシャマンはむしろサハの伝統世界とロシア＝西洋世界との間をつなぐ媒体である。そうしたシャマンが語る状況は、クラコフスキー自身も含めた知識人達の現状認識の比喻なのでもあった。その一端は、ヤクーチアを日本、中国、或いはアメリカに譲り渡すべきかというシャマンの問いかけに凝縮されている。この答えはシャマンによれば否であり、彼はロシアの呪術すなわち文学や科学・技術にこそ感嘆すべきであると人々に訴えかけている。その一方で 1905 年の第一次ロシア革命以降の革命的雰囲気に対する揶揄もまたみられた<sup>29</sup>。

二月革命の時期、クラコフスキーは北部ヤクーチアにいたが、このことは彼のその後人生を複雑にした。それは北部ヤクーチアが十月革命そして内戦期においても、反ボリシェビキ政権の支配下におかれたからである。実際、1917 年 8 月に当時の社会革命党(エスエル)の V.ソロビョフ(B.H. Соловьев)に率いられたヤクーツク政府は、クラコフスキーをバルホヤンスク管区のコミッサール(政治委員)に任命し、1918 年 12 月までその職にあった<sup>30</sup>。1919 年ボリシェビキ権力下に入ったヤクーツクに戻り、そこで県革命委員会人民教育部(отдел народного образования губревком) 附属ヤクート地方調査課の研究者となった。その半年後には同部の文芸課主任に任命された<sup>31</sup>。

1920 年以降彼は精力的に文化・学術活動を行うが、この時期に民族学関係の論考を発表している。さらに 1925 年にはすでにヤクート自治共和国の初代中央執行委員会議長を務めていたサハ人の P. オユンスキーらとともに学術研究協会「サハ・ケスキレ(Саха кэскилэ)」をつくった。さらに同年 12 月バクーで開催された第一回テュルク学会議にヤクート自治共和国から派遣されたが、この帰路に病気となり、1926 年 6 月 6 日モスクワで客死した<sup>32</sup>。

多くの研究においてクラコフスキーは非マルクス主義者であり、当初は十月革命の意義を理解せず反ボリシェビキ側に立ったが、最終的にはソビエト政権を受け入れたと指摘されている。実際に、1925 年に出版された彼の詩はソビエト体制・赤軍・ボリシェビキ党を賞賛している<sup>33</sup>。ソビエト政権の受容——これは先に紹介した 1950 年代にプラウダ誌で批判されたバシャーリンの著作においても、そして 1970 年に発行された「ヤクート・ソビエト文学史概説」においても同様である<sup>34</sup>。しかしクラコフスキーが真に自己変革したかどうかを問題にするよりも——バシャーリンが自らの著作の結論で指摘しているように——彼の人生は文学芸術・思想・政治的發展の道において複雑で矛盾に満ちている<sup>35</sup>——この側面にこそ彼の特徴があるといえよう。この点について近年の研究は次のように指摘している。クラコフスキーが問うたのは、サハが模範とすべき国家及び文明がアメリカ・日本・中国のいずれかなのか、或いはロシアのなかで発展することなのか——である。そしてその答えは 17 世紀以降ロシア文明との相互作用のなかであったサハ社会の歴史であり、その文脈にそってサハ文化の

<sup>29</sup> Башарин Г.П. Три якутских реалиста-просветителя. Якутск, Республиканское общество «Книга», 1994 (1944). С. 22-23, 46; Дьяконова. Якутская интеллигенция. С. 126; Зелинский К.Л. (ред.) Очерк истории якутской советской литературы. Москва «Наука», 1970. С.45-46.

<sup>30</sup> Башарин. Три якутских реалиста-просветителя. С.46-47.

<sup>31</sup> Зелинский. Очерк истории якутской. С.56-57.

<sup>32</sup> Бурцев А. А. Кулаковский как поэт – мыслитель // Полярная звезда 1994 №1. С. 158; Зелинский. Очерк истории якутской. С. 59.

<sup>33</sup> Башарин. Три якутских реалиста-просветителя. С. 29.

<sup>34</sup> Башарин. Три якутских реалиста-просветителя. С. 49-50; Зелинский. Очерк истории якутской. С.59.

<sup>35</sup> Башарин. Три якутских реалиста-просветителя. С. 55.

発展を考えなければならない<sup>36</sup>。それは彼がフォークロア・民族学的資料に親しみながら研究そのもの自体よりむしろサハ文学の創造——精神文化の発展——に力を注いだことに現れているのである。

#### ・ガブリール ワシリエヴィッチ クセノフォントフ(1888-1938)

クセノフォントフは、1888年4月4日ヤクーツク管区西ハンガル郡(Западно-Кангаласского улус)の第四マリジェガル郷(IV Мальжегарский наслег)で裕福な家庭に生まれた。数人の子供に早死にされていたその両親は、「不浄の力」をおそれて、子供の養育を同じ郷内のスレプツォフ一家に預けたという。郷内で初等教育を受けた後はヤクーツクの養護施設で育った。1899年に実科中学校に入学したが、この当時冬は生家で暮らし、夏は養家で過ごすという生活だった。1905年4月にヤクーチアで最初の非合法マルクス主義サークル「マヤーク(Маяк)」が社会民主主義者の政治犯流刑囚によって結成されるとこれに参加した。1907年に実科中学校卒業後、一年を経て1908年にトムスク大学法学部に入学した。そこでシベリア民族学者 G.ポターニン(Г.Н. Потанин)の学生らによって結成されていた民族学サークルに接し、民族学を学ぶことになった。1912年から1年間トムスクにおいて弁護士助手として働いたが、その後ヤクーツクに帰郷した。その後1917年まで弁護士活動を続けるが、同時に民族学への関心を失うことなくフォークロア資料などの収集を行っていた<sup>37</sup>。

二月革命がおきると、ヤクート連邦主義者勤労同盟(Якутский трудовой союз федералистов)に指導的立場で参加する一方で、E.ヤロスラフスキー(Ем. Ярославский)の影響で反宗教諸問題に関心をもつようになり、信仰関連の民俗資料に関心を持つようになっていた。そして1920年にはイルクーツク大学社会科学部の助手として考古学・民族学の研究をより本格的に行い始めた。当時イルクーツクには V. ペトリ(В.Э. Петри)、P. ハローシフなど著名な学者がおり、考古学・民族学分野は充実していた。彼らに師事しながら、サハの民族起源論に取り組むようになったのである。1922年にはヤクーツクに戻り通商産業人民委員部(Наркомат торговли и промышленности)の北方課の書記官として働き、その後1925年には教員人民委員部(Наркомпрос)の研究員の職に就いている。この間、ヴィルイ地域や北方地域(オレニョク川下流)でフォークロア・信仰儀礼の民族誌資料を収集したほか、ハカシヤや西ブリヤートも訪れ、比較民族学のための調査も行ったのだった。そうした成果は1937年刊行の「ウランカイ・サハラル:ヤクート古代史概説」で形となった<sup>38</sup>。

この本は、サハ人の民族起源とりわけ現在の中心的生活域であるレナ川中流域の移動拡散過程を、ヴェルイ地域・北方(オレクマ)地域・中央(レナーアムガ)地域の民族文化の偏差をふまえながら論じた大著である。クセノフォントフは、当初サハ人はヴィルイ地域に分布し、その後一部はさらに北部(オレクマ川下流=北極海沿岸)に移動して北方サハとなり、その後ヴィルイに残った集団から中央(レナーアムガ)地域へ移動したと考えた。残念ながら、これは現在の研究者には受け入れられておらず、現在定説となっているのは1630年代に中央地域からヴィルイ地域への移動があ

<sup>36</sup> Дьяконова. Якутская интеллигенция. С.128-129.

<sup>37</sup> Григорьев М.Г. Первый якутский историк // Известия Сибирского отделения АН СССР. Серия общественных наук. 1978. №1. С. 163-164.

<sup>38</sup> Григорьев. Первый якутский историк. С. 165; Иванов В. Н. Советские историки - якутоведы. Якутск, 1973. С.39.

ったということである。その他バイカル地域からの民族移動の時期や「古代」の政治体制についての見解についても多くが否定されている。しかしながら、フォークロア資料を丹念に分析することで、そこに民俗文化の多様性と時間的な秩序を読みとり、サハの基層文化の複合性を指摘したこと——それは無文字社会におけるフォークロア資料の位置づけを明確にした先駆的業績であるといえよう。

この出版の同じ年に、クセノフォントフはさらなる研究を進めるために、モスクワに移住した。しかし翌年 1938 年 4 月に逮捕され、同年 8 月 28 日に銃殺刑の判決、そして刑はその日のうちに執行されたのである<sup>39</sup>。

#### IV

これまで紹介してきた三人の知識人はそれぞれちょうど十才づつ離れた世代に位置しているが、さまざまな形でその人生は交差している。そしていくつもの共通性がみられることがわかるだろう。その第一は、政治犯流刑囚との関わりである。彼らは程度の差こそあれ、一様に人生の早い段階からナロードニキ政治犯と接触し、さまざまな影響をうけている。こうした経験は、当時のサハ民族知識人全体にいえることである。彼らが接した政治犯流刑囚のなかには、19 世紀末から 20 世紀初頭に行われた現在古典となっているサハ民族誌研究を行った者がいたことはすでに述べたとおりである。彼らの影響は、何も民族学や言語学、フォークロア研究といった領域だけにとどまらない。ニキーフォロフやクラコフスキーがロシア文学のサハ語翻訳を試みているように、またクセノフォントフがトムスク大学で法学を修めたように、文学をふくめた学術・科学的知識の窓は、帝政ロシアの植民地主義の制度的端々に存在していたのである。

実際に、ニキーフォロフはヤクート同盟を結成に先だって、1905 年 8 月に「啓蒙協会 Общество просвещения」を I. ゴボロフ(И.С. Говоров)らと設立したが、そのアイデアは政治犯流刑囚で民族学者の V. イオノフだったといわれている。この団体はサハの精神文化及び物質文化の収集を行うと共に、サハ語の識字教育、文学の翻訳を行い、さらに協会付属の「異族(ヤクート)クラブ Инородческий (Якутский) клуб」を設けた。これは 1880 年代のロシアでみられた公民館(народный дом)をモデルとするもので、このクラブでニキーフォロフの戯曲「マンチャーリ」も上演された。また同様の団体はクラコフスキーも作っており、彼はソフロノフらと共に 1910 年に「ヤクート文学愛好クラブ Кружок «Любитель якутской литературы»」を結成し、自ら文学作品を発表すると共に、サハ文学のロシア語翻訳、ロシア文学のサハ語翻訳を行った<sup>40</sup>。

そうした近代西洋的知識を身につけたサハ人が、その近代性を追求しながら、同時に自らの土着性を希求するといった態度も共通している。その一つの極は、クラコフスキー軌跡に現れている。彼の特徴の第一は、ロシアの文学・文化・国家性を高く評価した上で、自らのアイデンティティを支えるサハの精神文化——つまりシャマニズムへの関心である。なお 1920 年代に発表された彼の民族的諸論考は、その後 1979 年になって蒐集され出版された<sup>41</sup>。第二は、サハ人とロシア人は不可分な一体であるという認識に到達したことである<sup>42</sup>。実際、内戦期(1919-21 年)の間にクラコフスキ

<sup>39</sup> Григорьев. Первый якутский историк. С. 166; Иванов. «Ураангхай-Сахалар» Г.В. Ксенофонтова. С. 6-10.

<sup>40</sup> Антонов Е.П. Культурно - просветительное общество «Саха Омук» (1920-1928гг.). Новосибирск «Наука», 1998. С. 10-11.

<sup>41</sup> Кулаковский А.Е. Научные труды. Якутск «Якутское книжное издательство», 1979.

<sup>42</sup> Дьяконова. Якутская интеллигенция. С.125.



一はサハ語の転写法を編み出すが、そこで用いられたのはキリル字であった。彼はサハ人のおかれた歴史的背景を考慮しつつラテン字による転写法よりもキリル字のほうが現状に適しているという判断を行ったのであった<sup>43</sup>。

1905年の第一革命以来のさまざまな社会変動のなかにあつて、クラコフスキーは革命的変革の意義そのものに懐疑的態度を示してよように思われる<sup>44</sup>。むしろ前述した文化学術団体のような活動に積極的だったようである。死去する一年前の1925年にも学術研究団体サハ・ケスキレの設立に関与した<sup>45</sup>。とはいっても、当時の知識人に対する思想的影響は大きいものだった。単なる文芸的作品の創造にとどまらず、先述した「シャマンの夢」をはじめとして、「ヤクート・インテリゲンツィヤへ」の手紙(1912年)といったいわば政治批評を含む作品を数多く発表していたからである。

一方のニキーフォロフとクセノフォントフの場合、似たような傾向を持ちながらも、より明確な形で政治活動に関与している。ニキーフォロフは先述したように、1905年の第一次革命後にヤクート同盟を結成した。この時には300人もの郡(ウルス)代表が賛同し、同盟の設立会議に集まるほどだった。その活動では2度にわたって中央政府(一度目は当時の首相ウッテに、二度目は皇帝へ)に自らの主張を記した要求書を送りつけたが、政治的な成果は何もえることなくニキーフォロフ自身の逮捕をもって終結した<sup>46</sup>。その後再び彼の政治活動が顕在化するのは、1917年二月革命後である。この時にはクセノフォントフも加わって、ヤクート連邦主義勤労同盟(Якутский трудовой союз федералистов)が結成された。そもそも1917年3月にサハ人及びロシア人の農民を中心にして合法的政党として「自由党 Свобода」が結成されたが、6月に開催されたその大会において名称が「ヤクート連邦主義者勤労同盟」と変更されたのである。政治的対場は当時の社会革命党に近く、その後さまざまな場面で共闘している。主要なメンバーは、上記二人に加えて、A. シローキフ(A. Д. Широких)や R. オロシン(Р. И. Оросин)他である。彼らが連邦主義者をなれる所以は、アメリカ合衆国の統治制度をモデルとし、脱中央主権・地方への権限委譲を中心的な主張としたからである。その綱領においては、連邦主体として「シベリア」を想定し、シベリア州議会(Сибирская Областная дума)の設立を目指した。さらにヤクーチアを含むその構成内部では政治的自治の実現よりもむしろ文化自治を基本とした民族平等政策の実現が主張されている<sup>47</sup>。

二月革命後のヤクート州コミッサール(政治委員)はすでに述べたように社会革命党の V. ソロビヨフであり、反ボリシェビキが力を持っていた。その中にあつて黨員1198人、20の地方委員会(1917年11月)をもつヤクート連邦主義者勤労同盟は大きな影響を持っていた。さらにそれを安定させるべく1917年9月には連邦主義者勤労同盟は社会革命党とともに、文化啓蒙協会サハ・アイマフ(Саха аймах)等を含めて、「ヤクート州合同民主主義 Объединение демократия Якутской области」を組織した<sup>48</sup>。ちなみにこのサハ・アイマフという組織は、クラコフスキーの後継であることを自認する知識人によって1917年6月に設立されたものである。そのメンバーはサハ語のアルファ

<sup>43</sup> Башарин. Три якутских реалиста-просветителя. С.52.

<sup>44</sup> クラコフスキーの政治活動については、1921-22年に起きた反ソビエト運動であるヤクーチア州臨時人民統治軍に参加したという説とこれを否定する説双方がある。この解明については今後の課題としたい。

<sup>45</sup> Бурцев. Кулаковский как поэт. С. 158.

<sup>46</sup> Гоголев. История Якутии. С. 179-181.

<sup>47</sup> Радченко Н.Н. Государственно-правовое устройство России в программе якутского трудового союза федералистов // Иванов В.Н. (ред.) Государственность Республики Саха (Якутия): история, современность, будущее. Якутск «ИГИ АН РС(Я)», 1999. С.20-23.

<sup>48</sup> Гоголев А.И. Якутия: век XX (1917 – 2000гг.). Якутск «Издательство ЯГУ», 2001. С.6-7; Радченко. Государственно – правовое устройство. С. 19.

ベツト表記法を確立するS. ノブゴロドフ(С.А. Новгородов)や勤労同盟の中心メンバーでもあったR. オロシンら 52 人であり、(1)サハ語の発展、(2)フォークロア資料の収集、(3)文学の翻訳を組織の目的として掲げていた<sup>49</sup>。こうした合同の結果、1917年11月の全露憲法制定会議(Всероссийское Учредительное собрание)の代議員選挙ではクセノフと、社会革命党のV.パンクロフが選出されたほか、すでに紹介したように翌年1月にはヤクート州の自治庁議長にニキーフォロフが選ばれたのであった。つまり1917年の十月革命以降であってもヤクーチアは反ボリシェビキ派が力を握っていたのである。その後のヤクーチア内部の内戦過程はかなり複雑な道筋を経るが、最終的には彼らは敗北し、ボリシェビキが1922年12月にヤクート自治共和国が成立した<sup>50</sup>。

こうした三人と対称的に語られるのは、ボリシェビキ派にあったサハ人のM. アモーソフ(М.К. Аммосов)とP. オユンスキー(П.А. Ойунский)の二人である。1897年に生まれたアモーソフは一貫してボリシェビキの党人として生きた政治家であり、1920年にはシベリア革命委員会のヤクーチア組織における全権を、さらに1923~25年には全露中央執行委員会幹部会(президиум ВЦИК)附属ヤクート自治共和国全権代表を務めた人物である<sup>51</sup>。これに対し、オユンスキーの志向は、先の三者と類似している。彼は政治家であると同時に、詩人・文学者・フォークロア学者だったからだ。ちなみに彼の本姓はスレプツォフであり、オユンスキーはサハ語でシャマンを意味する「オユン」に由来するいわばペンネームである。彼は1893年バトゥルス郡(Батурусский улус)で生まれるが、この郡には当時何人ものサハの口頭伝承オロンホ(英雄叙事詩)の歌手がおり、さらにペカルスキーやイオノフらの政治犯流刑囚出身の民族学・言語学者が住んでおり、そうした環境がオユンスキーの性向に影響したといわれている。彼は一世代前のクラコフスキーらの文芸活動にも感化され、学術文化活動をおこなうが、政治的立場はボリシェビキに属し、その後政治指導者の道を歩んだ。1922年にはヤクート自治共和国人民委員会議(Совнарком)議長、つづいて同共和国中央執行委員会議長を務めるなど要職を歴任した<sup>52</sup>。

彼らが主要な指導的位置をしめたヤクーチア・ソビエト権力確立下において、前述の三人は学術・文化行政の職についたのはすでに見てきたとおりである。その彼らが一同に介する機会となったのが、1921年にロシア共産党(ボ)ヤクーツク当局の命令によって作られた「サハ・オムク Саха омук」であり、1925~1930年に実施されたソ連科学アカデミーによるヤクーチア総合調査であった。

サハ・オムクは、もともと先に紹介したサハ・アイマフを継承する文化啓蒙団体である。サハ・アイマフはその反ボリシェビキ的性格のため、ソビエト権力下のヤクーツク政府によって1920年8月活動停止命令がだされるが、その教育文化活動そのものの必要性は認められ、共産党員の知識人を加えることで再編されることが決定されたのであった。そのメンバーは共産党員からアナーキスト、社会民主主義者、連邦主義者、トヨンもふくめ当時のサハ人のほぼすべての知識人が関わっていたといわれる。正式な人数の記録はないが内務人民委員部(НКВД)の資料では最大時 1124 人だっ

<sup>49</sup> Антонов. Культурно- просветительное общество. С.13.

<sup>50</sup> Гоголев. Якутия: век XX. С. 7-16.

<sup>51</sup> Сыроватский А.П. Из документов о революционной и общественно-политической деятельности М.К. Аммосова в Сибири // Сборник научных статей (Якутский республиканский краеведческий музей им. Е. Ярославского). 1960. №3. С.110.

<sup>52</sup> Даниров С. и Окорочков Г. Поэзия борьбы и создания // П.А. Ойунский Стихотворения. Ленинград «Советский писатель», 1978. С.8-12.

たと記録されている。彼らは人文系研究を進めると共に、劇場芸術・出版活動を行い、さらに地方にもいくつもの支部を持ち、当時のヤクーツクのボリシェビキ政府も無視できない力をもっていた。次第にこの団体は反ソビエト的性質を持つものとして治安当局に認識され、最終的に 1928 年には廃止されている<sup>53</sup>。

後者のヤクーチア総合調査は、ヤクーチア自治共和国の国民経済と文化状況の向上の方法を模索するための基本的科学的資料を入手する目的でアモソフがイニシアティブをとりながら企画されたものである。とはいっても、そうした発想はすでにモスクワ中央政府によってその必要性が認められていた。そもそもの発端は十分な天然資源の調査が行われていなかったことに由来する第一次世界大戦中の鉱物資源不足であった。これを受けて当時の帝政ロシア政府は、V.I. ベルナツキーを中心とする「天然生産力研究に関する常時委員会 КЕПС」を設立した。そこでは天然資源・地質学・歴史及び民族構成に関する総合研究の国家的必要性が説かれたが、それはソビエト政権になっても引き継がれ、むしろその役割は拡大していったのである。こうしたなかでまさに人文社会科学から自然科学に至る総合調査を科学アカデミーが引き受ける制度的基盤は整っていたのである<sup>54</sup>。

1924 年 3 月アモソフは、ソ連科学アカデミーに総合調査を要望した。これをうけてアカデミー内部にヤクーチア調査委員会(КЯР = Комиссия по изучению ЯАССР)が設けられたが、その設立に際しては、当時中央で有力な研究者となっていたボゴラスやペカルスキー、マイノフといったかつてヤクーチアに流刑されていた知識人達の協力があったのである<sup>55</sup>。そして調査委員会は、1925 年から5年間にわたる民族学・公衆衛生学・経済統計・森林経済・狩猟漁労・魚類学・農学・地理学・地質学・水質学・気象学といった分野で調査の遂行を決定したのである。調査委員会委員長であった P.V. ビッテンブルグはこの調査が 18 世紀のメッセルシュミット調査に匹敵し、科学アカデミーにとっても重要なものだとして認識していた。それは単に人文社会科学と自然科学の総合というだけでなく、そこに医学・公衆衛生学さらに農学などが加わった応用的調査の側面が含まれていたからである。現地調査では 246 人の研究者が参加し、そのうち現地出身の研究者は 43 人だった<sup>56</sup>。ソ連科学アカデミーに協力したヤクーチア側の学術組織はオユンスキー、クラコフスキー、さらにペカルスキーらも加わる形で 1925 年に設立された学術研究団体サハ・ケスキレである。これはヤクート自治共和国中央執行委員会幹部会の決定によって設立された公式の団体で、全露西亜シベリア・ウラル・極東研究協会(Общероссийское исследовательское Общество изучения Сибири, Урала и Дальнего Востока)の支部であった(1930 年にはロシア地理学協会ヤクーチア支部と合体し、ヤクート地方研究協会となる)。ここを通してニキーフォロフやクセノフオンツらは実際の調査に従事したのである。その他、ヤクーチア出身のロシア人民族学者である A. ポポフ(A.A. Попов)や G. ポポフ(Г.А. Попов)などもいた<sup>57</sup>。すなわち民族学分野についていえば、この調査は、19 世紀末から 20 世紀初頭の政治犯流刑囚の民族学者及びイルクーツク大学の民族学関係者などもふくむ当時のサハ研究者のほとんどが何らかの形で集結したものだだったのである。最

<sup>53</sup> Антонов. Культурно - просветительное общество. С.14-24; Антипин. История Якутской АССР. Т.3. Советская Якутия. М. Издательство АН СССР, 1963. С. 110-113.

<sup>54</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 16-29.

<sup>55</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.45.

<sup>56</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.53-64.

<sup>57</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 98, 119, 127-128; Антипин. История Якутской АССР. Т.3. С. 113, 160.

終的に、調査のなかで民族学標本資料は 1084 点・写真ネガは 459 本が収集された。しかしその成果報告書は民族分野については残念ながらほとんど刊行されなかった。その理由は十分わかっていない。民族学調査に従事したものの多くがその後肅正されてしまうことや、ソビエト権力が民族学の成果に関心を示さなかったからだともいわれている<sup>58</sup>。

調査に関する出版は民族学分野以外で膨大な量となった。その主要な刊行物は 47 巻から構成される「ヤクート自治共和国調査委員会紀要 Труды КЯР」と 39 分冊から構成される「ヤクート自治共和国調査委員会資料 Материалы КЯР」である。なおここでは、19 世紀末に行われたシビリャコフ調査の未刊行の成果もあわせて刊行されており、ペカルスキーのサハ語辞典も初版は後者のシリーズから出版された<sup>59</sup>。

アモソフら自治共和国政府首脳にとって最も深刻だったのは、公衆衛生学的調査の成果だったという。なぜなら、19 世紀末の帝政ロシアの国勢調査以来、サハ人も含めたシベリア先住民は将来死滅すると危惧されていたからである。調査に従事した医学者達の答えはこれに否定的であったが、衛生条件を向上させるため、当時サハ人の住居の典型であった家畜小屋(хотон)と住宅(юрта)が合体したタイプは二つを分離するよう助言された。彼らはサハ人の疾病率の高さの原因を衛生条件の悪さをもたらす伝統的家屋とシャマンによる民俗医療に見いだしたのである。また畜産学調査によって家畜飼養についてもさまざまな改善が指摘されている<sup>60</sup>。こうした成果は、その後の反宗教政策・農業集団化を含めた社会主義化政策の実施を考えると様々な意味で示唆的である。実際、後に家畜小屋と住宅部分の分離は法律で明記された。また自由放牧されていた家畜に対しての飼料飼育法や草の研究も進められた。そして何よりもこのヤクーチア総合調査はその後のヤクーチアにおける学術ネットワークの人的・制度的建設の基盤になったのである<sup>61</sup>。

上述の5人が相互に協力する機会をあたえた総合調査であったが、その民族学的研究の成果が十分な形で世に出ることはなかった。五年間の調査中にクラコフスキーは病死し、さらにニキーフ・オロフは肅正、さらに 1938 年にはクセノフオントフもまた肅正されることとなったことはすでに述べたとおりである。さらに一貫してポリシェビキであったアモソフとオユンスキーもまた反革命罪にとわれ共に 1939 年に肅正されたのであった<sup>62</sup>。

## V

以上駆け足で、戦間期のサハ民族学の位置づけとこれに関わった民族知識人達の軌跡とその背後の状況を描写してきた。それは 19 世紀末～20 世紀初頭の古典的民族誌と 1940 年代以降のソビエト民族学におけるサハ研究の間の隙間を埋めることであった。この点について序論で掲げたように一定の見取り図をつくることはできたと思う。

この時代のサハ人研究者は、民族学的研究に従事すると共に、政治文化活動に関わる実践家であった。彼らはロシア＝西洋という枠組みの近代性を受け入れた上で、自らの土着性を崇高なものとして自覚し、そのことを自民族に啓蒙することを課したといえる。こうした態度はこの時代の帝政

<sup>58</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 103-104.

<sup>59</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 131-138.

<sup>60</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С.83-84, 92-94, 104-106.

<sup>61</sup> Ермолаева. Якутская комплексная экспедиция. С. 141-148.

<sup>62</sup> Макаров. М.К. Аммосов. С.8; Федоров М.М. О дело П.А. Ойунского // Полярная звезда 1994 №1. С. 168-170.



ロシア内あるいは世界各地の民族知識人に共通する側面をもっているといえよう。とはいえ注意したいのは、彼らの思想的・学術的蓄積とは異なる文脈でサハ民族学研究をめぐる制度的確立がされたということである。それは 1930 年代以降、ソ連における民族学が帝政以来の良質な民族誌記述と比較研究という性質から、史的唯物論に基づく歴史科学の下位部門としてのソビエト民族学(этнография)に変質していった過程と重なりあうことはいうまでもない。1940 年代以降、ここで紹介した三人のような学術研究と社会実践の双方を掲げながら活躍する民族知識人は当然ながら現れていない。その意味では彼らは過渡期に生きた知識人であり、その過渡性とは、帝政ロシアの植民地主義体制のなかで紡がれ始めた他者による民族学及び文学の思考の様式を、自らのものへと領有することの試みだった——ということができよう。残念ながら、その成果は十分に結実する以前に、彼らは消えていったのである。とはいえ、第二章で触れたサハの歴史的社會構成についての問題における論争に現れているように、その後の職業的知識人となったその後裔は、さまざまな形で自らの祖先を同定する作業を試みたのだった。それが 1990 年代以降の現代へと連なっているのである。おそらくここから見えてくる問題の地平は、ソビエト民族学のなかのサハ人によるサハ民族学研究の意味それ自体を問うことであろう。この新しい段階の課題をあぶり出したことをもって、本稿を閉じたいと思う。

## Карательное правосудие в СССР в годы Второй мировой войны (1940 – 1945)

С.А.Папков

Мировая война, развязанная в 1939 году в Европе, радикально изменила многие приоритеты внутренней политики сталинского режима и стала причиной глубоких перемен в системе правосудия, прежде всего в использовании уголовных наказаний. Репрессивная природа советской юстиции, формировавшаяся с первых лет большевистской власти, в годы войны получила законченные формы. В этом заключалась уникальность положения: ни в какой другой период советской истории система уголовного правосудия не находилась в столь зависимом положении от повседневной политики правящего режима и не выполняла такого объема мобилизационных задач в социально-политической и хозяйственной сфере, как во время войны.

Однако первые значительные шаги по переходу на чрезвычайное положение были сделаны еще накануне вступления в войну с Германией. Новые карательные тенденции, связанные с военной обстановкой, появились в советском уголовном праве в 1940 году. Они представляли собой один из ключевых инструментов мобилизационной политики режима и касались системы трудовых отношений в стране. Это была серия указов Президиума Верховного Совета СССР, главным из которых являлся Указ от 26 июня 1940 года «О переходе на восьмичасовой рабочий день, на семидневную рабочую неделю и о запрещении самовольного ухода рабочих и служащих с предприятий и учреждений».

Наиболее характерной особенностью развития советского правосудия в военный период явился пересмотр списка тех действий, за которые устанавливалась уголовная ответственность и, как следствие, – неизбежное возрастание роли уголовного преследования. Границы применения Уголовного Кодекса были необычайно расширены благодаря тому, что были искусственно раздвинуты рамки самого понятия «преступное деяние». В результате целый ряд действий, который в мирное время не считался даже административным нарушением, перешел в разряд преступлений и подлежал уголовному наказанию (1). К категории уголовных правонарушений стали относиться такие действия как «распространение в военное время ложных слухов» (Указ Президиума Верховного Совета СССР от 6 июля 1941 г.), «уклонение от сдачи радиоприемников и призматических биноклей» (на основании ст. 59-6 УК РСФСР), «уклонение от обязательного обучения военному делу». По некоторым действиям (или бездействиям),

неизвестным для УК РСФСР довоенного времени, также вводилась уголовная ответственность: для колхозников - «за невыработку минимума трудодней» (Указ от 15 апреля 1942 г.), «за уклонение от уплаты налогов или невыполнение повинностей» (на основании ст. 59-6 УК РСФСР), для молодежи - «за уклонение от воинского учета» (постановление ГКО от 16 января 1942 г.), «за уклонение городского населения от мобилизации на период военного времени на работу в промышленность и строительстве» (Указ от 13 февраля 1942 г.), «уклонение от мобилизации на сельскохозяйственные работы» (Указ от 15 апреля 1942 г.) и некоторые другие.

Одновременно снижался и возрастной порог, с которого наступала уголовная ответственность по всем видам преступлений. Законом от 31 мая 1941 г., специально предусмотренным для подростков, уголовное совершеннолетие устанавливалось с 14 лет.

Другой важнейшей тенденцией являлось общее ужесточение трудового законодательства. Меры сурового уголовного преследования были распространены на такие действия как опоздания на работу, прогулы, самовольный уход с предприятия, уклонение от мобилизации на работу в промышленность, строительство и сельское хозяйство. Но со вступлением СССР в войну с Германией и дальнейшей милитаризацией хозяйственной жизни санкции за эти нарушения значительно усилились. Если по Указу от 26 июня 1940 г. самовольный уход с работы карался тюремным заключением от 2 до 4 месяцев, то по Указу от 26 декабря 1942 г. такой уход с предприятия военного значения был объявлен трудовым дезертирством и карался тюремным заключением на срок от 5 до 8 лет(2).

Наконец, еще одной новой тенденцией стало чрезвычайное упрощение судебно-следственных процедур и порядка правоприменения. Такое положение стало возможным вследствие повышения роли специальных судов (военных и транспортных трибуналов), использующих ускоренный и упрощенный порядок осуждения, перехода к правосудию, основанному на указах, предусматривавших значительное отступление от обычных судебных норм в сторону их упрощения, а также понижение общего уровня квалифицированного правосудия в стране. Очень высокая степень зависимости советского правосудия от политического влияния и прагматическое отношение режима к использованию правовых норм, особенно характерные для периода войны, привели к значительному увеличению числа субъектов правоприменения, не относящихся к сфере правосудия. В этом аспекте система уголовного преследования вышла за пределы тех советских норм, которые сложились и были узаконены в предвоенный период.

Правосудие в СССР вновь оказалось в тисках глубокого кризиса и деградации, сопоставимых по своим масштабам и последствиям с периодом начала 30-х годов. В чрезвычайной обстановке войны инициативу на возбуждение уголовного преследования получили практически все основные партийные, советские, хозяйственные и административные руководители: секретари райкомов, председатели райисполкомов, директора предприятий, МТС и совхозов, разного рода уполномоченные, председатели колхозов, руководители учреждений и организаций.

Наделив должностных лиц правом и обязанностью требовать открытия уголовные дела в отношении подчиненных, политическое руководство СССР одновременно добивалось такого порядка, при котором местные руководители имели мало шансов уклониться от навязанных им карательных функций. Карьера, а часто и свобода этих людей находились в прямой зависимости от их готовности отдавать под суд нижестоящих лиц.

Невероятное рассредоточение административно-правовых функций породило очень широкое и хаотическое применение закона. Необоснованным арестам, казням и другим уголовным наказаниям во время войны открылись широкие границы, и потому жертвами судебного произвола стали миллионы советских граждан. Статистика осуждений за 1940 – 1945 гг., вероятно, уже никогда не будет установлена в полном объеме. Но даже выявленные сведения дают основания полагать, что карательное правосудие в СССР отличалось в военный период беспрецедентной экспансией и исполняло важную роль в качестве инструмента управления страной.

#### «Контрреволюционная преступность»

В системе советского правосудия «контрреволюционные» действия традиционно рассматривались как наиболее тяжкие государственные преступления(3). Для их подавления Уголовный Кодекс предусматривал широкий спектр особых статей. Но главной из них была 58-ая статья с 14-ю пунктами, в которых описывались все возможные случаи «контрреволюции»: шпионаж, агитация и пропаганда, вредительство, диверсии, повстанчество и участие в контрреволюционных организациях, измена родине и т.д. В повседневной советской практике 40-х годов наибольшее применение из этого списка имели два пункта: 58-10 (агитация и пропаганда) и 58-14 (саботаж). Их действие преимущественно распространялось на тыловые районы страны. На фронте, в воинских частях и в зонах, примыкающим к районам боевых действий, наиболее распространенным было осуждение по ст. 58-1 (измена родине).



В условиях войны степень ответственности за «контрреволюционные деяния» еще более возросла. Соответственно повысилась и мера наказания. В приказе Наркома юстиции РСФСР К.П. Горшенина от 31 октября 1941 года «О работе Верховных судов АССР, краевых, областных и окружных судов по делам о контрреволюционных преступлениях в военное время» всем судам ставилась задача «обеспечить суровую судебную репрессию ко всем контрреволюционерам и агентам германского фашизма...», применять законы военного времени ко всем случаям контрреволюционной пропаганды и агитации, «независимо от того, совершено ли преступление на территории, объявленной или не объявленной на военном положении»(4). В приказе также давалось указание «обеспечить рассмотрение дел о государственных преступлениях не позднее десятидневного срока со дня поступления дела в суд...». Карательное воздействие закона усиливалось прежде всего введением в судебную практику второй части ст. 58-10 УК РСФСР, предусмотренную исключительно для «военной обстановки» и ориентированной на применение высшей меры наказания – расстрела. Причем практическое применение этого пункта, согласно статистике, с первых месяцев войны стало преобладающим: на ее долю приходилось до 45-50 % всех судебных приговоров по делам о «контрреволюционных преступлениях».

Как наиболее важная категория уголовных дел, дела о «контрреволюционных преступлениях» не подлежали рассмотрению в судах низшей инстанции – народных (районных) судах. Они передавались в суды более высокого уровня или особой юрисдикции: в республиканские, областные (краевые) суды, Военную Коллегию Верховного суда СССР, военные и транспортные трибуналы и Особое совещание при НКВД-НКГБ СССР. Существовал также специфический порядок рассмотрения этих дел и вынесения приговоров: часть из них проходила полную судебную процедуру – обычно в закрытом процессе в республиканском, областном или краевом суде, другие дела попадали в военные или транспортные трибуналы, где действовал более упрощенный порядок: третьи рассматривались во внесудебном порядке, через Особое совещание, без многих формальностей и выяснения конкретной вины обвиняемого. Но в любом случае в обстановке войны от правосудия требовалось выполнить два ключевых правила – «быстрота рассмотрения» и «суровость наказания».

Поскольку «контрреволюционным преступлениям» придавалась особое политическое значение, их подавление представляло собой первостепенную задачу для органов правосудия. Уже с первых месяцев войны сталинский режим резко усилил репрессивные меры против «врагов народа». Наряду с увеличением арестов заметно возросло и количество судебных приговоров по

признакам «контрреволюции». Особый подход к борьбе с «враждебными проявлениями» получил отражение в своеобразной динамике судимости в стране: в то время как общие объемы судебной деятельности (поступление уголовных дел и их рассмотрение) с началом войны резко сократились, количество дел по «контрреволюции» значительно возросло. По Новосибирской области, например, из-за падения объемов судебной работы за вторую половину 1941 г. сеть народных судов была сокращена на 26 участков (со 173 до 147). Но поступление дел в областном суде по ст. 58-10 («контрреволюционная агитация и пропаганда») за первые шесть месяцев войны выросло более, чем в три раза (с 200 дел до 701)(5). Заметное увеличение числа осужденных за «государственные преступления» произошло и в Красноярском краевом суде: в первое полугодие 1941 г. было осуждено 485 чел., во второе полугодие – 1072 чел. (из них – 848 по ст. 58.)(6).

Общие масштабы использования судебной машины в борьбе с «контрреволюцией» в годы войны (в сопоставлении с предвоенной эпохой) наиболее полно представляют данные статистики.

Таблица 1.

Число осужденных судами всех видов по делам о контрреволюционных преступлениях за 1937-1945 гг. (по СССР).

Годы	Осуждено верховными судами союзных и автономных республик, краевыми (обл.) судами (спецколлегиями и судебным и коллегиями по уголовным делам)	Осуждено линейными и окружными судами, военными трибуналами и ж.д. и водного транспорта	Осуждено лагерными судами, лаготделениями и постоянными сессиями верховных судов союзных и автономных республик, краевых и обл. судов	Осуждено военными трибуналами СА и ВМФ войск МВД	Осуждено Военной Коллегией Верховного Суда СССР	Итого
1937	42 435	Нет сведен.	1 158	Нет сведен.	14 732	58 325
1938	45 410	7 792	1 446	Нет сведен.	25 235	79 883
1939	38 769	1 632	1 345	10 393	2 276	54 415
1940	21.795	1 149	1 338	5 619	1 307	31 208

Итого за 1937-1940	148 409	10 573	5 287	16 012	43 550	223 831
В среднем за год	37 102	3 524	1 322	8 006	10 887	55 958
1941	44 440	4 323	7 944	28 732	1 426	86 865
1942	28 254	5 565	8 381	112 973	72	155 245
1943	18 336	5 845	6 337	95 802	60	126 380
1944	8 631	7 478	3 791	99 425	123	119 448
1945	8 363	7 216	1 783	135 056	273	152 691
Итого за 1941-1945	108 024	30 427	28 236	471 988	1 954	640 629
В среднем за год	21 605	6 085	5 647	94 397	391	128 125

Источник: ГАРФ, ф. 9492 сч, оп. 6с, д. 14, л. 8.

Эти сведения, собранные Наркоматом юстиции СССР (ГАРФ, ф. 9492), иллюстрируют волнообразное применение уголовного права в отношении политических преступлений и широкий набор судебно-карательных органов для этой цели. Они показывают прежде всего, что суды общей юрисдикции (республиканские, краевые и областные) в военное время выполняли по «контрреволюционным» делам несколько меньший объем карательных функций, чем в предвоенные 30-е годы, и их участие в этой области правосудия непрерывно снижалось до самого конца войны. Основную репрессивную роль исполняли специальные суды – военные и транспортные трибуналы, трибуналы войск НКВД и лагерные суды. На их долю приходилось почти 80 % всех судебных приговоров по «контрреволюции» военного времени. При этом основной объем осуждений (почти полмиллиона человек за 1941-1945 гг.) принадлежал трибуналам Красной Армии, военно-морского флота и войск НКВД. Эти особые суды, как показывает статистика, наиболее интенсивно использовались в начале и в конце войны – в 1942 и 1945 гг., а именно в период наивысшего военно-политического кризиса, когда руководству страны приходилось вести отчаянную борьбу с развалом фронта и отступлением армии (с лета 1941 - 1942); и в период «пленения военнопленных» - массовой фильтрации советских солдат, освобожденных из немецкого плена в 1945 г., а также гражданских лиц, вывезенных из страны оккупантами.

Данные таблицы 1, разумеется, отражают лишь часть тех многообразных акций, которые относились к подавлению «контрреволюции», и поэтому не могут считаться полными. Они не учитывают жертв,

проходивших через внесудебное рассмотрение – Особое совещание при НКВД-НКГБ, которому также принадлежала значительная роль в этом процессе. По постановлению Государственного Комитета Обороны (Н ГКО-903) от 17 ноября 1941 г., подписанного Сталиным, Особому совещанию с началом войны вновь были возвращены, чрезвычайные полномочия, подобно тому, как это происходило в годы «большого террора». Ему предоставлялось право «с участием Прокурора Союза ССР по возникающим в органах НКВД делам о контрреволюционных преступлениях и особо опасных преступлениях против порядка управления СССР, выносить соответствующие меры наказания, вплоть до расстрела»(7). Вслед за этим появился приказ НКВД СССР N 613 от 21 ноября 1941 г. «О полномочиях Особого совещания», который потребовал от всех региональных управлений НКВД направлять в ОСО «все без исключения законченные следствием дела, возникающие в органах НКВД» по всем пунктам ст. 58 и большинству пунктов ст. 59(8). Таким образом, в период войны сталинское руководство вновь предпочло опереться на привычные – закрытые, ускоренные и упрощенные – способы подавления «контрреволюции», ограничив при этом роль гражданских судов.

Исключительная юрисдикция ОСО начала широко внедряться с конца 1941 г., вызвав ускоренное перераспределение накапливавшихся дел о «контрреволюции» из областных (краевых) судов в ведомство Берии. В результате – через ОСО при НКВД-НКГБ стало проходить более половины всех дел, которые ранее рассматривались в судебном порядке. Так, например, Красноярский краевой суд сообщал в своем отчете о резком снижении (на 58 %) поступления дел на судебное рассмотрение в начале 1942 г. по сравнению с последними месяцами 1941 г. Такое сокращение, говорилось в отчете, «объясняется главным образом тем, что за этот период на основании указаний правительства основное количество дел этой категории рассматривалось внесудебным порядком – Особым совещанием НКВД СССР»(9). Аналогичный порядок наблюдался и в Западной Сибири. В июле 1942 г. прокуратура Новосибирской области сообщала, что областным управлением НКВД совместно с городскими и районными отделами за минувший месяц было закончено 53 дела, из которых 21 было направлено в Особое совещание, а 31 передано в областной суд. Кроме того, прокуроры рассмотрели 216 дел на эвакуированных заключенных и их дела также направили в Особое совещание(10).

По приблизительной оценке количество приговоров, выносимых ОСО, в сравнении с гражданскими судами выросло с 1940 г. к концу 1941 г. с 7-10 % до 50-55 %. Через ОСО проходили в основном дела, которые советская система признавала «наиболее опасными проявлениями контрреволюции» - «диверсии», «шпионаж», «повстанческие намерения», создание



«организаций» и «групп», а также дела заключенных. Судебным органам оставались случаи разного рода «клеветы на советский строй», «восхваления врага», «распространения слухов» и «саботажа государственных заданий».

Что касается мер наказания, то в этой области советское правосудие демонстрировало особенно тесную связь с политикой режима и зависимость от конкретной военно-стратегической ситуации. Сталинское руководство попросту манипулировало правом: на первой, наиболее трудной фазе войны (1941-1945) оно особенно интенсивно использовало самые суровые приговоры, предавая казни сотни и тысячи граждан как «изменников» и «врагов народа». Однако в последующий период осуждение на смерть становится в судах единичным явлением: режим предпочитал использовать осужденных на тяжёлых лагерных работах в тылу, где был особенно острым дефицит рабочих рук. Примером такой эволюции смертной казни в период войны служат данные Красноярского краевого суда.

Таблица 2.

Карательная политика Красноярского краевого суда по «контрреволюционным» делам (ст. 58) за 1940 – 1945 гг.

Годы	Всего осуждено (чел.)	Из них приговорено к ВМН		Оправдано	
		Абсолют.	В %%	Абсолют.	В %%
1940	197	14	7,1	39	19,8
1941	1146	333	29,0	6	0,5
1942	997	206	20,6	8	0,8
1943 (первое полугодие)	378	7	1,9	4	1,0
1944	339	6	1,8	4	1,2
1945 (январь-май)	75	3	4,0	2	2,7
Всего за 1941-1945	2935	555	18,9	24	0,8

Источник: ЦХИДНИ КК, ф. 26, оп. 3, д. 8, л. 29; ГАКК, ф. Р-1736, оп. 1с, д. 25, л. 13; д. 26, л. 32; д. 29, л. 65, 110, 169.

#### Указное правосудие

Основной сферой применения карательного правосудия в годы войны являлась область трудовых отношений. Для ее регламентации была разработана, а затем шаг за шагом введена в практику целая система особых

правовых актов (указов), которые охватывали практически все отрасли экономической жизни и государственного управления страны. Указы, содержавшие подробные инструкции и нормы применения уголовного права с разнообразными видами наказаний, по существу заменили собой Уголовный Кодекс. Они стали играть совершенно новую, несвойственную обычному закону политико-экономическую роль.

Активное вторжение уголовного права в сферу трудовых отношений, начавшееся с Указа от 26 июня 1940 г. об уголовной ответственности за нарушение трудовой дисциплины, повлекло за собой очень глубокие и долгосрочные последствия для всей системы советского правосудия(11). Этот указ, во-первых, отныне запрещал увольнение работников и окончательно закрёпляет их за предприятием (учреждением); во-вторых, криминализировал целую область производственных отношений, переводя в разряд уголовных преступлений один из самых распространенных видов нарушений в советской экономической системе - самовольные уходы с работы, опоздания и прогулы.

С этого периода и до самой смерти Сталина Указ от 26 июня 1940 г. будет определять основное содержание работы советских судебных органов и он же станет главным инструментом массовых судебно-карательных акций режима в отношении рабочих.

Указ устанавливал следующие меры наказания: любой работник государственного предприятия (учреждения), который покидал место своей работы без разрешения администрации, подвергался тюремному заключению на срок от двух до четырех месяцев; за прогулы более двадцати минут предусматривалось наказание в виде шести месяцев исправительно-трудовых работ с вычетом до 25 % из заработной платы.

Уголовную ответственность, согласно Указа, несли также руководители предприятий, укрывавшие прогульщиков и других нарушителей дисциплины, не сообщавшие о них в правоохранительные органы.

Действие Указа от 26 июня служит одним из примеров крайне утилитарного использования политическим режимом системы правосудия. Этот правовой акт мог появиться на свет только в экономике мобилизационного типа, каким и была советская хозяйственная система при Сталине - экономика, опирающаяся на многомиллионные низкооплачиваемые малоквалифицированные трудовые ресурсы и мобилизационные способы вовлечения их в производственный процесс. Еще до начала войны с Германией по нему было осуждено более двух миллионов человек(12). Но уже в начале 1941 г. масштабы его применения стали снижаться.

На начальном этапе войны с Германией Указ пережил один из самых драматических моментов в своей истории. Произошедшую с ним метаморфозу в эти напряженные дни и недели можно охарактеризовать как переход от упадка к возрождению. В тот период, когда стало ясно, что боевые действия на западных границах СССР начали принимать все более угрожающий характер, советское руководство подготовило и разослало местным судебным органам секретный Указ Президиума Верховного Совета СССР от 12 июля 1941 г., которым по существу отменило действие Указа от 26 июня. Этот тайный закон давал распоряжение всем регионам СССР, объявленным на военном положении, освободить из тюрем осужденных по Указу от 26 июня и еще некоторым малозначительным видам преступлений, одновременно прекратив дела по преступлениям этих категорий, совершенным до 12 июля 1941 г.(13). Один из пунктов Указа от 12 июля требовал, чтобы все заключенные, вышедшие на свободу, были предупреждены об особой ответственности за неразглашение истинных причин досрочного их освобождения. Разумеется, это требование не могло быть выполнено досконально, и уже вскоре бывшие арестанты стали распространителями «вредных и провокационных слухов» о том, что «по Указу от 26 июня теперь не судят».

Обеспокоенный Наркомюст РСФСР, направивший по этому поводу специальные письма в краевые и областные судебные органы, постарался выправить ситуацию. Он обращал внимание, что «многие народные суды снизили как темпы, так и качество рассмотрения дел важнейших категорий», «резко ослабили свое внимание к вопросам трудовой дисциплины на предприятиях и учреждениях»(14). В качестве примера приводилась Ивановская область, где в практике судебной работы стали допускаться оправдания «злостных прогульщиков» и прекращение дел по Указу от 26 июня 1940 г. Наркомюст потребовал ужесточить судебные санкции и «подвергать наказанию по законам военного времени без всякого ослабления».

С осени 1941 г., в драматической обстановке массовых эвакуаций и падения объемов производства началась очередная фаза активизации Указа от 26 июня. В Сибири особенно быстрый рост (двукратное увеличение) поступления в суды уголовных дел за прогулы и самовольные уходы был отмечен в середине 1942 г. «в связи с невыполнением планов выработки продукции на ряде шахт и предприятий»(15).

Однако в последующий период наступил очередной спад: после 1942 г. масштабы осуждений по Указу от 26 июня непрерывно снижались до самого конца сталинской эпохи. Тем не менее, в период войны Указ служил основным источником «преступности» в СССР, которая каралась в судебном

порядке. За прогулы и самовольные уходы с предприятий и учреждений за 1941-1945 гг. было вынесено 42,1 % всех судебных приговоров периода войны (1,08 млн. чел. за самовольный уход и 5,66 млн. чел. за прогулы) (см. таблицу 3).

Очевидно, что для проведения такого огромного количества рабочих и служащих через судебные процедуры, хотя бы даже самые формальные, должны были использоваться нетрадиционные способы работы судебной машины. В противном случае было бы невозможно осудить миллионы людей в «обычном порядке». В самом деле, об оригинальных приемах, рождавшихся в недрах карательного судопроизводства, говорит тот факт, что в крупнейших индустриальных районах страны некоторые судебные участки (нарсуды) были переведены на прямое «обслуживание» наиболее важных промышленных предприятий,строек и шахт. В Новосибирской области, например, в 1942 г. управление юстиции учредило целую сеть судов «специальной подсудности» – «для обслуживания предприятий оборонной промышленности и рассматривающих дела только о прогулах»: 6 из них действовало в Новосибирске, 1 – в Прокопьевске, 1 – в Сталинске, 1 – в Кемерово. В ходе ревизии 1942 г., проведенной Наркоматом юстиции РСФСР в Новосибирске, эти судебные «спецучастки» были признаны незаконными и даже упразднены, но вскоре вновь были восстановлены. В 1943 г. их численность стала еще больше: только в Новосибирске действовало 8 судов «специальной подсудности»(16).

В стремлении поднять общественный престиж Указа руководство страны делало попытки придать ему более осязаемый, материальный характер. Постановлением Совнаркома СССР от 18 октября 1942 г. в отношении нарушителей Указа было введено дополнительное наказание: после вынесения обвинительного приговора прогульщик должен был получать сниженную хлебную норму. Трудно, однако, судить о том насколько точно это требование выполнялось на практике. Ряд сообщений местных организаций давали подтверждение о скромном применении этой меры. Сталинский горком ВКП(б), например, сообщал, что на Кузнецком металлургическом комбинате в январе 1943 г. «было осуждено за прогулы 375 чел., норма хлеба снижена только у 173-х, в феврале из 289 осужденных норма хлеба снижена у 175-ти(17). В дальнейшем, по-видимому, наказание голодом вовсе сошло на нет, и летом 1945 г. управление юстиции по Новосибирской области докладывало: «Ни один суд не занимался проверкой выполнения Постановления СНК СССР от 18 /X- 42 г. о снижении хлебных норм с момента вынесения приговора»(18).

Массовое и беспорядочное осуждение трудящихся к различным уголовным наказаниям составляло важнейшую характеристику действия



Указа. Как всякое политизированное мероприятие, борьба за его исполнение не могла проводиться в жизнь по строгим правовым нормам и для достижения ожидаемого эффекта нуждалась в постоянном давлении и контроле и со стороны руководства страны. Поэтому многие директора предприятий, которым также грозили меры уголовного преследования «за непринятие мер по борьбе с нарушителями дисциплины», считали необходимым отдавать под суд отдельных прогульщиков, а иногда и целые группы рабочих, не принимая во внимания причин вызывающих нарушения. Такой «списочный» и часто безосновательный подход к возбуждению дел становился главным поводом для критики руководителей предприятий со стороны судебно-правовых и партийных органов. Он также приводил к большому числу прекращенных дел и оправдательных приговоров в судах. В угольных районах и на заводах военной промышленности Западной Сибири, например, в первой половине 1942 г. доля оправдательных приговоров и прекращенных дел по Указу составляла 12-14 % от числа рассмотренных дел(19). В Красноярском крае за первый год действия Указа (до августа 1941 г.) было оправдано 5843 чел., или 14,5 % рассмотренных дел. «Подобного рода неосновательное возбуждение уголовных дел, - отмечалось в докладе краевого управления юстиции, - является следствием как недопонимания администраторами сущности закона, так и в ряде случаев явных элементов самостраховки. Не перевелись еще администраторы, которые не могут или не хотят взять на себя ответственность за обоснованность привлечения к суду... и предпочитающих переложить ответственность целиком на плечи суда или рассуждающих так, что, лучше «перегнуть», чем «не догнуть»(20).

Но положение в самих судах было еще более критическим. Как и на предприятиях, здесь господствовал тот же принцип перестраховки. Поскольку дела по Указу рассматривались по упрощенной процедуре, без участия обвинения и защиты и не требовали предварительного расследования, их прохождение в судах приобрело характер судебного конвейера. Невероятное упрощенчество, небрежность в процедурах и формальный подход к человеческим судьбам стали нормой для многих работников суда. Кроме того, существовала практика заочного рассмотрения дел о нарушителях трудовой дисциплины, которая имела место при условии, если милиции не удавалось разыскать ответчика и доставить его в судебное заседание.

Насаждаемый сверху политический подход к Указу от 26 июня, побуждавший непосредственных его исполнителей увеличивать количество обвинительных приговоров, мог бы естественным образом привести к еще большему числу жертв судебного произвола, если бы система правосудия не имела надзорного контроля.

Используя множество вопиющих нарушений, главным образом процедурного (формального) характера, судьи надзорных инстанций часто гасили обвинительный пыл своих коллег из судов низшего уровня. Как свидетельствует статистика, по делам, связанным с Указом от 26 июня, отменялось едва ли не основная часть опротестованных приговоров – до 60 %. В судах Новосибирской области, например, во втором полугодии 1943 г. было отменено 67 % таких приговоров(21). Можно сказать, что система работала с поразительно низкой эффективностью.

Чрезвычайно высокий процент отмененных приговоров говорит прежде всего об очень низком качестве судебной работы в годы войны. Это было особенно заметным явлением на первичном уровне – в народных судах, на которых лежала основная обязанность по претворению в жизнь законов военного времени. Этот факт свидетельствовал также о наличии заметного разрыва между квалификацией рядовых судей и работников более высокого уровня. Судьям надзорных инстанций (республиканских, краевых, областных и окружных судов) приходилось исправлять грубые нарушения права не в силу особой приверженности закону, а по причине более квалифицированного исполнения обычного профессионального долга. Наконец, важно иметь в виду и то обстоятельство, что работники разных уровней правосудия подвергались разной степени политического давления: те, кто непосредственно выносил приговоры, несли наибольшую ответственность перед властью; они оказывались ближе к реальной политике и поэтому острее ощущали практическое значение карательного правосудия.

Если рассматривать всю совокупность причин, которые провоцировали применителей Указа на карательные меры против рабочих – нарушителей трудовой дисциплины, его практическое значение предстанет в наиболее рельефном виде. Документы сообщают о самых разнообразных поводах, дававших возможность многим рабочим уклоняться от работы – допускать прогулы, опоздания и самовольные уходы. По большей части это были тяжелейшие материальные условия и стремление найти дополнительный заработок к ничтожной оплате, которую рабочие получали по основному месту работы. Для условий военного времени такие причины были наиболее распространенными.

Управление юстиции по Новосибирской области, изучавшее корни трудовых нарушений в угольной и военной промышленности Кузбасса летом 1942 г., сообщало, что 2522 осужденных рабочих (24 %), по делам которых можно было установить причину совершенного ими прогула, ссылались на отсутствие обуви. Действительно, в г. Сталинске (центр металлургии Кузбасса) в этот период, как сообщало управление, «вопрос со снабжением

обувью разрешали путем выработки кустарной обуви на деревянной подошве и лаптей». Кроме того, «до 50 % квалифицированных рабочих Кузнецкого металлургического комбината им. Сталина объяснили свой прогул тем, что занимались обработкой и посадкой своих огородов.»(22). Нередкими причинами прогулов и опозданий являлись также отсутствие налаженного учета и очень низкая организация труда на производстве. В ходе судебных заседаний от рабочих становилось известно, что прогулы, опоздания и самовольные уходы допускались еще из-за того, что им не было предоставлено конкретной работы или из-за потери пропусков. Многие молодые рабочие и выпускники школ ФЗО часто бросали работу из-за ужасных жилищных условий в общежитиях, отсутствия одежды, обуви и нормального питания.

Таким образом, Указ с помощью угрозы наказанием хотя бы отчасти позволял компенсировать хронические недостатки советской экономики, связанные с организацией труда и производства на предприятиях и элементарными условиями жизни рабочих.

После нападения Германии на СССР и потери многих жизненно важных территорий Указ от 26 июня 1940 г. был дополнен новым, еще более строгим правовым актом в отношении рабочих. Это был Указ от 26 декабря 1941 г. «Об ответственности рабочих и служащих за самовольный уход (дезертирство) с предприятий военной промышленности», который признавал всех работников мужского и женского пола, занятых в оборонных отраслях (авиационной, танковой, вооружения, боеприпасов, военного судостроения, военной химии), в том числе эвакуированных предприятий и других отраслей, обслуживающих военную промышленность, мобилизованными и закрепленными для постоянной работы. Любой случай ухода с этих предприятий квалифицировался как дезертирство и карался, как уже говорилось, тюремным заключением на срок от 5 до 8 лет. Кроме того, еще одним указом, от 11 июня 1942 г., эти положения были распространены на рабочих и служащих угольной промышленности, а с июля 1942 г. – нефтяной промышленности(23). Дела, рассматриваемые по этому Указу, преимущественно были компетенцией военных и транспортных трибуналов.

Областью широкого применения особых судебно-правовых норм в период войны являлись также трудовые отношения в деревне. Законодательную основу в этой сфере составляли три правовых акта, принятые почти одновременно весной 1942 г.: постановление СНК СССР и ЦК ВКП (б) от 13 апреля «О повышении для колхозников обязательного минимума трудодней», Указ Президиума Верховного Совета СССР от 15 апреля «Об ответственности колхозников за невыработку обязательного

минимума трудодней» и Указ от 15 апреля «Об ответственности за уклонение от мобилизации на сельскохозяйственные работы или за самовольный уход мобилизованных с работы».

Постановление СНК СССР и ЦК ВКП(б) от 13 апреля вводило «на время войны» новый, повышенный размер обязательного годового минимума трудодней для каждого трудоспособного колхозника: до 150 трудодней – в хлопковых районах; до 100 – в Московской, Ленинградской и других районах европейской части страны; до 120 – для всех остальных районов, включая Сибирь. Обязательный минимум устанавливался и для подростков от 12 до 16 лет – не менее 50 трудодней. Этим же постановлением, а затем и Указом Президиума Верховного Совета от 15 апреля 1942 г. вводилась уголовная ответственность «за невыработку установленного минимума»: исправительно-трудовые работы в колхозе на срок до 6 месяцев с удержанием оплаты до 25 % в пользу колхоза(24).

Указ о минимуме трудодней стал вторым «законом военного времени», по которому было осуждено наибольшее число советских граждан (см. таблицу 3). Оценивая характер и роль этого правового акта, следует подчеркнуть его значительное сходство с другими указами о труде. Как и реализация Указа от 26 июня 1940 г. о прогулах и опозданиях, его применение представляло собой беспорядочную кампанию, растянувшуюся до конца сталинского правления, основное значение которой состояло в поддержании атмосферы страха перед уголовным наказанием за уклонение от общественного труда. Идентичной была и общая динамика развития Указа: начальный период кампании давал наивысшие показатели судимости, через несколько месяцев происходил спад и затем показатели устанавливались на некотором среднем уровне.

Но имелись и свои особенности. Одна из них состояла в том, что это был по сути единственный «женский» указ, поскольку именно женщины – жительницы села в возрасте от 30 до 50 лет – в отсутствие взрослого мужского населения, призванного на фронт, получали абсолютное большинство приговоров за невыработку минимума трудодней. В Красноярском крае, например, за первые месяцы действия Указа (июнь – июль 1942 г.) осуждению подверглись 1215 женщин-колхозниц и только 26 мужчин(25). Подобное соотношение было и в других районах Сибири.

Вводя в действие Указ от 15 апреля 1942 г., политическое руководство страны не имело поводов рассчитывать на активную его поддержку со стороны колхозных начальников. Во-первых, потому, что в большинстве колхозов из-за отсутствия нормального учета невозможно было вообще установить действительные объемы выполненных работ каждым колхозником. Во-вторых, указу противостояла сама система человеческой

солидарности, существовавшая в сельской среде. Поэтому в законе предусматривались особые меры наказания для тех председателей колхозов и бригадиров, которые уклонялись от предания суду колхозников, не выработавших минимума трудодней. Благодаря введению Такая предусмотрительность послужила основным рычагом для организации массы судебных процессов над рядовыми членами колхозов. Уже в первые месяцы действия Указа от председателей колхозов стали поступать в суды материалы не только на отдельных крестьян, но и на группы - списками по 15-30 человек и более, часто без достаточных оснований и выяснения конкретной вины. В августе 1942 г. управления юстиции по Новосибирской области сообщало: «Все дела о невыработке трудодней народные суды области рассматривают с выездом в колхозы. (...) Отдельные народные суды допустили практику рассмотрения в одном производстве дел по обвинению нескольких человек... 1. Правление колхоза «Север» Мариинского сельского совета Венгеровского района передало материалы в суд на 57 человек. Досудебной проверкой нарсудьей всех материалов было установлено, что основательно привлечены к ответственности лишь 5 человек. 2. Правление колхоза «им. XVIII партсъезда» Венгеровского района представило в народный суд список колхозников на 14 человек с указанием одних только фамилий. Материалы были возвращены для переоформления обратно в колхоз...»(26).

Подобную картину можно было наблюдать и в других регионах страны. Руководители Красноярского управления юстиции в этот же период докладывали в Наркомюст РСФСР: «Из поступивших от 11 колхозов Советского района народным судом возвращены дела 9-ти колхозам, так как эти дела были направлены списком на 15-20-30 человек без обсуждения каждого колхозника на правлении колхоза, без указания количества выработанных ими трудодней и без характеристики.» Судебные работники Красноярска писали при этом и о таких неординарных случаях, когда в одном из колхозов в списках, представленных на осуждение по Указу, оказалось 63 человека из 100 трудоспособных колхозников(27).

Грубые и упрощенные способы реализации Указа о трудоднях находили выражение не только в массовом привлечении колхозников к суду. Распространенными явлениями были также осуждения тех жителей села, которых закон освобождал от всяких обвинений: беременных и многодетных женщин, нетрудоспособных, подростков и людей старше допустимого возраста (60 лет для мужчин и 55 для женщин). Вполне естественно, что в этих условиях значительная часть приговоров не получала утверждение и отменялась при дополнительном рассмотрении. Как и в случаях с Указом от 26 июня, в первый период войны отменялось большинство опротестованных



приговоров – 55,58 % (28), что составляло около четверти общего числа приговоров. В главном сельскохозяйственном районе Сибири, Алтайском крае, например, за 1943 г. было оправдано 23,4 % колхозников. Изучавший здесь судебную работу ревизор Наркомюста СССР Лисковец докладывал в своем отчете: «Такое положение, когда сотни людей тянут в суд напрасно, нетерпимо и свидетельствует о том, что правления колхозов передавали дела в суд, не проверяя причин невыработки минимума трудодней, а народные суды не реагировали на такое ненормальное явление» (29).

О развитии указного правосудия в годы войны свидетельствуют данные таблицы 3 и 4.

Таблица 3.

Число осужденных судами всех видов по указам военного времени за 1940 - 1945 гг. (по СССР)

Наименование указов		Периоды	Осуждено судами общей подсудности	Осуждено линейными и окружными судами и военными трибуналами и ж.д. и водного транспорта	Осужден о военными трибуналами СА, ВМФ и войск НКВД	Итого
Указ от 26/VI – 1940 г. – по ж.д. и водному транспорту, а также по ст.193-7 п. «Б» УК РСФСР	Самовольный уход с предприятия и учреждения	1940	321.648	-	-	321.648
		1941-1945	1.073.664	7.257	-	1.080.921
		Итого за 1940-1945	1.395.314	7.257	-	1.402.569
	Прогулы (самовольная отлучка)	1940	1.769.790	-	-	1.769.790
		1941-1945	5.603.917	62.567	-	5.666.484
		Итого за 1940-1945	7.373.707	62.567	-	7.436.274
Указ от 28/XII – 1940 г. (нарушение дисциплины и самовольный уход из ремесленных училищ, ж.д. училищ и школ ФЗО)		1941-1945	50.179	-	-	50.179
Указ от 26/XII – 1941 г. по ж.д. и вод. тр-ту, а также по ст. 193-7 п.п. «Г» и «Д» УК РСФСР (дезертирство с предприятий военной промышленности, ж.д. и		1942-1945	38.572	80.254	842.071	960.897

водного транспорта)					
Указ от 13/II- 1942 г. (уклонение от мобилизации для работы на производстве и строительстве)	1942-1945	21.786	-	-	21.786
Указ от 15/IV – 1942 г. (уклонение от мобилизации на сельхоз работы)	1942-1945	91.246	-	-	91.246
Указ от 15/IV – 1942 г. (невыработка минимума трудодней)	1942-1945	679.286	-	-	679.286
Всего осуждено по указам военного времени	1940	2.091.438	-	-	2.091.438
	1941-1945	7.558.650	150.078	842.071	8.550.799
	Итого за 1940-1945	9.650.088	150.078	842.071	10.642.23

Источник: ГАРФ, ф. 9492 сч, оп. 6с, д. 14, л. 9.

Полнота этих сведений Наркомюста СССР, безусловно, должна быть поставлена под сомнение, поскольку простой перечень указов, по которым граждане подвергались осуждению, приведен здесь не в полном виде. По крайней мере, в нем должны быть учтены еще несколько указов, давших сотни или даже тысячи осужденных. В их числе хорошо известные: Указ от 6 июля 1941 г. «Об ответственности за распространение в военное время ложных слухов, возбуждающих тревогу среди населения», предусматривавший тюремное заключение на срок от 2 до 5 лет; Указ от 19 апреля 1943 г. «Об уголовной ответственности немецко-фашистских захватчиков и их пособников» (так называемый «закон о военных преступлениях»), по которому была осуждена масса репатриированных граждан, включая деятелей белого движения<sup>(30)</sup>, а также ряд других указов. Вошли ли осужденные по этим указам в общую статистику и какова была действительная роль перечисленных правовых актов в годы войны – предстоит выяснить в ходе дальнейших исследований.

Таким образом, карательное правосудие в СССР в годы второй мировой войны отличалось широким размахом и сосредотачивалось прежде всего в области трудовых отношений. Оно распространялось главным образом на те категории населения, труд которых представлял наибольшую ценность: рабочих оборонных отраслей промышленности, железнодорожников, шахтеров и колхозников. При отсутствии серьезных экономических стимулов судебные репрессии и угроза их применения являлись дополнительным побудителем к труду для миллионов граждан. Влияние «законов военного времени» оказалось чрезвычайно высоким и

долгосрочным. Наиболее важные из них, как Указы от 26 июня 1940 г., 26 декабря 1941 г., 15 апреля 1942 г. и другие продолжали действовать и в послевоенное время, значительно увеличивая статистику судимости по стране. Они были отменены только в середине 50-х годов.

В заключение следует привести данные, позволяющие получить некоторую обобщенную оценку места и роли советского правосудия в годы мировой войны в сравнении с другими периодами советской эпохи.

Таблица 5.

Общее число осужденных по видам судов за 1941–1945 гг.  
(по СССР)

Годы	Осуждено Военной Коллегией ВС СССР (за контрреволюционные преступления)	Осуждено судами общей подсудности (с поправкой на неполноту учета)	Осуждено линейными и окружными судами и ВТ ж.д. и водного транспорта *	Осуждено военными трибуналами и СА, ВМФ и войск НКВД	Итого
1941	1.426	3.108.259	55.928	216.142	3.381.755
1942	72	2.818.826	76.563	686.562	3.582.023
1943	60	2.405.509	89.780	727.207	3.222.556
1944	123	2.449.386	96.120	543.745	3.089.374
1945	273	2.297.215	87.615	357.007	2.742.146
Итого за 1941–1945	1.954	13.079.195	406.042	2.530.663	16.017.854
В среднем за год	391	2.615.839	81.208	506.132	3.203.570

Примечание: \* За 1942–1945 гг. – без сведений по железнодорожным войскам.

Источник: ГАРФ, ф. 9492 сч, оп. 6с, д. 14, л. 7.

Таблица 6.

Общее число осужденных за 1937 – 1956 гг. в СССР  
(тыс. чел.)

Годы	Судами общей подсудности (с поправкой на	%	Специальными судами (включая военные трибуналы)*	%	Итого	Из них по делам о преступлениях, предусмотренных указами военного времени	%
	на						

	неполноту учета)						
1937-1940	7.105,0	100,0	Нет сведений	-	7.105,0	2.091,4	29,4
1941-1945	13.079,2	81,7	2.938,6	18,3	16.017,8	8.550,8	53,3
1946-1952	14.030,9	90,0	1.566,7	10,0	15.597,6	6.371,9	40,9
1953-1956	4.386,3	94,4	260,9	5,6	4.647,1	947,3	20,4
Итого	38.601,3	89,0	4.766,2	11,0	43.367,5	17.961,4	41,4

Примечание: \* По делам о контрреволюционных преступлениях включены также данные Военной Коллегии Верховного Суда СССР.

Источник: ГАРФ, ф.9492 сч, оп.6 с, д. 14, л. 6.

#### Примечания:

- <sup>1</sup> Советское право в период Великой Отечественной войны. Часть II. Уголовное право. – Уголовный процесс. Под ред. И.Т. Голякова. – М., 1948, с. 31.
- <sup>2</sup> Законодательные и административно-правовые акты военного времени. С 22 июня 1941 г. по 22 марта 1942 г. – М., 1942, с. 78-79.
- <sup>3</sup> См. об этом специальную работу: Папков С.А. «Контрреволюционная преступность» и особенности ее подавления в Сибири в годы Великой Отечественной войны (1941-1945). // Урал и Сибирь в сталинской политике. – Новосибирск, 2002, с. 205-223.
- <sup>4</sup> ГАНО, ф. Р-1027, оп. 9, д. 5, л. 172.
- <sup>5</sup> ГАНО, ф. Р-1199, оп. 1-а, д. 16, л. 9.
- <sup>6</sup> ЦХИДНИ КК, ф. 26, оп. 3, д. 291, л.49 об. – 50.
- <sup>7</sup> Органы государственной безопасности СССР в Великой Отечественной войне. Сборник документов. Т. 2. Кн. 2. Начало. 1 сентября – 31 декабря 1941 года. – М., 2000, с. 331.
- <sup>8</sup> Там же, с. 334.
- <sup>9</sup> ГААК, ф. Р-1736, оп. 1с, д. 23, л. 21.
- <sup>10</sup> ГАНО, ф.Р-20, оп.4, д.8, л.1.
- <sup>11</sup> Наиболее подробный анализ действия Указа от 26 июня 1940 г. в предвоенный период содержится в книге: Питер Соломон. Советская юстиция при Сталине. – М., 1998, с. 291- 313.
- <sup>12</sup> ГАРФ, ф. 9492 сч, оп. 6с, д. 14, л. 15. (Статистика судимости по СССР).
- <sup>13</sup> ГАНО, ф.Р-1027, оп.9 сч, д.5, л. 123-124.
- <sup>14</sup> Там же, л. 123, 125.

- 
- 15 ГАНО, ф.Р-1199, оп. 1-а, д. 18, л. 25.
- 16 ГАНО, ф. Р-1199, оп. 1-а, д. 18, л. 137; оп. 2, д. 4, л. 2.
- 17 ГАКО, ф.П-75, оп.1, д.39, л.3.
- 18 ГАНО, ф.Р-1199, оп.2, д.22, л.23 об.
- 19 ГАНО, ф. Р-1199, оп. 1-а, д. 18, л. 59, 69, 135.
- 20 ЦХИДНИ КК, ф. 26, оп. 3, д. 8, л. 108.
- 21 ГАНО, ф. Р-1027, оп. 9 сч, д. 13, л. 56. Речь в данном случае идет лишь о той категории дел, которые изучались для надзора или по которым были принесены протесты. Основная же часть приговоров утверждалась без специального надзорного рассмотрения, т. е. в том виде в каком поступали из народных судов. По отношению к общему числу приговоров доля отмененных и оправдательных составляла 9-12%. (ГАНО, ф.Р-1199, оп. 1-а, д. 18, л. 28; ф.Р-1027, оп. 9, д. 11, л. 33).
- 22 ГАНО, ф. Р-1199, оп.1-а, д. 18, л. 27-28.
- 23 Советское право в период Великой Отечественной войны. Часть II, с. 84-85.
- 24 Социалистическая законность, 1942, N 8, с. 1-2; Советское право в период Великой Отечественной войны. Часть I. Гражданское право. – Трудовое право. Под ред. И.Т. Голякова. – М., 1948, с. 227.
- 25 ГАКК, ф.Р-1736, оп.1с, д. 23, л. 136 об.
- 26 ГАНО, ф. Р-1199, оп. 1-а, д. 18, л. 56-57.
- 27 ГАКК, ф.Р-1736, оп.1с, д. 23, л. 138 об, 69.
- 28 Там же, л. 140.
- 29 ГАРФ, ф.9492, оп.1, д.453, л.3 об.
- 30 См. Кожевников М.В. История советского суда. – М., 1948.



## Органы государственной безопасности Восточно-Сибирского края (1930-1936).

И.В.Наумов

1930-е годы, как известно, вошли в историю Советского государства как очень сложное время. Это были годы, когда в СССР осуществлялись грандиозные преобразования - коллективизация, индустриализация, "культурная революция", когда тоталитарная диктатура коммунистической партии переросла в еще более жесткую диктатуру личной власти И.В.Сталина, а созданный общественно-экономический строй получил название социалистического. Наконец, это были годы, когда непрерывно нарастала угроза новой мировой войны, к которой активно готовились все ведущие державы мира, включая и СССР.

В новой обстановке существенно изменились функции и задачи органов государственной безопасности. Наряду с решением задач обеспечения безопасности государства, а также обеспечения классовой политики коммунистической партии в ходе проводимых преобразований, органы государственной безопасности все в большей степени становились главной опорой личной диктатуры И.В.Сталина. Соответственно их борьба с т.н. классовыми врагами Советской власти в течение 1930-х гг. все больше перерастала в борьбу со всеми реальными, потенциальными и мнимыми противниками уже не Советской власти, а сталинской диктатуры.

Если ранее, в 1920-е гг. деятельность органов государственной безопасности была направлена против значительной части населения - представителей бывших т.н. эксплуататорских классов и зажиточных слоев крестьянства, считавшихся в классовом государстве политически неблагонадежными, враждебными элементами, то в новых условиях под подозрение попадает практически все население страны, независимо от политических взглядов и социального положения. От возможных подозрений не был гарантирован никто, включая ближайших соратников диктатора. Постепенно, шаг за шагом органы государственной безопасности наделяются все более широкими и чрезвычайными полномочиями, их деятельность все более становится подконтрольной лишь одному лицу. Одновременно органами государственной безопасности при поддержке И.В.Сталина искусно создается атмосфера всеобщей подозрительности и нетерпимости, создается система тотального контроля за населением. Апофеозом этой деятельности стали годы т.н. "Большого террора" (1936-1938), когда государству, обществу, да и самим органам государственной безопасности

был нанесен очень большой ущерб, последствия которого в той или иной степени ощущаются до сих пор.

Важная роль в решении всех этих задач принадлежала территориальным органам государственной безопасности Восточно-Сибирского края, созданного в 1930 г. и существовавшего до 1936 г. Этот край был образован в результате разделения Сибирского края на Западно-Сибирский и Восточно-Сибирский. Он охватывал огромную территорию от Енисея до Забайкалья (дореволюционные Енисейская и Иркутская губернии и Забайкальская область). Его административным центром стал г.Иркутск.

В соответствии с новым административным устройством 28 марта 1930 г. было принято решение о создании в Иркутске Полномочного представительства ОГПУ СССР по Восточно-Сибирскому краю. Здесь предстояло сформировать новый, многочисленный и мощный аппарат органов государственной безопасности. Этот процесс занял несколько месяцев. В полном объеме Полномочное представительство ОГПУ СССР по Восточно-Сибирскому краю начало свою деятельность с сентября 1930 г. Первым и единственным Полномочным представителем ОГПУ в Восточной Сибири стал латыш И.П.Зирнис, работавший в органах государственной безопасности с 1918 г.

Структура Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю непрерывно изменялась и расширялась. Первоначально она включала в себя: Секретно-оперативное управление, управление Пограничной охраны и войск ОГПУ и отделы: кадров, общий, финансовый, связи, дорожно-транспортный Забайкальской ж.д., а также инспекцию резервов.

В августе 1931 г. в связи с коллективизацией и политикой раскулачивания в составе Секретно-оперативного управления был создан отдел по спецпереселенцам, а в январе 1932 г. "для улучшения чекистского обслуживания всех видов транспорта" и координации работы транспортных органов ОГПУ в его составе было создано транспортное отделение.

В конце 1932 г. Секретно-оперативное управление было расформировано, а его отделы: секретно-политический, учетно-статистический, экономический, особый, спецпереселенцев и отделения: оперативное, специальное, транспортное стали самостоятельными подразделениями Полномочного представительства. В то же время в связи с подчинением милиции ОГПУ в его составе было создано управление Рабоче-крестьянской милиции.

Руководить столь обширной структурой Полномочному представителю ОГПУ И.П.Зирнису помогали два его заместителя - А.Г.Грозный и К.А.Павлов. Первый руководил работой отделов: секретно-

политического, учетно-статистического, экономического и спецпереселенцев, а также работой городских и районных отделений ОГПУ территориального Иркутского оперативного сектора. К.А.Павлов руководил работой особого отдела, дорожно-транспортного отдела Забайкальской ж.д., оперативного, специального и транспортного отделений. Сам И.П.Зирнис помимо общего руководства непосредственно курировал работу управлений погранохраны и войск ОГПУ и милиции и отделов: кадров, общего, финансового, связи, а также инспекции резервов, в задачу которой входило наблюдение и контроль за хранением государственных продовольственных резервов и мобилизационных запасов.

В декабре 1933 г. в составе Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю появилось новое отделение - иностранное из 3-х сотрудников (начальник, оперуполномоченный и уполномоченный), в задачу которого входил сбор разведывательной информации в сопредельных странах, а также борьба с их спецслужбами.

Одновременно с созданием новых структурных подразделений в течение 1930-х гг. в связи с коренным поворотом в политике ВКП(б) стали резко расширяться функции и уже существовавших структур. В частности, в 1932 г. в ведение ОГПУ передали военизированную пожарную охрану НКПС. Особенно большая нагрузка ложилась на сотрудников общего и экономического отделов. Так, на плечи первых выпало обеспечение выполнения обширных строительных программ, осуществлявшихся ОГПУ в Восточно-Сибирском крае в годы первой и второй пятилеток. В составе общего отдела был создан даже специальный строительный подотдел (позднее преобразованный в отдел). Сотрудники 4-х отделений экономического отдела (промышленного, сельскохозяйственного, торгово-кооперативного, финансов и частного капитала) контролировали практически всю экономику края.

Территориальными органами Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю являлись региональные оперативные сектора: Красноярский, Иркутский и Читинский. Их структура во многом копировала структуру Полномочного представительства.<sup>1</sup> Только вместо отделов в них были соответствующие отделения. Несколько позже, в апреле 1931 г. был создан еще один оперативный сектор - Киренский, но его структура и функции были значительно уже, чем у трех первых. На территории Бурят-Монгольской АССР, входившей в состав края, действовал областной отдел ОГПУ также входивший в состав Полномочного представительства и

---

<sup>1</sup> Функции Иркутского оперативного сектора выполняло непосредственно само Полномочное представительство ОГПУ.

имевший структуру аналогичную оперативным секторам. В 1932 г. Красноярский сектор возглавлял Д.М.Денисов, Читинский - С.Г.Южный, Бурят-Монгольский областной отдел - Д.Д.Никифоров, а Киренский сектор - Д.Р.Плоткин.

Роль местных органов ОГПУ выполняли городские и районные отделения ОГПУ. Штаты всех районных отделений включали начальника, уполномоченного и его помощника. Отделения были созданы в Красноярском, Братском, Тайшетском, Тасеевском, Нерчинском, Баргузинском, Эхирит-Булагатском, Селенгинском, Акшинском и некоторых других районах. В остальных районах сохранились аппараты районных Уполномоченных, которые разделили на две категории. В штаты аппаратов 1-й категории помимо районного Уполномоченного входила и должность уполномоченного, а в районах 2-й категории аппарат состоял лишь из одного районного Уполномоченного. К районам 1-й категории относились такие как: Зиминский, Балаганский, Боханский, Качугский, Шиткинский, Агинский, Тункинский и некоторые другие, а ко 2-й категории районы: Слюдянский, Нижне-Илимский, Кежемский, Северо-Енисейский и другие.

Помимо сотрудников районных отделений ОГПУ и аппаратов районных Уполномоченных в сельской местности Восточно-Сибирского края с 1931 г. действовали местные уполномоченные отдела спецпереселенцев (в местах их размещения), а с 1933 г. в штаты Полномочного представительства ОГПУ включили должности заместителей начальников Политотделов МТС и совхозов по работе ОГПУ. Эти заместители во всех МТС и совхозах являлись штатными сотрудниками ОГПУ и работали в тесном контакте с районными структурами ОГПУ.

Контроль за соблюдением законности органами ОГПУ до 1932 г. осуществляли территориальные прокуратуры, а с 1932 г. помимо их этим стали заниматься и специально созданные военные прокуратуры погранохраны, войск ОГПУ и милиции. В Восточно-Сибирском крае такую прокуратуру сформировали в июле 1932 г. Их сотрудников приравнивали к оперативному составу ОГПУ.

Полномочное представительство ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю просуществовало до июля 1934 г. Как известно, 10 июля 1934 г. ЦИК СССР по решению политбюро ЦК ВКП(б) принял постановление об упразднении ОГПУ СССР и создании союзно-республиканского Народного комиссариата внутренних дел (НКВД), в число функций которого входило и обеспечение государственной безопасности. Внутри НКВД эти задачи выполняло Главное управление государственной безопасности (ГУГБ), сформированное на базе структуры и штатов бывшего ОГПУ. Объединение органов государственной безопасности и внутренних дел скорее всего было связано с подготовкой

И.В.Сталиным политики "Большого террора" и связанной с этим необходимостью концентрации сил репрессивного аппарата.

В соответствии с постановлением ЦИК СССР началось создание местных органов НКВД. 13 июля 1934 г. было сформировано Управление НКВД по Восточно-Сибирскому краю. Его начальником был назначен бывший Полномочный представитель ОГПУ И.П.Зирнис, которому присвоили звание комиссара государственной безопасности 3-го ранга. И.П.Зирнис возглавлял Управление до осени 1936 г., когда с поста народного комиссара внутренних дел был смещен Г.Г.Ягода и началась массовая смена руководства НКВД и его территориальных органов. После отстранения И.П.Зирниса начальником Управления стал М.И.Гай (Штоклянд), возглавлявший его с ноября 1936 г. до упразднения Восточно-Сибирского края в конце 1936 г.

Формирование нового Управления продолжалось с июля по октябрь 1934 г., когда окончательно определилась его структура. Управление НКВД СССР по Восточно-Сибирскому краю включало в себя:

1. Управление государственной безопасности (УГБ), в которое входили отделы - секретно-политический, экономический, особый, учетно-статистический, кадров, транспортные Забайкальской и Восточно-Сибирской ж.д., а также оперативное и специальное отделения. Все эти отделы и отделения со структурой и штатами представляли бывшее Полномочное представительство ОГПУ. Начальник УГБ являлся первым заместителем начальника Управления НКВД;

2. Управление Рабоче-крестьянской милиции, переданное из краевого подчинения в состав НКВД со своей структурой и штатами. Его начальник одновременно являлся заместителем начальника Управления НКВД;

3. Управление Пограничной и Внутренней охраны, включавшее в себя структуру и штаты управления пограничной охраны и войск ОГПУ бывшего Полномочного представительства;

4. Инспекция Резервов, также перешедшая от бывшего ОГПУ;

5. Отдел пожарной охраны (вновь созданный);

6. Отдел связи (бывший отдел Фельдсвязи Полномочного представительства ОГПУ);

7. Отдел Актов гражданского состояния (курировал местные ЗАГСы, переданные в состав НКВД);

8. Финансовый отдел (из состава бывшего Полномочного представительства ОГПУ);

9. Единый Секретариат, включавший в себя административно-хозяйственные отделы бывшего Полномочного представительства ОГПУ -



общий, хозяйственный, инженерно-строительный, спецпереселенцев, кооперативный.

Как следует из приведенных данных в НКВД органы государственной безопасности играли ключевую роль. Именно они послужили основой для создания Управления НКВД СССР по Восточно-Сибирскому краю.

Территориальные органы Восточно-Сибирского Управления НКВД во многом повторяли его структуру и функции. В то же время, в этот период в их организации произошли и определенные изменения. На территории Восточно-Сибирского края в рамках краевого управления были сформированы 2 областных управления НКВД - Бурят-Монгольское и Читинское и 3 оперативных сектора - Красноярский,<sup>2</sup> Киренский и Иркутский, функции которого выполняло непосредственно краевое Управление НКВД.

Бывшие районные аппараты ОГПУ 1-й и 2-й категорий были преобразованы в районные отделения НКВД. В состав которых вошли также районная милиция, ЗАГСы и пожарная охрана. Такие же изменения произошли и с ранее существовавшими районными и городскими отделениями ОГПУ. Все районные отделения подчинялись соответствующим областным управлениям и оперативным секторам НКВД, на территории которых они находились. Кроме того, приграничные районные отделения в оперативном отношении подчинялись начальникам пограничных отрядов и отдельных пограничных комендатур. Следует отметить, что численность районных отделений НКВД в Восточно-Сибирском крае в 1934-1937 гг. в связи с частыми административно-территориальными реорганизациями неоднократно изменялась.

Расширение в 1930-е гг. сферы деятельности и задач органов государственной безопасности изменило и требования к их сотрудникам. В связи с широко пропагандированным в эти годы тезисом об обострении в стране классовой борьбы по мере продвижения к социализму руководство ВКП(б) требовало от них три основных качества: высокую классовую бдительность, беспощадность к классовому врагу и соблюдение железной дисциплины. Именно на это нацеливало сотрудников государственной безопасности их руководство. В частности, как отмечалось в одном из приказов за 1932 г. Полномочного представителя ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю И.П.Зирниса: "Задача дальнейшего укрепления диктатуры пролетариата требует от ОГПУ не разжижения или смягчения карательной

---

<sup>2</sup> В декабре 1934 г. Красноярский оперативный сектор вошел в состав вновь созданного Красноярского края. На его базе было образовано соответствующее управление НКВД.

политики, а решительной, беспощадной расправы с международной агентурой контрреволюции, подавления отчаянного сопротивления остатков ликвидируемых капиталистических элементов, защиты священной социалистической собственности и охраны революционного порядка".<sup>3</sup>

Такая трактовка задач и деятельности органов государственной безопасности по существу требовала от их сотрудников превратиться в бездумных и бездушных исполнителей любых приказов руководства страны. Именно к этому их и готовили в течение первой половины 1930-х гг., постепенно все более ужесточая т.н. классовую политику.

Особенно большое внимание придавалось повышению дисциплины сотрудников государственной безопасности. Осуществить "Большой террор" можно было только в условиях беспрекословного повиновения органов государственной безопасности. В 1930-е гг. руководство органов государственной безопасности принимало самые решительные меры по подъему дисциплины, добиваясь беспрекословного выполнения любых поставленных задач. Следует отметить, что в плане повышения дисциплины в органах ОГПУ (а затем и НКВД) Восточной Сибири имелось немало проблем. На основании имеющихся документов дисциплину их сотрудников никак нельзя назвать высокой. Так, только одна из проверок прихода на службу, проведенная 9 августа 1932 г. в Полномочном представительстве ОГПУ выявила, что 86 сотрудников ОГПУ опоздали на службу на срок от 15 минут до получаса, опоздание 88 сотрудников составило от получаса до часа, еще 50 человек опоздали от 1 часа до 2 часов, а опоздание 7 сотрудников превысило 2 часа.<sup>4</sup> Как свидетельствуют документы сотрудники Восточно-Сибирского представительства ОГПУ и его структур допускали немало различных нарушений.<sup>5</sup> Наиболее распространенными из них являлись халатное отношение к служебным обязанностям, что особенно часто выражалось в нарушении сроков ведения следствия, необоснованном затягивании следственных дел. Нередки были случаи превышения власти и нарушения законности, использования служебного положения в личных целях, а также личной недисциплинированности на службе и в быту. И конечно же в их рядах пустил корни такой порок как пьянство.

Полномочному представителю ОГПУ (затем начальнику Управления НКВД) в Восточной Сибири И.П.Зирнису, его заместителям, начальникам управлений и отделов пришлось приложить немало усилий для повышения

---

<sup>3</sup>Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. – Ф. 1. – Оп. 1. – Д. 26. – Л. 899.

<sup>4</sup> Там же. – Л. 629-630.

<sup>5</sup> Там же. – Л. 201, 229, 262, 341-342, Д. 34. – Л. 144, Д. 35. – Л. 231, Д. 37. – Л. 331-334, Оп. 2. – Д. 41. – Л. 216, 269-270, 345-347504; и др.

дисциплины своих сотрудников. Как правило провинившиеся подвергались дисциплинарному аресту на срок от 3-х до 20 суток. Причем тогда существовало две формы ареста - с исполнением и без исполнения служебных обязанностей. За мелкие нарушения дисциплины руководство Полномочного представительства ОГПУ (Управления НКВД) ограничивалось объявлением выговоров, постановкой на вид, предупреждениями и т.п. мерами. Нередки были случаи освобождения от должности и перевода на нижестоящую, а также увольнения из органов государственной безопасности. За серьезные нарушения сотрудников госбезопасности предавали суду Коллегии ОГПУ СССР. Например, в 1933 г. за нарушение законности Коллегия ОГПУ приговорила к 3 годам заключения в Исправительно-трудовых лагерях (ИТЛ) уполномоченного комендатуры 51-го Троицкосавского пограничного отряда М.Т.Лавренова, а помощника начальника заставы того же отряда П.А.Ветошкина к 5 годам заключения в ИТЛ.<sup>6</sup> Особенно строго карались случаи "пособничества классовому врагу". В частности, в декабре 1932 г. Коллегия ОГПУ осудила к 5 годам заключения в ИТЛ надзирателя внутреннего изолятора Восточно-Сибирского краевого представительства ОГПУ Н.А.Александрова за то, что он передал сведения об арестованных их родственникам.<sup>7</sup>

Подъему дисциплины служили и такие меры как усиление политико-воспитательной работы, переход в 1932 г. на постоянное ношение форменной одежды, знаков различия и повышение требований к внешнему виду сотрудников (за исключением тех сотрудников, которые занимались секретно-оперативной деятельностью), а также введение различных запретов. Так, например, в январе 1933 г. Полномочный представитель ОГПУ И.П.Зирнис категорически запретил своим сотрудникам посещение ресторанов и пивных, кроме случаев служебной необходимости (причем посещать эти заведения можно было только в штатской одежде).

Насколько эффективными оказались принимаемые меры по подъему дисциплины судить сложно. Во всяком случае документы на эту тему не позволяют сделать вывод о каких-то серьезных качественных сдвигах в этой сфере. По мнению автора, этому мешали два обстоятельства. Во-первых, расширение штатов и обновление персонального состава сотрудников органов государственной безопасности Восточной Сибири в течение 1930-х гг. и, во-вторых, это непрерывное расширение сферы деятельности органов государственной безопасности и непрерывное возрастание объемов их работы вследствие декларируемого тезиса об "обострении классовой борьбы".

---

<sup>6</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 34. - Л. 147.

<sup>7</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 41. - Л. 306-307.

В 1930-е гг. в связи с увеличением численности сотрудников государственной безопасности и обновлением их персонального состава, а также изменением задач органов госбезопасности довольно остро встал вопрос о профессиональной подготовке кадров. Эту задачу руководство органов государственной безопасности Восточной Сибири пыталось решить разными путями. Лучших своих сотрудников оно направляло на учебу в центральную школу ОГПУ (НКВД) и в различные академии Красной Армии, в которых слушатели учились как очно, так и заочно.

Для профессиональной подготовки сотрудников государственной безопасности непосредственно в регионе в 1933 г. при Полномочном представительстве ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю были образованы 4-х месячные "Курсы переподготовки Оперативного состава". Их слушатели полностью освобождались от службы. На занятиях они изучали "марксистско-ленинско-сталинскую революционную теорию" и новые методы чекистской работы в соответствии с учебными программами, утвержденными руководством ОГПУ СССР. Учебный план помимо теоретических и практических занятий предусматривал и самостоятельную подготовку курсантов.

После реорганизации ОГПУ в НКВД эти курсы были переименованы в "Оперативные курсы управления НКВД Восточно-Сибирского края". Срок обучения на них остался прежним. В 1935 г. на этих курсах одновременно обучалось 40 человек.<sup>8</sup> При этом особое внимание уделялось подготовке сотрудников местных (периферийных) структур УГБ. Они должны были составлять не менее половины слушателей курсов. Программа курсов, утвержденная НКВД СССР, включала в себя изучение предметов: "История органов ВЧК - ОГПУ - НКВД", "Оргустройство органов НКВД", "Уголовный и Уголовно-процессуальный кодексы и следственное дело", "Практика агентурно-оперативной работы УГБ НКВД", "Шпионаж, террор, диверсия", "Работа рабоче-крестьянской милиции" и некоторых других. Занятия вели, как правило, руководители ведущих отделов Управления НКВД. По окончании курсов их слушатели проходили стажировку (как правило в местных структурах Управления НКВД).

Помимо оперативных курсов подготовка специалистов велась в окружной радишколе управления пограничной охраны и войск ОГПУ Полномочного представительства. Только в начале своей деятельности в 1931 г. эта школа подготовила для ОГПУ 14 электромехаников и 49 радиотелеграфистов, из них 17 выпускников за отличную учебу получили звание старший радиотелеграфист. Для сотрудников государственной

---

<sup>8</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 35. - Л. 200.

безопасности в 1930-е гг. начали действовать и автокурсы при спортивном обществе "Динамо".

Большое внимание в 1930-е гг. уделялось военной подготовке сотрудников государственной безопасности, что было связано как с обострением международной обстановки и нарастанием военной угрозы, так и с прокатившейся по краю (и стране в целом) волной крестьянских восстаний в период коллективизации. Для этого с января 1931 г. было введено обязательное обучение всех сотрудников ОГПУ стрельбе из нагана и трехлинейной винтовки (по 2 часа в пятидневку). С 1932 г. в Восточной Сибири была введена обязательная военная подготовка для всех сотрудников ОГПУ. При этом лица имевшие таковую привлекались в качестве инструкторов. Для военной подготовки формировалась специальная учебная рота. Занятия по программе подготовки командира взвода Красной Армии проводились один раз в шестидневку, в предвыходной день по 4 часа (с 17 до 21 часа). По окончании подготовки предусматривался итоговый экзамен на звание командира взвода. Программа предусматривала изучение строевой подготовки, стрелковой подготовки, стрелкового оружия (револьвер "Наган", трехлинейная винтовка, ручной пулемет Дегтярева, ручная граната), средств связи, химического дела (противогаз), подрывного дела, автодела, тактической подготовки. В то же время, военную подготовку стремились максимально приблизить к своей практической деятельности, Об этом убедительно свидетельствует тематика тактических занятий, на которых изучались: "Борьба с бандитизмом в городе", "Уличный бой", "Опыт операций ОГПУ по ликвидации банд-групп и контрреволюционных выступлений в Восточно-Сибирском крае", "Изучение местности" (особенно окрестностей Иркутска, Кругобайкальского участка ж.д. и берегов р. Ангары от истока до с. Буреть).<sup>9</sup> Контроль за учебой был возложен на начальников отделов. Одновременно женщины - сотрудницы ОГПУ проходили подготовку по программе медицинских сестер и обучались стрельбе.

Помимо всех этих форм специальной подготовки с сотрудниками всех подразделений ОГПУ (НКВД), включая и вспомогательные в 1930-е гг. не реже двух раз в месяц проводились политико-воспитательные занятия и занятия по чекистской подготовке, на которых сотрудников знакомили с новыми методами работы.

Руководство органов государственной безопасности Восточной Сибири проявляло заботу и о повышении общеобразовательного уровня своих сотрудников. С этой целью неоднократно организовывались специальные

---

<sup>9</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 600-602.



занятия. В частности, в 1935 г. такие занятия были организованы для сотрудников оперативного состава УГБ. Два раза в шестидневку в течение 2-х часов (с утра) нуждающиеся изучали русский язык и математику. По окончании учебы предусматривалась сдача зачетов.

Что касается непосредственной практической деятельности органов государственной безопасности в рассматриваемое время, то первой их крупной акцией стало обеспечение проведения коллективизации на рубеже 1920-х - 1930-х гг. В период коллективизации - этой грандиозной по масштабам и крайне противоречивой по результатам попытки коренного преобразования сельского хозяйства страны сотрудникам государственной безопасности пришлось решать целый ряд сложных и взаимосвязанных задач. Это и участие в хлебозаготовках, и выявление скрытых и явных противников коллективизации в крестьянской среде и их изоляция, и оказание давления на крестьянство с целью ускорения коллективизации, и участие в раскулачивании, и борьба с различными проявлениями крестьянских протестов против коллективизации, а также с теми ошибками и извращениями, которые были допущены в ходе коллективизации, это и контроль за деятельностью колхозов и совхозов. Наконец, в Восточной Сибири органам государственной безопасности пришлось решать и такую специфическую задачу как прием и размещение десятков тысяч крестьян, сосланных из Европейской части страны - т.н. спецпереселенцев, а также их трудоустройства и контроля за ними.

Наиболее значимыми из них являлись: обеспечение раскулачивания и борьба с антиколхозными настроениями и выступлениями в крестьянской среде на территории региона.

Коллективизация сельского хозяйства, политика раскулачивания и особенно форсирование этих процессов<sup>10</sup> вызвали массовое возмущение восточно-сибирского крестьянства, которое стало перерастать в открытое сопротивление властям. В первой половине 1930 гг. по всей территории Восточно-Сибирского края прокатилась волна стихийных крестьянских восстаний. Причем, во многих районах эти восстания неоднократно повторялись, что красноречиво говорит о степени недовольства аграрной политикой ВКП(б) значительной части крестьян. Наиболее крупными из них являлись: Шиткинское восстание 1930 г., Тасеевское восстание 1931 г., Братское восстание 1933 г. и другие, а также ряд восстаний в Забайкалье и в Бурятии (Мухоршибирское, Усть-Карийское, Тункинское и др.).

---

<sup>10</sup> Как известно в феврале 1930 г. Сибкрайком ВКП(б) принял решение завершить коллективизацию в Сибири весной 1930 г. - см.: История Сибири. - Т. 4. - С. 334.

Именно на плечи сотрудников ОГПУ легла основная тяжесть борьбы с крестьянскими восстаниями и протестами. Эту борьбу возглавляли непосредственно руководители Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю и его оперативных секторов во главе с И.П.Зирнисом.

Пожалуй, первым крупным крестьянским восстанием в регионе стало Кардойское восстание в Тулунском районе в апреле 1930 г. Согласно документам ОГПУ в селах района обстановка стала накаляться с декабря 1929 г., когда ВКП(б) стала осуществлять политику сплошной коллективизации и раскулачивания. Что касается непосредственно села Кардой, то уже в январе 1930 г. сводки ОГПУ зафиксировали массовое недовольство крестьян мероприятиями властей.<sup>11</sup> В целях стабилизации ситуации Уполномоченный ОГПУ по Тулунскому району Степин принял решение арестовать и привлечь к ответственности 14 наиболее недовольных крестьян, которые возбуждали население. В начале февраля 1930 г. удалось арестовать 6 из них, остальные успели скрыться. В марте месяце Тройка при Полномочном представительстве ОГПУ по Сибирскому краю во главе с Л.Заковским во внесудебном порядке приговорила арестованных кардойцев: А.С.Богданова, Н.И.Мануйлова, И.Н.Мануйлова, А.М.Митрофанова, Д.М.Павлова, И.Н.Шкуратова как кулаков к заключению в лагеря на 10 лет по 1-й категории.<sup>12</sup>

Однако принятые ОГПУ меры ожидаемого результата не принесли, а наоборот усугубили ситуацию, которая стала взрывоопасной. В первые дни апреля активисты коллективизации предупредили Уполномоченного ОГПУ Степина о возможности восстания и обратились с просьбой выслать им оружие. В ответ Уполномоченный ОГПУ решил провести в ночь с 6 на 7 апреля 1930 г. облаву на скрывшихся от ареста крестьян. Эта облава и спровоцировала крестьянское восстание. Оно началось в с. Корай, где проводилась облава и довольно быстро перекинулось на с. Кардой, ставшее центром восстания, и с. Луговское. Соответственно силы восставших с 20-30 человек увеличились до 130 человек. В ходе восстания был убит председатель Кардойского сельсовета Анищенко и еще 3 служащих сельсовета, а также активистка коллективизации М.Ляпунова. Повстанцы

---

<sup>11</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Д. 14179. - Л. 9-10.

<sup>12</sup> Там же. - Л. 61-67. Как известно, при раскулачивании по решению ЦК ВКП(б) всех кулаков разделили на 3 категории. Отнесенные к 1-й категории подлежали немедленному аресту и осуждению, ко 2-й к высылке в отдаленные районы страны, а к 3-й к выселению в пределах района проживания. Имущество всех 3-х категорий экспроприировалось.

разгромили здание сельсовета и сожгли все имевшиеся там документы и книги. Во второй половине дня 7 апреля они попытались захватить с. Илир, где содержались 40 крестьян, приговоренных как кулаки к высылке по 2-й категории. Однако нападение повстанцев удалось отразить отряду местных коммунистов. После этого восставшие отступили в села Кардой и Корай, где стали готовиться к обороне (для этого за пределы сел были отправлены все женщины и дети).

Как только Иркутскому отделу ОГПУ стало известно о восстании его руководство приняло решительные меры для борьбы с ним. 7 апреля против повстанцев выслали из Тулуна отряд местных коммунистов и комсомольцев численностью 55 человек, к которым в Илире присоединился такой же местный отряд в 35 человек. На следующий день из Иркутска прибыл еще один отряд коммунистов в 39 человек и 37 бойцов дивизиона войск ОГПУ.<sup>13</sup> Все эти силы были сведены в оперативную группу ОГПУ. 9 апреля после упорного 2-х часового боя оперативная группа заняла села Кардой и Корай. После этого повстанцы отошли в тайгу, где разбились на группы по 5-15 человек. Штаб оперативной группы выпустил воззвание к участникам восстания, в котором обещал сохранение жизни в случае добровольной сдачи. Восстание удалось полностью подавить к 20 апреля 1930 г., причем, значительная часть повстанцев добровольно сложила оружие. При подавлении восстания было убито 11 повстанцев и 4 бойцов оперативной группы ОГПУ.

Сразу же после подавления восстания сотрудники ОГПУ арестовали 129 его участников и сторонников.<sup>14</sup> От ареста в тот момент удалось скрыться 14 крестьянам. Следователи ОГПУ пришли к заключению о существовании в Тулунском районе разветвленной контрреволюционной организации, которая готовила восстание в масштабе района. Поэтому в течение апреля-мая 1930 г. аресты по этому делу проводились по всему Тулунскому району. Всего было арестовано 152 человека.<sup>15</sup> По окончании короткого следствия 145 человек из них в июне 1930 г. Тройкой при Полномочном представительстве ОГПУ по Сибирскому краю под председательством Л.Заковского были осуждены во внесудебном порядке: 58 человек приговорили к расстрелу, 30 человек к 10-летнему заключению в лагерях, 45 человек к 5-летнему заключению, 8 человек к 3-летнему

---

<sup>13</sup> Там же. - Л. 299.

<sup>14</sup> Там же. - Л. 116-117.

<sup>15</sup> Там же. - Л. 299-300.

заклучению, 3 человек выслали в Туруханский край и 1 заключили в колонию для несовершеннолетних.<sup>16</sup>

В начале лета 1930 г. в Шиткинском районе вспыхнуло еще более крупное крестьянское восстание. В нем участвовало уже более 300 человек, в т.ч. ряд бывших красных партизан. Восстание охватило несколько деревень Шиткинского района. Оно продолжалось в течение июня и было подавлено в первых числах июля.

Борьбу с восстанием возглавил начальник Канского окружного отдела ОГПУ Веверс. Он же затем руководил расследованием обстоятельств и хода восстания. После создания Восточно-Сибирского края дело было передано Полномочному представительству ОГПУ по этому краю.

Всего по делу о Шиткинском восстании было привлечено к ответственности 177 человек (в т.ч. 44 кулака, 92 середняка, 25 бедняков, 4 батрака, 3 служащих, 1 колхозник и 8 административно ссыльных).<sup>17</sup> Из них 155 заключили под стражу, еще 77 лиц имевших отношение к восстанию были объявлены в розыск, а 22 повстанца было убито при его подавлении.<sup>18</sup> Следователям ОГПУ удалось установить, что данное восстание готовилось с марта 1930 г., когда административно ссыльный Л.И.Старцев проживавший в д. Пойма создал из недовольных политикой ВКП(б) крестьян нелегальную организацию "Крестьянское эхо - союз трудового крестьянства". Всего к моменту начала восстания в ней состояло 56 человек.<sup>19</sup> В марте же Л.И.Старцев написал воззвание "Дорогие братья крестьяне", в котором призвал их к борьбе с коммунистами и сформулировал лозунги восстания. Основными из них являлись: "Свергнем ненавистных кровопийц-коммунистов", "Долой диктатуру коммунистов, долой насилие, долой грабеж и издевательства над нами", "Да здравствует великая, свободная крестьянская Россия". Позднее Старцев написал еще одно воззвание "К трудовому крестьянству", в котором призывал крестьян тщательно готовиться к восстанию (запасать оружие, боеприпасы, снаряжение, продовольствие и т.п.), не допускать преждевременных выступлений (ждать

---

<sup>16</sup> Там же. - Л. 348-351. Следует отметить, что в 1958 г. некоторые участники Кардойского восстания обратились к Прокурору Иркутской области с просьбой о пересмотре дела, однако Прокуратура не нашла тогда оснований для этого (Там же. - Л. 376).

<sup>17</sup> Там же. - Д. 13373. - Л. 1357.

<sup>18</sup> Там же.

<sup>19</sup> Там же. - Л. 1361.

общего сигнала) и быть лояльными к членам колхозов и коммун "ибо их загнали туда силой".<sup>20</sup>

"Крестьянское эхо" планировало начать восстание 10 июня и распространить его на весь Канский округ, но из-за недисциплинированности одного из его организаторов крестьянина И. Степаненко оно началось неорганизованно и на 2 недели раньше намеченного срока. После гибели в бою 7 июня 1930 г. руководителя восстания Л. И. Старцева его судьба была предрешена.

После подавления восстания основная масса его участников была арестована ОГПУ. В процессе следствия сотрудники ОГПУ стремились установить степень участия в восстании каждого обвиняемого. Причем, большинство из них свою вину признали. Следователи ОГПУ отмечали крайне слабое вооружение повстанцев и их организацию (умудрились проиграть несколько по существу уже выигранных боев). В то же время, следствие отметило лояльность повстанцев по отношению к арестованным представителям властей и пленным, захваченным на поле боя (за все время восстания повстанцы расстреляли лишь 1 человека), а также тот факт, что находившиеся в зоне восстания спецпереселенцы в массе не поддержали повстанцев.<sup>21</sup>

Тем не менее, несмотря на, если можно так выразиться "мягкость восстания", отсутствие жестокости, его участники понесли достаточно суровую кару. 15 октября 1930 г. Тройка при Полномочном представителе ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю в составе И. П. Зирниса, его заместителя Гарина и начальника секретно-политического отдела Шевченко рассмотрела во внесудебном порядке дело участников Шиткинского восстания. Из 177 обвиняемых 47 человек были приговорены к расстрелу (8 из них расстрел заменили 10-летним заключением в лагерь), 10 лет лагерей получили еще 3 человека, 24 человека приговорили к 5-летнему заключению, 33 человека к 3-летнему, еще 69 человек приговорили к условному заключению на срок от 1 до 5 лет и лишь 5 человек были освобождены от ответственности.<sup>22</sup>

---

<sup>20</sup> Там же. - Л. 1223.

<sup>21</sup> Там же. - Л. 1363-1364а.

<sup>22</sup> Там же. - Л. 1733-1754. О суровости осуждения говорят и конкретные факты. Так, бывший полковник царской армии В. М. Левандовский, который не участвовал в восстании, а лишь проживая в районе общался со Старцевым был приговорен к расстрелу (Там же. - Л. 1380). К расстрелу приговорили и 65-летнюю крестьянку А. И. Данченко за передачу повстанцам винтовки и револьвера и агитацию в пользу восстания (Там же. - Л. 1373).



Пожалуй, одним из последних крупных крестьянских восстаний того периода стало Братское, произошедшее в мае 1933 г. уже после окончания основного этапа коллективизации. В этом восстании, охватившем несколько деревень района, приняло участие около 600 крестьян.<sup>23</sup> Так же как и во всех предыдущих случаях повстанческие настроения братских крестьян накапливались постепенно в течение нескольких месяцев. Начавшееся 2 мая восстание возглавили бывший полковник Буланцев и ссыльный забайкальский казак Игуменов. Его целью являлось свержение Советской власти, которую сибирские крестьяне к тому времени прочно отождествляли с диктатурой коммунистической партии.

В виду масштабы восстания, упорства и жесточести его участников руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю предприняло решительные шаги по его подавлению. В Братский район были переброшены подразделения войск ОГПУ и почти весь оперативный состав Полномочного представительства во главе с И.П.Зирнисом, который лично возглавил борьбу с восстанием. Кроме того, из местных коммунистов, работников органов власти и колхозных активистов были сформированы вспомогательные вооруженные отряды. В результате принятых мер к концу месяца восстание удалось подавить.

Широкий размах протестов восточно-сибирских крестьян против коллективизации, их формы, нередко принимавшие характер вооруженной борьбы, наконец, поставленная ЦК ВКП(б) задача ликвидации кулачества как класса вынуждали органы ОГПУ уделять этим вопросам первостепенное внимание. В борьбе с крестьянским повстанчеством помимо сотрудников Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю, его оперативных секторов и войск ОГПУ (70-й отдельный Читинский, 77-й отдельный Иркутский, 78-й отдельный Красноярский, 79-й отдельный Алданский дивизионы) также участвовали военнослужащие пограничных войск ОГПУ - 51-го Троицкосавского, 53-го Даурского, 54-го Нерчинского погранотрядов и Тункинской отдельной погранкомендатуры. ОГПУ широко привлекало к борьбе с повстанческим движением в различных районах края милицию и местный партийно-колхозный актив, из которого формировались т.н. партотряды (партийные отряды) и группы для агентурно-разведывательной работы.

Большое внимание сотрудники ОГПУ уделяли анализу причин крестьянского повстанчества. Каждое следственное дело, информационные

---

Другая крестьянка, 29-летняя А.Д.Секушенко получила 10 лет лагерей за то, что снабжала восставших продуктами (Там же. - Л. 1388).

<sup>23</sup> Там же. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 38. - Л. 72.

сводки и другие документы ОГПУ содержат сведения на эту тему. Конечно, в те времена никто из сотрудников ОГПУ никогда не ставил под сомнение саму аграрную политику коммунистической партии как главную первопричину недовольства значительной части крестьянства и крестьянского повстанчества. Поэтому органы ОГПУ основные причины этого явления прежде всего связывали с враждебной, контрреволюционной деятельностью сибирского кулачества и других антисоветских элементов (духовенство, бывшие участники белого движения и т.п., с существованием на селе контрреволюционных подпольных организаций).<sup>24</sup>

Другую важную причину крестьянского повстанчества сотрудники Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю видели в собственных просчетах и недоработках. В качестве примера можно привести уже упоминавшееся Братское восстание 1933 г. Согласно оценке Полномочного представителя ОГПУ И.П.Зирниса это восстание вполне можно было предотвратить поскольку о повстанческих настроениях части крестьян было широко известно. Однако в силу слабой работы Братского райотделения ОГПУ и безынициативности его начальника Д.М.Жукова необходимые меры не были приняты. Более того, хотя восстание началось 2 мая 1933 г. о нем Полномочному представительству было сообщено лишь 5 мая, что осложнило борьбу с повстанцами (за допущенные просчеты, которые квалифицировали как "политическую ошибку" Д.М.Жукова сняли с должности).<sup>25</sup>

Из такого анализа причин (когда глубинные причины оставались за полем зрения) вполне закономерно следовал вывод о необходимости усиления репрессивной политики, усиления работы по выявлению и изоляции враждебно настроенных лиц. Именно это стало, пожалуй, главной формой предотвращения повстанческого движения в крестьянской среде. От сотрудников ОГПУ требовались решительность и беспощадность в борьбе с классовым врагом, ускорение сроков следствия.

При Полномочном представительстве ОГПУ и его оперативных секторах формировались т.н. оперативные группы, которые направлялись в те районы Восточно-Сибирского края, откуда приходили тревожные сообщения и где возникала опасность восстаний. В их задачу входили быстрое выявление недовольных, опасно настроенных лиц и их изоляция. Для этого применялись как прямые аресты, так и раскулачивание (хотя органы ОГПУ напрямую раскулачиванием не занимались, это была прерогатива местных органов власти, но сотрудники ОГПУ нередко

---

<sup>24</sup> Там же. - Д. 13373. - Л. 1361-1368, Д. 14179. - Л. 61-66, 116-118; и др.

<sup>25</sup> Там же. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 34. - Л. 271-272.

рекомендовали раскулачить тех или иных лиц с целью их удаления из данной местности). Кроме того, в задачу оперативных групп ОГПУ входила и ликвидация мелких повстанческих отрядов. Высказывания и действия арестованных крестьян как правило квалифицировались как создание и деятельность контрреволюционной организации, что позволялось законодательством того времени.<sup>26</sup> Следствие проводилось в кратчайшие сроки и дела передавались в Тройку при Полномочном представительстве ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю. В 1932 г. для ускорения рассмотрения дел было увеличено число заседаний Тройки до 3 раз в месяц. Деятельность оперативных групп позволила предотвратить немало крестьянских восстаний и тем самым сохранить многие человеческие жизни.

Выполняя директивы ЦК ВКП(б), сотрудники ОГПУ при проведении коллективизации проявляли мужество, решительность и находчивость. Немало сотрудников ОГПУ погибло в борьбе за победу колхозного строя. При этом органы ОГПУ брали на себя заботу о семьях погибших.<sup>27</sup>

За проявленное при выполнении заданий мужество и решение поставленных задач руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю не раз награждало своих сотрудников, отличившихся в период коллективизации. Наиболее распространенными в то время наградами являлись именные часы, пистолеты и охотничьи ружья, а также денежные премии.

Требую от своих сотрудников беспощадности и решительности в борьбе с классовым врагом руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю в то же время полностью понимало ограниченность таких действий, а также необходимость соблюдения законности. Оно неоднократно рекомендовало сотрудникам ОГПУ проявлять осмотрительность при арестах и корректность в обращении с арестованными и населением. "В борьбе с действительным врагом, - подчеркивал И.П.Зирнис в одном из своих приказов, - ЧЕКИСТ должен быть решителен и беспощаден, но всякое издевательство, даже над классовым врагом есть

---

<sup>26</sup> Сейчас зачастую уже невозможно установить, где реально существовали такие организации (поскольку степень недовольства была велика, велико было и стремление части крестьянства к самоорганизации с целью сопротивления властям), а где они были придуманы следствием.

<sup>27</sup> В частности, например, семье погибшего при подавлении Братского восстания (1933 г.) сотрудника ОГПУ Н.А.Вдовина помимо государственной пенсии приказом И.П.Зирниса было выдано единовременное пособие - 500 рублей (сумма в то время довольно крупная) - Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 2. - Д. 41. - Л. 454.

признак не силы, а слабости чекиста, допускающего издевательство." "Еще раз категорически предупреждаю всех сотрудников ОГПУ ВСК. - продолжал он далее, - что за всякое малейшее проявление некорректного отношения к арестованным и тем более за применение мер физического воздействия буду сурово карать вплоть до предания суду Коллегии ОГПУ."<sup>28</sup>

Для соблюдения законности принимались самые решительные меры. Так, в мае 1932 г. за избиения арестованных, помещение их в холодный сарай и лишение воды и пищи суду Коллегии ОГПУ были преданы начальник опергруппы ОГПУ в с. Верхне-Аленуй Читинского оперативного сектора штатный практикант Д.С.Халанай и командир взвода 70-го дивизиона войск ОГПУ Букан.<sup>29</sup> В то же году суду Коллегии ОГПУ предали начальника Черемховского райотделения ОГПУ М.Н.Александрова и сотрудника отдела спецпереселенцев Г.И.Роеенко за пьянку, беспричинную стрельбу на улицах с. Каменка и дискредитацию органов ОГПУ.<sup>30</sup>

Другой важной задачей связанной с коллективизацией, которую пришлось в те годы решать органам ОГПУ в Восточной Сибири, как уже говорилось, стал прием, размещение, трудоустройство и чекистское обслуживание десятков тысяч спецпереселенцев сосланных сюда из других районов страны.

Летом 1931 г. в связи с прибытием в край большого количества спецпереселенцев для работы с ними в составе Секретно-оперативного управления Полномочного представительства ОГПУ был создан отдел по спецпереселенцам, на который и легло выполнение названной выше задачи. Его работу курировал заместитель Полномочного представителя К.А.Павлов. Для размещения спецпереселенцев и работы с ними на территории Восточно-Сибирского края было сформировано 24 подчиненных отделу комендатуры спецпереселенцев: Балахтинская, Баунтовская, Богучанская, Бодайбинская, Больше-Муртинская, Зиминская, Игаркская, Ирбейская, Иркутская, Киренская, Колларская, Красноярская, Манская, Нижнеудинская, Олинская, Северобайкальская, Североенисейская, Тайшетская, Усть-Карийская, Черемховская, Чернышевская, Южноенисейская, Ярцевская. На их территории разместилось 165 поселений (поселков) спецпереселенцев, в которых в начале 1932 г. размещалось 25238 семей - 91664 человека.<sup>31</sup> Наиболее крупными комендатурами являлись:

---

<sup>28</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 26. - Л. 293.

<sup>29</sup> Там же.

<sup>30</sup> Там же. - Л. 803. С учетом прежних заслуг суд был заменен административным арестом, первого из них еще и сместили с должности.

<sup>31</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 21. - Л. 75-80.

Черемховская - 10 поселков и 12978 спецпереселенцев, Тайшетская - 17 поселков и 7370 спецпереселенцев, Енисейская - 9 поселков и 6681 спецпереселенец. А самыми маленькими: Северобайкальская - 2 поселка и 270 спецпереселенцев, Колларская - 1 поселок и 702 спецпереселенца и Киренская - 6 поселков и 892 спецпереселенца.<sup>32</sup> В последующем количество спецпереселенцев изменялось незначительно.

Спецпереселенцев в принудительном порядке распределяли на предприятия края, а также организовывали в сельскохозяйственные артели, на которые возлагалась задача обеспечения их продовольствием. Наибольшее количество спецпереселенцев было привлечено к работе на лесозаготовках, на обустройстве Северного морского пути и к добыче благородных металлов. Так, в тресте "Востсиблес" на территории 10 комендатур работало 6368 семей, в тресте "Цветметзолото" на территории 14 комендатур работало 5194 семьи, в системе Комитета "Севморпуть" в 7 комендатурах работало 3369 семей и в "Слюдатресте" на территории 5 комендатур работала 1121 семья,<sup>33</sup> что в целом составляло более 75% семей спецпереселенцев Восточно-Сибирского края.

Чрезвычайные методы проведения коллективизации и раскулачивания привели к тому, что в Сибири спецпереселенцы столкнулись с огромными трудностями. Это и отсутствие жилья, и бытовая неустроенность, и нехватка продуктов питания, и враждебное отношение со стороны местных сластей и ряда сотрудников ОГПУ. Так, например, только в Канском районе, входившем в состав Тайшетской комендатуры зимой 1931-1932 гг. 813 спецпереселенцев размещались в непригодных для зимовки бараках, а 862 спецпереселенца (в т.ч. женщины и дети) вообще жили в шалашах без печного отопления, что приводило к массовым заболеваниям и потере трудоспособности. Нередкими были случаи и произвола в отношении спецпереселенцев. В частности, весной 1931 г. в Абанском районе той же Тайшетской комендатуры по распоряжению райкома ВКП(б) была проведена незаконная экспроприация имущества и продовольствия у спецпереселенцев.

Тяжелые условия и произвол властей вели к росту побегов среди спецпереселенцев. Например, в августе 1932 г. бежало 330 человек, а в сентябре уже 415.<sup>34</sup> К концу года только в Нижнеудинской комендатуре в бегах числилось 1224 человека, причем, только в октябре и ноябре бежало

---

<sup>32</sup> Там же.

<sup>33</sup> Там же.

<sup>34</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 26. - Л. 870.



283 человека, из которых удалось поймать лишь 11.<sup>35</sup> Массовым побегам способствовала и халатность, проявленная рядом сотрудников ОГПУ. Так, Зиминский комендант Красавцев длительное время не знал о 77 бежавших и выяснил это лишь при передаче дел вновь назначенному коменданту..<sup>36</sup>

Руководству Полномочного представительства ОГПУ пришлось приложить много усилий для наведения порядка в рядах собственных сотрудников и нормализации положения спецпереселенцев. Немало сотрудников ОГПУ за халатность, равнодушие и бездеятельность понесли различные наказания. В частности, за неприятие мер против перегибов партийных органов в отношении спецпереселенцев был отстранен от должности Районный уполномоченный ОГПУ по Абанскому району Шафранский. За пьянство, дискредитацию органов ОГПУ в глазах населения и не пресечение побегов спецпереселенцев из ОГПУ были уволены инспектор Иркутской комендатуры М.Е.Топорков, помощник поселкового коменданта той же комендатуры Н.Д.Гарусов<sup>37</sup> и ряд других сотрудников.

Одновременно руководители Полномочного представительства ОГПУ принимали решительные меры в отношении труда и быта спецпереселенцев. Так, несмотря на неподготовленность после решения правительства СССР весной 1933 г. о переходе от централизованного снабжения спецпереселенцев продуктами питания к их самообеспечению в том же году комендатурам отдела спецпереселенцев Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю удалось выполнить посевной план на 90%<sup>38</sup> (это при том, что к началу сева были не очищены семена, не отремонтирован сельхозинвентарь, не подготовлена тягловая сила и т.п.). В результате приложенных организационных усилий постепенно ситуация стала изменяться к лучшему. В частности, уже в том же 1933 г. в одном из приказов И.П.Зирниса отмечалось, что в Черемховской комендатуре "созданы укрупненные спецпоселки, с обеспечением нормальной жилищной площадью", к производству привлечены все трудоспособные спецпереселенцы и достигнут рост производительности труда.<sup>39</sup> В 1933 же году ЦК ВКП(б) принял постановление "Об организации трудовых поселений ОГПУ", которым спецпоселения преобразовали в трудовые и изменили название самих поселенцев.

---

<sup>35</sup> Там же. - Д. 34. - Л. 2.

<sup>36</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 870.

<sup>37</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 262; Оп.2. - Д. 41. - Л. 216.

<sup>38</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 41. - Л. 564.

<sup>39</sup> Там же. - Л. 213.

Другой важнейшей задачей органов ОГПУ в Восточной Сибири являлись борьба с побегами спецпереселенцев и их чекистское обслуживание. Для борьбы с побегами с 1933 г. Коллегия ОГПУ СССР приравнивала их к побегам из мест заключения со всеми вытекающими последствиями. Еще раньше, в 1932 г. руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю потребовало от своих сотрудников сокращения сроков следствия по делам о побегах до 2 месяцев и проведения его не по месту побега, а по месту поимки. По отбытии срока наказания спецпереселенцев (трудопоселенцев) в обязательном порядке направляли в трудопоселки. Туда же направляли и семьи бежавших (если в побеге участвовала и семья).<sup>40</sup>

Главное же средство борьбы с побегами, а также и с антисоветски и контрреволюционно настроенными лицами руководство ОГПУ видело в усилении агентурно-оперативной работы среди спецпереселенцев и повышении ее эффективности. На этом участке деятельности ОГПУ в Восточно-Сибирском крае первое время также имелось много упущений. В частности, К.А.Павлов в январе 1933 г. отмечал, что "агентурно-оперативное обслуживание спецпереселенцев повсюду до сих пор поставлено совершенно неудовлетворительно".<sup>41</sup> К его наиболее вопиющим недостаткам относились: отсутствие резидентов и резидентур во многих местах, отсутствие осведомительной сети среди женщин и молодежи, бесплановость расстановки и работы осведомительной сети (неравномерное территориальное размещение осведомителей, несоблюдение пропорций национального признака среди осведомителей и т.п.), почти полное отсутствие разработки "антисоветского элемента" (не было ни одного группового дела), слабость работы осведомительной сети (в среднем в течение 1932 г. по райотделениям ОГПУ имелось около 50 донесений осведомителей, а в Тайшетском райотделении все осведомители в течение года не дали ни одного донесения).<sup>42</sup> Для исправления ситуации и улучшения работы органов ОГПУ в Восточной Сибири руководство Полномочного представительства приняло следующее решение:

1. В райотделениях всю агентурно-оперативную работу сконцентрировать в руках определенных сотрудников;
2. Отстранить от связи с осведомительной сетью по спецпереселенцам работников комендатур;
3. Провести чистку осведомительной сети по спецпереселенцам;

---

<sup>40</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 35. - Л. 260.

<sup>41</sup> Там же. - Д. 34. - Л. 1.

<sup>42</sup> Там же. - Л. 1-2.

4. Организовать специальные резидентуры по женщинам и молодежи;

5. Подыскать и завербовать недостающих резидентов;

6. Создать сеть квалифицированных осведомителей, которые могли бы выявить антисоветские и контрреволюционные настроения;

7. Расширить круг вопросов подлежащих освещению агентурно-оперативной работой (положение спецпереселенцев на производстве, злоупотребления хозяйственников со спецпереселенческими фондами питания и зарплаты, бытовое положение - жилищные условия, питание, зарплата, санитарное состояние, советизация - стремление к восстановлению в правах голоса, оседание, культурное обслуживание - школы, кружки, библиотеки и т.п., религиозность, сектантское движение).<sup>43</sup>

И в последующем вопросы спецпереселенцев (трудопоселенцев) находились в центре внимания руководителей органов государственной безопасности Восточной Сибири. В частности, когда в мае 1934 г. ЦК ВКП(б) через постановление ЦИК СССР разрешил краевым исполкомам Советов восстанавливать трудопоселенцев в гражданских правах перед органами государственной безопасности встал вопрос о паспортизации восстановленных в правах. Поскольку постановление ЦИК и СНК СССР от 25 января 1935 г. не давало права восстановленным в правах покидать места поселения, руководство Управления НКВД по Восточно-Сибирскому краю приняло решение: выдавать этим лицам паспорта исключительно в трудопоселках. При этом в паспортах делать соответствующую отметку, которая служила основанием запрещения для прописки где-либо кроме мест поселения, лиц же с подобной отметкой в паспортах, обнаруженных в других местностях, задерживать как бежавших.

Другой важной задачей, которую сотрудникам государственной безопасности пришлось решать в восточно-сибирской деревне по окончании коллективизации стала задача установления полного контроля над сельским населением.

ОГПУ стало создавать систему контроля в сельской местности еще в 1920-е гг., но полностью решить эту задачу по ряду причин тогда не сумело. В период коллективизации и раскулачивания эта работа активизировалась. Тем не менее и к концу коллективизации она была далека от завершения.

Это наглядно продемонстрировала проверка состояния агентурно-оперативной работы в деревне в ряде районов Восточно-Сибирского края, проведенная руководством Полномочного представительства ОГПУ летом 1932 г. Так, например, в Иркутском районе отделение ОГПУ из 95 колхозов

---

<sup>43</sup> Там же. - Л. 2-3.

обслуживало лишь 31, "а остальные 64 колхоза остаются без чекистского обслуживания, в результате чего в ряде колхозов района находятся кулаки, которые проводят контрреволюционную деятельность по развалу колхозов". За 5 месяцев с 1 января по 1 июня 1932 г. райотделение "по кулачеству и контрреволюционному элементу ... не привлекло к ответственности ни одного человека". В районе на учете состояло 198 человек антисоветских элементов, "которые совершенно не прорабатываются и для райотделения совершенно не известна их контрреволюционная и антисоветская деятельность". Вместо запланированных 16 резидентур в районе действовало лишь 4. Из 79 осведомителей реально работало только 50 человек, которые в среднем в течение первых 5 месяцев 1932 г. дали лишь по 3-4 донесения. Почти не велась работа с единоличниками (17 осведомителей, из которых реально работали только 2), в совхозах, с женщинами, молодежью, сельской интеллигенцией (на более чем 300 сельских учителей, врачей, сельхозспециалистов приходилось только 3 осведомителя и те не работали), а также с бывшими красными партизанами.<sup>44</sup>

Не лучше обстояло дело и в другом проверенном райотделении - Черемховском. Там вместо 25 запланированных резидентур было создано только 9, а вместо 239 запланированных осведомителей имелось лишь 168. Плохо обслуживались колхозы (на 141 колхоз приходилось лишь 48 осведомителей) и единоличники, и также почти отсутствовало осведомление среди женщин, молодежи, сельской интеллигенции и бывших красных партизан.<sup>45</sup> Еще хуже положение с постановкой агентурно-оперативной работы было выявлено в Усольском районе, где из 85 колхозов в 44 не было ни одного осведомителя.<sup>46</sup>

Руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю, вскрыв серьезные недостатки в постановке агентурно-оперативной работы на селе решительно потребовало их устранения в кратчайшие сроки и налаживания работы в районах края. Особо рекомендовалось создать женские резидентуры и направить работу "агентуры ... в деревне на выявление контрреволюционной деятельности кулачества, контрреволюционного элемента, выявляя новые формы и методы классовой борьбы, внутри колхоза ... нанося своевременный оперативный удар по организующим силам контрреволюции".<sup>47</sup>

---

<sup>44</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 21. - Л. 293-294.

<sup>45</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 22.

<sup>46</sup> Там же. - Д. 37. - Л. 329-330.

<sup>47</sup> Там же. - Д. 22.

Усилению деятельности ОГПУ в сельской местности способствовало и постановление ЦК ВКП(б) в январе 1933 г. о создании политических отделов (политотделов) при МТС (машинно-тракторных станциях) и совхозах. Одной из их основных задач стало выявление кулацких элементов и проведение всесторонней чистки сельскохозяйственных работников. Для этого приказом ОГПУ СССР с 1 марта 1933 г. в их структуру ввели должности заместителей начальников политотделов по работе ОГПУ, входивших в штаты Полномочных представительств ОГПУ. Первоначально в Восточно-Сибирском крае заместители начальников политотделов от ОГПУ были введены на 22 МТС (13 в Красноярском оперсекторе, 2 в Читинском, 1 в Бурят-Монгольском отделе ОГПУ - Баяндаевская и 6 в Иркутском - Заларинская, Зиминская, Качугская, Тулунская, Усольская и Черемховская).<sup>48</sup> Впоследствии их число стало быстро увеличиваться. Деятельности этой категории сотрудников ОГПУ придавалось особо важное значение. Вопросы их оперативной работы подлежали "немедленному и исчерпывающему разрешению в аппарате Полномочного представительства".<sup>49</sup>

Заместители начальников политотделов МТС и совхозов от ОГПУ сразу развернули бурную деятельность по выполнению возложенных на них задач. Только за май-июнь 1933 г. по их представлениям из колхозов Восточно-Сибирского края было изгнано "236 кулаков, белогвардейцев и пр. Антисоветских элементов, ликвидировано 17 контрреволюционных кулацких групп".<sup>50</sup> Приведенные цифры, на взгляд автора, убедительно говорят о том, что в деятельности политотделов, в т.ч. и представителей ОГПУ в это время уже явно просматривалось влияние печально знаменитого сталинского тезиса об обострении классовой борьбы в СССР по мере социалистического строительства.

В 1930-е годы органы государственной безопасности в Восточной Сибири как и по всей стране самое широкое участие принимали не только в коллективизации, но и в другом не менее грандиозном по масштабам и последствиям мероприятии - индустриализации. При этом сотрудникам

---

<sup>48</sup> Там же. - Л. 196.

<sup>49</sup> Там же. - Л. 314. Донесения заместителей начальников политотделов сотрудники аппарата ОГПУ обязаны были рассматривать в первую очередь. На лиц нарушавших это правило накладывались строгие взыскания. Например, сотрудника экономического отдела Климова арестовали на 15 суток за то, что он своевременно не рассмотрел ряд таких донесений. - Там же.

<sup>50</sup> История Сибири. - Т. 4. - С. 376.



государственной безопасности также пришлось решать комплекс взаимосвязанных задач, наиболее важными из которых являлись: контроль за ходом индустриализации, охрана ее объектов, материальное обеспечение индустриализации, борьба с ее реальными и мнимыми противниками и врагами, а также с экономической и уголовной преступностью и, наконец, прямое участие в строительстве и обеспечении работы объектов индустриализации.

Рост экономической составляющей в деятельности органов ОГПУ в Восточной Сибири начался с самого начала 1930-х гг. Уже в 1931 г. в соответствии с приказом ОГПУ СССР экономический отдел был выведен из Секретно-оперативного управления и подчинен непосредственно Полномочному представителю ОГПУ И.П.Зирнису. Аналогичная операция была осуществлена и с экономическими отделениями в оперативных секторах. Помимо этого в 3-х районах края - Бодайбинском, Енисейском и Черемховском, где находились наиболее крупные промышленные структуры на районные отделения ОГПУ непосредственно возложили функции экономической работы. Одновременно была принята новая структура экономического отдела (см.: с. 3), которую дублировали соответствующие отделения в оперативных секторах, а также расширены его функции и штаты.

В том же году с целью усиления контроля за работой всех видов транспорта и координации этой деятельности в составе Полномочного представительства было создано, как уже говорилось ранее, специальное транспортное отделение со штатом в 5 человек.

В начале 1930-х гг. активизируется работа и по усилению агентурно-оперативного обеспечения индустриализации. Проверка этой деятельности выявила немало недостатков не только в отношении сельского хозяйства, но и объектов промышленности. Так, в Черемховском районе было отмечено "недостаточное насаждение спецосведомления и осведомления по кадровому составу на предприятиях, угольных коях и новостроек" (так в тексте - прим. авт.). Из запланированных 8 резидентур на промышленных объектах имелись в наличии только 2, а вместо 94 осведомителей - 49. В сводках райотделения не отражались политические настроения рабочих. "На предприятиях не разрабатывались антисоветские и контрреволюционные элементы, а также члены "политпартий и антипартийных группировок (троцкисты и т.п.)". Не велось работы с молодежью и инженерно-техническим персоналом<sup>51</sup>.

---

<sup>51</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 22.

Руководство Полномочного представительства ОГПУ категорически потребовало от Черемховского и других райотделений "немедленно перестроить работу с агентурой по промпредприятиям, шахтам, новостройкам, рабочей молодежи и инженерно-техническому персоналу с расчетом максимального охвата осведомлением кадрового состава рабочих и специалистов, проверить действительную сеть и довербовать новое осведомление. Предварительно составить дислокационный план насаждения сети и резидентуры".<sup>52</sup> Полномочное представительство ОГПУ рекомендовало обратить особое внимание на выяснение таких вопросов, как состояние рабочего снабжения, общественного питания, зарплаты, текучести рабочей силы и т.п., а также усилить работу по выявлению и проработке антисоветского и контрреволюционного элемента и новых форм классовой борьбы на промышленных предприятиях.

Борьба с т.н. вредителями и вредительством на производстве вообще занимала очень важное место в деятельности органов государственной безопасности в Восточной Сибири в 1930-е гг.

С началом индустриализации с подачи партийного руководства страны все более широкие масштабы стала приобретать практика объяснять провалы в работе, низкое качество продукции, аварии в промышленности и на транспорте и т.п. явления преднамеренными вредительскими действиями т.н. антисоветских и контрреволюционных элементов. Соответственно органы государственной безопасности все больше стали ориентироваться на поиск, выявление вредителей и борьбу с ними.

Не стала исключением и Восточная Сибирь. Как и по всей стране здесь развернулся активный поиск вредителей, на которых списывали любые недочеты. Так, например, именно преднамеренным вредительством сотрудники ОГПУ в 1933 г. объясняли безрезультатную работу геолого-разведочной экспедиции "Байкальская нефтеразведка". По их мнению "вредительско-диверсантские элементы маскировали свою заранее обдуманную подрывную работу, смогли в течение двух лет безнаказанно разваливать нефтеразведку и омертвить до 400.000 рублей капитальных вложений".<sup>53</sup> Основные действия т.н. вредителей сводились к следующему:

- преднамеренное преуменьшение планов геолого-разведочных работ и их систематическое невыполнение;
- демонтаж скважин путем аварий ("в результате чего так и не удалось установить вопрос о нефти");
- полный срыв геологической обработки полученных материалов;

---

<sup>52</sup> Там же.

<sup>53</sup> Там же. - Д. 34. - Л. 186.

– "засорение социального состава разведки ... классово чуждыми явно враждебными элементами".<sup>54</sup>

Так же вредительством объясняло руководство ОГПУ и возникшую в январе 1932 г. на почве голода забастовку рабочих на строительстве Верхнеудинского паровозо-вагоно-ремонтного завода, когда 2 января забастовало около 500 рабочих из 1100 на первом стройучастке.<sup>55</sup> "Возникновение данной забастовки, подчеркивал Полномочный представитель ОГПУ И.П.Зирнис, является прямым результатом активной, подпольной работы просочившегося на строительство кулацкого контрреволюционного элемента."<sup>56</sup>

Следует отметить, что руководители ОГПУ в Восточной Сибири вредительство связывали не только с действиями враждебных сил, но и с собственными недоработками, когда сотрудники ОГПУ недостаточно занимались этим вопросом. Например, всю ответственность за упомянутую забастовку руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю возложило на сотрудников Бурят-Монгольского отдела ОГПУ и дорожно-транспортного отдела ОГПУ Забайкальской ж.д., "не сумевших своевременно разоблачить кулацкий, контрреволюционный организующий элемент и предупредить забастовку".<sup>57</sup> Сотрудникам ОГПУ рекомендовали усилить борьбу с вредителями. В результате она приняла достаточно широкие масштабы. В частности, в конце 1932 - начале 1933 гг. сотрудники ОГПУ Галушкин и Вяткин провели агентурную разработку под кодовым названием "Железнодорожники" на станции Нижнеудинск. Как отмечалось в одном из приказов Полномочного представительства ОГПУ, этой разработкой была "раскрыта контрреволюционная организация, направляющая свою работу на расстройство деятельности паровозного парка, срыв рабочего снабжения, вредительство, развал трудовой дисциплины и партийно-профсоюзной работы".<sup>58</sup> Причем степень наказания по обвинениям во вредительстве была довольно суровой. Так, в мае 1932 г. Тройкой при Полномочном представительстве ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю только по делу "Комбинат" были приговорены во внесудебном порядке к расстрелу 12 человек.<sup>59</sup>

---

<sup>54</sup> Там же.

<sup>55</sup> Там же. - Л. 12.

<sup>56</sup> Там же.

<sup>57</sup> Там же. - Л. 12.

<sup>58</sup> Там же. - Д. 37. - Л. 39.

<sup>59</sup> Там же. - Л. 331.

Борьба с вредителями наряду с выполнением многих других задач привела к явной перегрузке органов ОГПУ. В результате в их работе нередко начинаются сбои и неразбериха. Так, например, в начале 1931 г. по обвинению во вредительстве органы ОГПУ арестовали помощника начальника ж.д. станции Карымская Г.Т.Максимовича. При внутренней проверке в марте 1932 г. выяснилось, что обвиняемый все еще находится под стражей, а его дело в производстве. Было проведено служебное расследование причин нахождения Максимовича под следствием, во время которого его следственное дело обнаружить не удалось и в июле 1932 г. арестованного освободили из под стражи. Само же следственное дело 19 октября того же года нашли при проверке бумаг на столе у начальника дорожно-транспортного отделения ОГПУ станции Чита-1 А.М.Крессана, где "оно находилось без движения" с 24 ноября 1931 г.<sup>60</sup>

Вообще борьба с вредителями, несомненно, сопровождалась прямыми беззакониями. Она также способствовала насаждению в обществе, особенно в инженерно-технических и научных кругах атмосферы страха и подозрительности, что готовило почву для "Большого террора".

Так же как и в случае с коллективизацией и раскулачиванием сейчас уже трудно сказать, насколько обоснованной была эта борьба с вредителями, кого можно было назвать вредителем, а кто пострадал невинно. Разобраться в этом - задача не историков, а правоохранительных органов.

Безусловно, в стране имелись люди крайне недовольные властью и частично готовые на враждебные действия. Причем, ликвидация НЭПа, коллективизация и раскулачивание значительно расширили их ряды. И действия, которые можно было квалифицировать как вредительство, конечно же, имели место.

С другой стороны, настораживают масштабы борьбы с вредителями и их количество. Ведь во времена НЭПа сводки ОГПУ фиксировали лишь единичные случаи такого рода, а в 1930-е гг. вредительство вдруг приобретает массовый характер. Может быть дело было вовсе не во вредителях, а в масштабах индустриализации, в ее неподготовленности - отсутствии нужного числа специалистов, нехватке средств, материалов, опыта и т.п. В пользу того, что многие дела по вредительству были искусственно раздуты и многие люди пострадали невинно говорит и тот факт, что в свое время широко разрекламированные партийным руководством СССР вредительские дела - "Шахтинское", "Промпартии", "Крестьянской партии" оказались сфабрикованными. В пользу этого говорит и тот факт, что еще в 1934 г. прокурор Восточно-Сибирского края в докладе Прокурору

---

<sup>60</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 796.

СССР отмечал, что нередко "бесхозяйственность и злоупотребления пытаются замазать ссылками на вредительство классово враждебных элементов".<sup>61</sup>

В связи с индустриализацией, коллективизацией и их последствиями произошло и расширение функций органов государственной безопасности в сфере обеспечения сохранности государственной собственности. В 1930-е гг. эта задача легла непосредственно на плечи их сотрудников. Военские подразделения ОГПУ напрямую охраняли наиболее важные государственные объекты (к примеру, тоннельный участок Кругобайкальской железной дороги). ОГПУ фактически подчинялась и военизированная охрана железных дорог и крупных предприятий, а в 1932 г., как уже приходилось отмечать, в ведение ОГПУ передали и военизированную пожарную охрану НКПС.

Важнейшей задачей ОГПУ являлся контроль за сохранностью государственных мобилизационных запасов, которым занимались инспекция резервов Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю и его экономический отдел, обеспечивавший агентурное обслуживание мобилизационной работы.

С целью совершенствования системы охраны руководство Полномочного представительства устраивало периодические проверки, по итогам которых принимались меры к ее улучшению. Эти проверки позволили выявить много недостатков. В частности, при проверке хранения мобилизационных резервов в Бурят-Монгольской АССР в 1933 г. было установлено, что сотрудниками ОГПУ не "обеспечена полная сохранность мобзапасов, благодаря чего в складах Буркоопсоюза выявилось вредительское отношение к мобфондам: 4 вагона сухоовощей лежало в ограде под открытым небом ... В складе № 14 хранится четыре вагона масла, тара разбита, на некоторых бочках имеется плесень, масло хищнически растаскивается, о чем свидетельствуют следы пальцев, т.к. масло выгребалось руками. В некоторых бочках недостает до 50% масла".<sup>62</sup> В результате по итогам проверки начальнику экономического отделения Бурят-Монгольского отдела ОГПУ Серову объявили строгий выговор с последним предупреждением "за не обеспечение агентурным обслуживанием мобфондовских складов".<sup>63</sup> Были наложены взыскания и еще на ряд сотрудников ОГПУ, а также намечен перечень мероприятий по исправлению

---

<sup>61</sup> Цит. по: История Сибири. - Т. 4. - С. 377.

<sup>62</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 36.

<sup>63</sup> Там же.



положения (активизация агентурно-оперативной работы, чистка мобилизационных структур от классово чуждых элементов и т.п.).

Еще более серьезные недостатки удалось выявить в системе военизированной охраны государственных объектов. Так, скрытая проверка состояния охраны тоннельного участка Кругобайкальской железной дороги, железнодорожных станций Иннокентьевская и Иркутск, Иркутского затона и Черемховских угольных копей, проведенная в ночь с 30 апреля на 1 мая и с 1 мая на 2 мая 1932 г. показала: отсутствие планов охраны и обороны на большинстве охраняемых объектов, незнание часовыми своих обязанностей, неготовность оружия к действию (пулеметы "Максим"), неисправность средств связи и сигнализации.<sup>64</sup> Единственным объектом охранявшимся по всем правилам оказался железнодорожный мост через р. Иркут, за что его охранникам была объявлена благодарность.

Одновременно с усилением охраны различных объектов руководство Полномочного представительства ОГПУ нацеливало подчиненных и на усиление борьбы с хищениями, особенно на транспорте. Значительное падение уровня жизни населения в связи с коллективизацией и индустриализацией привело к резкому росту хищений. Так, согласно данным ОГПУ в 1932 г. на восточно-сибирском участке Томской ж. д. в мае было зафиксировано 97 хищений, из которых удалось раскрыть лишь 19, в июне уже 110 хищений, из них 31 раскрыто, а в июле 133 хищения при 26 раскрытых. Резко вырос и объем похищенного. Например, если в мае 1932 г. сумма ущерба от хищений на Забайкальской ж.д. составила 2308 рублей, то в июне - 24547 рублей.<sup>65</sup> В связи с этим руководство Полномочного представительства ОГПУ приняло решение увеличить число постов стрелковой охраны НКПС, ускорить рассмотрение следственных дел о хищениях и установить персональную ответственность работников железнодорожного транспорта за сохранность грузов.

Большую работу ОГПУ проводило в Восточной Сибири и по усилению противопожарной безопасности. Она особенно активизировалась после того, как в ночь на 22 декабря 1933 г. в Чите одновременно произошло 3 крупных пожара: сгорел дом Советов, где размещались все партийные и советские организации Забайкалья, а также горели здания телеграфа и общежития начсостава авиабригады Красной Армии. В связи с этим ОГПУ провело проверку противопожарной безопасности всех крупных зданий в Восточно-Сибирском крае, а также проверило социальный состав обслуживавшего их

---

<sup>64</sup> Там же. - Ф. 1. - Оп. 2. - Д. 21. - Л. 275-283.

<sup>65</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 37 - Л. 386.

персонала и провело его "чистку от классово чуждых элементов", поскольку читинские пожары были квалифицированы как диверсионный акт.

В начале 1930-х гг. в связи с возникшими в результате коллективизации серьезными продовольственными трудностями и переходом к нормированному снабжению продуктами сотрудникам ОГПУ в Восточной Сибири пришлось решать еще одну важную задачу - обеспечивать сохранность продовольствия и его нормированное потребление. Поскольку в крае в условиях острой нехватки продовольствия повсеместно наблюдались случаи безнормальной его выдачи, особенно хлеба, а также выдачи продовольствия по искусственно завышенным заявкам (что квалифицировалось сотрудниками ОГПУ как вредительство) в марте 1933 г. было принято решение производить выдачи продовольствия со складов только с разрешительной визой представителей ОГПУ.<sup>66</sup> Тем самым на ОГПУ возложили ответственность за плановое расходование продовольствия.

В борьбе с продовольственными трудностями в Восточной Сибири сотрудники ОГПУ проявили настойчивость и решительность. Благодаря именно их усилиям удалось успешно решить ряд вопросов. Так, например, как отмечалось в одном из приказов Полномочного представительства ОГПУ в феврале 1933 г., когда разлив р. Ангара стал угрожать хлебным складам в г. Черемхово руководство конторы "Заготзерно" растерялось и "давая ложные сведения о принятых мерах, само никаких мер не принимало". И лишь "благодаря исключительной энергии, решительности и умелого личного руководства со стороны Начальника Черемховского Райотделения ПП ОГПУ ВСК тов. Балашева" удалось быстро разгрузить склады и сохранить хлеб.<sup>67</sup> Примеров подобного рода можно привести немало. Очень сложную и ответственную задачу подобного рода сотрудникам ОГПУ пришлось решать осенью 1932 г., когда по заданию ЦК ВКП(Б) и СНК СССР им поручили обеспечить импорт крупной партии скота из Монголии. При этом необходимо было максимально сохранить поголовье и живой вес скота, а также "не допустить хищений и разбазариваний". Проведенная в октябре проверка предприятий "Скотоимпорт" и "Союзмясо" выявила их неготовность к этой операции. Потребовалось активное вмешательство сотрудников ОГПУ. В результате как подчеркивал позднее И.П.Зирнис: "Исключительно энергичной работой органов ОГПУ ... быстро и полно было выявлено фактическое состояние трактов Скотоимпорта и мясокомбинатов Союзмясо, что дало возможность также быстро подготовить тракты к безубыточному прогону и мясокомбинаты к массовой переработке скота.

---

<sup>66</sup> Там же. - Л. 13-14.

<sup>67</sup> Там же. - Оп. 2. - Д 41. - Л. 103.

Созданным нашими органами режимом на скотоперегонных трактах и пунктах переработки скота, обеспечена была напряженность и четкость работы Скотоимпорта и Союзмясо до последнего дня операции, и обеспечена невозможность хищений и разбазаривания скота и мяса".<sup>68</sup> Значительно перевыполненным оказался и план заготовок.

В целом же сотрудникам государственной безопасности в Восточной Сибири удалось успешно выполнить поставленные перед ними задачи в сфере охраны.

В 1930-е гг. органы государственной безопасности Восточной Сибири, как и по всей стране, через систему ГУЛАГа принимали и самое прямое и непосредственное участие в строительстве промышленных, транспортных и других объектов. По линии органов государственной безопасности трудом заключенных в различных районах региона было построено (или строилось) значительное количество различных предприятий, дорог, зданий, сооружений и т.п. По существу бесплатный труд заключенных ГУЛАГа стал важным фактором быстрого индустриального развития Сибири в довоенные годы.

Пожалуй, одной из первых широкомасштабных акций такого рода Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю стало строительство 126 мобилизационных складов под зерно и сено, начавшееся по решению Правительства в 1932 г. ОГПУ предстояло построить 56 зерноскладов емкостью по 2000 т зерна каждый и 70 сенных по 300 т.<sup>69</sup> Для руководства этой работой, ее обеспечения и координации в составе общего отдела пришлось создать, как отмечалось ранее, специальный подотдел, укомплектованный инженерными кадрами. Позднее в связи с ростом объемов строительства его преобразовали в самостоятельный отдел.

В следующем году ОГПУ развернуло в Восточной Сибири еще более грандиозное складское строительство. В соответствии с решением СНК СССР в крае предстояло построить мобилизационные зерносклады на 315 тысяч тонн зерна. Так, только в Красноярске требовалось построить 88 складских зданий, а в Иркутске - 46 (помимо этих городов склады должны были построить в Канске, Верхнеудинске и Чите). Решение этой задачи заместитель председателя ОГПУ СССР Г.Г.Ягода поручил Полномочному представительству ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю. Для ее выполнения И.П.Зирнис принял решение организовать специальные прорабские участки, рабочую силу набрать в основном из числа заключенных в трудовые колонии, административно ссыльных и спецпереселенцев.

---

<sup>68</sup> Там же. - Л. 116.

<sup>69</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 21. - Л. 232.

В последующие годы объемы строительства и количество различных строительных объектов органов государственной безопасности в Восточной Сибири непрерывно увеличивались, а следовательно росло и число лагерей ГУЛАГа в регионе и число их обитателей.

Помимо строительства различных объектов в 1930-е гг. органы государственной безопасности принимали самое активное участие и в сборе средств на индустриализацию, что являлось тогда одной из важнейших их задач. Это участие проявлялось в двух основных формах.

Прежде всего, это личное участие сотрудников государственной безопасности в сборе средств - приобретение облигаций государственных займов, денежные и другие пожертвования и т.п. Так, например, в 1932 г. в честь 15-летия ВЧК-ОГПУ бойцы и командиры 20-го полка 2-й железнодорожной бригады войск ОГПУ (Забайкальская ж.д.) предложили собрать деньги на постройку самолета "Восточно-Сибирский Чекист". Их инициатива получила полную поддержку руководства Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю и был организован сбор средств среди сотрудников ОГПУ и военнослужащих погранохраны и войск ОГПУ.<sup>70</sup>

Главной же задачей в этой сфере деятельности органов ОГПУ являлись выявление и изъятие ценностей у отдельных категорий населения. Как отмечалось в одном из приказов по восточно-сибирскому Полномочному представительству ОГПУ за 1931 г.: "Своевременное выявление "кубышечных" фондов нэпманства и всякого рода бывших людей, стремящихся к нелегальной переправе за границу с накоплениями и пресечение этих стремлений, а также утечки, добываемого в Крае, золота по всевозможным нелегальным каналам - заняло важнейшее место во всей системе работы большинства органов ОГПУ".<sup>71</sup>

Эту задачу партийно-государственное руководство страны поставило перед органами ОГПУ в 1930 г. Для ее решения с 1 октября 1930 г. в оперативных секторах Полномочного представительства ОГПУ и Бурят-Монгольском отделе ОГПУ были созданы специальные оперативные группы по борьбе с контрабандой. Общее руководство и координацию их деятельности возложили на оперативное отделение управления пограничной охраны и войск ОГПУ Полномочного представительства, которое возглавлял А.Н.Петрочук. С 1 июля 1931 г. для усиления этой работы в оперативных секторах и Бурят-Монгольском отделе ОГПУ создали специальные отделения по борьбе с контрабандой (и соответственно увеличились штаты

---

<sup>70</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 41. - Л. 54.

<sup>71</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 26. - Л. 93.

сотрудников ОГПУ), а во всех районных отделениях стали создаваться группы по борьбе с контрабандой. Руководство ими возложили на начальника управления пограничной охраны и войск ОГПУ, а в Иркутском секторе эту работу вело специально созданной в составе управления пограничной охраны отделение по борьбе с контрабандой. (начальник отделения - Баранов). Свою работу эти отделения вели в самом тесном контакте с экономическими структурами ОГПУ.

Проведенные реорганизации позволили значительно повысить результативность деятельности ОГПУ. Так, в течение 1931 г. было изъято ценностей, которые квалифицировались как контрабанда на сумму 1 миллион 633 тысячи 243 рубля. Из них в первом полугодии (до создания отделений по борьбе с контрабандой) на 653 тысячи 578 рублей, а во втором - на 979 тысяч 665 рублей.<sup>72</sup> В том числе изделий из золота (слитки, шликта, монеты и т.п.), драгоценных камней, а также иностранной валюты на сумму 1 миллион 35 тысяч 412 рублей. Сотрудники ОГПУ изъяли только золота 571,4 кг.<sup>73</sup> За достигнутые показатели 24 сотрудника Полномочного представительства ОГПУ по итогам года были награждены именными золотыми и серебряными часами и пистолетами "Коровин".<sup>74</sup>

В последующие годы стали практиковаться твердые централизованные планы по изъятию ценностей. Причем, достаточно высокие, что привело к снижению результативности этой работы. Так, уже в конце следующего 1932 г. И.П.Зирнис был вынужден констатировать, что "работа наших органов по изъятию золота, валюты и ценностей протекает медленно, по размаху недостаточно и по достигнутым результатам в ней совершенно неудовлетворительно.

15-я годовщина органов ВЧК\_ОГПУ застаёт нас с невыполненным еще боевым заданием Правительства и Коллегии ОГПУ".<sup>75</sup> Однако и в условиях снижения показателей отдельные подразделения Полномочного представительства сумели выполнить повышенные задания, как например, экономическое отделение (начальник Я.И.Косиненко) Красноярского оперативного сектора ОГПУ.

Важной задачей органов государственной безопасности в Восточной Сибири являлась борьба с экономической и уголовной преступностью, а также контроль за другими правоохранительными органами и прежде всего

---

<sup>72</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 21. - Л. 157.

<sup>73</sup> Там же. - Л. 159.

<sup>74</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 26. - Л. 193-194.

<sup>75</sup> Там же. - Л. 915.



за милицией.<sup>76</sup> Как мы уже видели сотрудники государственной безопасности принимали самое активное участие в борьбе с бандитизмом, контрабандой, хищениями и другими видами преступлений. Причем, они боролись не только с серьезными преступлениями, но и с обычным хулиганством. На это их периодически нацеливало руководство восточно-сибирских органов государственной безопасности.

Особенно большое внимание уделялось работе милиции. Как известно, в начале 1931 г. в связи с недостатками в деятельности милиции Постановлением ЦИК И СНК СССР на органы ОГПУ было возложено руководство милицией и ее включили в структуру ОГПУ. На работу туда направили многих опытных сотрудников государственной безопасности. В частности, после подчинения милиции ОГПУ начальником управления Рабоче-крестьянской милиции Восточно-Сибирского края назначили кавалера ордена Красного знамени Ф.М.Крумина, работавшего в органах государственной безопасности с 1919 г. Одновременно он являлся помощником Полномочного представителя ОГПУ по милиции.

Помимо непосредственного руководства милицией ОГПУ усиливала контроли за нею. Инструктивные документы ОГПУ требовали: "По милиции - занять достаточное осведомление на 10 - одного и выявлять политико-моральное состояние, антисоветские проявления, злоупотребления по службе и засоренность".<sup>77</sup> Кроме того, ОГПУ устраивало регулярные проверки деятельности органов милиции. При этом особое внимание обращалось на социальный состав милиции, соблюдение законности и служебную дисциплину. Сотрудникам ОГПУ Восточной Сибири удалось выявить значительное количество нарушений и должностных преступлений в рядах милиции. Так, например, их усилиями в 1932 г. была раскрыта преступная группа в городском управлении милиции г. Киренска, в которую входили старший уполномоченный оперативно-розыскного отделения М.Я.Мегре, помощники уполномоченного А.П.Исаков, В.Н.Вострецов, И.Прошутинский и вор-рецидивист Берзин. Милиционеры в сентябре 1931 г. задержали группу воров-рецидивистов и вступили с одним из них - Берзиным в преступный сговор. Они отпустили его, одновременно оформили документы на побег и объявили розыск. Взамен Берзин стал совершать кражи по наводкам милиционеров, нередко они снабжали его необходимым инструментом (отмычки и т.п.). Затем большая часть вещей якобы

---

<sup>76</sup> Этот контроль преследовал как проверку органов милиции на предмет их политической лояльности и классовой чистоты, так и эффективность борьбы с преступностью.

<sup>77</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 22.

найденная милицией возвращалась потерпевшим, за что милиционеры получали премиальное вознаграждение, одновременно они обеспечивали и большой процент "раскрываемости" по кражам. Другую часть украденных вещей Берзин продавал на рынке, причем нередко милиционеры почти сразу же изымали их у купивших как ворованные. Наиболее же ценные вещи просто присваивались. Вырученные деньги члены преступной группы делили между собой. Помимо этого Берзину были выданы оружие и милицейская форма и он под видом милиционера посещал поселки спецпереселенцев и отбирал ценные вещи у их обитателей. Группа безнаказанно действовала 6 месяцев и раскрыть ее удалось лишь благодаря вмешательству непосредственно Полномочного представительства ОГПУ. Всех ее участников за совершенные преступления предали суду военного трибунала.<sup>78</sup>

Несомненно деятельность ОГПУ способствовала некоторому улучшению работы милиции. Вместе с тем, в духе времени основную причину плохой работы милиции ОГПУ связывало с "засоренностью" ее "классово-чуждым и разложившимся элементом".<sup>79</sup> Поэтому и основной метод улучшения работы милиции ОГПУ виделось в проведении периодических чисток ее состава и в призыве на службу в милицию членов ВКП(б) и ВЛКСМ по направлениям райкомов партии.

Наиболее мрачной и трагической страницей в истории органов государственной безопасности стали годы т.н. "Большого террора" (1936-1938). Именно с репрессиями, как правило, ассоциируется в общественном сознании деятельность органов государственной безопасности в 1930-е гг. И это не случайно. Таковы были масштабы и последствия этой грандиозной акции.

Подготовка органов государственной безопасности к "Большому террору" велась с начала 1930-х гг. Не являлась исключением в этом процессе и Восточная Сибирь.

К этому их сотрудников постепенно готовил целый ряд взаимосвязанных явлений. Прежде всего, это резкое расширение сферы деятельности органов государственной безопасности в связи с переходом к индустриализации и коллективизации, сопровождавшееся ужесточением классовой политики. Не случайно циркулярные документы ОГПУ начала 1930-х гг. меру наказания за т.н. политические преступления по печально знаменитой 58-й статье УК РСФСР ставили в прямую зависимость от социального происхождения обвиняемых.

---

<sup>78</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 570-571.

<sup>79</sup> Там же. - Д. 37. - Л. 112.

Сотрудников государственной безопасности к "Большому террору" готовила и все более расширявшаяся практика применения внесудебных репрессий (противозаконных по самой своей сути), когда существовавшие при Полномочных представительствах ОГПУ "Тройки" без суда приговаривали лиц, обвиняемых в политических преступлениях, к различным мерам наказания вплоть до расстрела. Причем, масштабы деятельности "Троек", и в частности, восточно-сибирской, непрерывно возрастали. В августе 1933 г. в Полномочном представительстве ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю циркуляром заместителя председателя ОГПУ СССР Г.Г.Ягоды в связи с большой загруженностью основной "Тройки" была образована еще одна дополнительная "Тройка", на которую возложили применение внесудебных репрессий против нарушителей закона о паспортизации.<sup>80</sup> После преобразования в 1934 г. ОГПУ в НКВД практика внесудебных репрессий сохранилась. При НКВД СССР стало действовать Особое совещание, наделенное необходимыми для этого полномочиями, а вскоре при региональных управлениях НКВД были воссозданы "Тройки" с аналогичными полномочиями.

Приближали "Большой террор" и такие широкомасштабные акции как раскулачивание, борьба с вредительством и религией сопровождавшиеся массовыми беззакониями, жертвами которых в Восточной Сибири стали десятки тысяч ни в чем не повинных людей.

Так, в частности, сотрудники государственной безопасности Восточной Сибири принимали самое активное участие в антирелигиозной политике ВКП(б). Как известно, на рубеже 1920-х - 1930-х гг. коммунистическая партия начала решительное наступление на религию. Под различными предлогами (отказ в регистрации общины, необходимость ремонта храма и т.п.) храмы закрывались и конфисковывались. Одновременно при помощи "Союза воинствующих безбожников" у населения особенно у молодежи формировали одиозный образ священнослужителя как тунеядца, стяжателя и контрреволюционера. Важнейшей формой борьбы с религией стали и репрессии против духовенства. В это время в Восточную Сибирь по обвинению в антисоветской и контрреволюционной деятельности было сослано значительное число его представителей. Но и здесь продолжалось их преследование.

Руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю в начале 1933 г. категорически потребовало от своих сотрудников усиления борьбы с духовенством и сектантами. Тот факт, что в течение 1932 г. в Читинском оперсекторе ОГПУ репрессировали 12 ссыльных

---

<sup>80</sup> Там же. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 34. - Л. 99, 100.

священнослужителей, а в Красноярском оперсекторе и Бурят-Монгольском отделе ОГПУ только по 5 был расценен как "недооценка борьбы классового врага".<sup>81</sup> Не осталось без внимания ОГПУ и местное духовенство. Руководство Полномочного представительства в своих директивных документах требовало: "Взять все духовенство на учет, повседневно выявлять их деятельность ... Выявить все имеющиеся секты, количество каждой секты и их руководителей".<sup>82</sup>

Одной из акций предшествовавших "Большому террору" и готовивших его являлась внутрипартийная чистка 1933-1934 гг., ставшая логическим продолжением борьбы И.В.Сталина и его сторонников в 1920-е гг. против оппозиционных течений и групп в ВКП(б).

В Восточной Сибири эта чистка проходила особенно жестко. Ей предшествовало специальное постановление ЦК ВКП(б), в котором работа Восточно-Сибирского краевого комитета партии была признана неудовлетворительной. ЦК сместил все руководство крайкома ВКП(б) и направил в регион для укрепления партийной организации более 200 партийных и советских работников во главе с новым первым секретарем крайкома партии М.О.Разумовым. Новое руководство крайкома ВКП(б) взяло решительный курс на проведение чистки. В результате в Восточно-Сибирском крае из ВКП(б) исключили более 25% коммунистов, что значительно превышало как средние общесоюзные показатели (17%), так и показатели других сибирских регионов.<sup>83</sup> Не миновала чистка и сотрудников ОГПУ. Во всех структурных подразделениях Полномочного представительства в конце 1933 - начале 1934 гг. прошли партийные собрания, на которых проходила чистка. Партийная чистка и последовавший вскоре - в 1935-1936 гг. обмен партийных документов (бывший по сути той же чисткой) создавали среди коммунистов, в т.ч. и сотрудников ОГПУ, атмосферу неуверенности и подозрительности.

Наконец, еще до начала "Большого террора" на территории Восточной Сибири началось создание его важнейшей составляющей - системы ГУЛАГа. В частности, в мае 1936 г. руководство Управления НКВД по Восточно-Сибирскому краю в соответствии с директивой Главного управления лагерей НКВД приняло решение сформировать "колонии массовых работ" для строительства дорог на территории региона. Согласно этому решению создавалось 5 новых групп лагерей с центрами: в с. Акша

---

<sup>81</sup> Там же. - Д. 37. - Л. 26.

<sup>82</sup> Там же. - Д. 22.

<sup>83</sup> См.: История Сибири. - Т. 4. - С. 394.

(Забайкалье), с. Лежниково (Красноярье), с. Шимки (Тунка), с. Нижне-Илимск, с. Усть-Орда.<sup>84</sup>

Вместе с тем, нельзя не отметить, что в первой половине 1930-х гг. в репрессивной политике руководства ВКП(б) и деятельности органов государственной безопасности по ее реализации в Восточной Сибири имелись и сдерживающие элементы, реально затруднявшие переход к "Большому террору".

Прежде всего, они заключались в твердой позиции председателя ОГПУ СССР В.Р.Менжинского, состоявшей в том, что органы государственной безопасности, осуществляя репрессивную деятельность, должны строго соблюдать законы (действовавшие тогда в стране).

Такой же позиции придерживалось и руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю во главе с И.П.Зирнисом. Ранее уже приходилось писать о том, что руководители Полномочного представительства вели борьбу с различными нарушениями законности со стороны своих сотрудников, наказывая нерадивых.

Особенно жестко преследовались случаи физического воздействия на подследственных. В частности, например, в 1932 г. такой случай был отмечен в дорожно-транспортном отделе ОГПУ Забайкальской ж.д. Начальник отделения ОГПУ станции Чита-1 А.М.Крессан получил распоряжение от заместителя начальника дорожно-транспортного отдела ОГПУ П.И.Назарова произвести арест граждан, подозреваемых в создании контрреволюционной организации и провести ускоренное следствие. А.М.Крессан проведя аресты "дал установку допрашивать арестованных непрерывно до тех пор пока не будет получено признание, допустив применение физических мер воздействия". Эти действия руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю квалифицировало как "исключительное по своей грубости извращение принципов чекистской работы". За нарушение законности П.И.Назаров, А.М.Крессан и сотрудники отделения ОГПУ А.Я.Бергин и Д.И.Морозов были отстранены от занимаемых должностей, а особоуполномоченному Полномочного представительства дано поручение "в кратчайший срок произвести тщательное расследование для направления дела в Коллегию ОГПУ".<sup>85</sup>

Одновременно И.П.Зирнис и его заместители настойчиво добивались более качественного ведения следствия. В частности, они считали недопустимым затяжки следствия и содержание подследственных под

---

<sup>84</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Ф. 1. - Оп. 1. - Д. 35. - Л. 24.

<sup>85</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 852-853.



стражей более отведенных законом 2-х месяцев. Следует отметить, что в начале 1930-х гг. в связи с резким возрастанием объемов деятельности ОГПУ подобная практика стала принимать все более широкий характер, что свидетельствовало о том, что уже тогда органы государственной безопасности оказались не в состоянии в полной мере выполнить задачи, поставленные перед ними руководством коммунистической партии. Так, в августе 1932 г. было зафиксировано 7 случаев нарушения сроков и правил ведения следствия,<sup>86</sup> а в апреле 1933 г. уже 15.<sup>87</sup>

Руководители органов государственной безопасности Восточной Сибири пытались бороться и против искусственной фабрикации уголовных дел, которое уже имело место в то время. Например, в 1932 г. в дисциплинарном порядке были наказаны сотрудники Нижнеудинского отделения ОГПУ за то, что они во время следствия по делу группы граждан пытались "без наличия улик" обвинить их в создании контрреволюционной группировки, причем, "обвинение строилось на предположительных показаниях свидетелей".<sup>88</sup>

В то же время, говоря о существовании факторов, препятствовавших репрессивному курсу сталинского руководства ВКП(б), не следует преувеличивать их воздействие на работу органов государственной безопасности. В целом они, безусловно, послушно и по мере сил и возможностей добросовестно выполняли те задачи, которые ставил перед ними ЦК ВКП(б). Никто из руководства органов государственной безопасности и на центральном, и на местном восточно-сибирском уровне не ставил под сомнение правильность курса взятого лидерами коммунистической партии в 1930-е гг.

Одним из важнейших направлений деятельности органов государственной безопасности Восточной Сибири в 1930-е гг. являлась разведывательно-контрразведывательная работа. Причем, в эти годы ее значение резко возросло, что было обусловлено обострением международной обстановки в дальневосточном регионе. Как известно, с 1931 г. японский милитаризм взял открытый курс на установление своего господства в Азии. И первой его жертвой стал Китай. После оккупации северо-восточной его части - Манчжурии здесь в 1932 г. было создано прояпонское марионеточное государство Манчжоу-Го. Его территория стала опорной базой для организации японцами разведывательной и подрывной деятельности против восточных районов СССР, включая и Восточно-Сибирский край.

---

<sup>86</sup> Там же. - Д. 37. - Л. 331-334.

<sup>87</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 41. - Л. 345-347.

<sup>88</sup> Там же. - Оп. 1. - Д. 26. - Л. 879.

В Восточной Сибири японцев интересовали: этнический и количественный состав населения, работа промышленности, организация и состояние связи, водоснабжения, состояние и работа железнодорожных, автомобильных, водных и воздушных транспортных коммуникаций, количество и расположение аэродромов и конечно же численность, состав и дислокация частей Красной Армии.

Для ведения разведывательной и подрывной деятельности против СССР японская разведка широко использовала китайцев, корейцев, монголов, которых засылали в СССР под видом политических эмигрантов. Но особые надежды она связывала с русской белой эмиграцией на территории Манчжурии.

В 1930-е гг. в Манчжурии активно действовали различные политические эмигрантские организации и течения: дальневосточное отделение "Русского Обще-Воинского Союза" (глава генерал М.К.Дитерихс), манчжурское отделение "Братства Русской правды" (глава генерал И.Ф.Шильников), "Дальневосточный казачий союз", "Забайкальское землячество", "Национальный Союз Нового Поколения", "Русская фашистская партия" и другие.

Всплеск крестьянского повстанчества в Восточной Сибири и на Дальнем Востоке в связи с коллективизацией сельского хозяйства и японская оккупация Манчжурии способствовали заметной активизации их деятельности, поскольку в этих явлениях лидеры этих организаций увидели надежду на политический реванш.

В 1934 г. Японская военная миссия в Харбине с целью более рационального использования белой эмиграции в борьбе против СССР создала т.н. "Бюро по делам российских эмигрантов", которое занималось их учетом и вербовкой агентуры среди эмигрантов.

Откровенно-агрессивный курс Японии, обострение международной, а также и внутривосточной обстановки требовали от органов государственной безопасности резкой активизации контрразведывательной работы в восточных районах СССР и разведывательной работы на сопредельных территориях.

Заметную роль в противоборстве с японской разведкой в это время довелось сыграть и сотрудникам органов государственной безопасности Восточной Сибири. Разведывательно-контрразведывательной работой в регионе занимались особый отдел, а также созданное в 1933 г. иностранное отделение Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю (впоследствии Управления НКВД).

Пожалуй наиболее значительной, масштабной и яркой операцией разведывательно-контрразведывательного характера, проведенной

сотрудниками органов государственной безопасности Восточной Сибири, являлась оперативная разработка под кодовым названием "Мечтатели", осуществлявшаяся с 1931 по 1935 год. Она представляла собой в некоторой степени аналог знаменитой и хорошо ныне известной операции ОГПУ "Трест".

В 1931 г. в связи с заметной активизацией белой эмиграции в Манчжурии руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю по согласованию с ОГПУ СССР приняло решение начать разработку манчжурского отделения белоэмигрантской организации "Братство Русской правды" (БРП). На эту организацию выбор пал по ряду причин. Прежде всего, в начале 1930-х гг. эта организация очень активно заявляла о себе. В газете БРП "Русская правда", издававшейся в Берлине, открыто рекламировалась террористическая, вредительская и даже повстанческая его деятельность на территории СССР. Кроме того, при определении "партнера" учитывалось и то обстоятельство, что глава манчжурского отделения БРП, белогвардейский генерал И.Ф.Шильников, до революции служил в Иркутском военном округе, в Иркутске у него оставалось немало знакомых. Выходцами из Восточной Сибири являлись и многие активисты БРП, что позволяло использовать оставшихся здесь их родственников, друзей и знакомых для проведения оперативной разработки.

Общее руководство оперативной разработкой "Мечтатели" осуществлял лично Полномочный представитель ОГПУ И.П.Зирнис. Непосредственно руководил этой работой. Начальник особого отдела Полномочного представительства Н.Ф.Рунич, ставший незадолго до окончания операции заместителем начальника Управления НКВД по Восточно-Сибирскому краю. Под его руководством по делу "Мечтатели" работали: заместитель начальника особого отдела Хомяков, начальники иностранного отделения Б.И.Гудзь (специально переведенный в 1932 г. в Иркутск из Москвы для участия в этой оперативной разработке) и сменивший его на этом посту в 1934 г. Яковлев, уполномоченные иностранного отделения Фирсов, Л.В.Цвигун, а также сотрудники особого отдела - Мельников, Геранин, Оленев, Шарин и др. В ОГПУ СССР (с 1934 г. - НКВД) ход оперативной разработки "Мечтатели" контролировали и направляли начальник Иностранного отдела Артузов, его заместитель Фортунатов и начальник Особого отдела Гай.<sup>89</sup>

Руководство Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю, начиная данную оперативную разработку стремились решить 3 взаимосвязанных задачи:

---

<sup>89</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Д. 38. - Л. 168.

"1. Путем установления связи с Шильниковым принять на себя контрреволюционную активность белогвардейских авторитетов (перехват лазутчиков, оружия, документов, литературы, денег и т.п.);

2. Вскрытие их подполья;

3. Выяснение их планов и целенаправленности враждебной деятельности против СССР".<sup>90</sup> После оккупации Манчжурии Японией к этим задачам добавилась еще одна - выяснение разведывательной деятельности японских спецслужб против СССР и их связей с белой эмиграцией.

Суть оперативной разработки "Мечтатели" составляло легендирование наличия на территории Восточно-Сибирского края т.н. "Забайкальской контрреволюционной подпольной организации" из лиц известных белой эмиграции (бывшие участники Белого движения, члены дореволюционных политических партий и т.п.) и установление от ее имени отношений с И.Ф.Шильниковым и другими активистами БРП.

Для завязки легенды был использован завербованный ОГПУ бывший адъютант личного конвоя атамана Г.М.Семенова, вернувшийся в 1924 г. из эмиграции в СССР. По заданию ОГПУ он вступил в переписку со своим дальним родственником Антипьевым, проживавшим в Манчжурии и являвшимся одним из помощников И.Ф.Шильникова. Постепенно переписка приобрела доверительный характер, причем, Антипьев стал проявлять явный интерес к положению населения в Восточной Сибири, политической обстановке в крае и т.п. вопросам, которые не вызывали сомнений в их направленности. В частности, он пытался выяснить, кто из бывших белых офицеров служит в Красной Армии.

После этого Антипьеву в осторожной форме дали понять, что в Восточной Сибири существует некая "контрреволюционная подпольная организация". Антипьев немедленно сообщил об этом И.Ф.Шильникову и его заместителю по БРП бывшему полковнику И.В.Кобылкину. Они, как и рассчитывали сотрудники ОГПУ, решили взять эту "организацию" под свое руководство и оказывать ей всяческую помощь. В результате перед ОГПУ встала задача не на словах, а на деле создать легендированную организацию.

Ядро "организации" составила группа секретных агентов ОГПУ из числа т.н. "бывших людей", завербованных "на серьезных компрометирующих материалах".<sup>91</sup> Центральную роль в ней играли бывший казачий полковник А.В.Кобылкин, родной брат манчжурского Кобылкина, хорошо знавший генерала И.Ф.Шильникова, и В.Т.Серебряков, бывший

---

<sup>90</sup> Там же. - Л. 156.

<sup>91</sup> Там же. - Л. 167.

священник, а затем учитель "очень толковый, умный, честный, смелый, надежный, с феноменальной памятью агент ... имевший широкие связи среди "бывших" людей в Сибири и в Манчжурии".<sup>92</sup> "Основателям" удалось вовлечь в "организацию" около 30 человек из лиц враждебно настроенных к коммунистической власти<sup>93</sup> (некоторые из них впоследствии также были завербованы сотрудниками ОГПУ, а некоторые до самого конца "организации" так ни о чем и не подозревали, наивно считая, что на самом деле участвуют в "борьбе с большевиками", как например, братья Олейниковы, которые являлись основными "ходаками" через границу).

С помощью сотрудников ОГПУ "организация" наладила систему перехода границы. После этого в ее распоряжение из Манчжурии стали поступать деньги, оружие, боеприпасы и антикоммунистическая литература, издаваемая БРП. Только в течение последнего года существования "организации", с мая 1934 по май 1935 года в Восточную Сибирь было направлено 2 мексиканских винтовки и 260 патронов к ним, 4 пистолета "Маузер" и более 100 патронов, 6 пистолетов "Браунинг", 1 револьвер "Наган" и патроны к ним, 8 зажигательных патронов "Термит", дававших температуру до 3000 градусов, 154 доллара США и 4960 рублей советских денег.<sup>94</sup> Все это было передано И.В.Кобылкину представителями японской разведки. Взамен японцы требовали информацию разведывательного характера:

"а) данные о войсках в Забайкалье, если можно в Приморье и на Амуре, не ведется ли подготовка к войне;

б) нет ли новых дивизий, их нумерация, дислокация;

в) осуществляется ли переброска войск к Троицкосавску и далее;

г) схему телеграфной и телефонной связи в Забайкалье;

д) какие разговоры вокруг войны".<sup>95</sup>

В ответ на эти запросы сотрудники Полномочного представительства ОГПУ по согласованию с центром разрабатывали и переправляли через "организацию" в Манчжурию тщательно продуманную дезинформацию. В 1934 г. Манчжурию нелегально посетил один из "руководителей" "организации" В.Т.Серебряков, который встречался в Харбине с представителями Японской военной миссии, Вернувшись обратно, он принес

---

<sup>92</sup> Там же. - Л. 158.

<sup>93</sup> Там же. - Л. 167.

<sup>94</sup> Там же. - Д. 15397. - Т. 1 - Л. 61, Т. 2. - Л. 255, 321.

<sup>95</sup> Там же. - Д. 38. - Л. 160.



"значительную информацию о белогвардейских закордонных организациях, о деятельности японской военной миссии в Манчжурии".<sup>96</sup>

В целом оперативная разработка "Мечтатели" позволила: перекрыть один из каналов поступления средств для ведения подрывной деятельности; выявить нелегальные "явки" белоэмигрантских организаций на территории Забайкалья, которые были немедленно провалены под предлогом раскулачивания их содержателей и взамен "организация" предложила свои "надежные" явки; выявить и нейтрализовать ряд лиц, готовых к активной борьбе на стороне Японии; и, самое главное, она позволила выявить ряд представителей японской разведки в Манчжурии, занимавшихся работой против СССР, формы и методы их работы, а также многих агентов японской разведки из числа русских белоэмигрантов.

После смерти в мае 1934 г. генерала И.Ф.Шильникова руководство ОГПУ СССР сочло, что, поскольку полковник И.В.Кобылкин, возглавивший отделение БРП, не являлся видной фигурой в белоэмигрантских кругах, "дальнейшая игра с Манчжурским филиалом БРП не представляет оперативной ценности". Поэтому было принято "решение об окончании разработки путем вывода на Советскую территорию и ареста наиболее активных белогвардейцев".<sup>97</sup> Выполняя это задание "руководители" "организации" стали настойчиво приглашать И.В.Кобылкина лично прибыть в Восточную Сибирь для оказания практической помощи на месте. И.В.Кобылкин для проверки "организации" в январе 1935 г. направил в Забайкалье своего ближайшего помощника Е.Л.Переладова. Тот встретился с ее "руководством" и убедившись в дееспособности "организации" сообщил Кобылкину о необходимости его личного прибытия в Иркутск. После чего Переладова немедленно арестовали.

В ночь на 6 марта 1935 г. перешел границу и сам И.В.Кобылкин, "соответствующим образом экипированный (2 маузера, браунинг с боеприпасами, 2 зажигательных патрона "Термит", листовки БРП, деньги, доллары, письма, адреса и т.п. ...)".<sup>98</sup> Прибыв в Читу, он в сопровождении В.Т.Серебрякова выехал в Иркутск, где и был арестован 9 марта. Именно показания И.В.Кобылкина и помогли раскрыть японскую разведывательную сеть. Наконец, 28 мая 1935 г. при переходе границы был задержан связной Кобылкина, японский агент В.Олейников. Во время этого задержания в перестрелке пограничники убили еще двух агентов - М.Олейникова и В.Кустова. У них было изъято оружие, боеприпасы, яды, 2690 советских

---

<sup>96</sup> Там же. - Л. 159.

<sup>97</sup> Там же. - Л. 162.

<sup>98</sup> Там же. - Д. 15397. - Т. 1. - Л. 146.

рублей и 2713 экземпляров белогвардейских листовок, газет и прочей литературы.<sup>99</sup>

Заключительным аккордом дела "Мечтатели" стал открытый судебный процесс в Иркутске 31 августа - 1 сентября 1935 г., проведенный Выездной Сессией Военной Коллегии Верховного Суда СССР, на котором И.В.Кобылкин, Е.Л.Переладов и В.В.Олейников признали себя виновными в соотрудничестве с японской разведкой и были приговорены к расстрелу.<sup>100</sup>

Помимо разведывательно-контрразведывательной деятельности сотрудники органов государственной безопасности Восточной Сибири в 1930-е гг. продолжали оказывать помощь спецслужбам Монголии. В частности, они обеспечивали специальное оперативное обслуживание перевозок грузов из СССР в Монголию и обратно, оказывали консультативную помощь, а в 1932 г., когда в Монголии под влиянием коллективизации вспыхнуло массовое восстание на его подавление была направлена группа сотрудников Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю. Во время боев в Монголии погиб уполномоченный особого отдела А.Т.Бахеев.

Важным направлением противоборства с японскими спецслужбами, со всеми внешними и внутренними врагами СССР являлось укрепление и совершенствование пограничной охраны на восточно-сибирском участке государственной границы. Эта задача перед иркутскими сотрудниками органов государственной безопасности встала в 1930 г. в связи с образованием Восточно-Сибирского края. Ее решением занималось управление пограничной охраны и войск ОГПУ Полномочного представительства ОГПУ. На территории края охрану границы первоначально несли 3 пограничных отряда - 51-й Троицкосавский, 53-й Даурский и 54-й Нерчинский и Тункинская отдельная пограничная комендатура, а в середине 1930-х гг. к ним добавился еще один пограничный отряд - 64-й Мангутский. Кроме того, в оперативном отношении начальникам отрядов и Тункинской комендатуры подчинялись, как уже приходилось отмечать ранее, районные отделения ОГПУ (НКВД) 12-ти приграничных районов края.

Участок государственной границы СССР, находившийся в зоне ответственности Полномочного представительства ОГПУ по Восточно-Сибирскому краю в 1930-е гг. являлся крайне беспокойным, особенно его маньчжурская часть. Боевые действия вблизи границы между японскими и

---

<sup>99</sup> Там же. - Т. 2. - Л. 374а.

<sup>100</sup> См.: Восточно-Сибирская правда. - 1935. - 3, 4 сентября. Материалы дела "Мечтатели" послужили основой для написания писателем А.М.Шастиным трилогии "Час выбора".

китайскими войсками в 1931-1932 гг., провокационные действия на границе наиболее враждебной и активной части белоэмигрантов, враждебная разведывательно-подрывная деятельность японских спецслужб, стремившихся найти слабые места в советской системе охраны границ и использовать их в своих целях, наконец, наличие в приграничных районах широкого слоя казачьего населения, в большинстве своем участвовавшего в гражданской войне на стороне Белого движения и озлобленного политикой коллективизации, все это вело к тому, что напряженность на границе непрерывно росла.

Об этом же свидетельствуют и отдельные факты. В частности, 7 марта 1935 года пограничники обнаружили в тамбуре вагона поезда № 1 "Манчжурия - Москва" мешок, который был изъят и доставлен в управление 53-го погранотряда. При вскрытии в нем обнаружили: 2 пистолета "Маузер" с 70-ю патронами, пистолет "Астра" с 24-мя патронами, 2 зажигательных патрона "Термит", 60 долларов США, зашитых в белую материю, "контрреволюционные листовки" в количестве 2769 экземпляров, 8 писем в конвертах, из которых 3 без адреса и 5 адресованных в города: Елабуга (Татарская АССР), Ленинград, Нижнеудинск, Алзамай.<sup>101</sup>

Рост напряженности на восточно-сибирском участке государственной границы вынуждал руководство страны, ОГПУ и Полномочного представительства в регионе уделять повышенное внимание усилению и совершенствованию ее охраны. На протяжении 1930-х гг. неоднократно принимались решения об этом. Так, в январе 1933 г. И.П.Зирнис категорически запретил практику отрыва пограничников от несения службы охраны границы на хозработы, различные сборы и т.п.<sup>102</sup> А в июле того же года политбюро ЦК ВКП(б) вообще приняло постановление о том, чтобы увеличить численность войск Погранохраны в Восточно-Сибирском крае на 20%, приравнять Забайкалье по условиям пограничного режима к Дальневосточному краю и предоставить Полномочному представителю ОГПУ в Восточной Сибири права выселять враждебные элементы из Забайкалья.

Руководство Полномочного представительства ОГПУ неоднократно поощряло и награждало пограничников, отличившихся при охране границы - памятным боевым охотничьим оружием, серебряными и простыми часами, денежными премиями, а наиболее отличившихся представляли к награждению орденом "Красное знамя". Денежными премиями и памятными подарками поощрялись и местные жители, оказавшие содействие пограничникам в борьбе с нарушителями границы.

---

<sup>101</sup> Архив Иркутского РУ ФСБ РФ. - Д. 15397. - Т. 1. - Л. 146.

<sup>102</sup> Там же. - Ф. 1 - Оп. 1. - Д. 34. - Л. 51-52.

Вместе с тем, достаточно сурово наказывались нарушители режима охраны границы и нерадивые, недобросовестные пограничники. В частности, в апреле 1932 г. "за ряд грубейших нарушений" Полномочный представитель ОГПУ И.П.Зирнис снял все командование 51-го Троицкосавского погранотряда, а в марте 1933 г. были отстранены от должности и преданы суду Коллегии ОГПУ новый начальник этого отряда Фалеев и его помощник по хозяйственной части Лебедев, которым вменялись в вину многочисленные различные нарушения, в т.ч. и самовольные поездки в Монголию с целью приобретения товаров.<sup>103</sup>

Важнейшим направлением охраны границы являлась борьба с контрабандой товаров, которая исторически являлась традиционным занятием местного населения. В борьбе с контрабандистами пограничникам приходилось проявлять все свои лучшие качества, а нередко и настоящий героизм. Так, например, в июне 1932 г. пограничник, проводник-стажер 51-го погранотряда И.Чекменев с собакой по кличке "Езит" обнаружил следы нарушителей границы, преследовал их 8 км и в г.Троицкосавске (ныне Кяхта) единолично задержал 5 контрабандистов с товарами.<sup>104</sup>

В результате самоотверженной борьбы пограничников с контрабандистами из года в год возрастало число задержаний и сумма контрабанды. Только в течение 1931 г. пограничникам Восточной Сибири удалось задержать контрабанду на общую сумму 351 тысяча 286 рублей, в т.ч. на 118 тысяч 734 рубля при ее ввозе в СССР и на 232 тысячи 552 рубля при вывозе.<sup>105</sup> Из общей суммы задержанной контрабанды на долю 51-го погранотряда приходилось 38 тысяч 446 рублей, 53-го погранотряда - 247 тысяч 121 рубль, 54-го погранотряда - 54 тысячи 131 рубль и Тункинской комендатуры - 11 тысяч 588 рублей.<sup>106</sup> Высокие показатели Даурского погранотряда были обусловлены тем обстоятельством, что по его территории проходила железная дорога в Манчжурию, а также попытками нелегальной эмиграции бурят вместе со скотом в Манчжурию в знак протеста против коллективизации.

Завершая рассказ о деятельности органов государственной безопасности на территории Восточно-Сибирского края в 1930-1936 гг. можно лишь повторить, высказанную в начале статьи мысль о том, что это был крайне сложный и трагический период в их истории, который и определил конкретное содержание и итоги их работы в это время.

---

<sup>103</sup> Там же. - Д. 34. - Л. 144.

<sup>104</sup> Там же. - Д. 26. - Л. 520.

<sup>105</sup> Там же. - Оп. 2. - Д. 21. - Л. 158.

<sup>106</sup> Там же.

## РУССКИЕ ФАШИСТЫ В МАНЬЧЖУРИИ в 20-40-е годы XX века

Л.В. Курас (Улан-Удэ)

В отечественной, зарубежной и эмигрантской историографии уделяется достаточно большое внимание деятельности белой эмиграции как в Европе, так и в Маньчжурии<sup>1</sup>. Борьба эмигрантских группировок между собой, их деятельность в 20-30-х годах, а также попытка объединить все силы эмиграции и направить их против СССР и Монголии привлекают внимание как ученых, так и мемуаристов - непосредственных участников описываемых событий<sup>2</sup>. Этой проблеме была посвящена международная конференция «Годы. Люди. Судьбы. История российской эмиграции в Китае», состоявшейся в мае 1998 года в Москве. Изучение этой проблемы поможет отобразить более полную и правдивую картину ожесточенной борьбы за власть, внутренних распрей, провала неоднократных попыток объединения всех враждебных Советскому государству сил, влияния на эмиграцию реакционных кругов. Вместе с тем, история эмиграции - это крушение иллюзий, дела и судьбы людей, потерявших родину и даже готовившихся «освободить» Россию под чужими знаменами и потому решившихся на прямое предательство.

К числу наиболее массовых эмигрантских организаций, окопавшихся в Маньчжурии, следует отнести русских фашистов (в разное время: Русская фашистская организация, Русская фашистская партия, Всероссийская фашистская партия, Российский фашистский союз).

Проблема возникновения фашизма, проникновения его в среду рабочего класса и распространение этого социального феномена во многих странах

---

<sup>1</sup> Комин В.В. Крах российской контрреволюции за рубежом. Калинин, 1977; Барихновский Г.Ф. Идеино-политический крах белоэмиграции и разгром внутренней контрреволюции (1921-1924 гг.). Л., 1978; Шкаренков Л.К. Агония белой эмиграции. М., 1989; Аблова Н.Е. история КВЖД и российская эмиграция в Китае (первая половина XX в.). Минск, 1999; Устрялов Н. В борьбе за Россию. Сборник статей. Харбин, 1920; его же. Россия (у окна вагона). Харбин, 1926; Указатель периодических изданий эмиграции из России за 1919 - 1952 гг. Мюнхен, 1953; и др.

<sup>2</sup> Курас Л.В. Харбинская белая эмиграция в освещении спецслужб СССР (конец 20-х - начало 30-х годов) // Из истории спецслужб Бурятии. Материалы научно-практической конференции, посвященной 80-летию ВЧК-ФСБ. Улан-Удэ, 1997.



мира давно является объектом пристального внимания российских и зарубежных ученых. Однако деятельность русских фашистов со штаб-квартирой в Харбине, которые пустили глубокие корни по всей территории Китая и имели филиалы практически во всех странах, где после революции и гражданской войны в России осела белая эмиграция, пока не нашла должного освещения в историографии. Исключение составляют два харбинских издания, послесловие С.В. Кулешова к документальной публикации «Звезда и свастика», где во второй части книги опубликована «Азбука фашизма», статей Л.В. Кураса и Ю. Мельникова и небольшой параграф в монографии Н.Е. Абловой, посвященной деятельности российской эмиграции в Китае в первой половине XX века.<sup>3</sup> Между тем, русская фашистская организация представляла большую опасность не только для советской колонии на КВЖД, но и в целом для СССР. Среди прочего это обуславливается и геополитическими особенностями Маньчжурии.

Площадь этой крупнейшей китайской провинции составляла 1 миллион 300 тысяч квадратных километров, население - 35 миллионов человек, протяженность советско-маньчжурской границы - 3,5 тысячи километров. Маньчжурия представляла крупнейшую сырьевую базу - золото, уголь, железная руда, вольфрам, магниевые руды, хлопок, шерсть. В случае военного успеха войска агрессора могли в короткий срок перерезать важные советские коммуникации - Амурскую и Уссурийскую железные дороги и отсечь от СССР Советское Приморье. Поэтому неслучайно японская военная миссия (ЯВМ) в Харбине и японская военная разведка Квантунской армии обращали столь пристальное внимание на эту китайскую провинцию и стремились держать под контролем деятельность русских фашистов и других эмигрантских организаций в Харбине. Вполне естественно, что эти организации активно разрабатывались и советской разведкой. Достаточно сказать, что в 1942 году в Чите, на основании полученных советской разведкой данных, был издан трехтомник «Белоэмиграция в Маньчжурии», где имеются отдельные сведения и о русских фашистах в Харбине. Однако

---

<sup>3</sup> Большаков С. Фашизм и христианство // Фашизм и религия. Харбин, 1936; Против ВКП(б) - В.П.Ф. Харбин, 1936; Звезда и свастика. Большевизм и русский фашизм. М., 1994. С.271-312; Курас Л.В. Всероссийская фашистская партия: Харбин 30-е годы // Вопросы социально-политической истории (XVII-XХ века). Бахрушинские чтения 1997 года. Новосибирск, 1999; Аблова Н.Е. Указ. соч.; Мельников Ю. Русские фашисты в Маньчжурии (К.В. Родзаевский: трагедия личности) // Проблемы дальнего Востока. 1991. № 2. С. 109-121; № 3. С. 156-164

указанный трехтомник, ввиду тяжелого положения на фронтах Великой Отечественной войны, малого тиража и специфики издания (гриф «Для служебного пользования») сегодня является раритетом<sup>4</sup>.

На основании документов Центрального архива ФСБ Российской Федерации<sup>5</sup> и архива Управления ФСБ России по Республике Бурятия нам удалось достаточно полно воссоздать портрет русских фашистов. В конце 20-х начале 30-х годов стабилизировалось положение на западных границах СССР, в то время как на восточных рубежах было неспокойно. Именно к этому периоду относится советско-китайский вооруженный конфликт на Китайско-Восточной железной дороге (КВЖД) в 1929 г. и японская агрессия в Маньчжурии и Шанхае в 1931-1932 гг., которым предшествовал так называемый «маньчжурский инцидент» (так в исторической литературе называются события 18 сентября 1931 г., когда японцы подстроили взрыв на Южно-Маньчжурской железной дороге к северу от Мукдена, обвинив в этом китайцев, что послужило поводом к введению оккупационных войск в Харбин). В последующем в этом районе имело место широкомасштабное японское вторжение в Китай в 1937-1945 гг., советско-японские вооруженные столкновения на советско-маньчжурской и монголо-маньчжурской границах. Эти шаги, предпринимавшиеся Японией, полностью соответствовали агрессивным планам руководства страны, изложенным 7 июля 1927 года в сверхсекретном письме тогдашнего премьер-министра и министра иностранных дел Японии Танаки императору страны Восходящего Солнца, получившем название «меморандум Танаки» (в конце 1929 года советский разведчик Иван Чичаев, работавший под прикрытием генерального консула в Сеуле, добыл и направил в Москву копию этого документа. Через некоторое время Василий Пудин, работавший в Харбинской резидентуре, также добыл копию этого документа). В создавшихся условиях Москва пошла на беспрецедентный шаг, опубликовав в центральной печати обширные выдержки из «меморандума», вызвавшие болезненную реакцию Токио<sup>6</sup>. (После войны этот документ был признан подлинным и фигурировал на Токийском процессе в качестве официального документа под номером 169). Чуть позднее Ябэ Тэйдзи - идеолог в правительстве премьер-министра Ф. Коноэ - так обосновывал необходимость

---

<sup>4</sup> Белоэмиграция в Маньчжурии. В 3-х т. Чита, 1942. Режим секретности снят в 1999 г.

<sup>5</sup> Архив ФСБ РФ. Особый фонд. Н-18765. 25 томов. Дело по обвинению бывшего белогвардейского атамана Семенова Григория.

<sup>6</sup> Карпов В. Забвению не подлежит.// Новости разведки и контрразведки. Международная независимая газета о работе спецслужб. 1996. № 9. С.13.

создания «обширной сферы процветания» под эгидой Японии: «Восточноазиатская сфера процветания – обширная автономная зона обеспечения безопасности Японии и снабжения ее необходимыми материальными ресурсами – должна была включать Северный Сахалин и Курилы на севере, Восточную Сибирь, Маньчжурию, Внутреннюю и Внешнюю Монголию, Китай и Тибет на западе, Голландскую Индию на юге и океан до Гавайских островов на востоке»<sup>7</sup>. Все эти события достаточно полно рассмотрены в исторической литературе<sup>8</sup>, но роль в их подготовке и осуществлении со стороны русских фашистов пока изучена слабо.

В середине 20-х годов, когда фашизм начинает поднимать голову во всем мире, в Маньчжурии возникает Союз фашистов-синдикалистов, который позднее преобразуется во Всероссийскую фашистскую партию. Одновременно с Союзом фашистов-синдикалистов в Харбине возникает фашистская организация, возглавляемая полковником Ильей Александровичем Патиешвили. Эта организация в начале 1924 года получала денежную помощь от фашистов Западной Европы. Организация находилась в тесной связи с лидером китайских милитаристов маршалом Чжан Цзо-линем<sup>9</sup>. Сам И.А. Патиешвили подчинялся руководителю Монархического Союза Офицеров генералу Сычевскому. Это, однако, не мешало ему предпринимать и самостоятельные шаги по организации антисоветской борьбы. На 90 процентов организация состояла из белоэмигрантов, остальные – китайцы и немного японцев. По данным И.А. Патиешвили, к которым информатор относится с большим недоверием, фашистская организация насчитывала от 5000 до 8000 человек. По сведениям советской разведки организация включала в себя от 500 до 800 человек<sup>10</sup>. Высшим органом организации был Верховный Совет. Согласно уставу организации, она делилась на «пятки», в которых находилось разное количество людей. В распоряжении организации имелось небольшое

---

<sup>7</sup> Верисоцкая Е.В. Идеологическое обоснование агрессивной политики японского империализма в работах буржуазных ученых и политических деятелей Японии (1930-1940-е гг.) // Японская историография русско-японских и советско-японских отношений XIX-XX вв. Владивосток, 1987. С. 56.

<sup>8</sup> Смирнов Л.М., Зайцев Е.Б. Суд в Токио. М., 1980; Милитаристы на скамье подсудимых. По материалам Токийского и Хабаровского процессов. М., 1985.

<sup>9</sup> Архив Управления Федеральной службы безопасности Российской Федерации по Республике Бурятия (Далее – Архив УФСБ РФ по РБ), ф.2, оп.1, д.3, л. 158 (обзор № 7, л. 30).

<sup>10</sup> Там же. Л.159 (обзор № 7, л.31).

количество оружия, главным образом бомбы. Несмотря на значительную численность, организация была аморфна и бездеятельна. И.А. Патиешвили состоял в переписке с атаманом Г.М. Семеновым и генералом Толмачевым. В своих письмах И.А. Патиешвили занимался главным образом саморекламой. В руки советской разведки попало письмо генерала Никонова к атаману Семенову, в котором автор дает емкую характеристику организации: «Это такие смехотворные организации, что на них не приходится останавливаться. Одно можно сказать, что по персональному подбору - ниже всякой критики»<sup>11</sup>.

Помимо организации взрослых фашистов в Харбине существовала некоторое время организация юных фашистов во главе с полковником Енборисовым, которая быстро распалась и слилась с организацией взрослых..

В целом организация И.А. Патиешвили существовала по инерции, не проводя никакой работы, и в конце 20-х годов перестала существовать, а ее члены вступили в ряды Русской фашистской партии.

В середине 20-х годов особенно много сторонников идеологии фашизма было в среде студентов юридического факультета Харбинского университета (А.Н. Покровский, Е.В. Кораблев, К.В. Родзаевский, Б.С. Румянцев и др.), где была создана Российская фашистская организация (РФО). РФО в 1926 и 1927 годах опубликовала программные документы «Наши требования» и «тезисы русского фашизма»<sup>12</sup>. Однако заметной роли среди множества эмигрантских организаций она не играла.

По справедливому замечанию В.П. Булдакова «эмигрантский фашизм носил подражательный характер и не был результатом эволюции русского правого радикализма»<sup>13</sup>. Эмигрантский фашизм имел место во многих странах Европы, Латинской Америки, США и на Дальнем Востоке. Но лишь в Маньчжурии русская фашистская организация превратилась в крупную политическую партию.

Активизация русского фашизма в Маньчжурии приходится на начало 30-х годов. Это обуславливалось объективными обстоятельствами и, прежде всего, всеобъемлющим кризисом, на волне которого фашисты приходят к власти в Германии, а также вступлением японских оккупационных войск в Харбин в феврале 1932 г. с последующим созданием на территории Маньчжурии марионеточного государства Маньчжоу-Го во главе с императором Генри Пу

---

<sup>11</sup> Там же. Л.160 (обзор № 7, л.32).

<sup>12</sup> Онегина С. Письмо В.К. Родзаевского И.В. Сталину. Вступительная статья // Отечественная история. 1992. № 3. С. 92.

<sup>13</sup> Булдаков В.П. Национальная правая прежде и теперь // Отечественная история. 1994 № 3. С. 202

И. К этому следует добавить особую роль в превращении фашистской организации в партию ее бессменного лидера К.В. Родзаевского, который отличался высокой образованностью, прекрасными организаторскими способностями, ораторским талантом. Что касается роли этнической эмиграции и русских фашистов в деле создания государства Маньчжоу-Го на территории бывшей китайской провинции, то она нам не известна. Хотя Б.В. Базаров выдвигает гипотезу о том, что контакты эмиграции с Японией были достаточно плотными и потому в событиях в Маньчжурии «бурятская эмиграция могла сыграть не последнюю роль». Это предположение он соотносит с судьбой агинского бурята, в последующем генерал-лейтенанта Маньчжоу-Го Уржина Гармаева<sup>14</sup>.

Появление партии русских фашистов не было чем-то неожиданным, ибо фашизм, по справедливому мнению известного исследователя взаимосвязи психологии масс и фашизма В. Райха, всегда возникает на основе расовой ненависти и служит ее политическим и организационным выражением. «Отсюда следует, - пишет ученый, - что существует немецкий, итальянский, испанский, англосаксонский, еврейский и арабский фашизм»<sup>15</sup>.

Всероссийская фашистская партия отличалась довольно стройной структурой. По сообщениям советской разведки во главе партии стоял Верховный Совет. Председателем партии был А.Н. Вонсяцкий, власть которого была чисто представительской. Фактическим же руководителем партии был основатель и идеолог движения 27-летний К.В. Родзаевский. Он исполнял обязанности товарища председателя и был официальным Генеральным секретарем партии. Вся организаторская и исполнительская власть на Дальнем Востоке принадлежала ему. В состав Верховного Совета входили также видные функционеры движения М.А. Матковский, С.И. Долов, Валыков, В.Н. Василенко, Хохлачев, К.В. Арсентьев. В структуре партии имелся Исполнительный Комитет из 6 человек, которому подчинялся финансовый сектор, также состоявший из 6 человек. Основным контролирующим органом был разведывательный отдел во главе с С.И. Доловым, который одновременно возглавлял самую крупную Харбинскую организацию. В партии имелся агитационный отдел, который возглавлял

---

<sup>14</sup> Базаров Б.В. Генерал-лейтенант Маньчжоу-Го Уржин Гармаев // Историческое, культурное и природное наследие (Состояние, проблемы, трансляция). Выпуск II. Улан-Удэ: 1997. С.53; он же. генерал-лейтенант Маньчжоу-Го Уржин Гармаев. Улан-Удэ, 1999.

<sup>15</sup> Райх В. Психология масс и фашизм. СПб., 1997. С.13.



лично К.В. Родзаевский. Отдел отличался наибольшей мобильностью и реагировал практически на все происходившие события как в Маньчжурии, так и за ее пределами. Пропаганда велась через средства массовой информации, принадлежавшие партии. Это – ежедневная газета “Наш путь” и еженедельное приложение к ней «Возрождение Азии», “Авангард”, ежемесячный журнал “Нация”. Партия имела и зарубежные издания: ежедневную «Русскую газету» (Сан-Пауло, Бразилия) и ежемесячную газету «Русь» (София, Болгария). В структуре партии имелись отдел дипломатических сношений и издательский отдел<sup>16</sup>.

В основе идеологии и деятельности русских фашистов в Маньчжурии были антикоммунизм, антисоветизм и антисемитизм. Причем, антисемитизм носил гипертрофированный, погромный характер (только в 1934 г. в фашистской прессе было опубликовано 835 статей антисемитской и антимасонской направленности), что отталкивало от фашистов большинство русской эмиграции. Основные задачи партии – осуществление национальной революции в России, свержение советской власти, установление фашистской диктатуры. Эти задачи были сформулированы в программных документах партии, принадлежащих перу В.К. Родзаевского: «Монархия или республика», «Наше оружие», «Формы борьбы», «Фашистское мировоззрение», «Тактика В.Ф.П.», «Лицом к России», «Государство Российской нации» и др.<sup>17</sup>

Особо важное значение фашисты предавали национальному вопросу. Они не принимали интернационализм Коминтерна, который воспринимался ими как «презрение к России и русским». У В.К. Родзаевского было собственное видение «российской нации», для создания которой русские фашисты проводили активную работу в Маньчжурии. С одной стороны – это борьба с национальным сепаратизмом в эмигрантской среде, а с другой – создание национальных секций в партии (армянский, грузинский и украинский «очаги» в Харбине, мусульманский «очаг» в Хайларе и т.д.)<sup>18</sup>.

В архиве УФСБ РФ по РБ имеются многочисленные аналитические записки информаторов из числа самих эмигрантов, в которых были даны емкие характеристики лидеров русского фашизма.

В числе лидеров особенно выделялся К.В. Родзаевский. Он получил высшее образование в Харбине. Под влиянием фашизма в Италии и Германии именно он создает Союз фашистов-синдикалистов, который вскоре преобразует в партию. К нему тянулись различные слои русской эмиграции

---

<sup>16</sup> Архив УФСБ РФ по РБ, ф.2, оп.1, д.4, л.29.

<sup>17</sup> Аблова Н.Е. Указ. соч. С. 223.

<sup>18</sup> Там же. С. 224.

рабочие, учителя, студенты, журналисты, коммерсанты. К.В. Родзаевского отличала такая черта как бонапартизм. Он любил преклонение и рекламу; был честолюбив, напорист, гибок, для достижения поставленной цели не останавливался ни перед чем. Он не мог мириться с тем, что враги русского национализма и русской государственности “растоптали” такие идеалы русского народа как христианство и славянство. Окружавшим его imponировала искренняя ненависть К.В. Родзаевского к коммунистам, евреям и масонам. Но при этом он был абсолютно чистоплотен в денежных вопросах и, по сравнению с другими вождями русской эмиграции, честен. Его нельзя было подкупить и привлечь к какой-либо сомнительной комбинации, где могла бы проявиться его материальная заинтересованность<sup>19</sup>. На наш взгляд, успех и популярность лидера были во многом основаны на восприятии “исторической миссии вождя” его сторонниками. И нет сомнения в том, что если бы русский фашизм развивался в иных условиях, то мы имели бы блестящее подтверждение концепции Макса Вебера о “харизматической власти”.

Другие руководители, из которых:

М.А. Матковский - ближайший соратник К.В. Родзаевского. Человек сильной воли, честен в денежных отношениях, хороший оратор, работоспособен, предан делу ВФП. С его мнением считались в Верховном Совете. Он возглавлял дипломатическое бюро партии и был признанным авторитетом в области административно-организационной деятельности.

А.А. Кормилов - редактор газеты “Наш путь”. Владел французским, немецким, польским языками. Служил в военных заграничных агентствах Российской империи, был женат на дочери князя Кудашева, бывшего русского посла в Пекине, ранее редактировал ряд эмигрантских газет, был замешан в денежных махинациях.

В.Н. Василенко - финансовый директор партии. Имел среднее образование, бухгалтер, близкий друг К.В. Родзаевского. Несмотря на свою молодость (24 года) - это ярко выраженный тип фашиста. В его руках были сосредоточены все финансовые средства партии, русского клуба, газеты “Наш путь”. Вели скромный образ жизни и был до щепетильности честен.

Хохлачев - ближайший помощник В.Н. Василенко, слепой исполнитель его воли. Ему поручалась финансовая отчетность и ведение кассы.

Одновременно с этим он исполнял обязанности технического секретаря (канцелярская работа) по Дальневосточному сектору. Скромен, честен, слабо развит в политическом отношении.

---

<sup>19</sup> Там же, лл. 30-31.

А.Ф. Коновалов - секретарь Дальневосточного сектора партии. Был близок к М.А. Матковскому. В политическом отношении бездарен, глуп, хитер, не прочь «погреть руки». При этом предан делу партии. Участник Первой мировой и гражданской войн. На Восток пришел с армией Каппеля. В последние годы служил в отделе материального снабжения, где был замечен в нарушениях финансовой дисциплины. По работе близко соприкасался с С.И. Доловым.

С.И. Долов - офицер, участник двух войн, начальник Харбинского отделения ВФП, начальник разведслужбы партии, член Верховного совета, предан белому движению, но по мнению информатора в фашистском движении являлся «попутчиком». В разведработе не был профессионалом и потому деятельность его была бессистемна, не имел картотеки, не владел информацией о членах партии. Систематические чистки партии (1933, 1934 гг.), проводившиеся по его инициативе, нанесли существенный вред партии.

К.В. Арсентьев - военнотружущий телефонной станции. Вел корреспонденцию партии и осуществлял связь с иногородними отделениями ВФП. Партии предан. Мало развит, глуповат по натуре, но честен. Старый член партии, вел дела тщательно, систематически, пользовался доверием К.В. Родзаевского, М.А. Матковского.

Семена - 27 лет. Ведал всей партийной связью. Руководимый им отдел работал бесперебойно.

В.В. Высоккий - малообразован, не развит, нечистоплотен в денежных отношениях. Под руководством В.Н. Василенко вел кассу газеты «Наш путь», представитель Союза торгово-промышленных служащих. Хам, выдвинулся случайно, пресмыкается перед сильным. В пьяном виде хвастался своим положением, допускал выражения, порочащие партию. Не пользовался уважением среди фашистов. Во многом способствовал появлению «трещины» во взаимоотношениях харбинских купцов и русской фашистской партии<sup>20</sup>. Фашистская партия самым тесным образом сотрудничала с японцами, безоговорочно выполняя все распоряжения Японской военной миссии (ЯВМ).

В конце 1934 г. лидеры партии попытались проявить самостоятельность в организационных вопросах. Это вызвало резкое охлаждение по отношению к ним промышленно-финансовых кругов, которые поддерживали фашистов. Кроме того, было спровоцировано нападение японской жандармерии на русский клуб, созданный фашистами. Клуб этот, по существу, представлял собой игорный притон, где русские фашисты прокручивали деньги партии и

---

<sup>20</sup> Там же, лл. 30-34.

одновременно осуществляли вербовку новых членов<sup>21</sup>. Во избежание непокорности как со стороны фашистов, так и со стороны других эмигрантских организаций в конце 1934 года ЯВМ создала "Бюро по делам российских эмигрантов в Маньчжурии" (БРЭМ) под руководством генерала В.А. Кислицина - сотрудника ЯВМ, объединившем более 50 эмигрантских организаций<sup>22</sup>. Первым заместителем генерала был назначен В.К. Родзаевский. Без участия сотрудников ЯВМ «Бюро» не могло провести ни одного собрания или совещания даже по вопросам не носившим политического характера. В качестве компенсации японская разведка гарантировала бюро от вмешательства в ее "внутренние" дела со стороны местных властей. По этому поводу имелась секретная инструкция "Предупреждение по вопросу обращения с белыми русскими", адресованная начальником Хайларского особого органа Суганаки Ициро начальнику полицейского управления Северо-Хинганской провинции: "По распоряжению властей руководство белыми русскими, включая также татар и евреев, полностью осуществляется особыми органами, ввиду чего все серьезные мероприятия в отношении белых русских, как аресты, содержание под стражей и т.д., могут осуществляться только после согласования этого вопроса с вверенным мне органом или его ближайшими отделениями"<sup>23</sup>.

В структуру «Бюро» входили военный, переселенческий, учетно-статистический, финансовый, культурно-просветительский и молодежно-воспитательный секторы. О весе и значении фашистской партии говорит тот факт, что с конца 1934 по 1942 годы "Культпросветом" заведовал В.К. Родзаевский, а разведку и контрразведку возглавлял член бюро фашистской партии М.А. Матковский<sup>24</sup>. Радикальные лозунги ВФП казались японцам более предпочтительными, чем лозунги монархистов для подготовки диверсантов, разведчиков и резервов для вооруженных отрядов из числа молодежи, которые в нужный момент можно было бы использовать в военных действиях против СССР.

Одним из филиалов русских фашистов стал Союз торгово-промышленников, созданный С.И. Долговым. Основная задача Союза -

---

<sup>21</sup> Там же, л. 70.

<sup>22</sup> Курас Л.В. Атаман Семенов и Японская военная миссия // Сибирь: Выпуск 4. Кемерово, 2002. С. 132.

<sup>23</sup> Кирмель Н. Белозэмиграция в Маньчжурии // Новости разведки и контрразведки. (Международная независимая газета о работе спецслужб). 1996. № 19. С.13.

<sup>24</sup> Архив ФСБ РФ. Особый фонд. Н-18765. Т. 1. Л.22-23.

прикрепление русских эмигрантов к земле в приграничном районе. Эта деятельность Союза вызывала протест со стороны эмиграции, которая была типично городской и потому оказалась неспособной к земледельческому труду. Что касается Трехречья, то там на землю осели казаки, выходцы из Забайкалья, которые переселялись сюда целыми станицами и этот факт не мог служить примером для остальной эмиграции. Между тем Союз торгово-промышленников различными методами осуществлял программу Фашистской партии и ЯВМ по созданию русских эмигрантских земледельческих артелей, которые, в случае начала военных действий, должны были быть преобразованы в партизанские отряды<sup>25</sup>. Так, в 1936 году под руководством японского офицера Судзуки был организован «Перый фашистский отряд спасения Родины», командиром которого стал бывший телохранитель В.К. Родзаевского М.П. Маслаков. С помощью японцев отряд был переброшен на территорию СССР в район станции Амазар, где вскоре был уничтожен войсками НКВД<sup>26</sup>. Опираясь на военный и переселенческий отделы «Бюро по делам российских эмигрантов в Маньчжурии», фашисты начинают формировать из разбросанных по всему Маньчжоу - Го казаков поселки и станицы, выдавать ссуды на обзаведение хозяйством, обеспечивать их оружием. В конце 1941 года на базе этих поселений был создан отдельный казачий корпус. Один из лидеров казачества и ближайший сподвижник К.В. Родзаевского генерал А.П. Бакшеев в своем приказе писал: «Ваши лампасы как у старых, так и у молодых станичников, указывают, что вы крепко храните традиции своих отцов и дедов и, как встарь, вы готовы на последнюю борьбу»<sup>27</sup>.

Важное место в деятельности фашистской организации занимала пропагандистская работа, которой руководил лично К.В. Родзаевский. Листовки и прокламации, выпускавшиеся сотнями тысяч экземпляров, затем распространялись на территории Забайкалья, Амурской области, Приморья. По своему содержанию листовки не отличались особым разнообразием. В них не было ничего кроме глубоко укоренившихся идеологических фобий и демагогических эскапад, призванных возбуждать в массах низменные инстинкты. Они клеймили еврейско-коммунистическую, масонскую власть и разъясняли сущность фашизма. При этом использовались пропагандистские клише о «чести нации» и «спасении священной семьи и расы».

---

<sup>25</sup> Курас Л.В. Харбинская белая эмиграция в освещении спецслужб СССР.// Из истории спецслужб Бурятии... С. 47.

<sup>26</sup> Онегина С. Указ. соч. С. 92-93.

<sup>27</sup> Архив УФСБ РФ по РБ, ф.2, оп.1, д.4, л.34.



В партии была хорошо поставлена лекционно - пропагандистская работа, в которой основную роль играли кандидат права В. Кибардин, профессор Носач-Носков, Иванов, М.А. Матковский, Лагунов, Дудукалов, Гранин. Лекции читались регулярно. Пропагандистская группа готовила развернутые обзоры - записки, которые обязаны были изучать все активисты партии. Для всех членов партии было подготовлено специальное издание под названием "Азбука фашизма" (сто вопросов и ответов), которое составили Г.Тараданов и В. Кибардин под редакцией К.В. Родзаевского<sup>28</sup>.

Руководители русских фашистов в Маньчжурии уделяли большое внимание работе среди всех слоев русской эмиграции, стремясь среди прочего объединить эмигрантов по профессиональному принципу. С этой целью в 1934 г. в Харбине был создан Союз национальных союзов, включивший в себя Общество служащих, Союз печатников, объединение оренбуржцев, Союз работников, Союз русских торгово-промышленников и Союз железнодорожников. Причем, последнему, в связи с предстоящей продажей КВЖД, Японская военная миссия уделяла особое внимание<sup>29</sup>.

В начале 30-х годов военный отдел партии был развит слабо по причине того, что высшее руководство ВФП еще не проявляло к нему должного внимания. Но уже тогда к работе в военном отделе начинают привлекаться крупные военные специалисты из числа офицеров бывшего Генерального штаба Российской империи. При газете каждые две недели готовились и публиковались военные аналитические записки. Тогда же начинают формироваться собственные вооруженные силы партии. Во главе «полков» были поставлены полковник Я.Я. Смирнов и полковник Цветков<sup>30</sup>.

Самой мощной составляющей партии был Дальневосточный сектор, во главе которого стоял М.А. Матковский, квалифицированный инженер, принявший маньчжурское гражданство, сын генерала Матковского, который в период Первой мировой войны командовал Омским военным округом. Дальневосточный сектор делился на несколько отделов, самым важным из которых был Ниппонский отдел во главе с Валыковым (находился в Йокогаме, имел очаги в Куба, Нагасаки и других городах Японии, где проживали русские эмигранты). Членов партии в Ниппон было не много, но пропаганду они вели весьма активно. Численность всех ячеек, включая молодежный и женский отделы составляла 200 человек<sup>31</sup>.

---

<sup>28</sup> Азбука фашизма // Звезда и свастика. М., 1994. С. 191-270

<sup>29</sup> Аблова Н.Е. Указ. соч. С. 225.

<sup>30</sup> Курас Л.В. Всероссийская фашистская партия... С. 146.

<sup>31</sup> Архив УФСБ РФ по РБ, ф.2, оп.1, д.4, л.36.

Самый активный отдел располагался в Харбине, где зародилось ядро партии. Харбинский отдел в свою очередь делился на следующие районы: Модягоусский, который включал старый Харбин, Алексеевку, Новгородный с корпусным и госпитальным городками, Пристанский и Чинхайский районы, а также Затон. В Затонах Харбина существовало несколько очагов. Самый многочисленный среди них состоял из служащих судоходства, где все эмигранты входили в состав фашистской партии (200 человек). Численность организации в районе составляла 1000-1200 человек; Синьцзинский район - 200 человек; Ашихадский (к нему тяготел район СМЖД) - 250-300 человек; Цицикарский, Хайларский, Бухэдинский районы - 250-400 человек всех вместе. Дальневосточному сектору были подчинены Тяньцзин, Шанхай, Пекин, остров Ява, где находилось не менее 1000 фашистов. Кроме того, у Дальневосточного сектора имелись секретные очаги, численность которых советская разведка установить не могла. Партия имела много сочувствующих, в том числе и из числа рабочих - железнодорожников, которые в силу объективных обстоятельств не могли вступить в ряды партии, но их со всей определенностью можно отнести к числу фашистских активистов.

Всего Дальневосточный сектор насчитывал в своих рядах, включая взрослых, детей, юношество и женщин 3000 членов и кандидатов в члены партии. В секторе была сосредоточена касса сектора и издательства, а также основной фонд антикоммунистической борьбы. Здесь же был расположен ЦИК партии. По мере необходимости собирался Верховный совет. В результате внешнеполитической деятельности русских фашистов произошло объединение с американскими фашистами Ронсяцкого, что резко усилило работу партии и укрепило ее международные связи. В этот период начинаются политические трения между руководством партии в лице Родзаевского, Дудукалова и Кормилова и руководством хозяйственно - финансовой части в лице Матковского и Василенко за лидерство в партии.

Дальневосточный сектор включал в себя и отдел по линии Северо-Маньчжурской железной дороги (СМЖД), в который входило несколько очагов в Мукдене во главе с Саркинечем, Дайрене, Синтьзяне, Куаньченцзы и на станциях по линии железной дороги, где насчитывалось 300 членов партии; в Тяньцзине - 80 человек; в Шанхае - организация во главе с Галицким (близок к К.В. Родзаевскому), Волгиным-Краснопевским и Кадошниковым (возглавляли отдельные группы) насчитывалось 240-300

человек; в Ботсване на острове Суматра (Голандская Восточная Индия) - 70 колонистов<sup>32</sup>.

В середине 30-х годов движение фашизма получило развитие в русской колонии провинции Синцзин (китайский Туркестан), но связей с центром оно не имело, что было обусловлено событиями на севере Китая и потому развивалось нелегально. Организация состояла из остатков казачьих частей атамана Дутова.

Для пропаганды идей фашизма и чтения лекций в Шанхай и на Суматру были командированы Дудукалов и профессор Носач-Носков.

К Дальневосточному сектору относились и очаги на западной линии станции Маньчжурия, состав которой - казачество. В Хайларе имелось два очага, причем один из них был мусульманским (татарский).

Вблизи от станции Будэху на лесных концессиях среди русских рабочих была сильная заинтересованность идеями фашизма. Тяжелые условия труда, связанные с ручным производством, отсутствие социальных гарантий, низкий уровень жизни составили ту психологическую основу, на которую в данном случае опирались фашисты.

На восточной линии СМЖД в Дальневосточный сектор входил Ашихейский район, в котором насчитывалось 100 фашистов. В организации существовал отдел женского фашистского движения, отдел авангардистов (юношества) и фашистских крошек-девочек (руководитель Дунаев). В противовес коммунистам фашисты создали русский клуб, который посещали не только фашисты и эмигранты, но и советские представители. Имелся небольшой очаг в Эрцендянцзы - 16-20 человек, Имяньпо, станции Яблоня и концессии Кондо. Вообще в этом районе движение к середине 30-х годов только начало разворачиваться, так как там имелся сдерживающий фактор - боязнь коммунистов и хунхузов.

До вступления японцев в Маньчжурию руководитель Японской военной миссии Комацубара прочил на пост лидера всей русской эмиграции бывшего русского консула и директора педагогического института в Маньчжурии Хионина. С созданием Маньчжоу - Го ЯВМ возглавил Акикуса, который сделал ставку на атамана Г. Семенова, русских фашистов и забайкальских казаков. Кандидатуру Г.М. Семенова поддержали крупные промышленники, которые снабжали его денежными средствами и некоторые военные группировки и эмигрантские организации, включая фашистов.

К середине 30-х годов военную партию в Японии возглавил генерал Араки, который был сторонником скорейшего военного столкновения с СССР, считая, что соотношение сил к этому времени для Японии сложилось

---

<sup>32</sup> Там же. Лл. 37-38.

наиболее благоприятно. Этой ситуации способствовало и то, что командующий Особым Дальневосточным военным округом В.К. Блюхер вел активную подготовку к отражению возможной агрессии со стороны Японии. Эту деятельность генерал Араки рассчитывал преподнести всему миру как подготовку к нападению на Японию или Маньчжоу - Го33. В этот период ЯВМ действует в нескольких направлениях: 1) подготовка тщательной разведки через агентов всех эмигрантских организаций качества дорог, переправ, наличия колодцев в Монголии, Трехречье и районе от границы СССР до Читы. Разведкой занимались ЯВМ и телеграфное агентство Ничиро-Цусин, используя для этого монголов, бурят, казачье население Трехречья34; 2) создание специального комитета, в который вошли представители Второго отдела штаба Квантунской армии, японского посольства, Управления главнокомандующего ЮМЖД, призванных обследовать Внешнюю Монголию и важнейшие пункты Сибири и Дальнего Востока. В их числе: Камчатка, Сахалин, Дальневосточный край, Восточно-Сибирский край, Бурят-Монголия, Якутия, Ойротия, Хакасская область и район Турксиба; 3) консолидация всех сил эмиграции под руководством атамана Г. Семенова. О серьезности этих намерений говорит тот факт, что председатель Верховного совета русских фашистов Вонсяцкий, по согласованию с ЯВМ, был выведен из числа руководителей и исключен из партии за статью в редактируемом им журнале "Фашист", направленную против атамана Г. Семенова. По настоянию атамана Г. Семенова, генералов Сычева и Коробова уволили с должностей, которые они занимали в ЯВМ. Основной причиной такого шага была излишняя самостоятельность генералов, которые, будучи лидерами Восточно-казачьего Союза, не желали подчиняться атаману Г. Семенову. Сразу же стоит отметить, что в кругах белой эмиграции, не без согласования с японцами, обсуждался вопрос о создании в Забайкалье государства по образу Маньчжоу - Го и назначении его царем атамана Семенова35.

Окончательно Всероссийская фашистская партия сформировалась летом 1935 г. на III съезде фашистской партии (28 июля 1935 г., Харбин). На съезде были обсуждены и утверждены программа и устав партии, заслушан отчет ЦИК, осуществлены выборы центральных органов. На съезде присутствовали 48 делегатов, которые представляли организации русских фашистов Токио, Иокогамы, Киу-Сиу, Шанхая, Тяньцзиня, Явы, Персии, Сирии, Египта, Болгарии, Югославии, Польши, Эстонии, Финляндии,

---

33 Там же. Л. 39.

34 Там же. Лл. 73, 79.

35 Там же. Лл. 91-92.

Германии, Италии, Нью-Йорка и Сан-Франциско, Дайрена, Синьцзяна, Имяньпо, Аньда, Цицикара, Бухэду, Хайлара, Маньчжурии, Модягоу и Харбинских районных организаций. В качестве делегатов на съезде также присутствовали начальник канцелярии газеты "Наш путь" Крылов, редактор газеты Кормилов, члены агитбюро партии Ряжев и Карнаух, заведующий русским клубом Кузин, начальник хозяйственной части партии Никитин, заведующий фашистской перепиской Макаренко, начальник женского отдела партии Абаимова и ее помощник Охотина, начальник фашистских "крошек" Булыцева, начальник "авангарда" девочек Грудинская и начальник "авангарда" мальчиков Прокофьев<sup>36</sup>. Все решения съезда были согласованы с ЯВМ, а сама работа проходила в присутствии японских чиновников из состава комитета Квантунской армии.

На съезде был избран новый ЦК в составе: Генеральный секретарь - К.В. Родзаевский, начальник Дальневосточного сектора - М.А. Матковский, казначей - В.Н. Василенко, начальник канцелярии - А.Ф. Коновалов, военный министр - С.И. Долов, редактор газеты "Наш путь" - А.А. Кормилов, начальник агентурного отдела - Г. Тараданов, начальник хозяйственной части - Кузин. Согласно принятому уставу партия делилась на секторы (Дальневосточный, Ниппонский, Калифорнийский, Бразильский и другие), секторы - на отделы (Хайларский, Харбинский и др.), отделы - на районы, районы - на звенья, звенья - на очаги. Сам ЦК делился на 4 части: 1) общая часть во главе с А.Ф. Коноваловым, куда входили все канцелярские, технические и хозяйственные работы; 2) оперативная часть во главе с К.В. Родзаевским, куда входили отделы агитационный и сопартийных организаций (фашисты тесно сотрудничали с легитимистами, Народно-монархическим союзом и Дальневосточным казачьим союзом), организации клубов культурно-просветительной работы и сбора средств; 3) особая часть под руководством С.И. Долова, куда входили отделы разведки и контрразведки; 4) часть связи под руководством С. Метелицкого. Метелицкий одновременно стоял во главе штаба Харбинского отделения русских фашистов и сразу же после съезда был командирован в Америку для установления более тесных контактов с американскими фашистами и пресечения работы бывшего председателя ВФП и его сторонников<sup>37</sup>.

Все фашисты из числа служащих КВЖД были выделены в специальный железнодорожный отдел под руководством В.В. Высоцкого, который прибыл в Маньчжурию вместе с отступавшими частями белой армии. До 1931 г. он состоял в организации "крестonosцев". В фашистскую партию вступил в 1931

---

<sup>36</sup> Там же. Л. 92

<sup>37</sup> Там же. Лл. 92, 93.



г. и в течение двух лет был в составе конвоя К.В. Родзаевского. Через год возглавил террористическую группу, где одновременно был и казначеем. За растрату был смещен с занимаемой должности и назначен заведующим хозяйственной частью журнала "Наци".

В начале августа 1935 г. в Харбине состоялось три совещания фашистов, повестка которых шла в развитии решений III съезда партии и полностью соответствовала тем планам, которые вынашивал специальный комитет, созданный в сентябре 1934 г. при Квантунской армии. На совещаниях рассматривались вопросы об отправке на советскую территорию групп разведчиков-террористов во главе с Ключининым. О важности принимавшихся решений говорит тот факт, что на всех совещаниях присутствовало руководство фашистской партии в лице К.В. Родзаевского, С.И. Долова, М.А. Матковского, К.В. Арсентьева и доктора Носач - Носкова. На всех совещаниях присутствовали и представители Японской военной миссии. Перед группами террористов-разведчиков были поставлены совершенно конкретные задачи:

- 1) провести заброс групп в район Кузбасса и Урала, где требовалось осуществить вербовку;
- 2) восстановить старые связи с агентами, законсервированными после отступления армии адмирала А.В. Колчака;
- 3) собрать стратегические сведения в районе Кузбасса и Урала, а также обследовать состояние аэродромов и авиационного парка в Приморье;
- 4) выявить возможности организации антисоветских беспорядков, вредительства, вооруженных восстаний<sup>38</sup>.

Следует отметить, что японцы не очень доверяли белой эмиграции.

Достаточно отметить, что в середине ноября 1934 г. из Токио от Генерального штаба через японского консула в Маньчжоу - Го был получен приказ, адресованный японскому пограничному политическому отряду, в котором предлагалось через систему собственной агентуры осуществить тщательную разведку в Монголии (население, количество юрт в разных районах страны, численность стада овец, наличие колодцев, качество дорог в направлении Акши и Кунгура), Трехречья (дороги к границам СССР, их проходимость для войск, ширина, глубина и скорость течения реки Аргунь против тех мест, в которые упирались дороги), район от государственной границы СССР до Читы. Этот приказ обсуждался на совещаниях ЯВМ, специального комитета Квантунской армии, где рассматривались возможные пограничные пункты, через которые должна была в будущем осуществляться

---

<sup>38</sup> Курас Л.В. Кузбасс в милитаристских планах Японии // Кемеровской области 55 лет. - Кемерово, 1998.

военная провокация. В числе таких пунктов назывались Спаск и другие. Одновременно с этим погранполитотряд получил задание разыскать бурят, хорошо знающих Баргу. Погранполитотряд заготовил 40 ордеров на арест конкретных лиц и, прежде всего, начальников станций, дорожных мастеров на КВЖД, учителей бывших советских школ. В качестве возможного обвинения выдвигалось два варианта: либо агенты советской разведки, либо подрывники и члены боевой дружины. При этом русские эмигранты, в том числе и фашисты, были полностью отстранены от этой работы<sup>39</sup>.

После нападения фашистской Германии на СССР положение русских фашистов Маньчжурии серьезно осложнилось. Стараясь не осложнять обстановку, японские власти ужесточили контроль за деятельностью русских фашистов, а 1 июля 1943 года японская администрация без объяснения причин запретила Русский фашистский союз, который вскоре был переименован в Союз национально-трудовой России<sup>40</sup>.

После поражения фашистской Германии и начала подготовки военных действий на Дальнем Востоке лидеры русской эмиграции в Маньчжурии начинают всерьез задумываться о собственной судьбе. Так, 6 июля 1945 года Г.М. Семенов пишет письма на имя премьер-министра Великобритании Клементы Этли, президента США Гарри Трумена, и главы гоминдановского режима в Китае генералиссимуса Чан-Кайши, в которых предстает как «поборник мира, всеобщей безопасности и благополучия» и выдвигает собственное видение послевоенного мироустройства<sup>41</sup>.

После вступления Красной Армии Таким образом, Всероссийская фашистская партия совместно с другими эмигрантскими организациями активно осуществляла военно-разведывательную, агентурно-политическую и агитационно-пропагандистскую работу, направленную против СССР и Монголии. Одновременно с этим она постоянно рекрутировала в свои ряды все новых и новых членов, создавала новые территориальные организации и под присмотром и руководством Японии уже к середине 30-х годов была готова совместно с Квантунской армией начать агрессию против СССР.

Конечно, лидеры русских фашистов в Маньчжурии, находясь на чужой территории в качестве эмигрантов, не могли создать полномасштабное диктаторское правление, что удалось сделать итальянским и германским

---

<sup>39</sup> Архив УФСБ РФ по РБ, ф.2, оп.1, д.4, л.73.

<sup>40</sup> Онегина С. Указ. соч. С. 93.

41

фашистам. Но, тем не менее, организация представляла серьезную политическую и военную опасность для СССР, а опора на милитаристскую Японию позволила фашистам быстро расправиться с той незначительной оппозицией, которая существовала в среде эмиграции и сделала эту опасность еще более реальной. В этих условиях четкая и профессиональная деятельность НКВД позволила советскому руководству быть в курсе агрессивных планов японских милитаристов, русских фашистов и всей белой эмиграции.

## Русские и японцы в Маньчжурии (30-е годы XX в.)

Н. И. Дубинина

История дальневосточной ветви российской эмиграции вызвала у отечественных историков в последнее десятилетие повышенный интерес, отмеченный появлением разнообразных и содержательных публикаций<sup>1</sup>. Вместе с тем ряд ее проблем пока не нашел убедительного освещения. В статье рассматриваются взаимоотношения русских и японцев в Маньчжурии в 30-е годы XX в. через призму взаимоотношений Бюро по делам российских эмигрантов (БРЭМ) и японской военной миссии (ЯВМ), выявляются их механизм и эволюция.

Оккупация в 1931 г. Северо-Восточных провинций Китая расценивалась в Японии как начало реализации военно-стратегических планов создания «сопроцветания Великой Восточной Азии», что «неизбежно предусматривало захват Сибири и советского Дальнего Востока»<sup>2</sup>. Оккупированной Маньчжурии, насчитывавшей в середине 30-х годов 34,2 млн. человек<sup>3</sup>, отводилась важная роль плацдарма в планировавшейся войне. С присущей японцам деловитостью командование Квантунской армии занялось «государственным и политическим строительством», в результате которого в Маньчжурии появилось несколько своеобразных структур. Прежде всего было провозглашено о создании государства Маньчжоу-Го (Маньчжоу Ди Го), во главе которого японцы поставили извлеченного из небытия бывшего китайского императора Пу-И. Под диктовку командующего Квантунской армией генерала Ходжоо он подписал тайное обязательство, согласно которому в правительстве империи государственный секретарь и помощники всех министров назначались и увольнялись командованием Квантунской армии. Японскому правительству позволялось содержать на территории Маньчжурии свою армию неограниченной численности, ему же передавались для эксплуатации все пути сообщения. В разработке ископаемых богатств, в развитии промышленности предусматривалось обязательное участие японского государственного и частного капитала в размере 50 процентов. В случае войны Маньчжоу-Го брала обязательство участвовать в военных действиях в качестве союзника Японии. Подписанный 15 августа 1933 г. японско-маньчжурский договор был тайно ратифицирован<sup>4</sup>. По замыслу японских военных властей провозглашение Великой Маньчжурской империи должно было успокоить мировую общественность и придать видимость легитимности нахождения на ее территории Квантунской армии.

Одновременно с марионеточным государством командование Квантунской армии в 1932 г. создало «общество согласия и мирного сотрудничества народов» – Кио-Ва-Кай, которое призвано было убедить подданных Маньчжурской империи в том, что «Ниппон и Маньчжоу-Го – оба государства связаны священным

союзом и духовно представляют собой одно тело»<sup>5</sup>. Антикоммунистическая направленность Кио-Ва-Кай носила откровенно воинствующий характер. Коминтерн и компартия объявлялись «заклятыми врагами мировой справедливости». Граждане Маньчжоу-Го «не должны допускать в страну ни слова красной пропаганды.., должны уничтожить коммунистов до последнего человека»<sup>6</sup>. При этом имелись в виду не только СССР, но и коммунисты Китая. Президентом организации являлся премьер-министр Маньчжоу-Го. Главный пост на правах высшего советника принадлежал командующему Квантунской армией. Был создан центральный штаб с отделами, подотделами и начальниками, штабы в губерниях, уездах и городах. Идеалом общества провозглашалось такое его состояние, когда вне этой организации не останется ни одного человека. Опираясь на это общество, японские военные власти установили полицейский надзор за населением империи, вели антикоммунистическую пропаганду, сделали шаг к реализации лозунга «Азия под одной крышей», разумеется, японской.

В Маньчжурии существовала еще одна категория населения, которая не могла не привлечь пристального внимания японских властей. Это были российские эмигранты, в отношении которых у японцев были самые серьезные намерения – использовать их в реализации своих широкомасштабных военно-стратегических планов.

В середине 30-х годов в Маньчжурии проживало 103 тыс. эмигрантов из России<sup>7</sup>. Часть их составляли старожилы, т. е. те, кто строил и обслуживал КВЖД до 1917 г. В основном они были благополучными, состоятельными людьми. После поражения Белого движения в Сибири и на Дальнем Востоке в Маньчжурию хлынула волна беженцев из России, судьба которых сложилась по-разному. Понижение социального и экономического статуса преобладающего большинства изгнанников, значительное сужение поля реализации общественной активности, груз прежних партийных пристрастий и другие факторы делали эмиграцию неспособной к консолидации. Существовало множество политических объединений, профессиональных, корпоративных, национальных, благотворительных и других организаций.

В отличие от российской эмиграции в странах Западной Европы в Маньчжурии существовала и такая категория выходцев из России, как советские граждане, которых насчитывалось 86 тыс. человек<sup>8</sup>. Они были заняты обслуживанием КВЖД, которая находилась до 1935 г. в паритетном владении СССР и Китая. Почти десятилетие в Харбине располагались советская администрация железной дороги, советские учреждения, где существовали большевистские партийные организации, отмечались советские праздники, велась советская пропаганда. Такая ситуация заставила японскую военную миссию принимать меры против расползания «коммунистической заразы».



Японская военная миссия в Харбине (в 1934 г. ей присваивается наименование главной) действовала испытанным способом. Начальник миссии генерал-майор Мититаро Комацубара предложил объединить российскую эмиграцию под эгидой специального органа, который формально был бы самостоятельным и решал проблемы россиян, а фактически целиком бы подчинялся ЯВМ. Под руководством майора Акигуса, сотрудника миссии, было проведено несколько совещаний с представителями таких влиятельных эмигрантских объединений, как «Союз казаков Дальнего Востока» (генерал А. П. Бакшеев), «Лигитимисты» (генерал В. Н. Кислицин), Русская фашистская партия (К. В. Родзаевский)<sup>9</sup>. На них были обсуждены устав будущей организации, ее название, кандидатуры руководителей. Для придания в глазах широких эмигрантских масс привлекательного облика организации было решено на должность председателя назначить лицо, не состоявшее в эмигрантских политических организациях. Предложение встать во главе создаваемого объединения принял генерал В. В. Рычков, который от имени группы эмигрантов возбудил ходатайство перед властями Маньчжоу-Го о разрешении организовать Бюро по делам российских эмигрантов. Преследуемые японцами военно-политические интересы остались за кулисами, а на сцене состоялось почти демократическое действо, сулившее эмигрантскому населению защиту и помощь. Указом министра внутренних дел Маньчжоу-Го от 28 декабря 1934 г. было разрешено открыть Бюро по делам российских эмигрантов. Одновременно был утвержден его устав, согласно которому Бюро являлось административным учреждением Маньчжурской империи. В его задачи входило руководство общественной деятельностью различных организаций и отдельных эмигрантов, защита их правовых и культурных интересов; согласование и урегулирование вопросов, возникавших между различными организациями и отдельными эмигрантами; представление правительственным органам проектов по вопросам улучшения жизни российской эмиграции и поддержание справедливых ходатайств групп и отдельных лиц; ведение статистического учета эмигрантского населения<sup>10</sup>.

С самого начала организационное построение БРЭМ было нацелено на создание централизованной чиновничье-бюрократической структуры. Во главе Бюро стоял председатель, в ведении которого находились совет и канцелярия. Аппарат состоял из 1-го отдела – секретного (переселенческого), начальник генерал А. П. Бакшеев; 2-го – культурно-просветительского, начальник К. В. Родзаевский; 3-го – административного («разведывательно-контрразведывательного»), начальник Н. Р. Граси; 4-го – хозяйственного, начальник М. Н. Гордеев (Гордеев и Граси к тому же члены «Дальневосточного союза казаков», руководимого Г. М. Семеновым). Канцелярию возглавил член Русской фашистской партии Я. Я. Смирнов. Бюро имело свои

штампы и печать на маньчжурском и русском языках. В уставе говорилось, что оно содержит средства, изыскиваемые среди русских эмигрантов. Ему предоставлялось право приобретения собственности, отчуждения и продажи ее, а также организации разного рода торгово-промышленных мероприятий<sup>11</sup>. Аппарат Бюро в основном формировался из служащих по рекомендации начальника Союза казаков Дальнего Востока атамана Г. М. Семенова.

Несмотря на усиленную пропаганду идеи о необходимости объединения и выгоды его для эмигрантского населения, создание БРЭМ встретило сопротивление. Бюро было вынуждено опубликовать в газетах извещение, что «отдельные лица и небольшие группировки, которые не желают признавать руководство со стороны Бюро, не зарегистрировались в нем, пытаясь скрыть свое прошлое»<sup>12</sup>. В следующем извещении его тон ужесточился и стал угрожающим. В нем говорилось, что БРЭМ принимает решительные меры к выявлению «провокаторов, шептунов и опасных болтунов», которые вносили в среду эмигрантов раскол и вражду. Население было оповещено о том, что оно вышло с представлением к «надлежащим властям о принятии самых строжайших мер воздействия» против «мерзких и опасных провокаторов и негодяев». Провокаторы «были выявлены, наказаны, многие постарались покинуть пределы империи»<sup>13</sup>. Для устрашения несогласных были проведены аресты «вредителей, шпионов и провокаторов», распространявших коммунистические идеи и сеявших советофильские настроения среди русских эмигрантов. Газета «Новости Востока», представлявшая «некое иностранное государство», была закрыта. Около 15 человек были обвинены в шпионаже и осуждены<sup>14</sup>.

Хотя тесная связь руководства БРЭМ с японской миссией держалась в секрете и камуфлировалась его отношениями с государственными службами Маньчжоу-Го, для интеллектуальной части российской эмиграции она была хорошо известна.

Помимо политических, корпоративных и профессиональных объединений Бюро взяло под свою опеку и национальные общества. Сложнее обстояло дело с военными и казачьими объединениями. Эта проблема была решена с помощью включения казачьих и военных начальников в руководящий состав Бюро. Вместе с тем военные и казачьи объединения, как и Русская фашистская партия (РФП), с которыми ЯВМ строила отношения напрямую, во многом действовали автономно.

Ввиду того, что часть трудящегося населения находилась вне каких-либо корпоративных объединений, Бюро задалось целью это положение исправить и инициировало оформление целого ряда корпоративных, профессиональных объединений с последующим их подчинением. Так, при союзе торгово-промышленных служащих была образована секция мастеровых и рабочих, где надлежало зарегистрироваться всем мастеровым и рабочим – из эмигрантов и

маньчжурских подданных русской национальности. Бюро обязало всех эмигрантов, трудившихся в речном судоходстве, обязательно зарегистрироваться в обществе Сунгарийских судоходцев. По его требованию оформились общество русского транспорта, союз служащих, союз печатников, союз работников искусства. Поскольку лица так называемых свободных профессий, в особенности артисты, не спешили входить в созданный союз, Бюро особо предупредило, что регистрация всех артистов обязательна, «уклонившиеся будут лишены выступлений на сцене»<sup>15</sup>.

Наряду с организациями и объединениями была проведена регистрация всего эмигрантского населения. Под эмигрантским населением понимались все лица, имевшие эмигрантский паспорт, а также те русские по национальной принадлежности в возрасте свыше 17 лет, которые имели китайские и Маньчжоу-Го паспорта<sup>16</sup>. Целями статистического учета эмигрантского населения, как объясняло Бюро, являлось выяснение степени обеспеченности его заработками, определение количества специалистов различных профессий, которые возможно использовать для поднятия экономики Маньчжурской империи, а также для выяснения политической и уголовной благонадежности всех эмигрантов<sup>17</sup>. Очевидно, в последнем и состоял главный интерес ЯВМ.

В октябре 1936 г. газеты сообщили, что регистрация российских эмигрантов закончена. Было зарегистрировано около 150 эмигрантских организаций, включавших церковно-общественные, корпоративные, национальные, благотворительные, культурно-просветительные, казачьи и другие объединения. Каждому зарегистрированному эмигранту выдавалась учетная карточка. Бюро намеревалось сноситься со всеми эмигрантами, взятыми на учет, при помощи особых уполномоченных, которые назначались во все учреждения и организации. Через них с эмигрантов «будет взиматься положенный однопроцентный сбор с месячного заработка»<sup>18</sup>. Возникла идея о введении общеэмигрантского значка. Но до воплощения этой одиозной идеи, вызвавшей негативную реакцию эмигрантов, дело тогда не дошло.

Оставалась еще одна большая категория населения, особо заинтересовавшая японские власти и не попавшая в списки БРЭМ, — молодежь. Организацией молодежи занимался самый молодой из брэмовских руководителей, энергичный и инициативный К. В. Родзаевский — лидер фашистской партии. На заседании Бюро был принят устав объединения российской молодежи, которое определялось как «национальный культурно-просветительский союз, учрежденный для объединения молодежи на основах религиозных, активного национализма, здорового русского быта и самодеятельности»<sup>19</sup>. По возрастному критерию было создано три молодежных объединения. Общее руководство всей работой с молодежью было возложено на начальника 2-го отдела Родзаевского под

контролем и высшим руководством президиума БРЭМ и неофициальным контролем ЯВМ.

Так, с помощью притягательного для россиян девиза «общими устремлениями к единой цели возрождения Родины, Великой России» в сравнительно короткий срок удалось формально объединить выходцев из России. Тем самым был создан надежный канал для тотального контроля японских властей за российскими эмигрантами и их рекрутирования для выполнения грязной работы – диверсий, террора на территории Приморья и Приамурья.

Почти за 10 лет существования Бюро было проведено несколько его реорганизаций. Первая последовала уже через 10 месяцев после его создания. Первый председатель БРЭМ 65-летний генерал В. В. Рычков в августе 1935 г. после продолжительной болезни скончался. Новым руководителем в статусе заместителя председателя был назначен 62-летний А. П. Бакшеев – генерал-лейтенант семеновского производства. Одновременно в организационную структуру Бюро были внесены некоторые изменения, число отделов увеличено до восьми. (Численность отделов затем не раз менялась.) В штаты Бюро вошло 85 человек, кроме того, нештатных служащих и секретных агентов насчитывался 131 человек. Брэмовский аппарат служащих год от года увеличивался. Если в Харбине число служащих в 1935 г. насчитывало 140 человек, то в марте 1936 г. их уже было 21520. По данным Д. Стефана, ежемесячные субсидии японской миссии БРЭМ составляли 3300 долларов<sup>21</sup>, часть их шла на оклады служащим. С целью повышения ответственности и дисциплинированности брэмовских служащих в 1937 г. им были выданы пронумерованные и закрепленные за каждым специальные значки для постоянного ношения на лацкане пиджака.

«Бюро «в пределах возможного» стремилось поддерживать отношения с 12 своими отделами на местах (Трехречье, Хайлар, Цицикар и т. д.) и их 20 представительствами. Созданные на местах японские военные миссии по существу подчинили себе все местные отделения и представительства БРЭМ.

В публикации С. Онегиной утверждалось, что официальный советник-японец появился при Бюро лишь в 1938 г.<sup>22</sup> Очевидно, это произошло гораздо раньше. Так, на заседании президиума в мае 1936 г. были заслушаны «указания советника Бюро господина капитана Оноучи относительно замеченных им недочетов в работе Бюро»<sup>23</sup>. Показательно принятое постановление: «предложить начальникам отделов в срочном порядке произвести обследование служащих отделов в отношении их политической благонадежности»<sup>24</sup>. Обзоры своей деятельности Бюро представляло в общество Кио-Ва-Кай. Начальник Харбинского его отдела господин Като являлся советником 2-го и 5-го отделов БРЭМ. Как подчеркивалось в одном из документов, «руководящий аппарат Бюро составлен из представителей различных, пользующихся доверием ниппонских военных кругов, эмигрантских группировок»<sup>25</sup>. Руководящий состав БРЭМ

полностью оправдывал это доверие, согласовывая с ЯВМ все свои решения и акции вплоть до частных вопросов – организации в Харбине танцевальных вечеров, гастролей, лотерей и т. д. Под бдительным контролем находились перемещения российских эмигрантов, которые в Бюро и ЯВМ получали разрешение на поездки. Японцы контролировали не только выезд из Харбина, но и приезд в город родственников харбинцев из других городов.

Очевидно, А. П. Бакшееву не удалось наладить дружную работу руководства Бюро. Происходили раздоры, имелись различные партийные пристрастия. В понимании стратегических интересов и задач все руководители были единомышленниками. При решении же тактических, оперативных и финансовых вопросов возникали трения, непонимание, споры. В марте 1938 г. он «по расстроенному здоровью покинул службу» в Бюро. Новым начальником был назначен генерал от кавалерии В. А. Кислицин, характеризовавшийся как блестящий боевой офицер Российской императорской армии, участник 3 войн, имевший боевые награды вплоть до ордена Св. Георгия и Георгиевского оружия. При этом он сохранил руководство Союзом военных, благодаря чему произошло более тесное взаимодействие административного гражданского учреждения – БРЭМ, с военными структурами российской эмиграции.

В ходе очередной реорганизации БРЭМ президиум был упразднен. У начальника появилось три заместителя – К. В. Родзаевский, Б. Н. Шепунов, М. Н. Гордеев, и три советника, являвшихся проводниками политики ЯВМ.

Анализ публикаций эмигрантских газет, в частности, газеты «Рупор» за 1936–1938 гг., позволяет проследить процесс выдвижения атамана Г. М. Семенова на роль «вождя эмиграции и единого эмигрантского центра». В конце 1937 г. БРЭМ выступил с официальным заявлением о признании своим вождем генерал-лейтенанта Семенова<sup>26</sup>. Не ради красного словца ниппонские друзья называли Семенова «русским самураем».

БРЭМ стало играть заглавную роль в организации антисоветской пропаганды среди выходцев из России. Пропагандистской работой непосредственно занимался 2-й информационно-агитационный отдел Бюро с подотделами – культурно-просветительным и спортивным. Все десять лет существования БРЭМ (1934–1945) отдел возглавлял молодой, энергичный К. В. Родзаевский (1907–1946). Чтобы придать антисоветской пропаганде всесторонний охват, он организовал «изучение СССР». С этой целью велась ежедневная запись информации хабаровского радио о положении в СССР и на советском Дальнем Востоке. Пристальное внимание уделялось знакомству с советской прессой. Газеты без проблем можно было приобретать в Харбине, пока советские служащие работали на КВЖД. После продажи СССР дороги (1935) и значительного сокращения советских граждан в Харбине приобретать газеты «Правда» и «Известия» стало несколько труднее. К анализу советской прессы удалось привлечь



лучшие силы – преподавателей харбинских вузов, юристов, историков, экономистов, военных, священнослужителей. Среди них были профессор Н. И. Никифоров, генерал В. А. Кислицин, присяжный поверенный В. Ф. Иванов и другие. В перечень проблем, которые подвергались изучению, входили: пятилетки и реконструкция промышленности, сельское хозяйство, техника и энергетика, финансы и внутренняя торговля, комсомол и компартия, Красная Армия и флот, литература и искусство, церковь, школа, рабочий вопрос, Коминтерн, работа СССР среди эмигрантов<sup>27</sup>. По существу, выделенные проблемы касались почти всех важнейших вопросов политики советского государства и жизни общества, что свидетельствовало о сравнительно серьезном подходе к знакомству с социально-политической жизнью в СССР. Результаты своего изучения аналитики регулярно докладывали широкой аудитории. В Механическом собрании г. Харбина доклады проходили под общим заголовком «Что происходит в СССР».

Бюро издавало еженедельную газету «Голос эмигранта» (редактор А. П. Вележаев) и ежемесячный журнал «Луч Азии» (редактор В. Ф. Тарасов). Отдел БРЭМ на станции Пограничное издавал свою еженедельную газету «На границе», которая предназначалась и для распространения среди жителей советского Дальнего Востока. К тому же в многочисленных харбинских газетах публиковались как аналитические статьи, так и краткая информация о событиях в Советском Союзе, особенно о жизни в Дальневосточном крае.

Пропагандистскую и агитационную работу К. В. Родзаевский вел напористо и во многом умело. Им готовились циркулярные письма и разнообразные информации, которые отправлялись в редакции газет и журналов Китая и западноевропейских стран. В 1935 году отдел подготовил 39 таких материалов, которые были опубликованы в харбинских газетах «Наш путь», «Харбинское время», «Заря», «Рупор», «Шанхайская звезда», в парижском «Возрождении», берлинском «Новом слове» и др.<sup>28</sup>

Явно претендуя на роль главного антисоветского идеолога русской эмиграции в Маньчжурии, К. В. Родзаевский выступал как ученый-государствовед, как теоретик русского фашизма, как публицист и пропагандист. Им были написаны: «Государство Российской нации», «Учение о нации», «Критика Советского государства», «Библиотека российского фашиста», «Что говорят о евреях цифры», «Краткая программа Русской фашистской партии», «Первый русский фашист – П. А. Столыпин», «Азбука фашизма»<sup>29</sup>.

Обладая бойким пером, Родзаевский написал множество брошюр и листовок под общим названием «Паровоз компартии приближается к крушению». Его статьи публиковались в фашистской газете «Наш путь», которую он редактировал, и в журнале «Нация», а также в «Ежемесячной сводке изучения СССР», печатавшейся на ротаторе<sup>30</sup>. Газета «Наш путь» выпускала несколько отдельных приложений: «Авангард», «Наша смена» были ориентированы на

молодежь, «Русский железнодорожник» предназначался служащим КВЖД<sup>31</sup>. На судебном процессе в Москве в августе 1946 г. Родзаевский признавался: «Я работал дни и ночи». Судя по опубликованному письму К. В. Родзаевского И. В. Сталину<sup>32</sup> и его же отчету о 20-летней антисоветской деятельности<sup>33</sup>, имевшим покаянный и саморазоблачительный характер, идеи русского фашизма представляли собой эклектическую мешанину воинствующего антисоветизма и откровенно националистических идей, реализация которых связывалась с победой Японии в войне против СССР. При этом в расчет была взята религиозность эмигрантского населения, недаром фашистским девизом было: «Бог. Нация. Труд».

Газеты Харбина давали обширную информацию о политических процессах и расстрелах в Москве. Когда стало известно о расстреле маршала М. Н. Тухачевского, газета «Рупор» опубликовала воспоминания тех, кому довелось с ним служить. Бывшие однополчане писали о Тухачевском как об исключительно храбром воине. Одновременно под крупным заголовком газета дала следующее сообщение о серьезной болезни Сталина: «Дни некоронованного владыки России сочтены. Тот, кто убивал, умирает»<sup>34</sup>. «Будем верить, что в этом году произойдут величайшие события в нашей когда-то великой стране и не застанут нас в разброде»<sup>35</sup>, — вселял надежду руководитель БРЭМ.

Поддерживая отношения с эмигрантскими центрами Западной Европы, Бюро получало информацию и передавало ее в газеты. Так, в 1937 г. харбинские газеты дали подробную информацию об одном из знаменитых процессов 30-х годов в Париже — над известной русской певицей Надеждой Плевицкой, обвиненной в участии в похищении руководителя РОВС (Русского общевоинского союза) генерала Е. К. Миллера. И хотя на суде не была доказана причастность НКВД к похищению, большинство эмигрантов не сомневалось в том, что это дело «длинных рук» НКВД.

Деятельность НКВД среди русской эмиграции требовала от ее лидеров повышенной бдительности и использовалась для нагнетения психоза шпиономании.

Между тем атмосферой агрессивного антисоветизма пользовались как японцы, так и уголовные элементы из числа русских эмигрантов. В любой момент с помощью маньчжурских государственных структур японцы могли обвинить слишком самостоятельного и удачливого русского предпринимателя в сочувствии Советам и отобрать у него фирму. Так, директор самой влиятельной торговой фирмы «Чурин и К0» Н. А. Касьянов был изобличен как агент Коминтерна, а фирмой завладели японцы<sup>36</sup>. Зачастую уголовные элементы из числа русских выдавали свои преступления за праведную борьбу против Советов. Убийцы С. Каспе — сына богатого харбинского ювелира, отказавшегося заплатить выкуп за его похищение, — заявили на судебном процессе, что они ярые сторонники

антисоветского движения и стремились для него добыть деньги. Маньчжурский суд оправдал убийц.

Японская военная миссия понуждала руководителей БРЭМ к взаимодействию с обществом Кио-Ва-Кай – «единственной идеологической, культурной, политической и практической организацией» в Маньчжурской империи<sup>37</sup>.

С помощью японских советников и советников Кио-Ва-Кай Бюро было втянуто в антикоминтерновскую пропаганду среди русских эмигрантов, усилившуюся во второй половине 30-х годов. Ежегодно, начиная с 1938 г., первого мая Бюро организовывало день антикоминтерна под следующими лозунгами: «Из Москвы – разрушение, из Токио – возрождение», «Ниппон и Маньчжоу-Го – оплот антикоминтерна», «Хочешь вернуть Россию – становись в ряды антикоминтерна» и т. п. В программу входило проведение во всех храмах Харбина панихиды по жертвам коммунистического террора, устройство антикоммунистической демонстрации, антикоминтерновского общеэмигрантского собрания, выпуск специальных антикоминтерновских газет на русском языке, расклейка соответствующего содержания плакатов и лозунгов, организация антикоминтерновских собраний в школах<sup>38</sup>. Пропаганда пыталась убедить русских эмигрантов, что их будущее связано с Японией, с ее победой в войне против СССР. Бюро выступило с инициативой о создании антикоминтерновского союза российской дальневосточной молодежи при Бюро по делам российских эмигрантов. Цель его состояла во всеобщем объединении «молодых эмигрантов и эмигрантов в возрасте от 17 до 35 лет для борьбы с Коминтерном в неразрывном союзе с ниппонцами и народами Маньчжоу-Го за освобождение Родины с Востока»<sup>39</sup>. Допуск русских эмигрантов в добровольческие дружины Кио-Ва-Кай представлялся как серьезный дружеский акт со стороны японцев, как почетное дело для эмигрантов из России.

Критика атеистической политики Коммунистической партии составляла одну из ведущих тем антисоветской пропаганды. Например, Е. Ярославский в 1937 г. в Москве выступил с докладом об антирелигиозной пропаганде в СССР. В Харбине в Механическом собрании немедленно был прочитан доклад «К чему привела потеря креста». Следует подчеркнуть, что вопросы перегибов и недомыслий в советской политике в отношении церкви и верующих, факты закрытия и разрушения храмов, репрессии против священнослужителей в антисоветской пропаганде являлись козырными картами.

В противоположность СССР в Маньчжурии церковно-общественная жизнь в 30-е годы переживала своеобразный подъем. Этому в немалой степени способствовало терпимое отношение японских властей к православию и верующим. Храмовые здания и церковно-приходские организации были освобождены от всяких налогов, повинностей и сборов. В Маньчжурии имелось около 50

самостоятельных православных приходов и три монастыря<sup>40</sup>. В самом крупном, массиве русского населения, состоявшего в основном из казаков и крестьян Забайкалья, – районе Трехречья – действовало 8 православных храмов, самый большой – казачий соборный храм в центре района Драгоценке. В Харбине насчитывалось 7 храмов, в том числе величественный Софийский храм. Все церковные приходы обслуживали вполне подготовленные к священному делу священнослужители. Имелось два духовно-учебных заведения – Богословский факультет и Духовная семинария. В Харбине много лет издавался журнал религиозно-нравственного содержания – «Хлеб небесный». В 1938 г. владыка Мелетий участвовал в Церковном соборе, проходившем в Югославии, который был уполномочен являться представителем архиерейского Синода для всего Востока Азии<sup>41</sup>.

Ратовавший за «развитие моральных устоев и культурных начал» в среде русских эмигрантов В. М. Тустановский позволил себе поворчать: «...должно быть, русская эмиграция шибко богата, раз строят несколько богатых и дорого стоящих церквей,.. при отсутствии каких-либо общежитий для престарелых, нищих и других бездомных живых существ»<sup>42</sup>.

Широкой массе русских эмигрантов православная вера помогла сохранить высокие чувства памяти о покинутой Родине, старой России, содействовала духовному единению русских изгоев. Особенно это проявлялось во время больших православных праздников, которые торжественно и многолюдно отмечались в Харбине и во всех русских поселениях. Вера в бога помогла многим русским изгнанникам пережить трудности, лишения и горести беженского существования, духовно сохранить себя. И не только. Как правило, православные храмы вели огромную благотворительную деятельность. При них для бедноты существовали приюты, бесплатные столовые, детские учреждения и т. д. В этом контексте становится очевидным, что СССР с идеологией и политикой воинствующего атеизма, приведшего к разрушению храмов, террору против священнослужителей, преследованию верующих, воспринимался православными в Маньчжурии как чужая безбожная страна.

Занятые поиском работы и средств к существованию русские эмигранты в целом индифферентно относились к антисоветской и антикоминтерновской пропаганде брэмовских руководителей. В сельских районах, где относительно благополучно проживали бывшие забайкальские и амурские крестьяне и казаки, фашистская и антикоминтерновская пропаганда была непонятной и чуждой. Один из функционеров фашистской партии, приехавший в Трехречье, докладывал: «Обеспеченность и известное благосостояние глубоко гнездит в этих людях безразличное отношение к вопросам, выходящим из рамок их житейского обихода. Молодежь заполняет свой праздничный досуг пьянством да драками»<sup>43</sup>. Следует признать, что, несмотря на большие усилия и значительные финансовые затраты,

антисоветская, антикоминтерновская прояпонская пропаганда среди русских эмигрантов оказалась малоэффективной. Она привлекла только часть молодежи. Реалии жизни свидетельствовали об усилении роли японцев во всех сферах общества. Вытеснение русских из торговли и промышленности, факты дискриминации выходцев из России не давали им надежды связывать обретение Родины с японцами. Состоятельные русские, особенно из числа интеллигенции, покинули Харбин, Маньчжоу-Го – азиатское военно-полицейское государство – и избрали новым местом жительства Австралию, Канаду, США и др. страны.

Иногда действия военных японских властей по отношению к русским эмигрантам носили настолько дискриминационный характер, что вынуждали брэмовское руководство принимать решительные шаги. Бюро встало на защиту своих соотечественников, когда по приказу ЯВМ у них были отобраны охотничьи ружья. Оно выступило против перевода соотечественников в подданство Маньчжоу-Го, против нелепой школьной реформы, за сохранение и развитие русской культуры. Под его руководством ежегодно отмечался общеэмигрантский праздник – День российской православной культуры, совпавший с днем Святого Владимира. Отмечались даты, связанные с историей России, рождением выдающихся представителей ее культуры. В такие дни устраивались вечера русской музыки, танца, спектакли по произведениям русских классиков. При участии Бюро в Харбине появились Симфоническое общество, Русская опера в Восточной Азии, балет.

Безусловно, БРЭМ был нацелен на оказание помощи выходцам из России, страдавшим на чужбине от безработицы, экономических лишений и полицейского произвола. Его благотворительный отдел стремился направлять работу по оказанию помощи нуждавшимся. Благотворительный фонд складывался из небольших денежных средств, получаемых от находившихся в распоряжении Бюро пристани и участка на берегу р. Сунгари, где находилась база водных видов спорта, а также за выполнение разного рода технических работ, составление планов и проектов построек, подряды на строительство. С целью сбора денег на благотворительные нужды проводились лотереи и вечера, иногда состоятельные люди жертвовали деньги на благотворительную помощь, выделяли деньги также японские и маньчжурские власти.

Средства благотворительного фонда БРЭМ шли на содержание 14 благотворительных организаций и учреждений, включая Дом милосердия, приют св. Ольги, Комитет помощи беженцам, Союз военных инвалидов и др. В 1935 г. больница памяти доктора В. А. Казем-Бека для бедных разместилась в специально выстроенном здании. За мизерную оплату в ней трудилось 15 врачей, в том числе три штатных. За один 1935 г. через амбулаторию прошло почти 41 тыс. человек, в том числе более четвертой части бесплатно, остальные за символическую плату. Фонд выплачивал стипендии обучавшимся в более чем 30 вузах, училищах и



школах, в том числе на юридическом факультете, в Институте св. Владимира, гимназии им. А. С. Пушкина, речном училище и др. Через Серафимовскую народную столовую и столовую Беженского комитета нуждавшимся раздавали хлеб, бесплатные обеды. Остро нуждавшиеся получали небольшую денежную помощь, пожертвованную одежду, обувь, учебники и т. д.

Конечно, помощь Бюро и благотворительных организаций касалась сравнительно небольшой части нуждавшихся в ней российских эмигрантов. Это признавалось в докладе начальника благотворительного отдела: «Та помощь, которая оказывается в настоящее время бедным русским эмигрантам,.. далеко не удовлетворяет всей той нужды, которая имеет место среди русской эмиграции. Нужда эта слишком велика и разнообразна... Большая часть бедных людей, жаждущих какой угодно работы и за какую угодно плату, принуждены влечить голодное существование, ютятся в сырых, полуподвальных квартирах»<sup>44</sup>.

Таким образом, политическое, правовое и экономическое положение россиян и японцев в Маньчжурии в 30-е годы было противоположным. Опираясь на Квантунскую армию, японцы чувствовали себя в Маньчжоу-Го хозяевами положения. В 1935 г. в Маньчжурии насчитывалось 150 тыс. японских граждан<sup>45</sup> и доля их постоянно росла, не считая дислоцированной здесь Квантунской армии. Согласно принятому правительством Японии в 1936 г. плану колонизации Маньчжурии, рассчитанному на 20 лет, предполагалось переселить сюда 5 млн. японцев<sup>46</sup>. Идеологическая установка на создание Великой Азии под одной крышей откровенно выражала претензии военных кругов Японии на господствующее положение в Азиатско-Тихоокеанском регионе. Ускоренными темпами внедряясь в экономическую сферу Маньчжоу-Го, к концу 1939 г. японский капитал имел 1086 акционерных компаний из 1324 существовавших в Маньчжурии<sup>47</sup>, т. е. 82 процента компаний принадлежало японскому капиталу. Извлекая крупные дивиденды, японцы направляли их на вооружение и увеличение численности Квантунской армии, готовившейся к победоносной войне против СССР, в котором они видели главное препятствие на пути реализации своих амбициозных планов.

Приход японцев на Северо-Восток Китая лишил выходцев из России – строителей КВЖД и города Харбина, стабильного высокого социального статуса, приблизив их к положению российских беженцев, оказавшихся в Маньчжурии после поражения Белого движения и находившихся там из милости сначала китайских, а затем и японских властей.

Следует подчеркнуть, что в сотрудничестве японских властей и руководства российской эмиграции были заинтересованы обе стороны. Интерес был сконцентрирован на подготовке к будущей войне Японии против СССР, в которой японцы рассчитывали на лояльное отношение находившихся в их тылу российских эмигрантов, на активное участие части русских военных и молодежи в боевых

действиях против Советов. В свою очередь брэмовское руководство, возможно и искренне, полагало, что победа Японии над СССР обеспечит русским беженцам возвращение на Родину, хотя бы в ограниченных территориальных рамках – на Дальний Восток и Сибирь. Однако эти планы руководства БРЭМ имели сравнительно ограниченную поддержку среди российских эмигрантов. Существовавшая политическая, правовая и экономическая дискриминация не позволяла нашим соотечественникам связывать с японцами надежды на обретение Родины. Ощущая свою обреченность в Маньчжурии, российские эмигранты покидали ее в поисках пристанища в других странах.

Преодолевать лишения беженского существования россиянам в Маньчжурии в значительной мере помогала деятельность Бюро по делам российских эмигрантов. Толерантное отношение японцев к православной вере, к церкви и верующим помогло эмигрантам сохранить духовные ценности и традиции старой России, которые ныне стали неотъемлемой частью общероссийской культуры и духовности.

---

<sup>1</sup> Аурилене, Е. Е. Российская эмиграция в Маньчжурии в 30–40-е годы XX века (на примере деятельности Бюро по делам российских эмигрантов в Маньчжурской империи): Автореферат дис.... канд. ист. наук / Е. Е. Аурилене.– Владивосток, 1996; Дубинина, Н. И. Об особенностях дальневосточной ветви российской эмиграции (на примере материалов Харбинского комитета помощи русским беженцам) / Н. И. Дубинина, Ю. Н. Ципкин // Отечественная история.– 1996.– № 1.– С. 70–84; Онегина, С. Бюро по делам российской эмиграции в Маньчжурии / С. Онегина // Проблемы Дальнего Востока.– 1996.– № 5.– С. 141–146; Россияне в Азиатско-Тихоокеанском регионе. Сотрудничество на рубеже веков: Материалы первой международной конференции.– Владивосток, 1999; Годы, люди, судьбы. История российской эмиграции в Китае: Материалы международной научной конференции, посвященной 100-летию г. Харбина и КВЖД.– М., 1998; Кочубей, О. И. Исход и возвращение... (Русская эмиграция в Китае в 20–40-е годы) / О. И. Кочубей, В. Ф. Печерица.– Владивосток, 1998; Печерица, В. Ф. Духовная культура русской эмиграции в Китае / В. Ф. Печерица.– Владивосток, 1998; Хисамутдинов, А. А. Российская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке: Библиографический словарь / А. А. Хисамутдинов.– Владивосток, 2000; Хисамутдинов, А. А. Следующая остановка – Китай... / А. А. Хисамутдинов.– Владивосток, 2003 и др.

<sup>2</sup> Рагинский, М. Ю. Международный процесс главных японских военных преступников / М. Ю. Рагинский, С. Я. Розенблит.– М.– Л., 1950.– С. 246.

- 
- <sup>3</sup> Первый торгово-промышленный указатель Маньчжоу-Ти-Го.– Харбин, 1935.– С. 40.
- <sup>4</sup> Лавренцев, А. Пять лет из жизни последнего императора / А. Лавренцев // Тихоокеанская звезда.– 1997.– 13 февраля.
- <sup>5</sup> Что такое Кио-Ва-Кай?– Харбин, 1935.– С. 8.
- <sup>6</sup> Там же. С. 12.
- <sup>7</sup> Первый торгово-промышленный указатель Маньчжоу-Ти-Го.– Харбин, 1935.– С. 40.
- <sup>8</sup> Там же.
- <sup>9</sup> Онегина, С. Бюро по делам российской эмиграции в Маньчжурии / С. Онегина // Проблемы Дальнего Востока.– 1996.– № 5.– С. 142.
- <sup>10</sup> Государственный архив Хабаровского края (ГАХК). Ф. 830. Оп. 1. Д. 1. Л. 2.
- <sup>11</sup> Там же. Л. 121.
- <sup>12</sup> Рупор, 1935, 15 августа. С. 3.
- <sup>13</sup> Рупор, 1935, 1 ноября. С. 3.
- <sup>14</sup> Рупор, 1935, 30 декабря. С. 3.
- <sup>15</sup> Рупор, 1936, 13 апреля. С. 3.
- <sup>16</sup> ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 1. Л. 4.
- <sup>17</sup> Там же. Л. 3.
- <sup>18</sup> Рупор, 1936, 25 октября. С. 7.
- <sup>19</sup> Рупор, 1936, 8 февраля. С. 1.
- <sup>20</sup> Кочубей, О. И. Исход и возвращение... (Русская эмиграция в Китае в 20–40-е годы) / О. И. Кочубей, В. Ф. Печерица.– Владивосток, 1998.– С. 90.
- <sup>21</sup> Стефан, Д. Русские фашисты. Трагедия и фарс в эмиграции 1925–1945 / Д. Стефан.– М., 1992.– С. 213.
- <sup>22</sup> Проблемы Дальнего Востока. 1996. № 5. С. 142.
- <sup>23</sup> ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 5. Л. 14.
- <sup>24</sup> Там же.
- <sup>25</sup> Там же. Л. 271.
- <sup>26</sup> Рупор, 1937, 19 декабря. С. 2.
- <sup>27</sup> ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 1. Л. 43.
- <sup>28</sup> Семеновский судебный процесс // Кентавр.– 1993.– № 6.– С. 92.
- <sup>29</sup> Родзаевский, К. В. Отчет о моей 20-летней антисоветской деятельности / К. В. Родзаевский // Кентавр.– 1993.– № 4.– С. 109.
- <sup>30</sup> Кочубей, О. И. Исход и возвращение... (Русская эмиграция в Китае в 20–40-е годы) / О. И. Кочубей, В. Ф. Печерица.– Владивосток, 1998.– С. 171.
- <sup>31</sup> Семеновский судебный процесс // Кентавр.– 1993.– № 6.– С. 84.
- <sup>32</sup> Письмо К. В. Родзаевского И. В. Сталину // Отечественная история.– 1992.– № 3.

- 
- <sup>33</sup> Кентавр. 1993. № 4.
- <sup>34</sup> Рупор, 1936, 10 октября. С. 1.
- <sup>35</sup> Рупор, 1936, 1 января. С. 3.
- <sup>36</sup> Стефан, Джон. Русские фашисты. Трагедия и фарс в эмиграции 1925–1945 / Джон Стефан.— М., 1992.— С. 213.
- <sup>37</sup> Что такое Кио-Ва-Кай?— Харбин, 1938.— С. 9.
- <sup>38</sup> ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 40. Лл. 109,110.
- <sup>39</sup> Там же. Л. 178.
- <sup>40</sup> Великая Маньчжурская империя. К десятилетнему юбилею. Издание государственной организации Кио-Ва-Кай и Главного Бюро по делам российских эмигрантов в Маньчжурской империи.— Харбин, 1942.— С. 325.
- <sup>41</sup> Там же. С. 329.
- <sup>42</sup> ГАХК. Ф. 830. Оп. 1. Д. 59. Л. 12.
- <sup>43</sup> Там же. Д. 13. Л. 65.
- <sup>44</sup> Русский фашизм в 30-е годы // Кентавр.— 1993.— № 5.— С. 113.
- <sup>45</sup> Первый торгово-промышленный указатель Маньчжоу-Ти-Го.— Харбин, 1935.— С. 40.
- <sup>46</sup> Маркизов, Л. Все остается людям / Л. Маркизов // Проблемы Дальнего Востока.— 1997.— № 4.— С. 120.
- <sup>47</sup> Там же..

## Японо-германские отношения в 30-е годы XX столетия: ретроспективный взгляд на проблему

В.М.Песков

30-е годы XX столетия занимают важное место в мировой истории. Развернувшиеся в этот период события в конечном счете привели к новому, еще более драматическому мировому конфликту, который и поныне негативно сказывается на взаимоотношениях ряда стран мира.

Противоречия в послевоенной капиталистической системе обострил жесточайший мировой экономический кризис 1929-1939 гг. и последовавшая затем длительная депрессия. Систематическая недогрузка производства, ограниченная емкость внутренних рынков вследствие высокой безработицы и невысокой покупательской способности предопределили важность для ведущих государств мира внешних рынков, которые к тому же сократились из-за выпадения России из орбиты мирового капиталистического хозяйства.

Экономический кризис подстегнул интерес мирового капитала к богатым сырьевыми и людскими ресурсами регионам Северо-Восточной, Юго-Восточной Азии и Тихоокеанского бассейна. Американские монополии, используя свою экономическую мощь, успешно теснили здесь европейских конкурентов. В то же время усиливающиеся экспансионистские устремления американского капитала наталкивались на встречный поток экспансии, шедшей из Японии. Мировой экономический кризис весьма тяжело сказался на развитии ее экономики. Производство различных отраслей промышленности упало на 30-70%. В 1930-1931 гг. обанкротилось и прекратило существование свыше 10 тысяч средних и мелких предприятий. Особенно серьезными были последствия кризиса в сфере внешней торговли. В 1930 г. японский экспорт упал на 31% по сравнению с 1929 г., а в 1931 - на 22% по сравнению с 1930 г.<sup>1)</sup> Выход из кризиса тогдашнее руководство Японии видело в подготовке очередной войны за расширение своих интересов в Азиатско-Тихоокеанском регионе и создания "Великой Азии" под ее протекторатом.

Правящие круги Японии решили прибегнуть к традиционному для них методу - недостаток экономических возможностей компенсировать военной силой. Причем основное внимание уделялось Северо-Восточному Китаю, который японские монополии хотели превратить в свою сырьевую базу, используя его в качестве стратегического плацдарма для дальнейшей экспансии. Для реализации подобных замыслов в июне 1927 г. штаб Квантунской армии представил правительству Японии план захвата северо-



восточных провинций Китая. Если же Китай, подчеркивалось в плане, воспротивится такому развитию событий, то вопрос будет решаться силой.

Подобные взгляды полностью разделял премьер-министр Танака и министр иностранных дел генерал Гиити, неоднократно подчеркивая "уникальность" связей Японии и Маньчжурии. 7 июля 1927 г. Танака изложил только что вступившему на престол императору Хирохито программу-максимум ("меморандум Танаки") японской внешней экспансии, предусматривавшей завоевание Китая, Индии, Центральной и Малой Азии. То есть меморандум предполагал поэтапную агрессию с целью передела Азиатско-Тихоокеанского региона в пользу Японии, и первым шагом ее было создание плацдарма в Маньчжурии и Монголии. Не был обойден вниманием и Советский Союз. "В программу нашего национального роста, - говорилось в "меморандуме", - входит необходимость вновь скрестить наши мечи с Россией на полях Монголии в целях овладения богатствами Северной Маньчжурии"<sup>2</sup>).

Экспансионистская политика правительства Танаки в отношении Юго-Восточной Азии была конкретизирована на Восточной конференции руководителей военного министерства, генерального штаба, командования Квантунской армии и видных японских дипломатов.

Японская программа экспансии и создания в конечном счете "Великой Азии" готовилась по всем направлениям: политическом, экономическом и идеологическом. В конце 20-х - начале 30-х годов в правящих кругах Японии не было больших разногласий по вопросу об этапах реализации обширной экспансионистской программы. Предполагалось, что на первом этапе сравнительно легко будет захвачен Северо-Восточный Китай, затем с этого плацдарма последуют военные походы против Монголии, всего Китая и Советского Союза.

К описываемым событиям внутриполитическая жизнь Японии сдвинулась резко вправо. Монополистический капитал нашел в военщине, одержимой самурайским фанатизмом, орудие экспансии, насилия и войны. В учебниках истории, общественно-политических публикациях широко популяризировались итоги войн, которые японцы вели в 1894, 1904, 1914 годах. В них утверждалось, что Япония должна каждые десять лет испытывать "благодетельный ветер войны" и что источником всех несчастий страны стало отсутствие военных действий. В основу идеологической обработки был положен антисоветизм и антикоммунизм. Так, в книге Аалкава Такахару "О современных идеях в армии", написанной в 1928 г., утверждалось, что поскольку армию невозможно оградить от идей социализма и коммунизма, постольку воспитатели армии должны "смело вступить в столкновение с Марксом и расправиться с коммунистами"<sup>3</sup>). В Японии развернулась широкая антисоветская кампания под лозунгом

защиты Маньчжурии "от большой угрозы". В июле 1931 г. в прессе было опубликовано выступление начальника бюро военных дел генерала Койсо, в котором он заявлял: "Русская угроза снова выросла, - выполнение пятилетки (в СССР - В.П.) создает серьезную угрозу Японии. ...Ввиду этого монголо-маньчжурская проблема требует быстрого и действенного решения"<sup>4</sup>). Антисоветская истерия усиленно подогревалась проправительственными средствами массовой информации. В частности, газета *Japan Times* прямо заявляла, что предстоящая "война между Японией и Россией может иметь один исход: закрепление японцев в качестве полных хозяев Сибири вплоть до горного хребта, который отделяет европейскую часть России от азиатской"<sup>5</sup>). Выступления подобного рода преследовали двоякую цель: подготовить общественное мнение страны и заверить западные державы, что острие экспансии будет направлено против СССР.

В связи с подготовкой к войне в первой половине 1931 г. японский генерал Харада посетил Европу для изучения обстановки. На обратном пути он остановился в Москве, где встретился с послом Хиротой и военным атташе Касахарой, которые просили Хараду передать в генеральный штаб, чтобы Япония "проводила решительную политику против Советской России и была готова в любую минуту начать войну с целью захвата Восточной Сибири"<sup>6</sup>). В марте 1931 г. Касахара писал в генштаб, что Япония должна продвинуться по крайней мере до озера Байкал и рассматривать дальневосточные провинции как часть собственной территории, с созданием здесь военных поселений на долгие годы. "Нам недостаточно разбить Советский Союз в бою, - подчеркивал Касахара. Нам нужно будет вести войну на сокрушение ..." <sup>7</sup>). Весной 1932 г. Ю. Касахара был переведен в генштаб японских войск, где занял пост начальника русского отдела второго управления.

Развертывая подготовку войны против Китая и СССР, японские экспансионисты внимательно отслеживали обстановку, складывающуюся в мире. Они понимали, что США и Великобритания не намерены открыто противостоять Японии. Учитывая то, что управляемый Гоминьданом Китай также не стремится встать всеми силами на пути японского продвижения вглубь Азии, в Токио приходили к выводу, что единственной силой, способной нарушить их планы, является Советский Союз, сумевший в чрезвычайно трудных условиях надежно укрепить оборону своих дальневосточных рубежей. Сознавая это, японская правящая верхушка искала в мире такие силы, которые могли бы отвлечь боевую мощь армии СССР. Поэтому приход к власти гитлеровцев в Германии рассматривался правящими кругами Японии как своего рода дар судьбы. Токио смотрел на нацистский Берлин с тайной надеждой, что тот в своем стремлении занять

господствующее положение в Европе сумеет приковать к себе вооруженные силы СССР, США, Англии и Франции, а это облегчит осуществление экспансионистских планов японских монополий.

Со своей стороны, нацистские стратеги видели в милитаризирующейся Японии потенциального союзника, способного создать против СССР второй фронт - на востоке, увеличить удельный вес Германии в Европе. Обоюдная "симпатия" двух мировых держав начинает обнаруживаться уже в 1933 г. Японо-германское сближение прогрессировало с каждым последующим годом, несмотря на то, что еще в Первой мировой войне обе державы воевали друг против друга и самурайский дух "стоявшей в центре мира" Японии не терпел конкурентов, а гитлеровская идеология считала желтую расу одной из низших рас человечества. Экспансионистские интересы японского и германского капитала сближали эти далеко расположенные друг от друга державы, как и расчет на взаимопомощь в осуществлении планов овладения миром. Правящие круги обеих стран были не прочь переделить английские и французские колониальные владения, как и территорию Советского Союза. Насилие, подавление внутренней оппозиции, самурайский дух и теория "избранного народа", вся внутренняя структура Германии и Японии предопределили их сближение.

И когда глава японской делегации в Лиге наций Мацуока 24 февраля 1933 г. покинул зал заседаний, символизируя тем самым выход Японии из этой международной организации, то он не поспешил вернуться на родину. Мацуока - теперь уже неофициально - посетил ряд европейских столиц. В начале марта новые хозяева Германии показали ему индустриальные комплексы "ИГ Фарбениндустри", Круппа и Симменса. 4 марта в немецкой прессе Мацуока назвал Германию "одной и единственной страной в истории, которая имеет столько параллелей с историческим путем Японии и которая также борется за признание своего места в глазах всего мира"<sup>8)</sup>. Мацуока был принят руководителями рейха.

В конце марта 1933 г. немецкие консулы в Маньчжурии получили из Берлина приказ тесно сотрудничать с японцами. Официальная газета нацистской партии "Фёлкишер беобахтер" 14 августа 1933 г., поддерживая японскую агрессию, писала: "Япония сто раз права, когда стремится играть особую роль в Восточной Азии". На Нюрнбергском процессе Риббентроп показал, что в 1933 г. Гитлер запрашивал его мнение о возможности союза с Японией на антисоветской основе<sup>9)</sup>.

В сентябре 1933 г., когда Квантунская армия продолжала захватывать Китай, гитлеровский идеолог А. Розенберг говорил на съезде нацистской партии в Нюрнберге: "Мы признаем закономерность развития желтой расы и желаем ей в пределах своего жизненного пространства создать такую

культуру, которая соответствовала бы ее духу"<sup>10</sup>). В январе 1934 г. в Японии вышел сборник речей нацистского фюрера со специальным "обращением автора к японскому народу", призывавшим крепить германо-японские связи.

Дипломатическое сближение двух стран ускорилось с назначением послом Германии в Токио Дирксена. Перед отбытием в японскую столицу его инструктировали Гинденбург, Гитлер и военный министр Бломберг. Последний дал понять, что цель Гитлера - установление тесных отношений с "Японией, которую он желает видеть военной союзницей"<sup>11</sup>). 9 февраля 1934 г. посольство США в Берлине сообщило своему госсекретарю, что германское министерство пропаганды обязало все немецкие газеты и журналы не публиковать статьи, неприятные японцам<sup>12</sup>). Обе страны установили регулярную радиосвязь, была создана германо-японская ассоциация. Президент палаты пэров Японии Токугава во время визита в Германию, обставленного с большой помпой, заявил, что "дружба между нашими могущественными странами будет еще более крепкой"<sup>13</sup>).

Началось сближение и по военной линии. Немецкий флот обращался за новейшими достижениями в области кораблестроения в первую очередь к Японии, а не к Англии. Германию особенно интересовала техника строительства авианосцев. Посол Дирксен с удовлетворением сообщал, что японцы, изменив прежней скрытности, дали чрезвычайно важные сведения немецким специалистам. В мае 1935 г. 70 японских офицеров были направлены в Германию "для службы связи". В июне-июле американский посол в Берлине сообщал, что, по его мнению, Гитлер в стремлении окружить Россию, решил заключить союз с Японией<sup>14</sup>). Чтобы как-то "сократить" географическую отдаленность, между Токио и Берлином устанавливается телефонная связь через страны южных морей.

В июне 1935 г. непосредственно встает вопрос о японо-германском военном союзе. Риббентроп, а затем и Гитлер, через военного атташе Японии генерала Осиму предложили заключить союз, направленный против СССР<sup>15</sup>). Отвечая на запрос Осимы, Токио послал в Берлин представителя генерального штаба Вакамацу. В декабре в германской столице в обстановке крайней секретности состоялась конференция, участниками которой были Осима, Вакамацу, Риббентроп и Бломберг. Японский эmissар довел до присутствующих мнение своего генштаба о желании заключить договор с Германией. Главные пункты его надлежало выработать и согласовать в первую очередь генеральным штабам обеих стран.

Так была заложена основа для заключения военного пакта Токио-Берлин. Но поскольку предполагаемое соглашение имело политическую направленность и подписание его не входило в компетенцию представителей японского генштаба, этот вопрос был передан на рассмотрение

правительства, и с 1936 г. переговорами стал ведать японский посол в Берлине Мусякодзи. 25 ноября 1936 г. Япония и Германия подписали пакт "Антикоминтерн", который состоял из текста договора и секретного соглашения. Опубликован был только текст, где говорилось о тесном сотрудничестве сторон против Коминтерна и участия в оборонительных мероприятиях, но заявлялось, что настоящее соглашение не направлено против какой-либо другой страны. Через год, 6 ноября 1937 г., к пакту присоединилась Италия. По оценке госсекретаря США К.Хэлла, "хотя этот пакт ... внешне был заключен для самообороны против коммунизма, фактически он являлся подготовительным шагом для дальнейших мер насильственной экспансии со стороны разбойничьих государств"<sup>16)</sup>.

Антисоветская направленность секретных приложений пакта была отражена в телеграмме посла Мусякодзи, согласованной с Риббентропом и направленной министру иностранных дел Японии Арита, где говорилось, что он "... твердо убежден в том, что только дух вышеупомянутого секретного соглашения будет решающим для будущей политики Германии в отношении СССР"<sup>17)</sup>. В свою очередь, Арита, выступая на заседании Тайного совета 25 ноября 1936 г., в следующих словах изложил цели пакта: "Отныне Советская Россия должна понимать, что ей приходится стоять лицом к лицу с Германией и Японией...". Антисоветской направленности не отрицал и Риббентроп, заявив, что "в самом деле, политическое давление на Советскую Россию, в той или иной степени, являлось основой этого пакта"<sup>18)</sup>.

Создавая японо-германский антисоветский блок, японские военно-политические круги стремились обеспечить ему поддержку со стороны европейских стран, граничивших с Советским Союзом. Зондируя для этого почву, посланник Японии в скандинавских странах Сиратори предлагал им "со всей решительностью" потребовать от СССР в качестве "минимальных" уступок разоружения Владивостока и чтобы Советский Союз "... не держал ни одного солдата в районе озера Байкал". С целью же уничтожения угрозы со стороны России навсегда, в перспективе рекомендовалось "... сделать ее слабой капиталистической республикой и строго контролировать ее естественные ресурсы"... "В настоящее время, - уверял посланник, - шансы для этого хороши"<sup>19)</sup>.

Видя, как германский фашизм набирает силу и добивается от великих держав одной уступки за другой, руководители Японии стремились ускорить "трансформацию" антикоминтерновского пакта в военно-политический союз с Германией и Италией. В то же время часть монополий Японии, тесно связанных с американским и английским капиталом, опасалась антиамериканского и антианглийского курса гитлеровской Германии и предлагала вести более осторожную политику в отношении США и



Великобритании. Однако и ее увлекла согласованная с руководителями фашистских государств в Европе идея войны против Советского Союза.

В связи с этим вся внутренняя и внешняя пропаганда Японии носила откровенно антисоветский характер. Пристально наблюдая за политикой и военными приготовлениями фашистской Германии в 1938 г., правительство Коноэ и военное командование Японии все более убеждались, что решающим сражением за "новый порядок" будет сражение между Германией и СССР, и поэтому считали, что японо-германский военный союз должен рассматриваться "как союз, направленный только против СССР"<sup>20</sup>). Именно с этих позиций и выступали участники совета пяти министров Японии 26 августа 1938 г., настаивая на ускорении переговоров о заключении военного союза с Германией. На этом заседании было высказано "желание японского правительства извлечь опыт из событий в Европе, усилить борьбу против происков Коммунистического Интернационала и его агентуры в духе требований антикоминтерновского пакта для Азии"<sup>21</sup>). Это был прямой намек руководителям Германии и Италии, что Япония подтверждает свою верность уже заключенному пакту, но "дух требований его" может быть усилен и к участию в выполнении таких требований Япония готова.

Правительство Коноэ считало, что оно еще до официального заключения японо-германско-итальянского военного союза уже выполняло свои обязательства в Китае, где борьба против гоминьдановской армии являлась одновременно борьбой против колониальных позиций США и Англии, а борьба против "коммунистических" войск - борьбой за установление "нового порядка" в Азии, за "создание плацдарма для решительного удара по позициям Коминтерна в Азии".

В начале января 1939 г. правительство Коноэ ушло в отставку. Пришедшее ему на смену правительство барона Хиранумы продолжало политику нагнетания антисоветизма и расширения экспансии в Китае. И при новом правительстве военный и военно-морской министры, начальники генеральных штабов армии и флота продолжали настойчиво требовать ускорения японо-германских переговоров о заключении военного союза, утверждая, что "Япония может рассчитывать на добровольный уход Англии, Франции и США, из Азии, тем более если взамен этого им будет обещана решительная позиция в отношении Советского Союза на Дальнем Востоке и китайских коммунистов. Японии в этом случае ничто не угрожает, даже если она согласится на принцип "открытых дверей" в Китае. Но эти двери должны быть открыты настолько, чтобы осталось преимущественное положение Японии в этом районе"<sup>22</sup>).

Однако в ходе японо-германских переговоров обнаружились серьезные противоречия. Фашистское правительство Германии не хотело предоставить

Японии монопольное право эксплуатации сырьевых и людских ресурсов оккупированного Китая, тем более всей Азии. Немецкий посол в Токио Отт говорил министру иностранных дел Японии Угаки: "На Германию ложится вся тяжесть борьбы против Франции, Англии и других держав - противников "нового порядка", колониальные владения этих стран находятся вдали от европейского континента, но они крайне важны для полного достижения наших целей"<sup>23</sup>). Посол дал понять японскому правительству, что рейх заинтересован в том, чтобы колониальные владения великих держав в Азии служили агрессии фашистских государств, и в первую очередь, Германии. Отт выражал позиции антияпонской группы немецких монополий и государственных деятелей, которые стремились получить высокие прибыли от торговли и поставок Китаю.

Однако фашистское руководство Германии отдавало себе отчет в том, что близость Японии к азиатским владениям великих держав, ее положение на Тихом океане, а также ставшие общими границы с советским Дальним Востоком создают ей предпочтительные позиции как военному союзнику. Это понимали и в Токио, предъявляя на переговорах требования убрать из Китая немецких генералов и офицеров (более 430 человек), служивших советниками и инструкторами в гоминьдановской армии, прекратить продажу оружия Чан Кайши, оказать Японии военно-техническую помощь в строительстве военно-воздушных сил, передать новейшие технические и технологические данные о строительстве наиболее современных по тому времени типов подводных лодок.

Трудности в переговорах с Германией, обострение положения внутри страны, поражение японской армии на Халхин Голе привели к падению правительства Хиранумы. Особую роль в этом сыграло поражение на Халхин Голе. Японские историки писали: "Поражение Квантунской армии в районе реки Халхин Гол научило даже чванливых, возомнивших о божественной роли Японии японских генералов уважать мощь Советского Союза"<sup>24</sup>).

Боевые действия на Халхин Голе оказали серьезное влияние на исход переговоров, которые проходили летом 1939 г. между СССР и Германией. Немецкая сторона в отличие от англо-французской могла оказать содействие в прекращении эскалации боевых действий на востоке. В противном случае перед Советским Союзом открывалась реальная перспектива войны на два фронта. С другой стороны, подписание пакта с Германией вызвало в Японии настоящий шок и усилило взаимное недоверие между союзниками по антикоминтерновскому пакту. Ведь в статье 2-й секретного соглашения, приложенного к пакту, было записано: "Высокие Договаривающиеся Стороны не будут заключать без взаимного соглашения никаких политических договоров с Союзом Советских Социалистических Республик,

которые не соответствуют духу настоящего соглашения". Поэтому уже 26 августа 1939 г. министр иностранных дел Арита поручил послу в Германии Осима заявить германскому руководству, что "японское правительство рассматривает пакт о ненападении и договор ... как противоречащие секретному соглашению ..."25).

И если Германии относительно легко удалось вовлечь в военный блок фашистскую Италию, то сделать это с Японией оказалось сложнее. Переход от антикоминтерновского пакта к открытому военному союзу затруднялся серьезными противоречиями, имевшими место между Германией и Японией. Нацисты, мечтавшие о мировом господстве, не могли допустить усиления мощи Японии за счет захвата территорий Китая и стран Юго-Восточной Азии, куда стремились монополии и военщина самой Германии. Гитлер называл японцев "желтыми дьяволами", которым "нельзя простить Шаньдун (Китай) и Марианские, Каролинские и Маршалловы острова в центре Тихого океана, захваченные Японией после поражения Германии в первой мировой войне и могущие стать форпостом рейха в океане"26).

Однако поскольку Германия была все же заинтересована в союзе с Японией, Гитлер, выступая в феврале 1938 г. в рейхстаге, объявил о признании Маньчжоу-Го и добавил: "Я не могу согласиться с теми политиками, которые думают, что они служат Европе, вредя Японии. Я боюсь, что поражение Японии в Восточной Азии никогда не будет выгодно Европе или Америке, а только большевистской России. Я не считаю Китай достаточно сильным (и духовно и материально), чтобы противостоять, опираясь только на свои ресурсы, любому нападению большевизма. В то же время я уверен, что даже величайшая победа Японии была бы несравненно менее опасна для цивилизации и мира в мире, чем любой успех, достигнутый большевизмом..."27).

В Японии большинство правительственного кабинета склонялось к тому, чтобы при создавшихся в Европе условиях воздержаться от заключения военного пакта, но в то же время формально укреплять антикоминтерновский блок. Именно такое компромиссное решение было принято правительством Хиранумы 20 мая 1939 г., санкционированное затем императором, 28).

Тем не менее фашистская Германия продолжала надеяться на создание военного союза с Японией. Выступая на совещании генералитета 23 мая 1939 г., Гитлер признавал: "Трудным вопросом является проблема Японии. Хотя в настоящее время она по различным причинам неохотно идет на сближение с нами, однако в ее собственных интересах заблаговременно выступить против России. ...если и в дальнейшем Россия будет действовать против нас, отношения с Японией могут стать более тесными"29).

Заключение военного союза между Германией и Японией затруднялось также из-за разного подхода руководства этих стран к вопросу о том, на кого напасть в первую очередь. Япония настаивала на немедленном совместном нападении на СССР и летом 1939 г. не хотела заключения союза, предусматривавшего войну в первую очередь против Англии, Франции, США. Фашистская Германия, неизменно рассматривая Советский Союз как своего главного врага, в тот момент считала для себя стратегически более выгодным нанести удар сначала против Англии и Франции.

Начавшаяся война в Европе прямо или косвенно втянула в свою орбиту все государства этого континента, имевшие колониальные владения в Азии и бассейне Тихого океана. Позиции Англии и Франции в колониях неизбежно ослабли, что не могло не сказаться на поведении правящих кругов Японии. 4 сентября 1939 г. японское правительство заявило о невмешательстве в войну в Европе, но еще с большей настойчивостью стало разрабатывать планы установления своего господства в Азии и на Тихом океане. Япония спешила воспользоваться успехами Германии в Европе, приведшими к созданию "силового вакуума" в Юго-Восточной Азии.

Объявив о "невмешательстве" в европейскую войну, японское руководство, тем не менее, поспешно возобновило переговоры с Германией и Италией о заключении тройственного союза, прерванные в августе 1939 г. после заключения германо-советского договора. Германия была также заинтересована в военном союзе с Японией, преследуя цели использования ее вооруженных сил для наступления на азиатские позиции Англии и Франции, чтобы отвлечь с европейского театра военных действий возможно большую часть сил своих противников. Подписание 27 декабря 1940 г. тройственного пакта явилось поворотным пунктом в международных отношениях того периода в Европе и Азии. Пакт способствовал консолидации агрессивных сил и был направлен как против Англии, Франции и США, так и против СССР.

Получив сведения о готовящемся плане нападения фашистского рейха на СССР, японское правительство после тщательного анализа соотношения сил и ресурсов Германии и Советского Союза заключило, что ее западный союзник вряд ли сможет в короткие сроки победить СССР. Поэтому высшие военно-политические круги Японии решили не рисковать, а подождать результатов планируемой германской агрессии. Императорская ставка готовила два варианта стратегического ведения войны: северный и южный. Очередность их ставилась в зависимость от результатов на европейском театре военных действий и международной обстановки. Осенью 1940 г. Япония, помня печальный опыт Халхин Гола, считала, что ее войска пока еще не готовы к сражениям с советскими вооруженными силами. Еще в

октябре 1939 г. премьер японского правительства Коноэ признавался послу Германии Отту, что Японии потребуется еще 2 года, чтобы достигнуть уровня техники, вооружения и механизации, который показала советская армия в боях у реки Халхин Гол.

После долгих дипломатических проволочек японский посол в Москве Того (бывший начальник бюро европейско-американских дел МИДа) в июле 1940 г. от имени японского правительства предложил Советскому Союзу начать переговоры о заключении пакта о нейтралитете. Переговоры настолько затянулись, что в ходе их произошла смена японских послов. Новый посол генерал Татэкава в октябре 1940 г. выдвинул уже другое предложение: заключить пакт о ненападении, аналогичный пакту 1939 г., подписанному СССР и Германией.

Переговоры между Москвой и Токио возобновились 24 марта 1941 г. К этому времени Германия вела активную переброску своих войск к советской границе. Тревожные сведения, поступавшие в советские наркомат обороны, генштаб и наркомат иностранных дел, свидетельствовали о непосредственной угрозе германской агрессии, что не могло не отразиться на переговорном процессе. Глава японской делегации Ё.Мацуока вновь предложил подписать соглашение о ненападении и решить вопрос о продаже Японии Северного Сахалина. Советское руководство, представленное на переговорах И.Сталиным и В.Молотовым, в тот момент полагало, что договор о нейтралитете с международно-правовой точки зрения свяжет Японию в отношении СССР в сравнительно большей степени, чем договор о ненападении и вызовет определенные трения между странами "оси Рим-Берлин-Токио".

Первый тур переговоров не принес результатов, и для прояснения обстановки и зондажа германской позиции 27 марта Мацуока выехал в Берлин, где состоялась его встреча с Гитлером и Риббентропом. Берлин настоятельно втолковывал японскому гостю, что наступил благоприятный момент для решения мировых проблем силовым путем и никакие договоры не могут помешать этому. "Да, - заявил Гитлер, - Германия заключила несколько договоров с Россией, однако гораздо важным является тот факт, что Германия имеет в своем распоряжении от 160 до 200 дивизий против СССР". Важное значение он придавал взаимоотношениям между союзниками: "... особенно благоприятен тот факт, что между Японией и ее союзниками не существует никаких расхождений в интересах. Германия ... так же мало заинтересована в Восточной Азии, как и Япония в Европе. Это лучшая основа для сотрудничества между японской Восточной Азией и германо-итальянской Европой"<sup>30</sup>.



Вторя фюреру, Риббентроп прозрачно намекнул, что в случае германо-советской войны нет особой надобности в японской помощи, что "Япония поможет общему делу лучшим образом, если она не разрешит себе сойти с пути нападения на Сингапур", что плоды победы над Советским Союзом Германия сама распределит среди своих союзников, поскольку самое тяжелое бремя в предстоящей войне ляжет на ее плечи. Направляя японскую агрессию на юг, Берлин на всякий случай гарантировал себя от возможности сговора Японии и США и Англией за счет Германии. Германскому руководству было известно о наличии влиятельных японских политических деятелей, настроенных проамерикански.

Оценив складывающуюся ситуацию, в Токио все-таки сочли возможным заключение с Советским Союзом пакта о нейтралитете, не без основания полагая, что он обезопасит северные границы японской империи на время операций на юге. В случае же успеха Германии в войне против СССР, он позволит Японии в удобный момент нанести внезапный удар по советскому Дальнему Востоку. 7 апреля 1941 г. Мацуока возвратился в Москву, имея полномочия на заключение советско-японского договора о нейтралитете. На возобновившихся переговорах японская делегация вновь подняла вопрос о продаже Северного Сахалина. В ответ В.Молотов напомнил о несправедливости Портсмутского договора, навязанного России в 1905 г. и предложил в интересах добрососедства пересмотреть некоторые его статьи. После чего "сахалинский вопрос" на переговорах больше не поднимался, но Мацуока стал настаивать на принятии Советским Союзом обязательств уважать территориальную целостность и независимость Маньчжоу Го. Советская сторона потребовала аналогичных гарантий для Монголии. 13 апреля 1941 г. договор о нейтралитете сроком на пять лет был подписан. Советский Союз признавал территориальную целостность Маньчжоу Го, а Япония - Монголии.

Подписывая договор, японские правящие круги исходили из далеко идущих планов. Предполагалось, что после нападения Германии на СССР советское руководство будет вынуждено перебросить свои войска с Дальнего Востока на западный фронт, вследствие чего вся Восточная Сибирь и Приморье окажутся легкой добычей для Японии. Не случайно, возвратившись в Токио после подписания в Москве договора, Мацуока сообщил германскому послу следующее: "Никакой премьер-министр или министр иностранных дел не сумеет заставить Японию остаться нейтральной в случае конфликта между Россией и Германией. В этом случае Япония вынуждена будет в силу необходимости напасть на Россию на стороне Германии. Тут не поможет никакой пакт о нейтралитете"<sup>31</sup>).

Заключение пакта сидело о серьезной дипломатической неудаче Германии. Активнейший участник событий тех лет премьер-министр Японии Фукимаро Коноэ записал в своем дневнике, что "... министр иностранных дел г-н Риббентроп не скрыл своего недовольствия, когда сказал послу, что с трудом понимает истинные намерения г-на Мацуоки, заключившего договор с той самой страной, с которой Германия будет воевать в недалеком будущем..."<sup>32</sup>).

Подписание договора вызвало недовольствие в японских вооруженных силах. В частности, командование Квантунской армии не допускало даже мысли о том, что пакт о нейтралитете должен ослабить подготовку к войне против СССР. Выступая 26 апреля 1941 г. на совещании командиров соединений, начальник штаба армии заявил, что подписанный договор является только "дипломатической мерой", поэтому "нельзя думать о том, что мы можем сейчас же вступить в дружественные отношения (с Советским Союзом - *В.П.*), учитывая позицию, занимаемую в настоящее время", что Квантунская армия "... совершенно не может разрешить ослабление своих приготовлений к военным операциям", а наоборот, военные приготовления должны возрасти. Командирам соединений было поручено довести до сведения личного состава необходимость усиления и расширения военной подготовки войны с Советским Союзом с целью "... достижения... победы в предстоящих военных операциях против него"<sup>33</sup>). Подобную позицию занимали многие в правящих кругах Японии. В беседе с германским и итальянским послами адмирал Т.Тоёда разъяснял, что японо-советский пакт "это лишь временная договоренность, ... своего рода сдерживающее начало Советского Союза до тех пор, пока не будет закончена подготовка"<sup>34</sup>).

Нападение Германии на Советский Союз создало благоприятные возможности для реализации военных планов Японии. Уже 22 июня 1941 г. глава японского МИДа Мацуока заверил посла Германии Э.Отта в том, что "он лично по-прежнему считает, что Япония не может долгое время занимать нейтральную позицию в этом конфликте...". 25 июня он же на запрос советского посла в Токио Сметанина о позиции Японии в начавшейся войне недвусмысленно подчеркнул, что "...если настоящая война и пакт о нейтралитете будут находиться в противоречии с Тройственным пактом, то пакт о нейтралитете не будет иметь силы"<sup>35</sup>).

Гитлеровское руководство с первых дней войны с СССР вопреки своей позиции марта 1941 г. потребовало, чтобы японские вооруженные силы обрушили удар на Советский Союз с востока. 5 июля 1941 г. Риббентроп в телеграмме германскому послу в Токио настоятельно рекомендует: "Примите все меры для того, чтобы настоять на скорейшем вступлении Японии в войну против России. Наша цель остается прежней: пожать руку Японии на

Транссибирской железной дороге еще до начала зимы"<sup>36</sup>). Через несколько дней он вновь предпринимает попытку давления на японское руководство, в котором присутствуют весьма явственные элементы угрозы. В Токио направляется правительственное представление, где подчеркивается, что если Япония до 25 июля не примет решения "уважать условия тройственного пакта и антикоминтерновского соглашения и не денонсирует русско-японский пакт к этой дате", то Германия будет считать себя свободной и после победы над СССР "найдет лучшие средства, чтобы использовать свое влияние и силы ... в собственных интересах и мало того, ... изменит свою политику в отношении Китая и станет оказывать помощь правительству Чан Кайши"<sup>37</sup>).

Однако к этому времени в японских руководящих кругах имелись существенные разногласия как в вопросе выбора главного направления экспансии, так и в определении времени нападения на СССР. Не случайно посол Отт и военный атташе Кречмер телеграфировали Риббентропу о широких мобилизационных мероприятиях Японии у дальневосточных границ, но в то же время без энтузиазма сообщали, что "время начала наступления еще не ясно". Представитель генштаба генерал Окамото, докладывавали германские представители, "многokrатно упоминал ..., что Япония выступит лишь тогда, ... когда немецкие части достигнут Волги ..." <sup>38</sup>).

Японию больше интересовали ставшие "бесхозными" колонии в бассейне Тихого океана и территории Китая. 30 июня 1941 г. для выработки рекомендаций к предстоящему совещанию у императора собрался Высший военный совет, в состав которого входили военный и военно-морской министры, начальники генерального и главного морского штабов. Совет рекомендовал: "Япония будет придерживаться своего плана установления господства в Восточной и Юго-Восточной Азии и продолжать наступление на юг, одновременно будучи готова воспользоваться благоприятной возможностью, которая представится во время германо-советской войны, чтобы напасть на СССР"<sup>39</sup>). Эту рекомендацию утвердило 2 июля секретное императорское совещание, созывавшееся в чрезвычайных случаях для решения вопросов государственной политики. В его постановлении говорилось, что Япония будет оставаться нейтральной в германо-советской войне, "... тайно готовясь к нападению на Советский Союз, которое должно быть совершено тогда, когда станет ясно, что он "... настолько ослаблен войной, что не сможет оказать эффективного сопротивления"<sup>40</sup>). Высших японских руководителей несколько не смущал тот факт, что договор о нейтралитете недвусмысленно обязывал их соблюдать строгий нейтралитет, в том числе и в случае нападения на СССР гитлеровской Германии.

На совещании была утверждена "Программа национальной политики империи в соответствии с изменением обстановки", официально подтвердившая курс Японии на установление господства в бассейне Тихого океана и Восточной Азии силой оружия<sup>41)</sup>. Нападение на СССР было поставлено в зависимость от событий на советско-германском фронте. "Хотя наше отношение к советско-германской войне, - говорилось в программе, - определяется духом "оси Рим-Берлин-Токио", однако мы некоторое время не будем вмешиваться в нее, но примем по собственной инициативе меры к тайному вооружению для войны против Советского Союза. ...Если германо-советская война будет развиваться в направлении, благоприятном для империи, она, прибегнув к вооруженной силе, разрешит северную проблему"<sup>42)</sup>.

Некоторые влиятельные политики Японии настаивали на немедленном объявлении войны СССР. С такими предложениями выступили министры иностранных дел Мацуока, внутренних дел Хиранума, член Высшего военного совета принц Асака и др. Однако большинство деятелей финансово-промышленной верхушки правительственных и военных кругов явно склонялись к "южному варианту", ясно понимая, что это приведет к войне с Соединенными Штатами. Эту позицию отстаивал премьер-министр принц Ф.Коноэ, хранитель печати маркиз К.Кидо, имевшие большое влияние на императора. Трения по поводу избрания варианта экспансии - северного или южного - привели к падению 16 июля 1941 г. кабинета Коноэ. В его новом кабинете, сформированном 26 июля, место Мацуоки занял генерал Тэйдзиро Тоёда, сторонник "южного варианта".

В Японии внимательно отслеживали события на советско-германском фронте, постоянно уточняя военно-политическую линию в отношении Советского Союза. Сопrotивление, которое оказывала германским войскам Красная армия, сорвало первоначальные планы немецкого командования и вызвало разочарования в японских правящих кругах. Уже к концу июля 1941 г. уверенность в быстрой победе Германии над СССР была значительно поколеблена. Не случайно в секретном "Дневнике войны" японского генштаба 22 июля появляется следующая запись: "Прошел один месяц после начала советско-германской войны. Операции германской армии протекали в благоприятных условиях, но сила и гибкость советской власти, вопреки ожиданию, оказались большими. Советская дальневосточная армия не была переброшена на запад. Похоже, что возможность завершения немцами операций и войны в ранее запланированные сроки уменьшилась"<sup>43)</sup>.

Озабоченное замедлением продвижения немецких войск, провалов плана быстрого захвата Москвы и Ленинграда, японское руководство через посла в Берлине Осима обратилось за разъяснением сложившейся ситуации

к Риббентропу. По его поручению начальник штаба верховного главного командования фельдмаршал Кейтель объяснил послу, что замедление темпов вызвано большой растянутостью коммуникаций, отставанием тыловых частей, что продвижение в силу этих обстоятельств замедляется примерно на три недели. Однако оптимистические заверения Берлина не рассеяли сомнений Токио. В телеграмме Риббентропу 4 сентября 1941 г. посол Отт сообщал, что "ввиду сопротивления, оказываемого русской армией ..., японский генеральный штаб, по-видимому, не видит, что (Германия) сможет достигнуть решительных успехов до наступления зимы. ...Императорская ставка пришла в последние дни к решению - отложить на время действия против СССР". К тому же на позицию Японии, - отмечал германский посол, - все еще влияют воспоминания о поражении на Халхин Голе, "которые до сих пор живы в памяти Квантунской армии"<sup>44</sup>).

Вопреки заверениям Кейтеля, положение на советско-германском фронте радикально не менялось, что не могло не сказаться на линии поведения японского генштаба. 4 октября 1941 г. Э.Отт озабоченно докладывал Берлину: "Военных действий против все еще сильной в боевом отношении Дальневосточной армии раньше будущей весны ожидать нельзя. ...Упорство, которое показал СССР в борьбе с Германией, заставляет предполагать, что японское нападение, если его начать в августе или сентябре, не открыло бы в этом году дорогу через Сибирь"<sup>45</sup>).

5 июля 1941 г. военный министр генерал Тодзио утвердил план войны против СССР, получивший кодовое название "Кан Току-Эн". Его замысел состоял в том, чтобы внезапным нападением военно-воздушных сил уничтожить советские авиабазы на Дальнем Востоке, нанести главный удар по Приморью, войти в тыл Владивостоку и во взаимодействии с военно-морским флотом захватить его. Далее предусматривался захват Хабаровска, Благовещенска и других районов Дальнего Востока. Специальные группировки армии и флота в это же время должны были захватить Северный Сахалин и Камчатку<sup>46</sup>). ... "Русско-японская война, - сообщал японскому послу в Вашингтоне министр иностранных дел адмирал Тоёда, - предоставила отличную возможность разрешить северный вопрос и мы действительно продолжаем подготовку использовать эту возможность"<sup>47</sup>).

Но отслеживая ход военных действий на советско-германском фронте, японское командование вновь пришло к заключению, что война на западе приобретает затяжной характер, а обстановка на юге Восточной Азии крайне благоприятна, поэтому 9 августа было принято решение на период 1941 г. отказаться от планов решения "северной проблемы" и, в качестве главного направления, взять курс на "южный вариант"<sup>48</sup>). Разъясняя такой поворот японской экспансии, МИД Японии следующим образом инструктировал



своего посла в Берлине к его предстоящей встрече с Гитлером и Риббентропом: "Скажите, что, проводя в настоящее время продвижение на юг, мы не намереваемся ослаблять наше давление на Советский Союз ..., однако мы предпочли бы воздержаться от каких-либо прямых действий на севере"<sup>49</sup>).

К середине 1941 г. военно-политическим руководством Японии была выработана общая стратегическая линия в будущей войне. Был утвержден вариант, предусматривавший нанесение мощного удара по военно-морской базе США Перл-Харбор (Гавайские острова) и стремительное наступление на филиппинском и малайском направлениях.. Северный вариант по-прежнему оставался в силе и группировка войск в Маньчжурии продолжала увеличиваться. Причем мобилизационные мероприятия рассматривались как силовой нажим на Советский Союз в пользу стран "оси" и как прямая подготовка к нападению на советский Дальний Восток. В беседе с германским послом Э.Оттом 1 августа 1941 г. заместитель министра иностранных дел Японии генерал И. Ямамото, в частности, указал, что именно "под этим углом зрения надо рассматривать мобилизацию, которая производится с намерением уничтожить русские вооруженные силы на Дальнем Востоке". "Советское правительство, - заметил Ямамото, - официально умалчивает об этом, однако, по достоверным сведениям, следит за мобилизацией с возрастающей тревогой..."<sup>50</sup>).

27 сентября 1941 г. под давлением союзников по "оси" в Токио был подписан японо-германо-итальянский военный договор - "пакт трех держав". 29 декабря этого же года между державами "оси" было заключено соглашение о создании "общих военных и экономических комиссий, в которые вошли министры иностранных дел и послы стран-подписантов.

Однако упорные и затяжные бои на советско-германском фронте не давали надежд на скорую победу вермахта, а, следовательно, оттягивали сроки наступления японских войск на советский Дальний Восток. Несмотря на настойчивые требования Германии, японское командование приняло решение воздержаться от немедленного нападения. Тем не менее, сосредоточение на дальневосточной границе готовой к нападению полностью отмобилизованной Квантунской армии вынуждало советское командование держать на Дальнем Востоке до 40 дивизий, что, конечно же, облегчало положение вермахта на советско-германском фронте. Не случайно Риббентроп в телеграмме в Токио 15 мая 1942 г. отметил, что наличие у дальневосточных границ крупных контингентов вооруженных сил Японии "...облегчает наш труд, поскольку Россия ... должна держать войска в Восточной Сибири в ожидании русско-японского конфликта"<sup>51</sup>).

Только победа Красной армии под Курском, знаменовавшая коренной перелом в советско-германской войне в пользу Советского Союза, заставила японский генштаб отказаться от дальнейшей разработки планов и сроков нападения на советский Дальний Восток. Но военный и экономический шпионаж в пользу Германии не прекращался. Начальник русского отделения генштаба генерал-майор Токомацу Мацура систематически передавал в 16-е (германское) отделение для германского военного атташе полковника Кречмера сведения о силах Красной армии, дислокации ее частей на Дальнем Востоке. В начале 1942 г. им была передана информация о переброске советских войск из-под Хабаровска на советско-германский фронт, об авиачастях и механизированных силах, находившихся к тому времени на Дальнем Востоке. Через помощника военного атташе подполковника фон Петерсдорфа в Берлин шли собранные японскими дипломатами, работавшими в СССР разведанные, которые использовались германским командованием при планировании военных операций.

Таким образом, в действиях Германии и Японии в 30-е годы и в первый период Второй мировой войны было много общего, что вело их к сближению и в последующем к заключению военно-политического союза. Как в Европе, так и в Азии главной целью этих государств была военная экспансия ради установления "нового мирового порядка", создания "Великой Азии" под контролем Японии.

Имелось и определенное сходство в подготовке Германии и Японии к решению главной задачи - уничтожению силой оружия Советского Союза как главного препятствия на пути завоевания мирового господства. Как в Германии, так и в Японии правящие круги считали, что перед нападением на СССР необходимо максимально усилить экономический и военный потенциал за счет завоевания близлежащих государств, объединения их силой оружия.

В то же время экспансионистская политика Японии носила специфические черты. Японские правящие круги при решении важнейших политических и стратегических задач не были склонны безропотно следовать в фарватере "третьего рейха". Японское военно-политическое руководство исходило прежде всего из собственных экспансионистских интересов, стремясь в максимальной степени использовать результаты агрессии своих союзников по "оси" для укрепления и расширения своих позиций в Азии и на Тихом океане.

#### Примечания

1. Севастьянов Г.Н. Активная роль США в образовании очага войны на Дальнем Востоке. 1931-1939. М., 1953. С. 69.

2. Смирнов Л.Н., Зайцев Е.Б. Суд в Токио. М., 1978. С. 9.
3. Цит. по Лемину Н. Пропаганда войны в Японии и Германии. Минск, 1994. С. 108.
4. Оккупация Маньчжурии и борьба империалистов. М., 1932. С. 59.
5. Смирнов Л.Н., Зайцев Е.. Указ. соч., с. 26.
6. Рагинский М.Ю. Милитаристы на скамье подсудимых. По материалам Токийского и Хабаровского процессов. М., 1985. С. 127.
7. История Второй мировой войны. 1938-1945. Т. I. Воениздат. М., 1974. С. 90.
8. F. Presseisen. Germany and Japan. A Study in Totalization Diplomacy 1933-1941. The Hague, 1938. P. 32.
9. F. Presseisen. Ibid. P. 48.
10. Цит. по: История Второй мировой войны. Т. I. С. 108.
11. F. Presseisen. Germany and Japan. A Study in Totalization Diplomacy 1933-1941. The Hague, 1938. P. 43, 45.
12. F. Presseisen. Ibid. P. 45.
13. Цит. по: История Второй мировой войны. Т. I. С. 108.
14. Там же.
15. R. Butow. Japan's Decision to Surrender. Stanford, 1954. P. 104.
16. Государственный архив Российской Федерации (ГА РФ), ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 746.
17. Там же.
18. Там же, л. 177.
19. Там же, д. 256, л. 168.
20. История войны на Тихом океане. Т. 11. Японо-китайская война. Пер. с японского. М., 1957. С. 267.
21. См.: Japan Weekly Chronicle, August 31, 1939. P. 242.
22. Цит. по: История Второй мировой войны. Т. II. С. 315.
23. Там же.
24. Иноуэ Киёси, Ононо Синдзабуро, Судзуки Сёси. История современной Японии. Пер. с японск. М., 1955. С. 238.
25. ГА РФ, ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 38.
26. История Второй мировой войны. Т. II. С. 321.
27. Там же.
28. Х. Эйзус. Япония от первой до второй мировой войны. М., 1946. С. 188ю
29. Цит. по: История Второй мировой войны. Т. II. С. 322.
30. ГА РФ, ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 94.
31. Там же, л. 270.
32. Там же, л. 275.

33. Там же, лл. 60, 61.
34. Там же, л. 65.
35. Там же, л. 68.
36. Там же, л. 231.
37. Там же.
38. Там же, л. 232.
39. Там же, л. 229.
40. История войны на Тихом океане. Т. 3. М., 1958. С. 380.
41. Хаттори Токусиро. Полная история войны в великой Восточной Азии. Гавайская операция. Токио, 1967. С. 184-185, 188-195.
42. ГА РФ, ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 234.
43. Там же, л. 272.
44. Там же, л. 275.
45. История войны на Тихом океане. Пер. с японск. Т. 4. М., 1958. С. 98.
46. ГА РФ, ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 179.
47. Хаттори Токусиро. Полная история войны в великой Восточной Азии. Гавайская операция. Токио, 1967. С. 85.
48. ГА РФ, ф. 7867, оп. 1, д. 275, л. 241.
49. Там же, л. 248.
50. Там же, д. 482, л. 1022.
51. Там же, л. 283.

# モンゴル人民政府の地方行政制度改革と旧ザサグ旗社会

岡 洋 樹

## 問題の所在

1921年7月に成立したモンゴル人民政府は、第一回国家大呼拉尔の招集に向けて一連の行政統治制度改革を実施した。この改革が、清代に形成されたモンゴルの社会構造解体の画期となったことに疑問の余地はない。この改革の結果、王公タイジから剥奪された統治権力は人民（アルド）によって組織される住民会議に移された。この改革について1955年刊の『モンゴル人民共和国史』は、行政統治制度改革も含めて「1921～1924年に人民政府が獲得した成果は、共和国を建設する条件を作り出した」と評価し（1）、1985年刊の『モンゴル人民革命党簡史』は、「封建階級の政治支配に対する突撃を深化させ、封建王公の無限の特権を廃止した」と述べている（2）。またM.サンジドルジは、行政制度改革を、「旧封建時代と比べると質に関わる重大な改革となったことを明記すべきである」とし（3）、M.リンチンも「封建階級の政治権力・封建国家・行政制度に対して、人民政府がその経済的需要と利害を擁護し、社会の生産関係に対する法的サービス、封建権力の規範を廃棄し、社会の基本的生産手段の一つである土地（牧地）の生産及び行政単位の形での私的所有を終結させ、全人民の所有としたことにより、封建的生産関係＝農奴制の客観的存立条件を消滅させたのである」（4）との評価を与えている。1990年代の民主化以後もこの改革に対する評価は維持されている。例えばJ.ボルドバートル・D.ルンデージャンツァンは、1997年に刊行された『モンゴル国の国家・権利の歴史的継承』において、この改革を「人民代表組織の統一的なシステムが確立し発展する基礎を築いた」と評価し（5）、Ch.ダシダワーは、行政統治制度改革の諸規定が「地方において新しい政治制度を生み出す法的基礎となった」（6）としている。

人民政府による改革は、1931年のホショー（旗）廃止によって完成を見た。しかし一連のプロセスにおいて特に重要なのは、1923年初頭における「ザサグ王公・閑散王公権限規定」及び「地方行政組織規定」の発布と、これを法的基礎とした各級の住民会議の組織及び行政当局者の選出である。人民政府による改革は、封建王公の統治権力の廃止と人民権力の確立という点から評価されてきた。本稿は、改革に関わるかかる評価自体に異論を差し挟もうとするものではなく、従来ほとんど顧みられなかった以下の論点について検討することで、一連の改革を、清代に形成された封建的地方社会構造の解体局面としての歴史的意義を論じようとするものである。

すなわち、第一の論点は、清代及びこれを継承したボグド・ハーン政権時代における王



公による統治体制のいかなる形式が改革によってどのように改められたのかという問題に関わる。たとえば、ソノムダグヴァは、「ザサグ王公・閑散王公権限規定」の意義に関わって、次のような認識を示している。

「王公権限規定」は、封建王公の政治的経済的権力を制限したばかりでなく、軍事的・封建的農奴制の上に作られた地方行政の旧組織を初めて破壊した。満洲が1691年にハルハ・モンゴルを征服し、軍事・封建的システムを定めた時、満洲・モンゴルの封建王公の利益に合わせて、旗を佐領、随丁という2つの部分に分け、行政単位として組織し、佐領のアルドに満洲の国家的アルバを、随丁に地方の封建王公のあらゆるアルバ・ゴヴチョール（貢租賦役——岡）を納める義務を課し、その基礎の上に行政組織を作ったのである。この行政組織は、200年余りの間継続し、1921年の人民革命期に至ったのである。

王公権限規定は、封建的農奴制を廃止するのに大きな一歩となった。王公権限規定の第一条に、『ハルハの多くのザサグ及び閑散王公タイジ等を、この規定に従ってあらしめるほか、多くのザサグとすべてザサグ・ダルガと名付け、随丁を廃止して佐領に入れる』と指示している。この指示は、地方に民主行政を組織する上で、もう一つの基礎となったのであって、1923年以後随丁であった人民によってはじめてソムを編成しはじめたのである。（7）

明らかにソノムダグヴァは、改革の対象となったのが、清朝蒙古例から抽出されるような、佐領・随丁・タイジによって構成される旗の身分構造であったと理解しているのである。たとえば「随丁を廃止して佐領に入れる」という場合、蒙古例は王公タイジ・随丁と佐領の間に何らの組織的な関係も想定していないのであるから、随丁を佐領に編入することは新しい統属関係の創出を意味することになる。しかし近年、清代のハルハ・モンゴルにオトグあるいはバグと呼ばれるタイジ分枝集団の属民統治組織が存在し、これが佐領制度と共存していたことが明らかにされつつある（8）。しかも、タイジ分枝集団は、佐領随丁とも関係を有していた。とすれば、ソノムダグヴァのような理解は、オトグやバグの存在を考慮に入れた上で再検討されなければならないことになる。

そこで本稿では、まず人民政府の地方行政組織改革政策の概要を整理した上で改革の法的基礎となった「ザサグ王公・閑散王公権限規定」及び「地方行政組織規定」の内容を確認し、さらに規定の発布を受けてガルシャル・オーラ・ホショー（旧セツェン・ハン部中末旗、ビシュレルト・ザサグ旗）で組織された住民会議の議事録を用いて、実際のソム編成の状況を検討することによって、行政組織改革による新編のソムと改革前の旧社会組織、とくに旧中末旗の五つのオトグとの関係を明らかにすることとしたい（9）。

## 第一章 「ザサグ王公・閑散王公権限規定」と「地方行政組織規定」

### 第一節 人民政府による地方行政制度改革

モンゴル人民党率いる人民政府は、当初から「封建王公支配」の解体を党の政策綱領に組み込んでいた。1924年8月に開催されたモンゴル人民党第三回党大会において「内務省における国内改革について」と題する報告を行った内務副大臣デンデヴは、内務省の活動について、以下のように述べている(10)。

以前の清国の時代に、我がハルハのモンゴル人をいにしえのチンギス・ハーンの子孫と称するザサグ・ノヨン達やタイジ達に代々属民として分配し、ザサグ旗として管理させた。この弊害により、自治モンゴル国時代にもこれらのザサグ・ノヤン達や貴族のタイジ達が国の全権力を独占し、自家の世襲の地位を永遠に確固たらしめるため、諸旗の旧印璽を交換し、某ハン部の某ザサグ旗長印と称したが、これはすなわち人民の権利を永遠に抑圧しようとする専制政治の反動的政策にほかならず、我が人民権力政府に敵対するばかりではない。最近定め布告した王公タイジ等の権限及び地方行政規定の中に、地方のあらゆる役職の選出及び解任権をすべて人民代表会議に帰属せしめ、貴族・人民の区別なく、有能で人々の利益を尊重する者を選ぶという目的から、人民政府内務省は諸部・旗に自治政府時代に授与した印璽を回収し、新しい印璽を作り与え、部の盟長印をはじめから地名をもって示し、与えたので・・・

つまり地方行政改革は、ボルジギン氏族王公タイジからの行政権力の奪取と、人民への権力移行を目的としたものだったのである。ただしこの時期の人民＝アルド arad は、階級的な概念というよりは、清朝が貴族身分として公認していたボルジギン氏族王公以外の異姓諸氏族を指す身分概念である。

人民政府は、この目的の実現に向けて、一連の措置をとる。1921年7月10日にソ連赤軍と人民義勇軍がフレーに入城して人民政府が成立すると、9月5日に「国家臨時ホルル」を組織して正式の国家大フルル召集までの合議体とし、構成員の多数派を人民出身者で組織することにより、王公とその官員による独占的支配から中央権力を奪取した。さらに11月1日にはボグド・ハーンといわゆる「誓詞協定」を締結して制限君主制を実現した。これより前の9月14日に『ウリヤ』紙に掲載された「党・政府より近日中に遂行する目標」では、「部・旗の役所を、人民の権力として刷新する法律・規定を速やかに布告し、遂行するべきである」と地方行政制度改革に着手することを宣言し(11)、さらに党・政府の代表者を地方に派遣し、旗レヴェルに政府の政策を浸透させると共に、国家大フルル代議員の選出母体となる旗住民会議や党細胞の組織化に乗り出した(12)。

### 第二節 随丁の佐領編入措置について

そのような中で1922年1月に随丁(ハムジラガ)のソム(佐領)編入措置が採られた(13)。

清朝蒙古例下のザサグ旗の構造が、佐領編成とタイジへの随丁分与という身分的枠組みを原理としていたと考えれば、この措置はザサグ旗体制の根幹を改めたように見える。しかし後にみるように、地方での新しいソムの編成は1923年に入って実施されており、22年1月という時点で出されたこの命令の意義を過大評価することには疑問がある。

1922年1月の随丁の佐領編入に関わる措置は、軍務省大臣將軍チョイバルサンの共戴11年11月11日（西暦1921年12月10日）付要請に基づく。チョイバルサンは、この要請の中で、

モンゴル人民軍の創設に当たっては、兵役に就くべき全ての男子を動員し、将来兵の増員規定を作成することが特に重要となる。そこで、モンゴル領内に居住する全ての兵役に就くべき人々の総数及び各地における人々のそれぞれの数を明確に知ることができれば、徴兵事務は容易かつ公正なものとなる。

として、徴兵規定を作成中であることを述べた上で、

この規定の施行まで、多くのノヤン達の随丁及びタイジを随丁と共に佐領の丁冊に移し入れるべきであると言うのを、我が軍協議会は承認し、政府に送って決定を求めることに決めたので、・・・

と述べている（14）。これを受けた政府は、共戴11年12月28日（西暦1922年1月25日）の政府第37回会議決定第4項において、

全軍協議会より、多くのノヤン・タイジの随丁及びタイジ等を佐領箭丁の数内に移入するよう計画したことについて協議し、これを認めて内務省から布告することを決定した。

との決定を下した（15）。この経緯を虚心坦懐に見れば、チョイバルサン率いる全軍協議会の要請は、あくまでタイジ・随丁中の兵役適齢者に佐領箭丁の身分を与えることで徴兵対象とすることを目的としたものであり、これをもって直ちに地方の社会構造改革に関わる措置と見なすことはできない。

### 第三節 「ザサグ王公・閑散王公権限規定」と「地方行政組織規定」の制定

人民政府は、1923年正月に「地方行政組織規定」、2月に「ザサグ王公・閑散王公権限規定」を發布し、各地の旗住民会議の組織化に法的基礎を与えた。これを受けて、各旗では住民代表代表と行政担当者の選出が開始された。しかし当初の住民会議による行政担当者の選出においては、多くの場合旧来のザサグ・ノヤンや官員がそのまま選出され、人民への権力移行は実効があがらなかったという。たとえば、ザサグト・ハン部では、1923年11月までに同部の20旗と3つのシャビで地方行政組織が作られたが、14旗で旧ザサグ王公がそのままザサグ・ダルガに選出され、4旗でザサグの死亡ないし病気のためその子が選出され、1旗では死亡したザサグに嗣子がないためにタイジがザサグ・ダルガに選出された。人民（アルド）出身者がザサグ・ダルガになったのは、ジャーラマ・ダムビージャンツァンと結託したザサグ・ミシグドルジが処刑されたヨスト・ザサグ旗（右翼前旗）のみであっ

たという (16)。このような事態について、1924 年 11 月に開催された第一回国家大フラルで内務大臣として報告を行ったナワーンネレンは、次のように述べている。

地方の権力者達は、・・・多くの場合保守的に対応し、規定通りに十戸及びバグ、ソム会議を開催して代表を選出することなく、それぞれザサグ・ノヨンや協理、管旗章京等の官員、有爵者やラマ等のみで会議を開催してホショー会議と称し、審議を行った。その審議においては、あらゆる官職や代表の選出にあたって常に旧在職者を賞賛し、貴族や無能な者を選出したり、規定を歪曲して誠実に実施するよう努めないなどの問題が多発した。このため派遣された数名ばかりの代表たちではいかんともなしがたく、任務をうまく遂行できないまま、月日が経つにまかせ、任務を滞らせるに至った・・・

という (17)。住民会議の組織とザサグ・ダルガの選出が、国家大フラル代表の選出母体の創出を目指すものである以上、旗レベルで旧王公層が代表に選出されて政治権力を維持することは、中央における王公層の権力奪回に直結するおそれがあった。かかる事態に対して人民政府は、1923 年 11 月 21 日 (旧暦共戴 13 年 10 月 13 日) に第一回国家大フラルを召集するとした当初の方針を撤回した上で、地方の住民代表及び行政担当者選出と住民会議組織のやり直しを命じた。その結果についてナワーンネレンは、

ハルハ四アイマグのザサグ・ダルガは 93 人であるが、このたびの行政機関の設置にあたり、多数意見をもって 70 人のザサグ・ダルガを交代させ、それぞれのアルドの中からホショー・ダルガを選出してきた。我が政府はこれをそのまま承認したほか、残るザサグ・ダルガ等については、今年秋人民党第三回大会で審議して、共和国の体制に則って、旧ザサグをそのままザサグ・ダルガとして承認することを認めず、全てホショー・ダルガを選出することとしたのに従い、残るザサグ・ダルガを交代させ、以前多数意見をもって選出したその副官達か、あるいは再度有能な者を選出任命するよう関係諸処に布告命令した。

と述べている (18)。このように中央政府は、選出されたザサグ・ダルガ 93 名中 70 名を交代させるという強力な介入を行うことによってようやく王公層を旗の行政権力から排除することに成功し、翌 1924 年 11 月の国家大フラル開催にこぎつけることができたのである。

この一連の地方住民会議体の組織の法的根拠となったのが「ザサグ王公・閑散王公権限規定」と「地方行政組織規定」であった (19)。

## 第二節 「ザサグ王公・閑散王公権限規定」

共戴 13 年 2 月 5 日 (西暦 1923 年 3 月 22 日) の紀年をもつこの規定は 14 条から成る。まず従来のザサグ王公及び閑散王公の存在を法的に位置づけた上で、ザサグ王公はザサグ・ダルガと称し、隨丁を廃止してソムに編入、かつ王公の公職への選任を認めている (第一・第二・第三条)。また、ザサグ・ダルガ及び閑散王公について欠員が生じた場合の子への爵位継承を認める一方で、ザサグに関してのみ、子がない場合の近親者への爵位継承

を認めている。一方ザサグ職については、ホショー会議で適当な者を選出することとしている（第四・第五・第六条）。また、人民に対して虐政を敷いたり、政府命令に従わないものは処罰解任するとともに、後任はホショー会議が選出する。また叛逆の場合にはザサグ・閑散共に処罰の上、子への爵位継承は認めないこととした（第七・第八・第九条）。ホショー・ダルガに同様な不法行為があった場合は処罰の上、別人を選任する（第十条）。また、ザサグ・ダルガ及びホショー・ダルガは、行政事務遂行にあたり、ホショー会議ないし印務処官員と協議して、多数意見をもって処理する。過失があった場合には、アイマグないしは国の司法省において処罰するものとし、処罰や税負担においては人民と同様な権利・義務をもつこととしている（第十一・第十二・第十三条）。

この規定によって、王公タイジ身分は法的には名ばかりの爵位保有者に過ぎない存在となった。ザサグ・ダルガに選出された場合にも、その権限はホショー住民会議の承認・任命によるものとされ、爵位保有特権と行政権力が分離された。これに先立ち、人民政府は1922年3月、ザサグ及び閑散王公に人民同様の国税負担を課し、同年5月5日の決定によりハムジラガからの租税徴収を禁止している（20）。しかしこの規定は王公タイジの特権廃止を目的としたもので、その支配権力の基盤となっていた属民社会自体の解体・再編を意図したものではないことに注意する必要がある。旗民社会の再編は、次の「地方行政組織規定」によって行われた。

### 第三節「地方行政組織規定」について

#### 1. 規定の内容

本規定は、1923年1月5日政府決定、3月22日に公布され、全体で以下の58条からなる。各レベルの住民会議組織の編成・任務・行政担当者選出方法・権限を規定する。

第一部 総論 1～9条

第二部 十戸規定 10～15条

第三部 バグ規定 16～18条

第四部 ソム規定 19～22条

第五部 ホショー会議規定 23～42条

ホショーから毎年一回期限内にアイマグ衙門に報告する事項 43～48条

ホショーから三年一回期限内にアイマグ衙門に報告する事項 49～51条

ホショー事務監査委員会規定 52～54条

特記事項 55～58条

規定では、行政組織を、十戸 arban・バグ bay・ソム sumu・ホショー qosiyu・アイマグ ayimay・国家 ulus の六段階をもって構成することとし（第1条）、各レベルに住民会議が組織された。各ホショーは、150戸ごとにソムを編成し、さらにその下に50戸ごとにバグが置かれた。そしてバグは、最下級の単位としての十戸に組織される。また、各級定員の3分の2に及ぶものは1ソムあるいはバグの編成を認め、及ばない場合は他のソム・バグに統合す



る（第2条）。各住民会議はその長と上級の住民会議への代表を選出する（第6条）。

《十戸 arban》十戸は、その名の通り十の戸からなり、十戸長 arban-u daruy-a を長とする組織で、王公タイジ・官員・ホトクト・アルドの区別なく編成される。十戸には会議体が設置され、十戸長・バグ会議代表の選出、戸口簿の作成、家畜財産登録簿の作成、税負担配分、生産奨励、学校設置、上級衙門の命令遂行を任務とする（第14条）。

《バグ会議 bay-un qural》バグ会議は、各十戸2名の代表とバグ長 bay-un daruy-a によって組織される（第16条）。バグ会議は、バグ長の選出と十戸長の承認、ソム会議への代表選出、十戸が報告した戸口・財産報告の監査、税金の十戸への分配、産業振興、学校設置を任務とする（第17条）。

《ソム会議 sumun-u qural》ソム会議は、各十戸1名の代表とソム章京によって構成され（第19条）、ソム章京選出、バグ長の承認、ホショー会議への代表選出、バグから報告された戸口・財産数の監査、税金のバグへの分配、産業振興、学校設置を任務とする（第20条）。またソムの章京には銅製の公印が内務省から支給される（第21条）。

《ホショー会議 qosiyun-u qural》ホショー会議は、四ソム以上のホショーであれば各ソム5名、三ソム以下であれば各ソム10名の代表をもって構成され、代表はソム会議で選出される（第23・第24条）。毎年一回4月1日から1か月間開催される定期会議と、必要に応じて15日間以内の期間で開催される臨時会議からなる（第25条）。会議開催に当たっては、議長・副議長・書記長各1を選出する（第28条）。ホショー会議は、ソム・バグ・十戸の設置、税金の分配、収支報告の作成、ホショー内の問題の審議とアイマグ・政府及び国家フラルへの報告、ホショー当局の執務状況の監査、ザサグ・ダルガの任免の承認及びホショー・ダルガ、協理、ザヒラグチの任命、アイマグ会議代表（任期一年）の選出、印務処官員の承認、収支監査委員会の選出、金銭の借用・債務返済の議決、産業・施設設置などを任務とする（第29条）。議決は構成員の3分の2の同意をもってする（第30条）。

ホショーには行政官庁として印務処が置かれ、旗印を管理するザサグ・ダルガが率いる。政務はザサグ・ダルガと印務処官員の協議により、多数意見をもって議決される（第36条）。印務処には、行政課 jakirqu tusiyaqu keltes（ホショー内の行政・警察・駅管理・労働税の実施・野獣駆除・火災防止と消火・伝染病予防と駆除など）、司法課 jaryu sidkekü keltes（民事・刑事の訴訟処理）、軍務課 čirig-iin keltes（丁冊の作成、兵の訓練・徴兵・出動、武器や軍用家畜の保管など）、税務課 alba tatburi-yin keltes（住民の人口・財産・家畜登録、税金徴収、耕作地・干し草・牧地・建物用土地の供与、税収の受領と国庫への納入、官員の賃金支給、収支報告作成、予算案作成など）が設置される（第37条）。

またホショーには事務監査委員会が設置され、収支内容の監査を行う（第52条）。

「地方行政組織規定」は、旧制度下における身分範疇（王公タイジ・随丁・佐領選定）を住民数に基づく階層的な会議体に統合し、かつ各レベルの行政担当者を各会議において選挙によって選出することとしたものである。

この規定は、ソノムダグヴァが述べるように「モンゴル人民党・人民政府は、地方行政

区分を直ちに革新することを目指しておらず、地方行政を民主化の基礎の上に新たに組織し、行政組織を世襲的に率いていた封建王公を行政権力から排除し、その代わりに民主選挙に基づく人民の代表によって構成される行政を組織することを主たる目的とした」ものであった(21)。つまり旗内部の行政組織を、10戸から成るアルバン、50戸からなるバグ、150戸からなるソムという階層構造をもって、身分を区別することなく全住民組織として編成したのである。旧体制下におけるソムやアルバンが、少なくとも規定上は比丁冊に登録された兵丁によるアルバ負担の内容に即した組織編成であったのに対して、新制度は、戸を単位とする全住民組織になっている点で本質的に相違する。つまり、盟旗制度下の佐領によって公式に把握されるのが、18~60歳の青年男子箭丁に過ぎなかったのに対して、新制度では戸主は勿論家族を含む全住民が把握の対象になり、しかも、これには王公タイジやその旧随丁、ラマも含まれる。これによって、ソム・バグ・アルバンは、ホショーの下位における行政統治区分として、身分・性別・年齢に拘わらず全住民を包括しうる組織となった。そして各級の住民組織に会議体が組織され、行政担当者は会議構成員の秘密投票によって選出された。

また「地方行政組織規定」第21条に、ソムの章京の任務として、

同ソムの領域 (sumun-u γajar) を常時監視し、不正に行動する者を捕らえ、所轄印務処に連行して取り調べさせる。

とあるように、ソムに一定の領域が存在したことが注目される。すなわち、王公タイジや章京との統属関係を紐帯として編成された清代の佐領組織や随丁とは異なり、新組織は、住民の地縁的な社会関係に立脚し、領域を有する社会集団として成立したのである。換言すれば、佐領・随丁制度の属人主義的社会編成原理を、属地主義的(地縁的=領域的)編成原理をもって代えたことになる。

しかしこのような編成原理上の質的な相違は、蒙古例下における佐領・随丁制度を比較対象とした場合においてのことであることに注意する必要がある。

既に明らかにしてきたように、王公タイジ分枝(バグ)を単位とする清代のオトグやバグも地縁的組織であった。従って問題は、「地方行政組織規定」第1・第2条が規定するアルバン(10戸)・バグ(50戸)・ソム(150戸)という編成原理が、オトグやバグのような既存の地縁組織といかなる関係にあったのかという形で提示されなければならない。しかし規定には、オトグやバグとの関係への言及は一切ない。そこで、新組織の地縁組織としての実態を、具体的事例によって検討する必要がある。以下、これまでオトグ・バグ組織の構成が明らかになっている旧セツェン・ハン部中末旗、新制度下のガルシャル・オーラ・ホショーを事例として検討する。

## 第二章 地縁組織としてのソム・バグ・十戸

### 第一節 人民革命直前の中末旗（ビシュレルト・ザサグ旗）社会

清代の中末旗の社会構造については、既にいくつかの論文において論じてきたところであるが、本節では、1922年の同旗戸口檔冊によって、地方行政組織改革直前の同旗社会の状況を把握しておきたい。

モンゴル国立歴史中央アルヒーヴ所蔵の檔冊「共戴12年6月セツェン・ハン部親王品級ビシュレルト・ザサグ多羅郡王ドルジツェレン、スジグト・ダイチン貝勒ジャンツァンホルロ、化身ラマ・ジャミヤントゥブデンニマの私財及び所轄旗の協理タイジ、タイジ達、佐領、隨丁の全住民・財産家畜をジャスの家畜と併せて数え調べた呈冊」（22）によると、1922年時点での同旗の社会集団は表1のごとき構成となっている。

表1：1922年戸口檔冊に見られるビシュレルト・ザサグ旗の社会集団

身分	名称	戸数	口数
タイジ	トサラグチ・タイジナル	29戸	128口
	ダイチン・タイジナル	2戸	3口
	ホンタイジ・バグのタイジ	1戸	2口
	ズーン・タイジナル	5戸	14口
	シネチュード・タイジナル	5戸	25口
ハムジャー（隨丁）	ゴル・ハムジャー	148戸	614口
	トサラグチ・ハムジャー	54戸	214口
	ダイチン・ハムジャー	8戸	24口
	ズーン・タイジナルのハムジャー	19戸	92口
	シネチュード・ハムジャー	7戸	33口
	ホンタイジのハムジャー	11戸	70口
ソム（佐領）	トサラグチ・ソム	145戸	534口
	ダイチン・ソム	113戸	453口
	ヒヤナル・ソム	48戸	184口
	パローン・ソム	34戸	124口
	ホーチド・ソム	20戸	67口
ハロール・バグ	31戸	103口	

これによると、まずタイジでは清代の比丁冊や系図に見られる五つのバグが維持されていることがわかる。しかしその内訳をみると、トサラグチのタイジ数が突出し、対照的にダイチン・ホンタイジ両バグのタイジが僅か3名に減少している。隨丁ではザサグの隨丁であるゴル・ハムジャーの突出ぶりが著しく、トサラグチのハムジャーがこれに次ぎ、ホ

ンタイジ・ハムジャーが11戸に過ぎない。ソムでは、トサラグチとダイチンのソムが全体の6割以上を占める。かかる状況は、住民組織編成にも影響したであろう。

## 第二節 ガルシヤル・オーラ・ホシヨールにおける五ソム編成

本節では「ザサグ王公・閑散王公権限規定」及び「地方行政組織規定」公布を受けて、旧セツェン・ハン部中末旗（ビシュレルト・ザサグ旗）において行われた新ソムの編成の状況を、1923～24年の同旗住民会議議事録を用いて具体的に検討する。(23)

### 《1923年編成の5ソム》

1923年の住民会議議事録「共戴13年4月10日（西暦5月25日）ホシヨール会議全メンバーが集まり協議した第一回会議の決定」の第五条によると、同旗では5ソムが編成された。

第五条。所属五ソムの名称を何とするかについて協議した。仁・義・礼・智・信というのは、太極及び陰陽から生じた万物が離れることのできない五つの行であり、一人の人間の体から切り離すことができない五倫の名である。この一ホシヨールが五ソムに編されたのにちなむ深淵な意義を有している。またこれにより、内に一体とならんとするの祈願を表す奥深い意義があると、章京ドガルジャヴのソムを仁 örüsiyeltü、章京シルチンのソムを義 jirumtu ソム、章京スレンホルローのソムを礼 yosulaltu ソム、章京ダムダンジャヴのソムを智 mergen ソム、章京ボムジャルガルのソムを信 itegemjitü ソムと名付けることに決定した。(24)

ソムの名称に五常に因む名称が採用されていることも興味をそそるが、清代には、清末には整佐領2、半分佐領1であった同旗に、5ソムができていたことが注目される。

議事録第四項には、会議に参加した各ソム代表者と章京の名が挙げられている。この代表者を前年1922年の戸口家畜档冊中から所属を特定すると表2のようになる。

表2：1923年編成ビシュレルト・ザサグ旗5ソム代表者所属

ソム名	代表・章京名	所 属
仁ソム	章京ドガルジャヴ	ズーン・タイジのハムジャー、ユルンヒー・ダルガ
	チョイジンジャヴ	不明
	ロドイ	ホーチド・ソム、ラマ
	ロヴサンゲンドウン	ヒヤナル・ソム、ラマ
義ソム	章京シルチン	ゴル・ハムジャー、ユルンヒー・ダルガ
	ロヴサンダワー	ゴル・ハムジャー
	サンジャイ	ゴル・ハムジャー、従者 dayalta
	ツェヴェーン	ゴル・ハムジャー、ラマ
	ジャムバルノルヴ	ゴル・ハムジャー、ラマ
礼ソム	章京スレンホルロ	トサラグチ・バグ、タイジ

	ダルハジャヴ	トサラグチ・バグ、タイジ、筆帖式
	ツェヴェグジャヴ	トサラグチ・ハムジャー、ユルンヒー・ダルガ
	トグジ	不明
智ソム	章京ダムダンジャヴ	トサラグチ・ソム、従者、筆帖式
	ジグミド	トサラグチ・ソム、従者
	メンドバヤル	トサラグチ・ソム、シュレンゲ
	バルジンニヤム	トサラグチ・ソム、従者
信ソム	章京ボムジャルガル	ダイチン・ソム、二品ショドラガ・バートル
	ナムサライ	ダイチン・ソム、四品筆帖式
	ノルヴ	ダイチン・ソム、従者、筆帖式
	サッタ	ダイチン・ソム、驍騎校

仁ソムはズーンのハムジャー（随丁）とホーチド、ヒヤナル両ソムで構成されている。おそらくズーンのタイジもここに所属したものと思われる。1922年の戸口冊では、ズーンのタイジは対応する名称をもつソム箭丁集団を有していない。おそらく、ホーチド、ヒヤナル両ソムは、ズーンのタイジと何らかの関係を有していたものと推測される。また義ソムはザサグ随丁たるゴル・ハムジャー、礼ソムと智ソムはトサラグチ・オトグ、信ソムはダイチン・オトグにそれぞれ該当することがわかる。

#### 《1924年に再編成された5ソム》

前述のように、1923年のソム当局者選出結果は中央政府によりいったん無効とされ、翌年に再度ソムの編成と当局者選出が行われた。これについて、モンゴル国第14年6月（西暦7月）17日（8日）付の「モンゴル人民政府より布告した地方行政規定に従い、旗会議を開催し、協議決定した第一回会議決定」第2項は、以下のように記す。

本ホショーのソム・バグ、十戸の設立方法を決定する件につき協議し、旗の登録された全戸814の内、貧困な戸114戸を除外し、特に財産を有する正戸(jingkini erüke) 700を70の十戸・14バグ・4整ソムとし、残る100戸を規定に従って一ソムとして数え、5ソムを組織することとした。(25)

「財産を有する正戸」を700とするなど、数字合わせの作為が読みとれる内容であるが、ここでもやはり5ソムが編成されている。その名称について、同決定第7項は、

またソムの会議から報告してきたバヤンハーン・オーラ・ソムの章京ダシネレン、デルゲルバトムフ・オーラ・ソムの章京シルチン、ボタルチョロー・ソムの章京デムベレル、ボヤントボラグ・ソムの章京メンドバヤル、ノヤン・オーラ・ソムの章京ナムサライ等を承認した。(26)

と記す。また5ソムには以下のように第一から第五までの番号が付されている。

第一バヤンハーン・オーラ・ソム（大ソム）：章京ダシネレン



- 第二デルゲルバトムフ・オーラ・ソム：章京シルチン
- 第三ポタルチョロー・ソム（大ソム）：章京デムベレル
- 第四ボヤントボラグ・ソム（大ソム）：章京メンドバヤル
- 第五ノヤン・オーラ・ソム（大ソム）：章京ナムサライ

これを前年の5ソムと対照してみる。まずシルチンを章京とするデルゲルバトムフ・オーラ・ソムが義ソムにあたる。ポタルチョロー・ソムの章京デムベレルは、1922年戸口冊に見えるトサラグチ・ハムジャーのラマ・デムベレル（54歳）、トサラグチ・ソムの箭丁デムベレル（69歳）のいずれかに比定されるものと思われ、ボヤントボラグ・ソムのメンドバヤルもやはり23年の代表中にトサラグチ・ソムのシュレンゲとして見える人物であろう。従って、この両ソムが礼・智両ソムに該当する。ナムサライを章京とするノヤン・オーラ・ソムは信ソムにあたる。章京ダシネレンのみは、1922年の戸口档冊では档冊冒頭の官員の項目に章京としてバグとは別個に記されており、所属集団は不明である。もしダシネレンがズーンに関わる者だったとすると、この五ソムは、順番も章京任官者も1923年の仁義礼智信五ソムに対応することになる。

ところで、この五つのソムは一定の領域を有していた。同決定第3項には、五ソムのホショー境巡視任務の分担についての規定がある。これによると、

境界を巡視するのに、五ソムの元来の居住地のそれぞれの近さの便宜を考慮し、第一ソムは第19タブン・トルゴイ・オボーから東へ第43ガルト・ウネグド・オボーまで、第二ソムはガルト・ウネグドから第54ザミン・フヴ・オボーまで、第三ソムはザミン・フヴから第65ハルチョロート・オボーまで、第四ソムはハルチョロートから第11ハワツァガーン・オボーまで、第五ソムはハワ・ツァガーンから第19タブン・トルゴイ・オボーまでそれぞれ巡視する（27）

とされ、分担区域が各ソムからの近さによって決定されている。このオボー名を同旗光緒年間の地図によってみると、第一バヤンハーン・オーラ・ソムは旗の北部から東北部にかけて、第二デルゲルバトムフ・オーラ・ソムは旗東部、第三ポタルチョロー・ソムが旗東南部、第四ボヤントボラグ・ソムが旗西南部、第五ノヤン・オーラ・ソムが旗西北部をそれぞれ分担することとなる（論文末地図参照）。規定の趣旨からして、この旗境巡視分担は各ソムの領域配置に対応していると考えられる。（28）このように、1923～24年の地方行政組織改革によって編成された五ソムは、地縁的な領域をもつ組織だったのであり、行政組織規定の内容とも対応している。以上の結果を表にすると表3の通りとなる。

このように、1923年の五ソムは、ズーン、ゴル、トサラグチ、ダイチンの四オトグを基礎として組織され、その内トサラグチが2ソムを形成した形になっている。筆者はこれまで清代の中末旗がズーン、ダイチン、ホンタイジ、トサラグチ、それにザサグとシネチュードのタイジ率いるバローンの五つのオトグから成っていたことを明らかにしてきた。ところがこの1923年のソム編成では、トサラグチが二ソムを形成する一方で、ホンタイジ・オトグが消滅していることが注目される。またザサグが率いるバローンについては、22年

表3：ガルシャル・オーラ・ホショーの5ソム

	1923年 ソム名 称	1923年章京 (1922年档册所属)	1924年ソム名称	1924年章京 (1922年档册 所属)	ソム位置
第一	仁	ドガルジャヴ(ズ ーン)	バヤンハーン・オー ラ・ソム	ダシネレン (不明)	第19～第43 北部～東北 部
第二	義	シルチン(ゴル)	デルゲルバトムン フ・オーラ・ソム	シルチン(ゴ ル)	第43～第54 東部
第三	礼	スルンホルロ(ト サラグチ)	ボタルチョロー・ソ ム	デムベレル (トサラグ チ)	第54～第65 東南部
第四	智	ダムダンジャヴ (トサラグチ)	ブヤントボラグ・ソ ム	メンドバヤ ル(トサラグ チ)	第65～第11 西南部
第五	信	ボムジャルガル (ダイチン)	ノヤン・オーラ・ソ ム	ナムサライ (ダイチン)	第11～第19 西北部

の戸口檔册に34戸124口がバローン・ソムとして登録されていながら、各ソムの代表者や章京中にこの集団に所属する者は確認できない。またシネチュード・タイジ及びそのハムジャー構成員も同様である。このことを、どのように考えるべきであろうか。

これはおそらく、150戸1ソムというソム編成方法と関わりがあると思われる。表4は、1922年の戸口册における戸口数をオトグ・バグごとに表にしたものである。

これによると、ダイチン・オトグは、1922年の時点でタイジ2、随丁8、箭丁113戸を有する一方で、ホンタイジ・オトグはタイジ1戸、随丁11戸を有するにすぎない。両バグは、清代から一人の族長の統率下に置かれており、特にホンタイジ・バグの人口の減少から、ダイチン・バグに統合されたのではないかと推測したい。

次にゴル・ハムジャーについて。清代ザサグ最近親のタイジは、シネチュードのタイジと合して系譜が作成され、かつ族長をいただいております、一つのバグないしはオトグを形成したものと考えられた。しかし1923年のソム編成においては、ゴム・ハムジャーのみでデルゲルバトムンフ・オーラ・ソムを形成し、ザサグ直属のソム箭丁と考えられたバローン・ソム34戸124口からは代表や章京は出ていない。1922年当時ゴル・ハムジャーは148戸を数え、ほぼ一ソムの定員を満たしているため、一ソムの編成が可能である。それではシネチュードのタイジ及び随丁、バローンの箭丁はどうなったのだろうか。これも推測になるが、おそらくトサラグチ・オトグによって編成された二つのソム、すなわち、ボタルチョロー・ソムとボヤントボラグ・ソムのいずれかに編入されたのではあるまいか。五ソムの

表4：1922年ビシュレルト・ザサグ旗オトグ・バグ戸口数

オトグ・バグ名	身分	戸数	口数	戸数計
ゴル	ハムジャー	148	614	148
シネチュード	タイジ	5	25	12
	ハムジャー	7	33	
ズーン	タイジ	5	14	24
	ハムジャー	19	92	
トサラグチ	タイジ	29	128	228
	ハムジャー	54	214	
	ソム	145	534	
ダイチン	タイジ	2	3	123
	ハムジャー	8	24	
	ソム	113	453	
ホンタイジ	タイジ	1	2	12
	ハムジャー	11	70	
ヒヤナル	ソム	48	184	48
バローン	ソム	34	124	34
ホーチド	ソム	20	67	20
ハロール・バグ		31	103	31

ホショー境警備分担の分布を見ると、ボタルチョロー・ソムがデルゲルバトムフ・オーラ・ソムの南に接しており、このソムにザサグ属民中のシネチュード部分とバローン・ソム箭丁が編入されたのではないか。つまり 228 戸を数えるトサラグチ・バグ中の 150 戸でボヤントボラグ・ソムが編成され、残る住民とザサグ属下のバローン・ソムとシネチュード・タイジ及びその随丁をもってボタルチョロー・ソムを編成したと考えておく。

ソム中のヒヤナルとホーチドについては、ズーン・バグとともにバヤンハン・オーラ・ソムを構成したことが明らかであるが、清代には見ることできたズーンのソム箭丁が 1922 年には見られない。ズーンのソム箭丁部分とヒヤナル・ホーチド両者の関係は不明だが、相互の継承関係を想定することは可能かもしれない。

いずれにせよ、地方行政組織改革によって中末旗に編成された五つのオトグは、基本的に旧体制下の五つのオトグ・バグ集団を基盤としたものであったと考えられる。

### 第三節 その他の事例

清代におけるオトグやバグと人民政府によるソム編成との関わりを示唆する事例は他の旗についても報告がある。サインノヤン部ダライ王ツェデンソドノム旗（中左旗）の 1923 年 5 月 18 日（旧暦 4 月 3 日）に開催された同旗印務処官員・ソム・オトグ代表第一回会議

の決定によると、同旗の新しいソムの編成は以下のごときのものであった。

章京ダシドンドグのアンギでは、貝子バトボルド、ボルジギン・タイジナル、タイジ・デンドエヴラヴダン、オイドヴ等4バグを1ソムとする。章京タイジ・ツェムベルラーシのアンギでは灰色馬群(саарал адуу)、茶色馬群(бор адуу)、タイジ・ジャムバ、サインヒシグ、ヤンサンジャヴらの5バグを1ソムとする。章京アヨーシのアンギではガンボルド、アル・サーラル2バグを1ソムとする。タイジ・トゥムルバートル、シャラヴゾンドイ、ダルガ・シャグダルスレンらの3バグを1ソムに組織し、筆帖式ヨンドンを章京に充てる。アル・ハムジラガを1ソムに組織して官員エルデネバトを章京に充てる。章京ゲンデンペルのアンギでは、大ハムジャー2オトグを1ソムにする。ゴル・バグを1ソムとし、驍騎校ボヤントグトホを章京に充てる。章京ワンジルツェレンのソムの5オトグをそのまま1ソムとし、章京ゴンゴルスレンのソムの4バグをそのまま1ソムとする。ウブル・ハムジラガ、シャビ両オトグを1ソムとし、章京に官員ドヴドンを充て、それぞれの事務を司らせ、以前定めたソム、バグの驍騎校等とタイジの族長等を全て廃止することに定めた(29)。

この旗は清代には3佐領であったが、23年に10ソムが組織されたのである。ダライ王旗においても、ソム編成に当たって、旧佐領ではなく、オトグ・バグなどの社会組織が基盤となっている点が中末旗の事例と共通している。

かかる事例は、ハルハの多くの旗で確認することが可能と思われる。今後事例を蓄積する必要はあるものの、この改革が、佐領・随丁制度の影に隠れていた前代の実際の基層社会構造を反映した行政区分となったものと評価することも可能であろう。

## 結 語

以上述べ来たったように、1923～1924年に実施された人民政府による地方行政組織改革は、旗の王公タイジ・随丁・佐領という身分構造を解消してソムに統合したものであるが、ソム編成の基盤となったのは、清代の佐領ではなく、オトグあるいはバグと呼ばれる基層社会組織であった。この措置の歴史的意義は、以下のようにまとめることができる。

第一に、新しいソム組織は、旗住民を地縁原理によって編成したものであり、属人的原理に基づく旧体制下の佐領や随丁とは組織原理上本質的に相違する組織である。

第二に、地縁的な社会編成を実現するための基盤となったのは、同じく地縁的な構造をもつオトグやバグであった。タイジや随丁は既存のいずれかの佐領に編入されたのではなく、自らが属するオトグ・バグ構造を基盤として属下とともにソムに編成されたのである。

第三に、人民政府による「ザサグ王公・閑散王公権限規定」「地方行政組織規定」制定は、王公タイジからの支配権力奪取を目的とした。従って改革により王公タイジの行政権力は

廃止されたが、オトグ・バグを基盤とする旗民社会の区分が解体されたわけではなく、オトグ・バグを構成した地縁的社会関係は新しいソムに受け継がれたと考えられる。

だから、ソノムダグヴァが示したような清代の佐領・随丁・タイジという身分による社会編成を新しいソムへと統合したものとするソノムダグヴァによる地方行政組織改革の歴史的な位置づけは、オトグ・バグと新しいソムとの継承関係を無視しているという点で、改革の実態を十分にとらえたものとは言い難い。つまり、清代のザサグ旗社会に伏在した二重の社会構造の内、タイジ・随丁・佐領という蒙古例に淵源する身分構造は解体されたものの、地域の地縁的基層社会構造としてのオトグ・バグの地域区分枠組みは人民革命後に受け継がれたのである。これは、外来の佐領・随丁制度の影に隠れていた清代モンゴル社会の伝統的社會編成たるオトグ・バグが、王公支配の廃止によって旗民の地縁的社會構造へと転化しつつ、地域の基層社会編成の枠組みとして浮上したものと考えられる。

本稿における以上のような結論は、ハルハ全土において確認する必要がある。これについては、1922年に全土で作成された旗民の戸口冊の網羅的な調査と、1923～24年のソム編成の関係を確認する作業が求められる。なぜならば、この戸口冊には、比丁冊のような佐領・随丁の身分別ではなく、オトグ・バグ単位の記載が見られるからである。今後の課題としたい。

## 注

- (1) Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын түүх. Улаанбаатар, 1955. 335-р тал.
- (2) Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Товч Түүх. Нэмж засварласан гуравдахь хэвлэл. Улаанбаатар, 1985. 86-р тал.
- (3) М. Санждорж: Төлөөний түшмэд. *Studia Historica Tomus VIII, Fasc. 11*, Улаанбаатар, 1969. 231-р тал.
- (4) М. Ринчен; Феодалын үйлдвэрлэлийн харилцааг устгасан тухай асуудлаас. *Studia Historica Tomus XII, Fasc. 4*, Улаанбаатар, 1976. 65-р тал.
- (5) Ж. Болдбаатар, Д. Лүндээжанцан: Монгол улсын төр, эрх зүйн түүхэн уламжлал. Улаанбаатар, 1997. 222-р тал.
- (6) Д. Дашдаваа: Улаан түүх. Улаанбаатар, 2003. 64-р тал.
- (7) Ц. Сономдагва. БНМАУ-ын орон нутгийн засаг захиргааны хуваарьт гарсан өөрчлөлтүүд 1921-1965. Улаанбаатар, 1967. 11-р тал.
- (8) 拙稿「清代モンゴル・ザサグ旗官制について：外モンゴル・ハルハ・セツェン＝ハン部中末旗を事例として」『集刊東洋学』第81号、1999年5月30日、118-100頁、「清代ハルハ・モンゴルにおけるタイジと随丁——ハルハ東路セツェン＝ハン部中末旗を事例として——」『国際文化研究』（東北大学国際文化学会）第6号、1999年12月31日、29～43頁、**Чин улсын үеийн монголын засаг хошууны**



- нийгмийн зохион байгуулалтын тухай шинэ асуудал. The Changing Paradigm of Mongolian Studies : Between Documents and the Field. Papers presented at the Twenty-Second Taniguchi International Symposium. Ed. by Yuki Konagaya, Mongolian Culture Studies II, International Society for the Study of the Culture and Economy of the Ordos Mongols (OMSe.V.), Koln Germany, 2001. pp.71-103. 「モンゴルにおける地方社会の伝統的構成単位オトグ・バグについて——モンゴル国ヘンティ・アイマグ、ガルシャル・ソム調査報告——」岡 洋樹編『モンゴル研究論集 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告 I』東北アジア研究センター叢書 第6号、東北大学東北アジア研究センター、2002年、209~233頁及び中村篤志「19世紀ハルハ・モンゴル旗社会の統計史料——トシェート・ハン部左翼後旗の“戸口家畜冊”について、——」『内陸アジア史研究』第18号、2003年3月、63~73頁を参照。
- (9) なお、本稿では、地方行政組織改革以前の旧体制下における部 *ayimag*・旗 *qosiyu*・佐領 *sumu* は「部」「旗」「佐領」と漢名で表記し、新体制におけるものを「ホショー」「ソム」と記すか、必要に応じて漢名と併記してこれを区別することとする。
- (10) Монгол Ардын Намын гуравдугаар их хурал. 1924 оны найм-есдүгээр сар. Дэлгэрэнгүй тэмдэглэл. Улаанбаатар, 1966. 68-р тал.
- (11) Монголд ардын бүгд найрамдах засаг тогтоон явуулсан нь (Баримт бичгүүдийн эмхтгэл) 1921-1926. Улаанбаатар, 1970. 9-10 тал.
- (12) この代表官員については、M. Санждорж: Төлөөний түшмэд. *Studia Historica Tomus VIII, Fasc.11*, Улаанбаатар, 1969.を参照のこと。
- (13) Н. Дангаасүрэн: Ардын хувийн аж ахуйтан феодалын мөлжлөгөөс чөлөөлөгдсөн нь. *Studia Historica, Tomus VII, Fasc. 5*, Улаанбаатар, 1968. 82-р тал.
- (14) Ц. Насанбалжир: Ардын засгаас 1921-1924 онуудад авсан хувьсгалт арга хэмжээнүүд. (Баримт бичгийн эмхтгэл) Улаанбаатар, 1954. 108-109-р тал.
- (15) 同上。
- (16) Завхан аймгийн түүхэн тойм. Улиастай, 1973. 32-р тал.
- (17) Бүгд Найрамдах Монгол Ард улсын анхдугаар их хурал. 1924 оны XI сарын 8-28. Дэлгэрэнгүй тайлан. Улаанбаатар, 1984. 50-р тал.
- (18) Мөн тэнд. 50-51-р тал. 当時旧ザサグ王公が旗長に選出された場合これをザサグ・ダルガといい、非王公タイジが選出された場合にはホショー・ダルガと呼んだ。
- (19) 両規定は、Ts. ナサンバルジル編の資料集に収録されているが (Ц. Насанбалжир: Ардын засгаас 1921-1924 онуудад авсан хувьсгалт арга хэмжээнүүд. (Баримт бичгийн эмхтгэл) Улаанбаатар, 1954. 46-63-р тал.)、本稿では、モンゴル国立図書館所蔵の両規定原本を使用した。これは行政組織改革に当たって人民政府が印刷したものである。モンゴル人民党第三(二)回党大会第六回会議(1924年8月9日)での内務副大臣デンデヴによる報告「内務省の内政改善について」への代議員からの質疑に対する応答によると、この規定は「行政組織、全バグに足り及ぶように考え、2500部印刷したもので、「第二刷刊行の準備をしている」とある。アルヒーヴ所蔵の版本もその一部と思われる。

Монгол Ардын Намын гуравдугаар их хурал. 1924 оны найм-есдүгээр сар. Дэлгэрэнгүй тэмдэглэл. Улаанбаатар, 1966. 71-р тал.

(20) モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著『モンゴル史』1、東京、1988年、199頁。

(21) Ц. Сономдагва: БНМАУ-ын орбон нутгийн засаг захиргааны хуваарьт гарсан өөрчлөлтүүд 1921-1965. Улаанбаатар, 1967. 10-р тал.

(22) モンゴル国立歴史中央アルヒーヴ CX-81, Д.-1, хн.13. 目録登録名: Хүн хөрөнгийг дэлгэрэнгүй данс. 原簿冊表紙の題名は以下の通り。olan-a ergügdegsen-ü arban qoyaduγAr on jun-u segül-sar-a-du, sečen qan ayımaγ-un čin wang-un jerge bisireltü Jasaγ törü-yin giγün wang dorjicerin, süjügtü dayičin beyile jangčangqurlu, qubilγan lam-a jamiyangtүbdüngnim-a-yin qubi ba, qariγatu qosıγun-u tusalaγči түsimed, tayijinar, sumu, qamjilγan-u бүküyile күmүн ama körüngge mal-i jisa mal-un qamtu bayičayan тоγулаγулju ergүkү čese. 152 葉からなり、二種類の簿冊が合冊されている。横 26.5×縦 26cm.前半 (1~51 葉) は、各戸主の名と年齢の下に、口数・馬・駱駝・牛・羊の数が記載され、さらに戸の構成員の名と年齢が注記される。後半の簿冊は戸主を台頭し、家族が一人一人別々に記載される。前半・後半いずれも、旗住民の表の後にジャスの家畜数の表が附載されている。

(23) 本章で用いるのは、モンゴル国立歴史中央アルヒーヴ所蔵の以下の議事録である。

CX-81, Д. 1, хн.18 Хошууны хурлын тогтоол. Mongγul ulus-un arban dörbedüger on jirγuγan iberub-yin doluγan sarayin arban doluγan naiman-u edüre mongγul arad-un Jasaγ-un γajar-ača jıγan γarγaysan nutuγ-un jakirγan-u el-e dürim kemjıyen-ü yosuγar qosıγun-u qural negegejü kelelčen тоγтаγaysan angqaduγar quralun тоγтаγал.

CX-81, Д. 1, хн. 28 Хошууны анхдугаар хурлын тогтоол. olan-a ergügdegsen arban γurbaduγar on-u qosıγun-u qural-un тоγтаγал. egüni bisireltü wang-un qosıγu kemebesü jokimui.

なお他のホショーの同種の議事録としては、これまでに M. サンジドルジと Ts. ナサンバルジルによって三つの事例が報告されている。Ц. Насанбалжир: Нэгэн хошууны ардын ардчилсан засаг захиргаа тогтсон нь. *Studia Historica Tomus IX, Fasc. 18*, Улаанбаатар, 1973. 65-73-р тал. 同 Булган хан уулын хошууны хурал. Түүхийн Судлал. *Studia Historica Tomus X, Fasc. 14*, Улаанбаатар, 1975.33-45. М.Санждорж: Нэгэн хошууны хурлын тухай товч тэмдэглэл. Эрдэм шинжилгээний өгүүлүүд. *Studia Historica, Tomus VII, Fasc. 5*, Улаанбаатар, 1968. 91-100.

(24) CX-81, Д. 1, хн.18, 2b:l.8-3a:l.13.原文は以下の通り。

tabuduγar jüil. qariγatu tabun sumun-u ner-e ken ken kemen nereyidkü yabudal-i kelelčeged örüsüel, jirum, yosulal, mergen, itegemji kemegsen anu, nigen tuyil ba arγ-a bilig-eče törүjү γaruγsan aliba yaγum-a anggijirču үlү čidaqu tabun maqabud buyu nigen күmүн-ү biy-e-eče anggijirγulbasu үlү bolqu tabun esite-yin ner-e bolqu anu, uul nigen qosıγu tabun sumu bolun jokiyaduγsan-dur tokiyalduju bolqu gün udq-a bui ba, basaču egүн-iyer dotuγadu-yin neng nigen biy-e bolqu yerүgel barildulγ-a-tu sanay-a-yi ilerkeyilen nigedkegsen (3a) qola učir bui bolqu metü kemen janggin duγarjab-yin sumu-i örüsüeltü sumu, janggin širčin-yin sumu-i jirumtu sumu, janggin süringqurlu-yin sumu-i yosulaltu sumu, janggin

damdangjab-yin sumu-i mergen sumu, janggın bumjaryal-yin sumu-i itegemjitü sumu kemen tus tus nereyiddükü-ber toytuba.

qural-un daruy-a-du yombuwačir,

ded daruy-a-du damdangjab

narin bičig-ün daruy-a-du duyarsürün

örüsiyeltü sumun-u gisigün duyarjab, čoyijungjab, lodui, lubsanggengdün.

jirumtu sumun-u gisigün širčın, lubsangdawa, sangjai, čewang, jambalnorbu,

yosulaltu sumun-u gisigün sürüngqorlu, dalhajib, čebegjab, tongji,

mergen sumun-u gisigün damdangjab, jigmid, mengdebayar, baljingnim-a

itegemjitü sumun-u gisigün bumjiryal, namsarai, norbu, satad

nar bolumui.

(25) CX-81, Д. 1, хн. 28. 原文は以下の通り。

qoyaduyar jüil,

qariyatu qosiyun-u sumu bay ba, arban ger-i kerkin bayiyulqu-i erkilen toytuyaqu yabudal-i kelelčeged qosiyun-u bükü toyalaydaysan erüke naiman jayun arban dörbe-yin dotur-a qabsuraysan erüke nigen jayun arban dörbe-i tayilyad tusayar körüngge büküi jingini erüke doluyan jayu-yi tayilan arban ger arban dörben bay dörben güičed sumu bolyaqui-dur üligsen nigen jayun erüke-i dürim-ün yosuyar nigen sumu bolyan toyačaju tabun sumun-u ner-e jokiyaju toytuba.

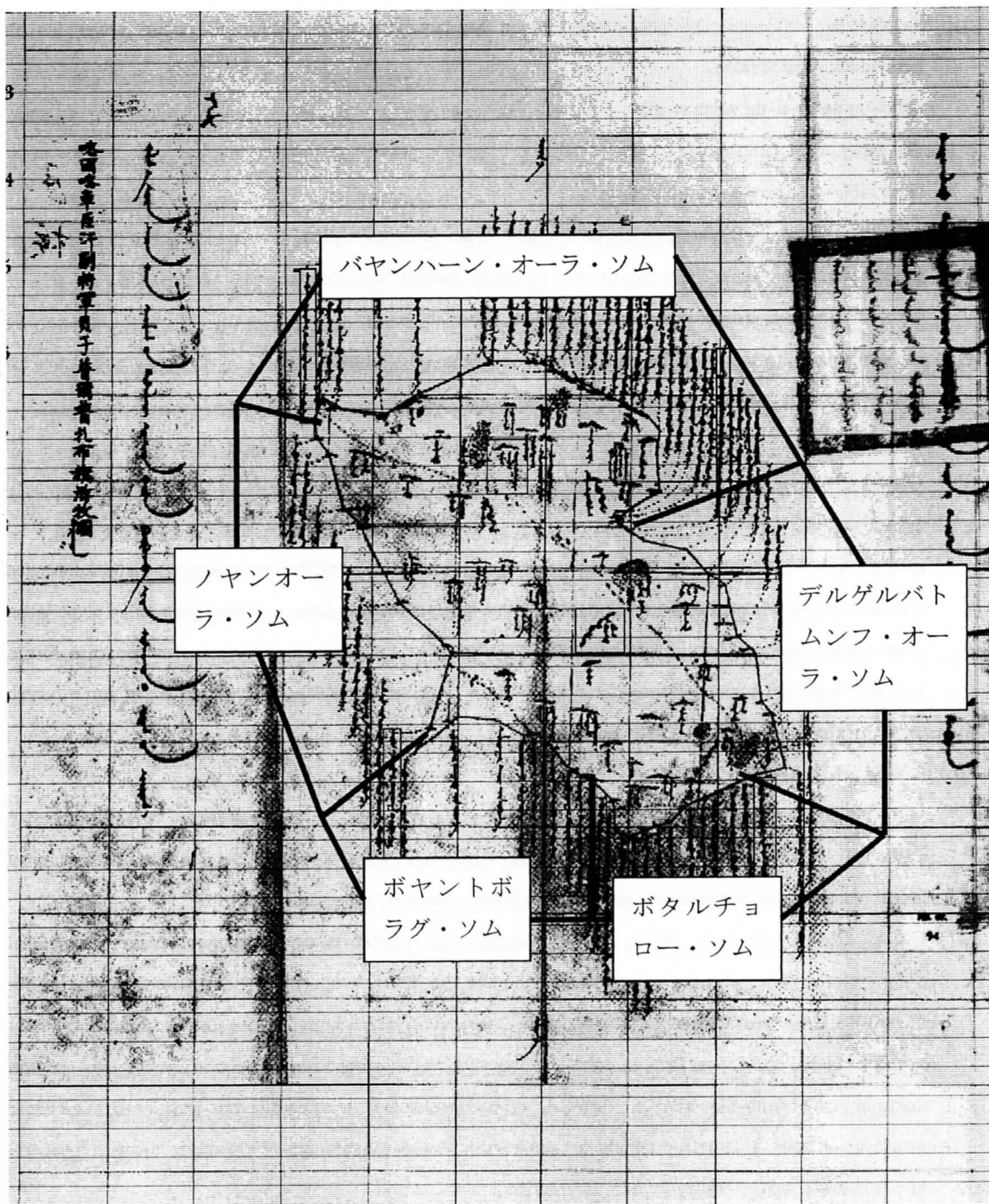
(26) CX-81, Д. 1, хн. 28.

sumu-ud-un qural-ača medegülügsen bayangqayan ayula-yin sumu-yin janggi dasinerin delgerbatumöngke ayula-yin sumun-u janggi sirčın, butar čilayun-u sumun-u janggi demberil, buyangtubulay-yin sumu-u janggi mengdubayar, noyan ayula-yin sumun-u janggi namsarai, nar-i batulan toytuba.

(27) CX-81, Д. 1, хн. 28. 同上。原文 : kijayar-i čaydan sergeyilegülkü-dü tabun sumun-u ijayura (3a) nutuylan sayuqu yažar-un öber öber-ün oyir-a ildum-i boduju nigedüger sumu, arban yisüdüger tabun tolyai-yin obuyan-ača jegün teysisi döčın yurbaduyar yaltu üneged-ün obuy-a kürtel-e, qoyaduyar sumu mön yaltu üneged-eče tabin dörbedüger jam-un köbe-yin obuy-a kürtel-e, yurbaduyar sumu mön jam-un köb-eče jirin tabuduyar qarčilayutu-yin obuy-a kürtel-e, dörbedüger sumu mön qarčilayutu-ača arban nigerdüger qawačayan-u obuy-a kürtel-e, tabuduyar sumu mön yawačayan-ača arban yisüdüger tabun tolyai-yin obuy-a kürtel-e eyin kü tus tus čaydan jakirqu

(28) ソム名となっている山名・地名の内、バヤンハン・オーラはガルシャル・ソム北部にバヤン・オーラ・ブリガードとしてその名が残り、ノヤン・オーラはソム東部に標高 1467 メートルとして見える。ボヤントボラグは、現在のソム中心地ボヤントの南近傍に存在する。デルゲルバトムフ・オーラとボタルチョローは確認できなかったが、バヤンハン、ノヤン両山とボヤントボラグの位置は、三つのソムの位置に対応している。

(29) Ц. Насанбалжир: Нэгэн хошууны ардын ардчилсан засаг захиргаа тогтсон нь. Studia Historica Tomus IX, Fasc. 18, Улаанбаатар, 1973. 69-р тал.



ガルシヤル・オーラ・ホショー境警備分担図

Walther Heissig: Mongolische Ortsnamen Teil II Mongolische Manuskriptkarten in Faksimilia.  
 Wiesbaden, 1978. 757: Karte des Banners des Purbüjab (Setzen Khan-Distrikt). Hs.or.94(86)により作成

## モンゴル人民共和国における文字政策の転換点 ーラテン文字からキリル文字へー

東北大学・東北アジア研究センター 栗林 均

### はじめに

モンゴル国（旧モンゴル人民共和国）では、旧ソ連邦内の諸共和国における文字改革の動向と呼応して、1930年代に伝統的なモンゴル文字からラテン文字へ変換の方向が打ち出され、1940年代にはそれがキリル文字（ロシア文字）へと方向転換が行われた。こうして、モンゴル語を表記するために1940年代にキリル文字に基づくアルファベットが採用され、以後半世紀以上にわたってモンゴル国の書き言葉として使用されてきた。

モンゴル人民共和国におけるこうした文字改革の経緯は、ツェ・シャグダルスレンの『モンゴル族の文字概説』（註1）によって、そのあらましを知ることができる。

- ・1930年2月に開催されたモンゴル人民革命党の第8回大会において、モンゴル文字からラテン文字への移行の方針が採択された（181頁）。
- ・1940年3月に開催されたモンゴル人民革命党の第10回大会の党中央委員会政治報告で、モンゴル文字からラテン文字への移行の方針が再確認され、今後5年内に準備を行って一般に使用することとした（181頁）。
- ・1941年2月21日、新しいラテン文字の制定に関する党中央委員会・閣僚会議の第17/13号合同決定が採択された。主な内容は次のとおり。
  - (1)ラテン文字委員会の作成した29のラテン文字をそのまま採用する。
  - (2)長母音は母音字を重ねて書く代わりに長母音符号を用いる。印刷条件が整うまでは長音符号の代わりにアポストロフィを用いる。
  - (3)第2音節以降の弱化母音に関しては、完全に消失した母音は表記せず、弱化しても聞き取れる母音は表記する。大衆の話し言葉に近く、学びやすい新しい規則を作成することを科学委員会に課す。
  - (4)正式な正書法規則を作成するまでの期間、学校やサークルで教える教本となる暫定的な規則を3月30日までに作成することを科学委員会と国民教育省に課す（182頁）。
- ・1941年3月25日付けモンゴル人民革命党中央委員会・閣僚会議の「モンゴルの新文字の決定に関する」合同決定第22/28号は、モンゴル文字をラテン文字化する方針を転換して新しくロシア文字を採用し、移行することにした（183頁）。
- ・1941年5月9日、人民閣僚会議とモンゴル人民革命党中央委員会幹部会は「ロシア文字に基づいてモンゴルの新しい文字を制定することに関する」第25/27合同決議を採択。これによると、ロシア文字にもとづきモンゴル文字を全35文字とする。新しい文字を使用する暫定規則を1週間以内に作成し公布することと、アルファベットの教科書を短い期間で準備することを科学委員会と国民教育省に課す。さらに、小学校の第1・第2学年において31・32学年度【1941-1942



年度】からすべての授業を新文字で行うこととした。ただし、この決定は第2次世界大戦の影響で延期された（190頁）。

- ・1945年5月18日、モンゴル人民革命党中央委員会・閣僚会議は「すべての出版物および国の公務を1946年1月1日より新文字で行う」旨の第31/27号合同決議を採択した（190頁）。

以上がシャグダルスレンによるラテン文字化とキリル文字化の概要である。このうち、1930年代におけるラテン文字への移行に関しては、モンゴル語を表記するためにラテン文字のアルファベットが作成され、それによる学習書や辞書も出版された（多くはモスクワかレニングラードで出版されたものである）。しかし、モンゴルの新聞、雑誌、書籍等の出版物のほとんどは依然としてモンゴル文字で印刷され、またラテン文字の使用も公的機関や学校教育にまで及ぶものではなかった。こうしたことから、モンゴルにおける1930年代のラテン文字化は、あくまでも移行への準備段階にとどまり、一般に普及するには至らなかったとすることができる。

他方、モンゴルにおけるキリル文字の正書法の作成に中心的な役割を果たしたツェ・ダムディンスレン（Ц. Дамдинсүрэн）は、1940年代に行われたモンゴル文字からキリル文字への移行の過程を次のようにまとめている（註2）。

- ・1940年に開催されたモンゴル人民革命党の第10回大会で、伝統的なモンゴル文字を廃してロシア字に基づく新文字を採用することに関する決定が行われ、翌1941年から文字の切り替えが行われた。（3頁）
- ・1941年5月に採用され、公布された「新文字」はロシア字32字に  $\theta$  と  $\gamma$  の2文字を加え、 $\ddot{e}$  の文字を独立の文字に数えて35文字である。ロシア字のすべてを採用したものの、 $\kappa$ 、 $\phi$ 、 $\psi$  の3文字はモンゴル語の単語を書くのには用いないので、実際使用している文字は32文字である。（3頁）
- ・新文字を採用した後、正書法を作成する作業に入り、1941年11月に新文字の正書法規則を公布した。新文字正書法規則は1941年の冬に作成し、1942年に出版した。（4頁）
- ・その後4年経って、1946年には新文字規則を再度点検し、多くの学者や知識人、教師らの意見や批判を考慮して若干の修正を行い、その概要を公刊した。

ダムディンスレンのまとめは、モンゴル文字からキリル文字への移行の過程がより具体的に述べられているが、次の点ではシャグダルスレンの記述とは矛盾している。つまり、1940年における党大会の決定をシャグダルスレンは「モンゴル文字からラテン文字への移行」に関するものとしているが、ダムディンスレンは「キリル文字への移行」に関するものとしている。これは、ダムディンスレンの思い違いか、あるいはラテン文字化ということを取って表に出さないようにした当時の配慮によるものであり、「ラテン文字への移行」に関するものであったことは後に見る資料によっても明らかである。

ここに紹介するのは、1940年代にモンゴルでモンゴル文字からキリル文字への移行が行われた際に、これまで言及されていない状況があったことを示す2つの資料である。

第1の資料は、1940年11月23日の『ウネン』紙 No.125（1884）とそれに続くNo.127（1886）、No.128（1887）の3号に続けて掲載されたツェ・ダムディンスレンの「弱化母音と新文字の問題」

と題する論説である。論説はモンゴル文語（モンゴル文字）で書かれ、モンゴル語をラテン文字化するに際して弱化母音（単語の第2音節以降の短母音）を一切表記しない方式を提唱している。

上に引用したシャグダルスレンのまとめによれば、1940年3月の第10回党大会で、モンゴル文字からラテン文字への移行が再確認された後、1941年2月にラテン文字のアルファベットと具体的な正書法の方針が決められ、その約1ヶ月後にラテン文字からキリル文字への方向転換が行われた。1940年の3月から約1年の間、モンゴル語のラテン文字への移行が具体的に検討されていた訳であるが、この時期の状況はこれまでほとんど知られていない。この資料によれば、ラテン文字のアルファベットは1930年代に試用されていたものとまったく同じものではなかったこと、正書法も新たに作成することが検討されていたこと、新たな正書法では弱化母音の表記の問題が焦点となっていたこと、この時の文字改革にはツェ・ダムディンスレンが中心的な役割を演じていたこと、等を読み取ることができる。

第2の資料は、1945年3月6日付『ウネン』紙、No.1である。一枚の紙を二つ折りした4頁の新聞で、1面の大きさは縦36cm×横25cmである。号数のNo.1は、新文字（キリル文字）正書法で発行された記念すべき最初の号と考えられる。

1941年3月25日には、その1ヶ月前に再確認された「ラテン文字への移行」が一転して「キリル文字への移行」に方向転換がなされたわけであるが、それから実際に「キリル文字への移行」が実施されるまでにはさらに数年を要したことは上のシャグダルスレンとダムディンスレンのまとめからも見て取ることができる。その大まかな経緯は、1941年5月9日にキリル文字アルファベット35文字を公布。直ちにキリル文字への移行を行う決定を出したが戦争のために延期。1942年にキリル文字の正書法規則を出版。1945年5月18日に翌1946年1月1日より、全面的にキリル文字への移行を決定。1946年にキリル文字正書法を再点検し、正書法規則を出版。

第2の資料は、1942年のキリル文字正書法規則にもとづいて書かれたモンゴル語の実例であり、1946年から実施された正書法がこれにどのような修正を加えて成立したものか知ることができる。これをみると、ダムディンスレンが「1946年には新文字規則を再度点検し、多くの学者や知識人、教師らの意見や批判を考慮して若干の修正を行い、その概要を公刊した」という、修正の中心は長母音の表記に関するものであった。

これらの資料は、1982年8月にウランバートルで開催された第4回国際モンゴル学会議に栗林が参加した際に、故ダムディンスレン教授から直接お借りして、複写したものである。当時私は大学院を終えたばかりで、これが最初のモンゴル訪問であった。言語部会の会議場で、高名なダムディンスレン教授と初めてお会いしてお話した際、モンゴルにおける新文字正書法の成立に関心を持っていることを伝えたところ、教授はわざわざ自宅から古い新聞の切抜きファイルを持ってきて貸してくださった。複写は、当時日本大使館に勤務していた富永文朗氏に是非にとお願いして実現することができた。その後、この貴重な資料を活用することもなく保存していたわけであるが、今回こうした形で発表することによって、わずかなりとも両氏のご厚意に報いることができれば幸いである。ここに、改めて両氏の寛大なご厚意に深甚な感謝の意を表したい。

## 資料 1.

これは『ウネン』紙 No.125 (1884)、および No.127 (1886)、No.128 (1887) に連載されたツェ・ダムディンスレンの「弱化母音と新文字の問題」と題する論説である。これらはいずれも記事の切抜きであり、新聞の号数は欄外の記載によって確認することができる (No.127 については該当記事の裏面に号数の記載がある)。いずれにも日付の部分は無いが、No.125 (1884) の記事の左端に手書きで「23/XI 1940」と書かれており、1940年11月23日付のものと考えられる。

資料では、モンゴル文語で書かれた原文の縮小コピーと、それを現在使用されている新文字 (キリル文字) 正書法に直したものを掲げる。キリル文字正書法に直した文章を付したのは、縮小コピーでは可読性に欠けることと、なじみ易さを考慮したことによる。

上述のように、この論説は、モンゴル語をラテン文字化するに際して弱化母音 (単語の第2音節以降の短母音) を一切表記しない方式を提唱している。その内容を要約すると、次のようになる。

\* \* \*

### 1-1.

モンゴル語は、過去七・八百年の歴史の中で、単語が短縮されて来た。モンゴル語の単語が短縮した現象を新文字の採用に際して考慮しないわけにはいかない。モンゴル語の単語がどのように短縮されてきたかを見ると次のような場合がある。

1. 語頭における音の消失：語頭の h の音が消失し、また若干の単語で語頭の母音が消失した。
2. 母音にはさまれた γ が消失したあと、2つの母音が融合して長母音が生じた。
3. 2つの単語が結合して1つの語となった。
4. 語末の n 音が消失した。
5. 強勢のない短母音が弱化し、時には完全に聞こえなくなった。

ここでは、最後の現象をどのように新文字の正書法に反映させるかということが問題となる。

---

### 1-2.

新文字の正書法でこのような弱化母音を一切表記しないことにすると、以前に作成した新文字の計画にいくつかの説明や修正をほどこさない訳にはいかない。

大原則は、ラテン文字 26 文字にどのような新しい文字も追加せず、それだけでモンゴル語を表記するということである。これに基づいて、次の3つの説明が必要となる。

1. 長母音について。単語の第1音節の長母音と短母音は必ず書き分けなければならない。第2音節以降では、短母音 (弱化母音) を一切表記せずに、長母音を母音字1つで表記する。
2. 単語の第1音節では、i の後に a の文字を書く場合がある。例：iarx (勝つ)、shiatx (燃える)。単語の第2音節以降にも ia を表記する。例：taria (穀物)、xunias (鋳)。
3. ハルハ・モンゴル語には n と ng の音があり、n は母音の前に、ng は子音の前あるいは語末に現れる。これらには別の文字を用意することはせず、n のあとの弱化母音の代わりにアポストロフィ (') を書く。例：jabn (行き) -- jabn' (行きます) , manx (砂丘) -- man'x (見

張る)。

さらに、新文字の正書法に次の3つの修正を加える。

1. 単語の第2音節以降に現れる母音字はすべて長く発音する。ただし i の文字はこの規則に当てはまらない。短い i は i で、長い ii は y で表す。例: shabi (弟子) -- shabiyn (弟子の)、ym (このような)、shalqxyn (検査することの)、tenyx (伸ばす)、ul (足裏、靴底) -- ulix ([犬・狼が]吠える) 等。
2. 長い i を y で表記するため、y には別の文字 j を使用する。他方 j は sh, ch と同様 zh で表記する。
3. γ には q の文字をあてて g と区別する。例: arq (方法) -- arg (アルガルを集める籠)、buq (鹿) -- bug (悪霊)、agt (去勢馬)、maqđ (確かに)、xerg (用事)、medgdx (知られる)、ger (家)、等。

こうした正書法の利点は、次の点にある。

1. 基本的なラテン文字(ローマ字)に1字も追加していないので、ラテン文字のタイプライターや植字ケースをそのまま用いて支障がない。
2. 学習が容易になる。弱化母音をどこに書くか・書かないかといった現在の厄介な混乱が解消される。口語に近くなる。
3. 速く書くことができる。植字やタイプもすべて速くできる。弱化母音を一切表記しなければ文字数が5分の1節約され、従来の5頁が4頁に収まる。このような経済的な利点も多い。

---

### 1-3.

以下は、弱化母音を一切表記しない方式に対する批判に答えたもの。

1. 弱化母音を一切表記しないと、多くの子音字が連続して見た目がよくない—慣れの問題である。新しいものはすべて最初は奇妙に思われても、目が慣れればそういうことは無くなる。
2. 外国語にこのような子音字が連続している例がない—これはモンゴル語の問題である。この方式はモンゴル語の特徴を正書法に反映させたもので、正書法を外国語に合わせる必要はない。
3. ö, ü のように、文字の上に2つの点をつけるのは、書きにくい—これらはラテン文字のタイプライターにある。また多くの母音字を重ねて書くことがなくなったために点の数も少なくなる。たとえば、以前は tölöblögöö と書いていたのを今度は tölblgö と書くため、難しいことはない。
4. 音節に分けて書くやり方に反している—音節は必ずしも母音を含むものではなく、子音だけでも成り立つ。モンゴル語の弱化母音はゆっくり話せば発音され、早く話せば無くなり、安定していないため、弱化母音に基づいて音節を区切ろうとすると、解決策が無くなる。弱化母音を一切表記しないことにすれば音節(をどのように分けるか)に関する厄介は軽減する。
5. 第1音節にだけ母音を書き、第2音節以降に弱化母音を書かないのは、実際の発音でどのよ

うな母音で発音していか分からなくなる――モンゴル語には母音調和があり、問題ない。ポッペの作成したブリヤート語規則の第14項目には、単語の第1音節には7つの母音すべてが現れるが、それ以降の音節に短母音は2種類しか現れない。これは第2音節以降の短母音を男性・女性の2種類だけでそれ以上は区別しないということである。大まかに言えば、先行する強勢のある母音に引かれて類似の音になる。

6. 詩を朗読するとき、弱化母音は明瞭になる――詩は文語調で朗読するのでなく、現代の口語で読むべきである。口語では強勢のない短母音は不明瞭に発音されるので、口語で詩を読めばやはり弱化母音は不明瞭に発音される。
7. 弱化母音を一切表記しないのではなく、現在聞きとれる弱化母音を書くのがよい――単語のどこに弱化母音を書くようにするか、規則化するのは難しい。概してモンゴル語の強勢の無い短母音はすべて弱化し不明瞭である上、人によっても発音が異なる。弱化母音があると言って書く人もいれば、それが無いと言って書かない人もいるので、また従前の混乱が続くことになる。さらに弱化母音を書いたり書かなかったりすると、第2音節以降の長母音を1つの母音字で表すことができなくなる。弱化母音を書いたり書かなかったりするより、一切書かないことにすれば混乱も無く分かりやすい。
8. 口語から離れることになる――逆である。弱化母音をすべて表記することは口語から離れてしまう。弱化母音を一切書かないのは、口語と完全に合致していると言うことはできないが、以前の正書法と比べれば著しく近く、冗長さが無い。概略の表記である。今回の正書法は、学びやすく余計なものが無い。
9. 同じ表記の語が多くなる――同じように発音して混乱が生じていないのであるから、同じように表記してはいけないということにはならない。同音異義語を表記で区別しようとするとき口語と表記の差が大きくなる。弱化母音を一切書かないかどうかは別として、発音が同じものは同じように表記するのがよい。
10. 規則が多くなる――弱化母音を書くとなれば多くの複雑な規則が必要となるが、一切書かなければ、次の4つの規則で足りる。
  - 1) 弱化母音は一切表記しない。
  - 2) 長母音は単語の第1音節では母音字を2つ連ね、第2音節以降では母音字1つで表記する。
  - 3) i は上の規則の例外となる。短い母音は i で、長い母音は y で表記する。
  - 4) 後ろに母音字を伴わず、明瞭に聞こえる n にはアポストロフィをつける。
11. 外来語をどのように表記するのか――元来は外国語でも、完全にモンゴル語化した語はモンゴル語と同じ規則に従う。もともとはチベット語の単語でもモンゴルで一般に用いられている人名もモンゴル語の単語と同じく扱う。例：Xand-sürn, Damdin-zab。2語以上からなる人名は、単語の間にハイフンを置く。例：Mönx-Cogt, Enx-Bajr。

ただ、世界で用いられている用語を書く際には、原語の綴りや発音を考慮して書く。外国の述語の表記に関しては特別の規則が必要である。

\*

\*

\*



この論説の中には、ラテン文字のアルファベット表と、その正書法によって表記した文章の例が掲載されている。以下に文章表記の例を採録し、現在のキリル文字正書法と対照する。

Pushkin	Пушкин
Arilsn borony ecsyn üül	Арилсан борооны эцсын үүл
Ariun ogtrquid qancar хөблзөд	Ариун огторгуйд ганцаар хөвөлзөөд
Baran süüdre qazrt буулqzh	Бараан сүүдрээ газарт буулгаж
Bajrt ödrygi qutazh bain'.	Баярт өдрийг гутааж байна.
Sajxn chi tengrygi бүрхед	Саяхан ч тэнгэрийг бүрхээд
Sacrsn caxilqan chamaigi ороqod	Сацарсан цахилгаан чамайг ороогоод
Ajnqyn duugi nizhgnüln baizh	Аянгын дууг нижигнүүлэн байж
Anqsn qazrygi xurar undlb.	Ангасан газрыг хураар ундлав.
Delxei sergzh boro arilla,	Дэлхий сэргэж бороо ариллаа,
Dendl ügei odo tonilbl sain.	Дэндэл үгүй одоо тонилбол сайн.
Ajsyn salxi nabchylgi илbser	Аясын салхи навчийг илбэсээр
Amrlinqui tengres archn' chamaigi.	Амарлингуй тэнгэрээс арчина чамайг.

この論説が出たのは 1940 年 11 月であるが、これは同年 3 月にモンゴル文字からラテン文字への移行が再確認された後、具体的にどのようなアルファベットと正書法でモンゴル語を表記するかが議論されていた時期であることが分かる。その際、ラテン文字のアルファベットと正書法に関しては、1930 年代に試用されていたものがそのまま受け継がれてはいなかったことは注目に値する。

1935 年にレニングラードで出版された『ロシア語・モンゴル語口語辞典』（註 3）では、モンゴル語はラテン文字アルファベットで表記されている。辞典の最初に付されている「文法要覧」はポッペ（Н.Н.Поппе）によるものであるが、そこに掲げられているラテン文字アルファベットは次の 27 字である。

A a	B b	C c	Ç ç	D d	E e	F f	G g	H h
I i	J j	K k	L l	M m	N n	O o	Ө ө	P p
R r	S s	Ş ş	T t	U u	V v	Y y	Z z	Ž ž

これに対して、ダムディンスレンの掲げているラテン文字アルファベットは、次の 30 字となっている。

A	B	C	CH	D	E	F	G	H	I
J	K	L	M	N	O	Ö	P	Q	R
S	SH	T	U	Ü	W	X	Y	Z	ZH

前者と後者の違いは、文字の種類に限ってみれば、次の5点である（それぞれ左側が1930年代の表記、右側がそれに対応する1940年の表記）。

ç = ch    ș = sh    z = zh    ɵ = ö    y = ü

ここで両者の最も大きな違いは、前者で ç, ș, z, ɵ という、ローマ字アルファベットに補助記号を付した特殊な文字が使われているのに対して、後者ではそれらが ch, sh, zh, ö に置き換えられていることである。つまり、1940年のラテン文字化に際して最も重要視されたのは、おそらく印刷技術の問題であり、既存のタイプライターや活字がそのまま利用できるように、特殊な記号を使わないということであったと考えられる。1940年のラテン文字アルファベットでは、Ö と Ü の2字が新しく加わっているが、ダムディンスレンは「ラテン文字（ローマ字）26文字にどのような新しい文字も追加しない」「ö, ü はラテン文字のタイプライターにある」と書いているように、これをラテン文字の一部として扱っている。

このような新しいラテン文字アルファベットで、モンゴル語をどのように表記するかという正書法の問題に関しては、モンゴル語の弱化母音（単語の第2音節以降の短母音）をどのように扱うかということが議論の中心になっていたことが分かる。ダムディンスレンがこの論説で主張しているのは弱化母音を一切表記しないという方式であるが、これは、周知のようにカルムイク語の正書法で採用されていた方式である。

1930年代のラテン文字正書法では、単語の第2音節以降の短母音を表記するに際して、母音の質に関しては母音調和にしたがって a o e ɵ および i のいずれかを書くという規則が決められたが、単語のどこにそれら書くかという母音の位置に関してはモンゴル文語の形をよりどころにしていたと考えられる。aka（兄）modo（木）nege（一）gurba（三）derbe（四）taba（五）nyde（目）といった表記に見られるように、語末の短母音は1930年代のラテン文字正書法では、モンゴル文語と同様な位置に表記されていた。しかし、これらの短母音は人により、場合により、また話す速度により「発音されたり、されなかつたり」する不安定な母音である。こうした弱化母音の表記をどのようにするか、とりわけそれを単語のどの位置に書くか書かないかについて議論が紛糾していたことが伺われる。ここで、ダムディンスレンが出した結論が「一切表記しない」という方式であった。紛糾した議論を終結させるには、きわめて明快な方式であるが、実際の発音に合致しているという支持は得られなかったようである。

翌1941年2月21日付の党中央委員会・閣僚会議合同決定では、次のような方針が確認された。

- (1)ラテン文字委員会の作成した29のラテン文字をそのまま採用する。
- (2)長母音は母音字を重ねて書く代わりに長母音符号を用いる。印刷条件が整うまでは長音符号の代わりにアポストロフィを用いる。
- (3)第2音節以降の弱化母音に関しては、完全に消失した母音は表記せず、弱化しても聞き取れる母音は表記する。

ここでいう、「29のラテン文字」はおそらくダムディンスレンの示した30文字と同様なものと考えられるが、1字の違いが何を意味しているかは不明である。それはともかく、ダムディンスレンが提唱した「弱化母音を一切表記しない」という方式は採用されず、「完全に消失した母音は



ここでは、『ウネン』紙のひとつの記事の内容を要約しておく。

\* \* \*

#### T. ルハグワー「小・中学校に新文字で印刷された教科書」

1941年5月の党中央委員会と人民閣僚会議の合同会議はモンゴルの旧文字を新文字に移行する決定を行った。

この決定を遂行するために国民教育省はすべての学校の生徒たちにモンゴルの新文字を教えることが必要と見なし、小学校と中学校で学習する教科書を新文字で出版することにした。小学校の教科書のすべてを新文字で出版し、中学校のいくつかの教科書を新文字で出版した。たとえば、1, 2, 3, 4年生が学ぶ文法、綴り方、読本、算数、自然(理科)の教科書、また4年生と7年生で学ぶモンゴル地理、5年生で学ぶ植物学、生徒規則、教員手引きの雑誌、小学校指導計画等20種以上の書籍が新文字で出版された。また1945年には小学校のすべての教材を新文字で出版し、8年生中学校の基礎科目授業の教科書を新文字で出版するべく準備を進めている。

全教員は授業の概要、生産計画、成績簿を新文字で作成し、記録することになった。

しかし、教員や生徒が新文字で出版された教科書や物語、詩歌等を読むことは十分でない。新文字で出版されたすべてのものを読み、それぞれの文化教養の発展への足がかりとなった新文字をさらに一層よく学び合おう！

\* \* \*

この記事には「小学校の教科書のすべてを新文字で出版し、中学校のいくつかの教科書を新文字で出版した」として、具体的な教科書の名前が挙げられている。こうした教科書類が文字通り出版されたものとしても、翌1946年に正書法規則の修正が行われたことから、使用されるに至ったかどうかは疑わしい。しかし、このように出版された教科書類が現在まで残っていれば、文字改革の過程を示す実例として、きわめて興味深い資料となるはずである。

註1. Ц. Шагдарсүрэн, Монголчуудын үсэг бичигийн товчоон, *Bibliotheca Mongolica: Monograph 1*, Centre for Mongol Studies, National University, Улаанбаатар, 2001.

註2. Ц.Дамдинсүрэн, "Шинэ үсгийн дүрмийн тухай эрөнхий зүйл", Монгол хэл бичгийн зарим асуудал, Б.Н.М.А.У. Шинжлэх Ухаан, Дээд Боровсролын Хүрээлэн, Улаанбаатар, 1959, 3-14.

註3. А.В.Бурдуков, Русско-монгольский словарь разговорного языка с предисловием и грамматическим очерком Н. Н. Поппе. Ленинградский восточный институт. Ленинград, 1935.







1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

|   |    |   |    |    |
|---|----|---|----|----|
| 1 | Q  | U |    |    |
| 2 | F  | N | T  |    |
| 3 | E  | M | SH | ZH |
| 4 | D  | L | S  | Z  |
| 5 | CH | K | R  | Y  |
| 6 | C  | J | Q  | X  |
| 7 | B  | I | P  | W  |
| 8 | A  | H | O  | O  |

medgdx, 00 ger 00 ...  
 buq, agt, maqd, xerg, ...

arg, arg, buq, ...  
 bug, ...  
 3. ...

zh ...  
 sh, ch ...  
 2. ...

tenyx, ul, ulix ...  
 shablyn, ym, shialqryn, ...  
 shabl, ...  
 1. ...

jabn', manx, man'x ...  
 jabn, ...

... ( ... )  
 ...  
 3. ...  
 ...

2. ...

1. ...

Pushkin.  
 Arilsn borony esyn üül  
 Arlun ogtquid qancar köblzöd  
 Baran süüdre qazıt buulqzh  
 Bajıt ödrygi qutazh bair'.

Sajxu chıı tengrygi bürxed  
 Sacrsn caxılqan chamalgi oroqod  
 Ajraqyn duugi nizhguün balzh  
 Anqsn qazrygi xurar undlb.  
 Delxel sergzh boro arilla,  
 Dendı ügel odo tonlıbl sain.  
 Ajsyn salıxı nabchıygi libser  
 Amrlınquı tengres arehni' ehomalgi.









Ц. Дамдинсүрэн






### Балархай эгшиг ба шинэ үсгийн асуулт

Сүүлийн долоо найман зуун жилийн дотор монгол хэл хэрхэн хөгжиж ирснийг бараглан мэдэх баримтууд баймуй. Эдгээр баримт бичгүүд ба эрдэмтний шинжлэл, хуучин бичгийн хэл, одоогийн олон монгол овогтны ярианы хэл зэргийг нийлүүлэн хянаваас монголын хэл, монголын үг ямагт богино түргэн болж хураагдсаар иржээ. Үг богино болсон дээрээс түргэн цагийн дотор олон үгийг хэлж амжих тул энэхүү богино болж буйг дэвшилт хөгжилт хэмээн үзмүй. Энэхүү үгийн богино болох явдал ганцхан монгол хэлэнд үзэгдэж байгаа хэрэг бус, дэлхий дахинаа ихэд дэлгэрсэн бөгөөд бусад хэлийг бодвол шинэвтэр хэл болох англи хэлний олонхи үг, илүү эгшгээ улмаар гээж нэг буюу хоёр үетэй болж баймуй.

Гэтэл түүний үсгийн дүрэм баахан хуучныг мөрдөх тул хэлдэг хэл ба бичдэг бичгийн хооронд гүнзгий завсар гарч англи хэлийг сурагчдад бэрхшээл болмуй.

Монгол хэлэнд ийнхүү хэл, бичиг хоёрын хооронд их завсар гаргахгүйг ялангуяа одоо шинэ үсэг зохион авах үед хянаж хичээвээс зохимуй. Монгол үгийн хураагдан богино болж яваа байдлыг шинэ үсэг авахдаа анхаарахгүй байж болохгүй. Иймд монгол үгний хэрхэн богино болж явааг хянаж үзэхэд илүү бус санагдмуй.

1. Хубилай хааны үеийн дөрвөлжин бичигт “hünege”, “harban”, “hildü” гэж бичсэн нь тэр цагийн ярианы хэлийг дагасан буй за. Одоо бидний хэлэнд ünege, arban, ildü хэмээн хэлэх болж эхний h гийгүүлэгчийг хаяжээ. Урьд умартаqu(умартах), üneker (үнэхээр) хэмээн хэлж байсан ба одоо ч хүртэл тэр хэвээр бичдэг боловч манай ярианы хэлэнд мартаqu(мартах), pegeren (нээрэн) гэх болж эхний эгшгийг хаяв. Бас sün-г урьд üsün гэдэг байсан хэмээмүй. Энэ мэтээр эхний гийгүүлэгч ба эгшгийг хаяж яваа нь үгийн богино болох нэг зам болмуй.

2. Хуучин бичигт уртуулыг үа аймгаар тэмдэглэдэг. Жишээлбэл, uul(уул) гэж хэлээд  (ayula) гэж бичмүй. qaalya, qooloi, qiguu гэж хэлээд  (qaalya-a),  (qoolai),  (qiguu) гэж бичмүй. Хэлний түүхийг хянаж үзвээс энэ нь зөвхөн уртуулыг тэмдэглэх арга биш, урьд монгол бичгийг анх тогтож байх үед үнэхээр ayula, qaalya-a, qoolai, qiguu хэмээн хэлж байсан бололтой. Ямар баримт байна хэмээвээс одоогийн буриад хэлэнд qiguu(хуруу), niguu(нуруу) хэмээх үгийг үа-тайгаар дуудаж qiguun(хурган), nigun(нурган) хэмээн хэлмүй. Дагуур хэлэнд egüde зэрэг үгийг бичгийн хэлээр дуудмуй. Дөрвөд хэлэнд  (uayakiju) хэмээх үгийг уауаju хэмээн хэлмүй. Энэ нь одоогийн бидний урт эгшиг эрт цагт дундаа үа-тай хоёр үе байсны үлдэгдэл болмуй.

Монгол бичгийн анх тогтсоноос хойш арван гурав дөрөвдүгээр зууны үе болоход дээр дурдсан ayula, qaalya-a, qiguu гэх зэргийн үгийн дундах үа нэгэнт хаягдаж хоёр эгшиг нь хавсран дуудагдах болжээ. Баримт нь дөрвөлжин бичигт ayula, qaalya хэмээх үгсийг ayla, qaalya гэж бичсэн ба тэр үед монгол үгийг араб үсгээр тэмдэглэж зохиосон араб

монгол толь бичигт хаалга буулгах гэж бичсэнээс гэрчлэгдэмүй.

Тэр дундах үа-ийн хаягдсан үеийн хэлний дуудлагаас одоо үеийн монгол бичигт уламжилж ирсэн нь *taulai*, *qauli* гэх зэрэг үгс болмуй. Энэ мэтээс бодоход монгол хэлний урт эгшиг нь урьд дундаа үа бүхий хоёр эгшиг байсан ба улмаар дундах үа-гаа хаяж хавсран хэлэх болоод харин одоо болоход хоёр биш нэг урт эгшиг болжээ. Урт боловч нэг эгшиг нь хоёр эгшгээс богино биш үү.

Владимирцовын зохиосон монгол хэлний граматикийн 128-р зүйлд ийнхүү хоёр үеэс бүрэлдэн урт эгшиг буй болох явдлыг арван дөрөв, арван тавдугаар зууны үед туурвисан хэмээжээ. Үүнийг монгол үгний богино болж ирсэн нэгэн зам хэмээн үзмүй.

3. Монгол хэлэнд хоёр үг нэгдэх замаар бас богино болж явмуй. Жишээлбээс, *үai ügei*(гай үгүй), *ejen ügei*(эзэн үгүй) хэмээх үгс нийлж *үaiүüi*(гайгүй), *ejegüi*(эзгүй) болжээ. *abci irekü* хэмээх үг нийлээд *abçiraqu*(авчрах), *açiraqu*(ачрах) болов. *kelejü orkiy-a*(хэлж орхиё), *yabuju orkiy-a*(явж орхиё) нийлээд *kelçirkey-e*(хэлчихье), *kelçey-e*(хэлчье), *yabuçirkey-e*(явчихья), *yabuçiy-a*(явчъя) болж ирсэн баймуй. Энэ мэтийн хоёр үг нийлэхдээ нийлсэн үгсийн эгшиг гийгүүлэгчийг хэд хэдээр хаяж ямагт богинохон болох тийш ханджээ.

4. Монгол үгний эцсийн *n* ихэнхдээ хаягджээ. Жишээлбээс, *modun*, *burγasun*, *usun* гэх зэргийн үгсийг урьд чухам тийнхүү хэлж байсан ба одоо буриад чингэж хэлдэг боловч халх хэлэнд *modu*, *burγasu*, *usu* гэх зэрэг хэлэх болж сүүлийн *n*-г гээжээ. Бас *tngrī*, *kelberi*, *büri*, *üiledbüri* хэмээх зэргийн эцсийн *i* хаягдаж *tengger*, *kelber*, *bür*, *üiledbür* гэж сонсдох болов.

5. Монгол хэлэнд өргөлтгүй богино эгшиг нь балархай сонсдох буюу заримдаа бүрмөсөн сонсдохгүй болдог. Үүнийг монгол хэлийг шинжиж үзсэн эрдэмтэн бүр Бобровников, Рамстедтаас эхлээд Владимирцов, Поппе хүртэл цөм нэгэн дуугаар батлан тэмдэглэжээ. Эрдэмтэн Рамстедтийн бичсэн нь: монгол хэлний өргөлтгүй эгшиг ихэнхдээ үгүй болдог. Жишээлбээс, *aq-a*, *maγad*, *modu* хэмээх үгийг *aq(ax)*, *maγd* (магд), *mod*(мод) хэмээн хэлэх болжээ. (Монгол хэлний дууны судлал хэмээх номын 59-р зүйл) Поппегийн бичсэн нь: монгол хэлний хөгжлийн шинэ үеийн онцгой тэмдэг нь юу буй хэмээвээс нэгдүгээрээс бусад үеийн эгшгүүд анхны шинж чанараа алдаж маш тодорхойгүй болов. Энэ явдал улмаар гүнзгийрч заримдаа өргөлтгүй эгшиг бүрмөсөн хаягдах буюу орхиод арилсан ба эсвэл туйлын богино маш балархай эгшиг болон хувилжээ. Жишээлбээс: *qural*, *qudtuγ* хэмээх хоёр үгийн дуудлага *qurl*, *qudg* болсон амуй. (Монгол үсэг толийн 33 дугаар талд буй.)

Бурдуковын зохиосон Орос-Монгол толины өмнөх граматикийн дөрөвдүгээр зүйлд мөн Поппегийн бичсэн нь: "Монгол хэлний нэгдүгээрээс бусад үеийн богино эгшиг маш тодорхойгүй, ярианы хэлэнд ихэнхдээ идэгддэг ба ер нь сонсдоггүй" хэмээжээ. Монгол хэлийг шинжсэн эрдэмтэн бүр ингэж хэлэхээс гадна, бид өөрсдөө үг хэлж чагнаж үзэхэд үгний нэгдүгээрээс бусад үеийн богино эгшиг балархай бөгөөд сонсдохгүй шахам баймуй. Жишээлбээс: *usu* гэхэд эцсийн *u* сонсдохгүй, *ulus* гэхэд

l-ийн дараах u маш балархай, заримдаа uls гэж хэлмүй. bolqu, medekü, medegdekü зэрэг үгийн нэгдүгээрээс хойшхи үеийн эгшгүүд маш балархай тул bolx, medx, medgdx гэж сонсдох мэт баймуй.

Дээр дурдсан таван баримтыг нийлүүлэн бодоход монгол үгний богино болж монгол хэлний түргэн болж яваа байдал нүдний өмнө илэрхий буй за. (төгсөөгүй)

(үргэлжлэл)

Ийнхүү эгшгийг хаяваас шинжлэх ухааны хүрээлэн[гээс] урьд гаргасан шинэ үсгийн төлөвлөгөөн дээр [хэд]эн зүйлийн тайлбар ба засвар оруулахаас бус [арг]агүй болмуй.

Үүнд бид латин 26 үсгийн дээр ямар ч шинэ тэмдэг нэмэхгүй гагцхүү түүнийг монгол хэлний [бай]далд зохилдуулан авмуй. Ямар тайлбар засвар[ыг] оруулах буй хэмээвээс бичих дүрэм дээр холбогдсон [гу]рван зүйлийн тайлбар баймуй.

1. Урт эгшгийн тухай. Үгний эхэн үед тохиолдох урт богино эгшгийг эрхбиш ялгаж бичих хэрэгтэй. Жишээлбээс:  $\text{ᠤᠯ}$  ·  $\text{ᠤᠯ}$  хэмээх үгсийг ul, uul гэж бичмүй. Нэгдүгээрээс хойшхи үед балархай эгшгийг огт бичихгүй учраас урт эгшгийг давхар үсгээр тэмдэглэх нь илүү хэрэг болох тул дан үсгээр тэмдэглэмүй. Жишээлбээс:  $\text{ᠮᠠᠨᠳᠤᠯᠤᠯᠠᠳ}$  (manduylulad),  $\text{ᠪᠦᠲᠦᠭᠡᠵᠦ}$  (bütegejü) гэх мэт үгсийг mandulad, bütezh гэж бичмүй.

2. Үгийн эхний үед i-гийн дараа хааяа а бичмүй.  $\text{ᠶᠢᠷᠠᠭᠤ}$  (iraqu),  $\text{ᠰᠢᠲᠠᠭᠤ}$  (sitaqu) хэмээх үгсийг  $\text{ᠶᠢᠷᠢᠭᠦ}$  (irekü),  $\text{ᠰᠢᠲᠢᠭᠦ}$  (sidekü) хэмээн уншихгүй болгохын тул iarx, shiatx гэж бичмүй. Үгийн дунд ба эцэст  $\text{ᠲᠠᠷᠢᠶᠠ}$  (tariy-a) taria,  $\text{ᠬᠤᠨᠢᠶᠠᠰᠤ}$  (quniyasu) хунias зэргийн үгэнд ia хэмээх үе орох тул үгийн эхэнд ia үе байхад үл болох явдалгүй.

3. Манай халх монгол хэлэнд n, ng хэмээх хоёр дуун байх үүнд эгшгийн өмнө n сонсдох ба гийгүүлэгчийн өмнө буюу үгийн эцэст цөм ng сонсдмуй. Энэ хоёр дуунд хоёр үсэг хэрэглэх явдалгүй. Гагцхүү n үсгээр тэмдэглэж n-гийн дараа орох балархай эгшгийн оронд абструфа хэмээх тэмдгийг хэрэглэвээс болмуй. Жишээлбээс:  $\text{ᠶᠠᠪᠤᠨ}$  (yabun) - jabn,  $\text{ᠶᠠᠪᠤᠨᠠ}$  (yabun-a) - jabn',  $\text{ᠮᠠᠩᠭᠤ}$  (mangqu) - manx,  $\text{ᠮᠠᠨᠠᠭᠤ}$  (manaqu) - man'x

Шинэ үсгийн төлөвлөгөөнд оруулах гурван зүйлийн засварыг дурдваас:

1. Үгийн нэгдүгээрээс хойшхи үед тохиолдсон эгшгийг цөм уртаар унших хэмээн дээр хэлсэн дүрмэнд гагцхүү i үсэг хамаарахгүй. Богино i-ийг i үсгээр, урт ii-ийг у үсгээр тэмдэглэмүй. Жишээлбээс:  $\text{ᠰᠠᠪᠢ}$  (šabi) - shabi,  $\text{ᠰᠠᠪᠢᠶᠢᠨ}$  (šabi-yin) - shabiyn,  $\text{ᠶᠤᠮᠤ}$  (eyimü) - um,  $\text{ᠰᠢᠯᠶᠠᠭᠤᠶᠢᠨ}$  (silγaqu-yin) - shalqxyn,  $\text{ᠲᠡᠨᠦᠶᠢᠬᠦ}$  (tenüyikü) - tenyx,  $\text{ᠤᠯ}$  (ul) - ul,  $\text{ᠤᠯᠢᠬᠤ}$  (uliqu) - ulix гэх зэргээр бичмүй.

2. Урт i-г у үсгээр тэмдэглэх тул у-д тусгай үсэг хэрэгтэй. Үүнд j үсгээр тэмдэглэмүй.  $\text{ᠵ}$  (j) дууг  $\text{ᠶ}$  (š)  $\text{ᠵ}$  (č), sh ch -ийн адилаар zh хэмээн тэмдэглэмүй.

3.  $\text{ᠠᠷᠭᠠ}$  (arg-a),  $\text{ᠠᠷᠭᠠᠭ}$  (argγ),  $\text{ᠪᠤᠭᠠ}$  (buγ-a),  $\text{ᠪᠤᠭ}$  (buγ) гэх зэрэг үгсийг arg bug гэж адил бичвээс сайнгүй. Эрхбиш ялгаж бичих хэрэгтэй тул урьдын гагц g үсгээр γ, g хоёр дууныг тэмдэглэх журам дутагдалтай болмуй. Иймд γ үсэгт латин үсгийн доторхи q

хэрэглэмүй. Жишээлбээс:  $\text{ᠠᠷᠭᠦ}$  (ary-a) - arq,  $\text{ᠠᠷᠭᠠ}$  (aray) - arg,  $\text{ᠪᠠᠭᠦ}$  (buy-a) - buq,  $\text{ᠪᠠᠭ}$  (buy) - bug,  $\text{ᠠᠭᠲᠠ}$  (ayta) - agt,  $\text{ᠮᠠᠭᠠᠳ}$  (mayad) - maqd,  $\text{ᠬᠡᠷᠭᠡ}$  (kereg) - xerg,  $\text{ᠮᠡᠳᠡᠭᠳᠡᠬᠦ}$  (medegdekü) - medgdx,  $\text{ᠭᠡᠷ}$  (ger) - ger гэх зэрэг бичмүй. Энэ засварыг хуучин төлөвлөгөөнд оруулаас бүгд үсэг 30 болох нь.

|            |            |            |            |            |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| A          | B          | C          | CH         | D          | E          | F          | G          | H          | I          |
| $\text{ᠠ}$ | $\text{ᠪ}$ | $\text{ᠸ}$ | $\text{ᠴ}$ | $\text{ᠳ}$ | $\text{ᠡ}$ | $\text{ᠪ}$ | $\text{ᠭ}$ | $\text{ᠬ}$ | $\text{ᠢ}$ |
| J          | K          | L          | M          | N          | O          | Ö          | P          | Q          | R          |
| $\text{ᠵ}$ | $\text{ᠬ}$ | $\text{ᠯ}$ | $\text{ᠮ}$ | $\text{ᠨ}$ | $\text{ᠣ}$ | $\text{ᠣ}$ | $\text{ᠮ}$ | $\text{ᠵ}$ | $\text{ᠷ}$ |
| S          | SH         | T          | U          | Ü          | W          | X          | Y          | Z          | ZH         |
| $\text{ᠰ}$ | $\text{ᠱ}$ | $\text{ᠲ}$ | $\text{ᠤ}$ | $\text{ᠮ}$ | $\text{ᠰ}$ | $\text{ᠬ}$ | $\text{ᠶ}$ | $\text{ᠵ}$ | $\text{ᠵ}$ |

Ийнхүү балархай эгшгийг хаяж хэрхэн бичих байдлыг үзүүлвээс:

Pushkin  
 Arilsn borony ecsyn üül  
 Ariun ogtrquid qancar xöblzöd  
 Baran süüdre qazrt buulqzh  
 Bajrt ödrygi qutazh bain'.  
 Sajxn chi tengrygi бүрхед  
 Sacrsn caxilqan chamaigi oroqod  
 Ajnqyn duugi nizhgnüln baizh  
 Anqsn qazrygi xurar undlb.  
 Delxei sergzh boro arilla,  
 Dendl ügei odo tonilbl sain.  
 Ajsyn salxi nabchygi ilbser  
 Amrlinqui tengres archn' chamaigi

Энэ журмын ашиг тусыг дурдваас:

1. Үндсэн латин үсэг дээр нэг ч тэмдгийг нэмсэнгүй тул латин бичгийн машин, үсгийн касса зэргийг хэвээр хэрэглэхэд ямар ч саад үгүй.
2. Сурахад амархан болмуй. Балархай эгшгийг хаана бичих эсэх зэргийн одоогийн төвөгтэй будлиан арилмуй. Ярианы хэлэнд ойр болмуй.
3. Бичихэд түргэн болмуй. Үсэг өрөх, машинаа цохих цөм хурдан болмуй. Хуучнаас тавны нэгэн хувь хэмнэгдэх тул таван нүүр бичиг, дөрвөн нүүрт багтмуй. Үүнээс эдийн засаг дээр холбогдсон ашиг тус маш арвин болмуй. (төгсөөгүй)

(үргэлжлэл)

Үүнээс гадна, балархай эгшгийг хаяж бичих журмыг шүүмжлэгч нөхдөд хэдэн зүйл тайлбарыг өгье.



1. Балархай эгшгийг хаяваас олон гийгүүлэгч үсэг нэгэн хамт бичигдэж нүдэнд аягүй харагдмуй хэмээн зарим нөхөд хэлж буй. Үүнд зөвхөн нүдэнд дасаагүйн харгаа болохоос өөр аягүй юм юу ч үгүй. Танихгүй буюу шинэ юм анх жигтэй санагддаг нь ердийн заншил бөгөөд нүд дасваас тэр живхэргэх(жихүүрхэх?) явдал аяндаа арилмуй.

2. Зарим нөхдийн хэлэх нь, гадаадын хэлэнд ийм олон гийгүүлэгч үсэг нэгэн дор ордоггүй тул манай бичиг гаж буруу болох нь хэмээмүй. Үүнд бид шинэ бичгийг зохиохдоо монгол хэлний үүднээс монгол хэлний байдалд тохируулан зохиохоос бус, бусад хэлтэй тохируулан зохиох бус, түүнээс гадна, манай хэлтэй яг адил ийнхүү өргөлтгүй богино эгшиг нь балран харагдаж буй хэл үгүй баймуй. Иймийн тул бид өөрийн бичгийн дүрмийг бусад хэл бичигтэй ижилдээх(ижилтгэх) хэмээн зүтгэх хэрэггүй.

3. Зарим нөхдийн хэлэх нь ө, ү хоёр дээр хос цэг тавих нь бичихэд бэрхтэй хэмээмүй. Үүнд латин үсгийн машинд буй хэрэглэх нь чухал дөхөмтэй болохыг сануулахаас гадна, урьдын төлөвлөгөөний адил олон давхар эгшиг бичигдэхгүй тул аяндаа тэр чиг цөөрмүй. Жишээлвээс: урьд төлөвлөгөөг *tölöblögöö* гэж бичих байсан аваас одоо *tölblgö* гэж бичих болмуй. Иймд энэ тэмдгээс бэрхшээх явдал үгүй болов уу.

4. Бас зарим нөхдүүд хэлэх нь үгийг үе болгон хуваах ёстой энэ журам зөрөлдөн, тохирохгүй хэмээмүй. Үе нь заавал эгшиг оролцож бүтэх бус, нэг буюу хэдэн гийгүүлэгчээр бүтэж болмуй. Амьсгалын нэгэн түрэлтэнд хоолойгоос нэгэн бүлэг болж бөөм гарах дууг үе гэдэг баймуй. Бусад хэлэнд аливаа гийгүүлэгч ба ялангуяа хамрын гийгүүлэгч аялгуут гийгүүлэгч дангаар эгшиггүй үе болох нь үзэгдмүй. Монгол хэлний гийгүүлэгч нь эгшгээ хаяж дангаар үе болж буй хэмээн эрдэмтэн Поппегийн бичсэнийг дээр дурдсан бөлгөө. Одоо хуучин монгол бичгийг үе болгон хувааж байгаа нь ярианы хэлтэй огт тохирохгүй тулгамал хиймэл зүйл үлэмж буй. *jisiyelbesü* хэмээх үгийг *ji si ye le be sü* хэмээн зургаан үе болгон хувааж буй. Гэтэл ярианы хэлэнд энэ үг гурван үе болохоос хэтрэхгүй. *jibqulangtu* хэмээх үгийг *jib qu lang tu* хэмээн дөрвөн үе болгож буй ба шинэ бичгээр мөн *zhabxalanta* гэж дөрвөн үе болгож бичих гэж баймуй. Гэтэл *jibqulangtu* хэмээх үг ярианы хэлэнд хоёрхон үетэй болоход хүрчээ. Үүнээс үзэхэд үе хуваах явдалд их будлиан баймуй. Монголын балархай эгшиг нэг үгийг тайван хэлэхэд буй болох ба яаруу хэлэхэд үгүй болох зэргээр тогтворгүй тул эгшгийг баримталж үгийн үеийг хуваах хэмээвээс гаршгүй балчиг шаварт шигдэх болмуй. Харин балархай эгшгийг тэмдэглэхгүй болбаас үеийн будлиан яршиг багадаа болмуй. Ер нь миний бодоход үеийн үүднээс монгол хэл бичгийг тайлбарлах бус, монгол хэлний үүднээс үеийг тайлбарлаваас зүйтэй.

5. Зарим нөхдүүдийн хэлэх нь гагцхүү эхэн үед эгшгийг бичээд, хойшид балархай эгшгийг бичихгүй болбаас монгол хэлний долоон эгшгийн аль дуртайг хэлж болох ба үүнээс будлиан үүсэх хэмээмүй. Үүнд монголын долоон эгшиг чанга хөндий саармаг хэмээн гурван зүйлд ялгардагийг сануулмуй. Чанга хөндий хоёр төрлийн эгшиг нэг

үгэнд ордоггүй. Саармаг и чанга хөндий ямар ч эгшигтэй үгэнд орж болмуй. Үгний эхний үед чанга эгшиг байваас түүнийг чанга а, о, у гурвын аль нэгэн дагахаас бус, хөндий э, ү, ө дагахгүй. Мөн тэрчлэн үгийн эхний үед хөндий эгшиг байваас түүнийг э, ү, ө гурван хөндий эгшгийн аль нэгэн дагахаас бус, чанга эгшиг дагахгүй. Ийм учраас долоон эгшгийн аль нэгэн орж болмуй хэмээх үг үнэн бус, эсбөгөөс чанга гурав, эсбөгөөс хөндий гурав дагамуй гэх хэлж болох боловч чухамдаа үгийн өргөлтгүй балархай эгшгийг одоогийн ярианы хэлэнд чанга хөндий хэмээн ялгаж болохоос а буюу о, ө буюу ү хэмээн ялгаж болохгүй болжээ. Поппегийн зохиосон буриад хэлний дүрмийн 14-р зүйлд хэлсэн нь: Үгийн эхний үед долоон эгшиг бүрнээ тохиолдох боловч түүнээс хойшхи үед хоёрхон богино эгшиг тохиолдмуй. Энэ болбаас эгшгийг чанга хөндий гэж ялгахгаас бус тодорхой тэмдэггүй. Бараглаваас өмнөх өргөлттэй эгшигт татагдамуй хэмээжээ. Үгийн балархай эгшгийн чанга хөндий нь үгийн тэргүүн үеийн эгшгийг дагаж шийдвэрлэгдэх тул монгол хүн em хэмээх үгийг ema гэж уншихгүй. am хэмээх үгийг ame гэж уншихгүй. Иймд үүнээс гарах будлиан байхгүй.

6. Шүлгийг уншихад балархай эгшиг тодормуй хэмээн зарим хүн хэлмүй. Бидний санаваас шүлгийг ямар нэгэн шүүх тогтоол буюу ноёдын амгаланг эрэхээр гуншин дуудахын адил хуучин бичгийн хэлээр унших хэрэггүй. Харин одоогийн ярианы хэлээр, илтгэлийн хэлээр уншваас зүйтэй. Ярианы хэлэнд өргөлтгүй богино эгшиг тодорхойгүй тул шүлгийг хэрэв ярианы хэлээр уншваас балархай эгшиг тодорхойгүй болай. "Саран мандухуйяа миний сэтгэл цэнгэнэм" хэмээх зэргээр шүлгийг ямагт хуучин бичгийн хэлээр бичих ба мөн түүнийг хуучин бичгийн хэлээр унших хэрэгтэй гэх бөгөөс даанч хойш ухарсан үзэл болмуй.

7. Зарим нөхөд хэлэх нь балархай эгшгийн бүрмөсөн баларсныг хаяаад одоо сонсдож байгааг бичье хэмээмүй. Ерөөс монгол хэлний өргөлтгүй богино эгшиг цөм балархай бөгөөд дээр хэлсэн ёсоор зарим хэлэхэд буй болох ба зарим хэлэхэд үгүй болох зэргээр тогтворгүйгийн дээр хүн бүрийн хэлэнд бас ялгавартай тул ямар үед хаана балархай эгшгийг бичих ба ямар үед хаана бичихгүй зэргийг дүрэм болгон тогтооход маш бэрхтэй. Зарим хүн балархай эгшиг байна хэмээн бичих, зарим хүн үгүй хэмээн хаях тул хуучин төвөг будлиан бас хэвээр үргэлжилэхэд хүрмүй. Бас балархай эгшгийг хааяа бичих болбаас нэгдүгээрээс хойшхи үеийн урт эгшгийг нэгэн эгшгээр тэмдэглэж болохгүй болмуй. Иймд балархай эгшгийн заримыг хаяснаас бүрмөсөн хаясан нь будлиангүй амар болмуй.

8. Зарим хүн ярины хэлнээс холдов гэж баймуй. Үүнд, харин үгүй болсон ба баларсан эгшгийг цөм тодорхойлон бичих нь ярианы хэлнээс ихэд хоцрогдож холдсон хэрэг бөгөөд нуршуудал үлэмж. Балархай эгшгийг бичихгүй орхих нь ярианы хэлтэй яг нийлсэн гэж хэлж болохгүй боловч харин урьдхыг бодвоос нэлээд ойртсон бөгөөд нуршуудалгүй. Ямар ч улсын үсэг мөн үндэстний хэлийг чухам ялгаагаар нарийн тэмдэглэж чадахгүй барагцаалан тэмдэглэсэн байдаг бөгөөд бид мөн барагцаалан тэмдэглэх үсгийг авмуй. Бидний үсэг нь сурахад хялбар бөгөөд нуршуудалгүй байх

хэрэгтэй. Балархай эгшгийг хаяваас дэмий нуруудал арилмуй.

9. Адил үг олон болох хэмээн зарим хүн хэлмүй.  $\text{ᠠᠯᠠᠭᠤ}$  (alaqu),  $\text{ᠠᠯᠠᠭᠤᠨ}$  (aluq-a)-г  $\text{ᠠᠯᠬ}$ ,  $\text{ᠪᠡᠯᠢᠭᠡ}$  (belge),  $\text{ᠪᠡᠯᠢᠭᠡᠨ}$  (belig)-г belg,  $\text{ᠶ᠋ᠠᠯᠠᠭᠤ}$  (qalaqu),  $\text{ᠶ᠋ᠠᠯᠠᠭᠤᠨ}$  (qaluq-a)-г xalx гэж адил бичигдвээс будлиантай явдал гармуй хэмээмүй. Миний санаанд бид адилаар хэлээд будлиантай учир санаагаа мэдэлцэж чаддаг тул адилаар бичихэд бас үл болох газаргүй. Хэлэхэд адил дуудлагатай үгийг ондоогоор бичвээс хэл бичгийн хоорондын завсар их болохыг дээр дурдсан бөгөөд балархай эгшгийг хаясан эссэн алин боловч адилаар хэлдэг үгийг адилаар бичиг буй за.

10. Зарим хүн олон дүрэмтэй хэмээн зэмлэмүй. Үүнд балархай эгшгийг бичвээс маш төвөгтэй дүрэм хэрэгтэй бөгөөд балархай эгшгийг хаяхад дөрөвхөн дүрэмтэй болмуй. Тэр нь:

1) Балархай эгшгийг бичихгүй.

2) Үгийн эхний үеийн урт эгшгийг давхар бичих ба хойшхи урт эгшгийг нэгэн эгшгээр тэмдэглэмүй.

3) Энэ дүрмэнд i хамааралгүй. Богино i-г i-гээр, урт ii-г y-гээр тэмдэглэмүй.

4) Хойноо эгшиггүй бөгөөд тодорхой сонсдох n үсэгт абуструфа тэмдэг тавимуй.

Үүнийг олон дүрэм хэмээн хэлж арай болохгүй болов уу.

11. Гадаадын үгийг хэрхэн бичих вэ хэмээн зарим хүн асууж буй. Үүнд угаас гадаадын үг боловч бүрмөсөн монголжсон үгийг монгол хэлний нийт дүрмээр явуулмуй. Жишээлбээс:  $\text{ᠰᠠᠵᠠᠩ}$  (šajang),  $\text{ᠪᠠᠩᠲᠠᠭ}$  (bangtang),  $\text{ᠴᠠᠢ}$  (čai),  $\text{ᠵᠢᠩᠭᠢᠨᠢ}$  (jingkini),  $\text{ᠶᠠᠶᠢᠰᠢᠨ}$  (piisin),  $\text{ᠶᠠᠷᠠᠨᠳᠠ}$  (qaranda)(түрэг хэлээр хар чулуу хэмээсэн үг) зэрэг болмуй. Угаас төвд үг боловч монголд хэрэглэж заншсан хүний нэрсийг монгол үгний адил бичмүй. Жишээлбээс:  $\text{ᠶᠠᠨᠳᠤᠰᠦᠷᠦᠨᠭ}$  (qangdusürüng) Xand-sürn,  $\text{ᠳᠠᠮᠳᠢᠨᠵᠠᠪ}$  (damdinjab) Damdin-Zab гэх мэт. Мөн энэ мэтээр хоёр үгээс бүтсэн хүний нэрийн монгол үгийг хооронд нь зураас тавьж бичмүй. Жишээлбээс:  $\text{ᠮᠣᠩᠭᠡᠴᠣᠭᠲᠤ}$  (möngkečoytu) Mönx-Cogt,  $\text{ᠡᠩᠭᠡᠪᠠᠶᠠᠷ}$  (engkebayar) Enx-Bajr гэх мэт.

Гагцхүү дэлхий дахинаар хэрэглэх нэр томъёог бичихэд уг үсэг ба дуудлагыг харгалзаж бичвээс зохих болов уу. Жишээлбээс:  $\text{ᠶᠠᠯᠠᠳᠠᠷᠢ}$  (proletari) - proletari,  $\text{ᠶᠠᠯᠠᠳᠠᠷᠢ}$  (kapital) - kapital,  $\text{ᠮᠠᠰᠢᠨᠠ}$  (masina) - mashina гэх мэт. Хэрэв балархай эгшгийг хасваас гадаадын үг тусгай дүрэмтэй болох ба балархай эгшгийг бичвээс гадаадын үг монгол үгтэй нэгэн дүрэмтэй болох гэж бодвоос эндүүрэл болмуй. Балархай эгшгийг хаясан ч тэр бичсэн ч тэр гадаадын үгний чанга хөндий эгшиг нэгэн үгэнд орох ба (номер) үгийн эхэнд хоёр гурван гийгүүлэгч нэгэн хамт тохиолдох (gramm) хийгээд а-гийн хойно эрхбиш а дагалдмуй хэмээх монгол үгний журамд үл захирагдах (Komunism, atom) зэрэг журмыг өөрчилж болохгүй тул гадаадын нэр томъёоны үг эрхбиш тусгай дүрэмтэй байхаас өөр аргагүй мэт. Гадаадын үгийг хэрхэн бичих нь тусгай яриа бөгөөд дараа боловсортол хэлэлцэж тогтоох буй за.

Төгсөв.

ОРОН БҮХНИЙ ПРОЛЕТАРИНАР НЭГДЭГТҮН

№ 1

# ҮНЭН

МОНГОЛ АРДЫН ХУВЬСГАЛТ НАМЫН ТӨВ  
ХОРО БА ЗАСГИЙН ГАЗРЫН СОНИН.

1945 он  
3 дугаар сарын  
**6**  
МИГМАР

Үнэ 20 мө.

Монголын үндэсний хэлбэртэй, хувьсгалын утгатай шинэ соёл мандтугай!

## Эрх чөлөг олгогч Улан Армийн яру алдар мандтугай

Улан Арми! Энэ хоёр үгийг сонсход эрх чөлөнд дуртай монголын хүн ардын сэтгэлд ютай бахтай сайхан байдаг вэ!

Хорин дөрвөн жилийн өмнө, Сүхбатар, Чойбалсангийн ардын журамт цэргийн байлдагчид, Монголын ард түмний эрх чөлөг тэмцэж байсан шургү тэмцэлд их Лениний туслар ирүүлсэн Улан Армийн дайчин батар цэргийг тэсгэлгүй баярлан угтаж байсан билэ.

Зөвлөлт их Орос улсын ард түмэн бидэнд ах дүгийн тусламж үзүлэв гэсэн баяртай мэдэ, монголын удам нутгар түгэн сонсдоо ардууд, монголын хэр тал газар урьд өмнө үзэгдээгүй эрхэм их цэргийн дайчин эрчүүдийг үр хүүхэддэ үзүлэх гэж, улсынха чөлөлөгдсөн нийслэлд иршгэдэг байсан билэ. Өвгөд, Улан цэргийг бахдан үзэхдэ, хүүхэд, манай хань нөхөр Улан цэрэг ийм байдаг юм шү, харав ү? эдэн шиг, ийм батар журамтан хүн болброй гэж захидаг байла.

Эрх чөлөг олгогч Улан Армийн дайчин батар эрсийг ингэж бахдан үзэж байсан ариун сайхан сэтгэлийг тэр малчин өсгөдийн ач үр нь, гар нь ганзганд, хөл нь дөрөнд хүрэхдэ монголын ард түмний хань нөхөр болсон Улан цэргийн батар эрсийн нэрийг гутгахгүй сайчул болжэ.

Тэд, эрх чөлөгт улсынха тусгар тогтсон байдлын төлө халдан түрэмхийлсэн дайсантай Халх голын хөвөнд хатү бэрх тулалдэн хийхдэ батар Улан цэрэг шиг гялалзсан сайхан эр болброй гэж эцэг өвгөдийнхэ захисан захиаг сэтгэлдэ хадгалж явсныг үзүлжэ.

Тэгэд тэр бэрх тулалдэн хийх үед нь улса хэрийн болчлогчдын талхиас салгаж чөлөлөх гэж Улан цэргэтэй мөр зэрэгцэн анх дэр цагт ардын хувьсгал мандах үед, байдлэн хийж явсан партизанын стрядас өсөж хөгжсөн, өрнөж бадарсан манай ардын хувьсгалт цэргийн дайчин батар



эрсэд туслар их Лениний үйлсийг сүт мэргэнэр залгамжлагч мэргэн Сталины явуулсан Зөвлөлт орны хувүд, батар Улан цэрэг ирж журмын тусламж үзүлсэн билэ.

Манай ард түмэн, ах болсон Зөвлөлтийн ард түмэнтэй дотно их найрамдлын сэтгэлтэй бөгөд эрх чөлөг олгогч хүчирхэг Улан Армийн их ачий нь бишрэн санаж явдаг. Тэгэд, Октябрийн их хувьсгалын хорин долдугар ойгөр эрх чөлөгт монгол улсын нийслэлд Сүхбатарын талбай дэр монголын их бү, эрэлхэг сүрийг бадрулан нийжигнэхдэ Монгол, СССР хоёр улсын ард түмний ах дүгийн найрамдлын эрхэм ёслолыг гүйцэтгэн манай улсын нийслэлийг хорин дөрвөн жилийн өмнө чөлөлөд одоо фашизмд болчлогдсон Европа дахины олон нийслэлийг чөлөлөн давшиж явд Улан Армийн их ялалтанд ёсолсон билэ.

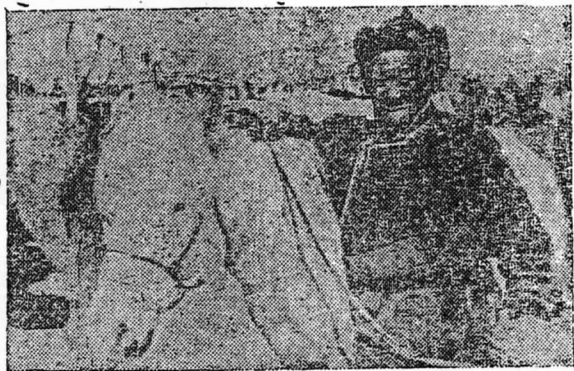
Ялгүсан тугийнхэ орой дэр, дэлхий дахины хүн төрөлхтний эрх жаргалыг мандулан гийгүлж явд СССР-ын олон ард түмний их найрамдлын Арми болсон хүчирхэг Улан Армийн ачар гйтлеризмийн гашуун дарлалас анхжран чөлөлөгдсөн түг түмэн хүний баярлан бахдаж байга сэтгэлийг манай ард түмэн нэвтэрхий мэдэж, тэдний нэгэн адил баясч байна.

Гйтлерийн түрэмхий балмад цэргийг Зөвлөлт улсад зүй бусар гэнэдүлж халдсан тэр бэрх цагас эхлэн бид журамт нөхдө ялна гэж хөдлөшгүй бат итгэж, Ленин - Сталины үзэл суртал нь Гйтлерийн харгис бурангуй суртлыг ялна гэж нотод бодож байсан билэ.

Чингэд бид дайсныг ялах цагийг ойртүлах сан гэж

километрийн зайтай болов гэдгийг сэтгэл бахдан үзэж байна.

Миний морь бас Бёрлин орох гэж давшиж явна шү! гэж манай малчин ардууд бардам омог төгөлдөр баясгалантайгэр хэлж байна. Энхрн хайрт Армида тусалж, эрхэм үйлсэд оролчихыг манай ард дайр, нэр төрний сайхан хэрэг гэж, батар Улан Армида



Малчин ард морьт Улан Армида өгөв.

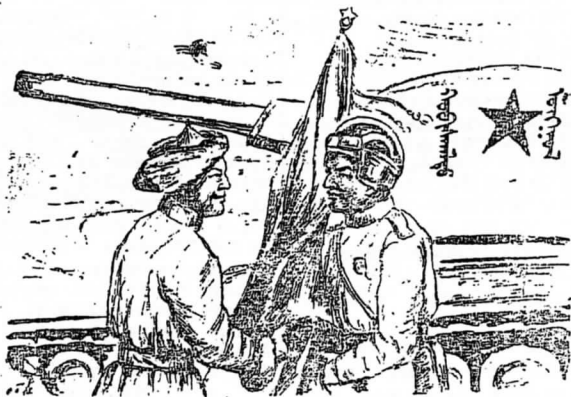
чин сэтгэлийн үднэс хэрэгтэй бүгдийг хийж байла.

Улан Арми баруун зүг торох тогтохгүй давшин явж байгаг үзэв.

Бёрлин хүртэл мянгэр, зүгэр хэлэлцэхгүй, хэдхэн арван

туслахын алдарт сайхан үйлсэд чадла арван давхар гаргана гэж тангараглаж байна.

Харгис дайсныг харанхуй ичэнд нь нугаслаж байга, эрх чөлөг олгогч дайчин Улан Армийн яру алдар мандтугай!





## МАРШАЛ ЧОЙБАЛСАНГИЙН ТАВИН НАСНЫ ОЙД ЗОРИҮЛСАН ЕРӨЛ

Холыг харах нүдтэй төрсөн,  
Ихийг бүтэх чадалтай төрсөн,  
Эрхэм нөхөр Чойбалсан та  
Эрэлхэг нөхөр Сүхбатарын хамт

Энгийн олон ардыг удирдаж  
Эрс зоригт Оросыг түшиж  
Энэ бүхий хэргийг  
Эндэгдэлгүй бүтэж өгсөн  
Эрхэм их гавьгүй чинь  
Энэ өдөр магтан сайшана.  
Олон түмэн арда  
Осолдолгүй түшдэг учрас  
Оросын батарлаг ард түмэнтэй  
Огт салшгүй нөхрөлдөг учрас  
Оны манлай жанжин минь  
Онц их хүчтэй байна.

Хүний чанарыг  
Нөхрөр нь танина.  
Хөлгийн чанарыг  
Шөрмөсөр нь танин гэдэг.  
Манай монгол улсын  
Маш дотно нөхөр  
Аварга их хүчтэй  
Арслан батар цэрэгтэй  
Оросын их улс  
Орчлон дахины тулгүр болж  
Онц гайхамшгэр мандаж ирэв.  
Булх дэрэмдэх тэргүтэн  
Бузар мусайн явдалтныг  
Бутцохин сөнөсөр ирсэн  
Буянт тэр нөхдийн минь алдар  
Буман нарны гэрэл мэт  
Бүршгүй шацарч байна.  
Европа тэвийн зүрхэнд нь  
Ялзарсан шарх гарч  
Ирээс барс тэнктэй  
Идэмхий Гйтлерийн сүргүд  
Идэх амь ангайгад  
Цавчих сэмлэ далайгад ирхэд  
Их Стáлин түрүтэй  
Зөвлөлтийн ард түмэн,  
Ид хүчэ гаргаж  
Итэвхтэй тэмцлэр сөнөж  
байна.

Дэлхий дахиныг аврах  
Дэд их зорилгыг биелүүлэх  
Дэвшилт их хэрэгт  
Дэмжилгэ тусыг үзүлж  
Дэж бэлгийг хүргэсэнд.  
Москвāгас, нөхөр Стáлин  
Монголын засгийн манлай,  
Танил нөхөр Чойбалсанд,  
Талархлын бичгийг ирүлэв.  
Ачит жанжин Чойбалсан та  
Алтан дэлхийн дэрх  
Ариун тэнгэрийн дөрхи  
Ард бүхэнд ачтай  
Авралт мэргэн Стáлины  
Түмэн бaтpын тoнд орж.  
Буман нөхрийн эгнэнд багтаж  
Батар их Стáлины толгойлсон  
Бадрангуй Зөвлөлт улстай  
Баян монголын зайг холбо-  
сонд

Баршгүй баярлаж байна.  
Удамт монголын эрхэм хүү  
Удирдагч нөхөр Чойбалсан  
таныха  
Ужиг сайхан энгэрт байга  
Ухаант багш Лёниний дүрсийг  
Улс олон монгол чинь харж

Угас их баярлаж байна.  
Лёниний эрхэм одон  
Таны энгэрт байга нь  
Лёниний их суртал  
Таны зүрхэнд шингэснийг  
гэрчилж байна.  
Эр хүний чэжинд  
Эмэлтэй хазартай морь багт-  
даг

Эрийн эрдэм бүрдсэн  
Эрхэм нөхөр Чойбалсангийн  
Сэтгэл зүрхэн дотор  
Эрдэмт багш  
Лёнин, Стáлины ноилолбс авад  
Энгийн малчин монголын  
Санал хүсэл цөм багтжэ.



Сарул хэрийн монгол хүн-  
дийн Сайн жанар бүгдийг  
бүртгэсэн  
Санасан хэрэг бүгдийг бүтэсэн  
Салшгүй нөхрө таниж ханилсан  
Самба зоригт батар танда  
Сайд ард бүгдэр инялж  
Сайн ерөлө хүргэнэ.  
Ардын, Нам Засга  
Арвидах шийнийн сар мэт  
Асар ихэр мандулж  
Ард олон биднийгэ  
Авран тэнхрүлэх  
Аз зайтай төрсөн  
Ачит нөхөр Чойбалсангийнха  
Алмад гавьт тавин насны  
Алдарт ойг тэмдэглэхдэ  
Ардын төрийн туг болж  
Ахиж тавин нас насалхын  
Ариун ерөлийг хүсье!

Ц. ДАМДИНСҮРЭН.

## МИНИЙ НУТАГ

Хэнтий, Хангай, Сайны өндөр  
сайхан нуруунд,  
Хойг зүгийн чимэг болсон ой  
хөөч үлнүд,  
Мэнэн, Шарга Номны өргөн  
их говинүд,  
Өмнө зүгийн манлай болсон  
элсэн манхан далайнүд.  
Энэ бол, миний төрсөн ну-  
таг, монголын сайхан орон.  
Хэрлэн, Онон, Тулын тунгалаг  
ариун мөрөнүд,  
Хотол олны эм болсон горхи,  
булаг аршанүд,  
Хөвсгөл, Увс, Буйрын гүн  
цэнхэр нүрүд,  
Хүн малын унда болсон той-  
ром бүрд уснүд.

монголын сайхан орон.  
Салхины үзүрт найгасан, сор-  
гог нарийн ногойтой,  
Сарул талд яралзсан, сонин  
ямын зэрэглэтэй,  
Сайн эрс цугласан, байц бэрх  
газартай,  
Сүлд тахилга улирсан, сүмбэр  
их овдой.

Энэ бол, миний төрсөн  
нутаг, монголын сайхан орон.  
Нарийн өвс ургасан малын  
сайхан билчэртэй,  
Наш цаш сүлжих тэнэгэр  
сайхан газартай,  
Дөрвөн цагийн улиралд дурара  
нүх нутагтай,  
Таван зүйлийн тарианы хөрс  
шорбо газартай.

Энэ бол, миний төрсөн  
нутаг, монголын сайхан орон.

Өлгий сайхан улсад өвгөдийг  
тавьсан газар,  
Үр ач хүхдийн үржиж өссөн  
орон,  
Таван хушү мал, дүрэн билч-  
сээ нутаг,  
Монгол хүн бидний сэтгэлийг-  
сорсон орон.

Энэ бол, миний төрсөн  
нутаг, монголын сайхан орон.  
Өвлийн тасхим цагт цас мөс  
бүрхэд,  
Болор шилийн өнгө, гялт-  
ганаж гялалзсан орон,

Зуны найртай улиралд цэцэг  
навч дэлгэрэд,  
Жигүртэн шувуу холбс ирж  
гангар гунгар донгодсон орон.

Энэ бол, миний төрсөн ну-  
таг, монголын сайхан орон.  
Алтай, Хянганы завсарт атар  
баялаг орон,

Ав эжийн минь оршсон  
ашлын зайсан нутаг.  
Алтан нарны туйнд энхжин  
тогтсон орон,  
Мөнгөн сарны гэрэлд мөнх-  
жин гялалзсан газар.

Энэ бол миний төрсөн нутаг,  
монголын сайхан орон.  
Хүнү Шүнүгийн үес хөгшилд  
өвгөдийн минь нутаг,

Хөх монголын цагт хүчирхэг  
боссон орон,  
Он онд идэшиж олон жилд  
дассан нутаг.

Одгийн шинэ монголын улаан  
туг бүрхсэн орон.  
Энэ бол миний төрсөн ну-  
таг, монголын сайхан орон.

Өссөн төрсөн бидний үндэс-  
ний хайрт нутаг,  
Өнгөлзөгч дайсан ирвэл үтэр  
өшиглөн хөнө,  
Хувьтай энэ оронд хувьсгал  
улса мандулж,

Хойчийн шинэ ертөнц дэр  
хүндтэй гавьгаг байгуула!

Энэ бол миний төрсөн ну-  
таг, монголын сайхан орон!

Д. НАЦАГДОРЖ

Энэ бол, миний төрсөн нутаг,



# Монголын шинэ үсэг бол соёлын эрхэм түлхүүр юм.

## Шинэ үсгийг сурцгай

Манай монголчууд уйгүрын үсгийг авч хэргэлсэр, долб найман зүй жил болов. Эйн монгол үсгийн дутагдалтай болох учрыг монголын сэхэ-тэн анх хэдийнэс мэдсэр байсан ба засамжилхыг оролдсэр иржэ.

Жишээлбэл: гаднын Энэтхэг, Төвд, Хятадын үгийг бичиж болохгүй байхад  $\text{Э} - \text{Э}$  зэргийн үсгийг нэмж зохиожэ.

Ярианы үгийг тэр хэлдэг хэвэр нь монгол үсгэр бичиж болохгүй учрас баруун монголчууд тод үсгийг зохиожэ.

Гэвч өнөдөр монголын үсэг, аж амьдрал оргин хөгжиж бадран мандаж байхад түүний хурц зэвсэг болж харахан чадахгүй, харин зарим зүйлд бөгдүлэх зүйл болж байна.

Ганд жишэг хэлбэл, хүчин монгол үсгэр бичсэн  $\text{Ч}$  гэдэг үгийг, тэдэ, дэдэ, тада, дада, тэтэ, дэтэ, тата, дата, найман янзэр уншиж болох байна. Энэ бол нэгтгүүр хүнд сурхад хэцүү болхос гадна нөгөтгүүр үгийг тодорхой нарийн бичиж болшгүй болгож байна. Бас хүчин монгол үсгэр одогийн ярианы зарим хар үгийг бичих аргагүй. Жишээлбэл: ханаас гэдэг үгийг  $\text{Х}$  (Хамга-аца) гэж бичхэс эр аргагүй.

Бас, од, от, одо, гэдэг гурван ондо утгатай үгийг хүчин монгол үсгэр ялгаж бичиж болдоггүй. Түүнэс гадна шинжлэх ухааны то, химийн томьёолол, гаднын хүний нэр зэргийг бичхэд бас бүдүлэгдэд болдоггүй зүйл олон бий.

Ийм учир монголын шинэ хөгжилд зохилдүлсан ба орос монголын соёлын найрамдлыг улмэр зузатгасар байгаг анхралда авч олны сурхын хялбарыг бодож орос үсгийг үндэслэн шинэ үсгийг авч хэргэлхэр манай Намын Төв Хорь ба Засгийн Газрас 1941 онд тогтоосон байна. Түүнэс хойш энэ хэдхэн жилийн дотор манай обган сурагч, малчин ард нийтэр шинэ үсгийг маш дуртайгаар сурцгаж байна.

Шинэ үсэг бол манай хэлэнд чухам тохирсон нарийн сайн үсэг юм. Түүнийг сурхад хялбар. Ярианы хэлэр бичиж болно.

Цэндийн.

## Монголын шинэ үсэг

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| А | а | Б | б | В | в | Г | г | Д | д | Е | е | Ё | ё | Ж | ж |
| Э | э | И | и | Й | й | К | к | Л | л | М | м | Н | н | О | о |
| Ө | ө | П | п | Р | р | С | с | Т | т | У | у | Ү | ү | Ф | ф |
| Х | х | Ц | ц | Ч | ч | Ш | ш | Щ | щ | Я | я |   |   |   |   |
| Ы | ы | Э | э | Ю | ю | Я | я |   |   |   |   |   |   |   |   |



Монгол улс малэр баялаг

бага, дунд сургуулинуд шинэ үсгэр хэвлэгдсэн сурах бичигтэй болжэ.

1941 оны гуравдугар сары Намын Төв Хорь, Араын Сайн нарын Зөвлөлийн хавсарсан хурлас монголын хүчин бичгийг шинэ үсэг дэр шилжүлэх тухай тогтолыг гаргажэ.

Энэ тогтолыг биелүлэх үндсэн дэр Ардыг Гэгэрүлэх ямнэс бүх сургуулийн сурагчдыг үндэсний шинэ үсэгт сураха явдлыг онцлон үзэж, бага дунд сургуулинудад үзэх сурагчдыг шинэ үсгэр хэвлэдэ болов. Бага сургуулийн сурагчдыг бүгдийг шинэ үсгэр хэвлэсэн ба дунд сургуулийн зарим сурагчдыг шинэ үсгэр хэвлэжэ.

Жишээлбэл 1, 2, 3, 4 дүгэр ангиудад үзэх хэлний зүй, үсэглэл, унших бичиг, арифметика, байгаль мөн, 4, 7 дугар ангиг судлах монгол орны газрын зүй, бас 5 дугар ангида үзэх ургамлын судлал ба сурагчийн дүрэм, багш нарт тусламж гэдэг сэтгүл, бага сургуулинудын программ зэрэг 2% гаруй төрлийн номуд шинэ үсгэр хэвлэгдэн гарчэ. Түүнчлэн 1945 онд бага сургуулинудын бүх суралцах номудыг шинэ үсгэр хэвлэж гарга ба бүрэн бус дунд сургуулинудын үндсэн хичэлүдийн сурах бичгийг шинэ үсгэр хэвлэн гаргахэр бэлтгэж байна.

Нийт багш нар, хичэлийн конспект, үйлдвэрийн төлбөргө, журналыг шинэ үсгэр үйлдэж хөтөлдөг болжэ.

Гэвч багш, сурагчдас шинэ үсгэр хэвлэгдсэн сурах бичиг, үгүлэл, шүлэг найрүлаг зэргийг унших явдал хангалтгүй байна. Шинэ үсгэр хэвлэгдсэн бүх зүйлийг цуцалтгүй уншиж тус тусын соёл боловсорлын хөгжилтэнд алхам болсон шинэ үсэгт улаачаартай сайнэр суралцагч тун!

Т. Лхагва

## ТӨЛӨГ, ТҮЛАЙ, ЧОНО ГУРВЫН ҮЛГЭР.

Эрт урд цагт нэг баян айлын төлөг турж, билдэрт ижлэс хоорд хөдө газар тэнэж явтал, нэг түлай үлэж, асүжэ: „Чи ижил ба гэрэсэ анхирд, ингэж тэнэж явах учир юу билэ? гэсэнд, төлөг турж хоорсон учра хэллэ. Түлай хэлжэ: „Тийм бол чи бид хоёла аж төрөн явъя” гэснийг төлөг дарий зөвшөрч, хоёла ханыцан явсар, айлын нэг нутаг дэр очод, хөсөр хэвтсэн аруу ба тогони өрөсөн бариулыг, бас бичигтэй улан цасны нэг хүдсн хамтар олж авад, цаш явж байтал, нэг өлсөглон чоно тэр хоёрыг хард идхэр айсууг үзэд, төлөг хэлжэ: „Эрхэм нөхөр түлай, чи зугтвал гүйх чинь хурдан, иүгдвал бие чинь бага тул, хэрхэв амь мэнд гарч болно. Төлөг би бол угас хурдан биш, бас тэнхэл огт үгүйн дэр нэгэлт турж туйлдсан учир зугтан чадахгүй. Ялангуяа Чононүд бидний язгурын эрлэгүд мөн. Одо би ч эрхэм нөхрөс хагашаж, эрлэг чонон аманд амь алдах цаг ирвэ” гэж гашүүдэн уйлсанд, түлай хэллэ: „Нөхөр чи ингэж бүү бачимдан уйл! эртний үг, зовох цагт хатүүлж хэрэгтэй, жаргах цагт сэрэмжил хэрэгтэй гэсэн биш ү! зүгээр түний ирхийг хүлэж, тухайд аргацай! Зол гарвал амь мэнд гарах ч юны магад, хэрэв үхэх цагт хүрч ирсэн бол зийлхэд бэрх” гэж хэлж байтал, чоно ирэд төлгийн зүг шүдэс залгиан довтлох гэв. Хажуунас түлай өндөр дүгэр залдан хэлсэн нь: „Мүү нүгэлт чоно чи нам бай! Би дэд тэнгэрийн зарлигар тухайлан таныг хэргийг шийтгэхэр ирсэн түшмэл билэ. Зүгээр шударга намар шийтгэн шэрлүүлхийг хүлэгтүн!

Учиргүй салмад ашилбал, өцөггүй алма” гэсэнд, чоно гайтаж зогсов.

Түлай бас хэлсэн нь: Аль, элч төлөг чи дэрэс шагнасан ширэ-олбогийг засагтун! гэсэнд, төлөг эрүүлийг ишэр нь газарт хатгаж дэр нь тогони эрэсэн бариулыг дэвсэв. Түлай түний дэр гарч сүгэд, бачигтэй улан цасыг дэлгэн баримагш, засаар орулж худлар бичгийг увшсан нь: Хурмст тэнгэрийн зарлигар олон амьтны үл бүтэх хэргийг шалган шийтгэх ямны бичиг. Зарлигар томилон гаргасан замбатэвийн түлай түшмэлд илгэв. Явуулах учир, мөнхөн

манай ямнэс айлтгасан, мүү хортын цэрлүүлэн шийтгэж, зогсов, дэрд олон амьтны зовлонг байсан үзэж, тодорхойлох мэдүүлэр анги хуван томилон гаргасан түшмэлдэс нэр хамт өргөн мэдүүлсэн бичгийн дотро, замбатэв дахь хорт хөх чононүд бол нэг нутгийн чадал мөхөс адүс гэрэсний зэрэг язгууртныг хорлон хөнөх нь маш их. Ялангуяа хүний хөрөнгийн малас булдан хулгайлж, идхэд зөвхөн цацхыг үл хэрэгсэн, хичийн ч бол хомхой сэтгэлдэр бүстэл хядах нь дэнч хэцүү болжэ. Одогос хэсэн залхажгүй бол тэр нь улмар өрнөн хэмжээгүй сүйтгэл хийх нь нэгэнт байдалд илэрхий зэрэг олон учрыг гаргаж, сийрүүлэн захыг эрхийн тул, өргөн мэдүүлжэ. Үнд түшмэл бид, байдал, чононүд хувьсийн хөрөнгөгүй бөгөд, амиа тэжэхийн тул, уг төрсөн үйлийн эрхийг дагаж, мал гэрэсний зэргийг алж идхэс өр аргагүй боловч, зөвхөн цацхыг боддоггүй, харин дэмий л идэмхэй, шаламгайд эрдэж, хүний хөрөн-

гийн малыг хэрэггүйгэр хэтэрхий сүйтгэн хядав гэсэн нь, олон амьтны амь буснаулж хохирлыг үзүлдснэр барахгүй малын эздийг өшө өвөрлүүлэн давхар хорсолыг хуралгах зэрэг эцэстэ амлашгүй зовлонг эдэлхэд хүрнэ. Иймд зүй нь, дарий цэрлүүлэн шийтгэж, тэгж сүйтгэх мүү гэмийг зогсов, дагаж явүүлбал зохих боловч, хэрхэн шийтгүүлэх явдлыг түшмэл бид эрсэн тогтох газар бусын тул, хичэнгүйлэн нугалбар бичиж, хурмаст тэнгэрийн гэгээнэр толилууд, дагаж явүүлхыг гуйна. Үний тул хичэнгүйлэн айлтгав.

Зарлигар гуйна гэд өргөжэ. Одо хүлэн авсан уг нугалбарт зарлигар хорт чононүдыг хэсэн шийтгэхэд түлай түшмэлд томилон гаргаж, тухайлан ширэ олбог нягтдийг түнд олбог, уг хэргийг дүсгагтун, гэснийг хичэнгүйлэн дагатугай. Үний тул зарлигар томилон гаргасан түлай түшмэлд, дэр шагнасан ширэ олбогийг хэрэглүүлэн явуулд, хүрмэгц, уг булгасан дэд зарлигар ёсчлон гүйцэтгэж, төлөг томбоой чадалтай элчийг харьт тэв дотроос түгэр

томилон авч энэ хэргийн хорт хөх чононүдыг йж шийтгэвэл зохихыг хянан тогтмогц гүйцэтгэн шийтгэд, хэрхэн шийтгэсэн явдлыг улмар толилуудан айлтгахад бэлтгүүлэ.

Учир иймийн тул илгэв гэж уншад, түлай хэлэв: За нүгэлт хөх чоно чи сонс! энэ бол таны мүү явдлын боловсорлор сая дэд хурмаст тэнгэр, ингэж зарлиг булгасан хэрэг ажэ. Чи одо өрний сэтгэлдэ өшин гэмшвэл зохихно. Бусад хэнд ч мүү санах хэрэггүй. Иймд одо таны хөх чононүдыг пем пазар авачна. Харин далан чонон арьсар дах нэгийг урлан үйлдүүлж, толилох бэлтгэнэ. Олон амьтны хэргийг шалган шийтгэх яманд хүртүлэд, улмар дэш өргөн айлтүүлна. Гэд төлгийн зүг хэлсэн нь: За элч төлөг чи энэ хорт хөх чононүд одо дарий хүчлэн барьж, цазар авчхад бэлтэг гэсэнд, төлөг, зэгэд почмогбэр үсэрхийлэн түнийг барихар завдмагц, чоно үнэ мшиж, айн хялсхийн харж, ухасхийн зугтаж очив гэнэ. Ингэж түлай нөхөр нь аргацаж, төлгийн амийг авран, гэрт нь хүргэн жаргуулав.

(Ардын аман зохиол)

## Говийн зоригтон.

Их говийн хүнд, Удам сайхан сэтгэлтэй, тэд, хатуу бэрх байгальтай тэмцэхдэ бие биендэ чин сэтгэлэр тусалдаг найртай сайхан, сэтгэлгэ төгөлдөр улс юм.

Хүний нүдэнд товойж үзэгдэхгүй жирийн хүн юм үү дэ гэж бодмэр улсын чин зориг чадлыг ямар ч анкэтэр хянан мэдэж, хүний сэтгэлийн агүү ямар ч анкэтэр хянан магадлаж болдоггүй дэ. Цасан талын дунд Дорноговь аймгийн Баянмөнх сумын төв дэр, сумын дарга Балдан, өвгөн Дамбадаржа нар өвөлжиж байв. 1944 оны арван хоёрдугар сарын тэр нэгэн шөнө ер бусын их чимэ гархад, нойрын дунд цочия чагнахад түг түмэн адүны түвэргэн, цасны шажигнах аялгүтэй хавсралцай сонсдов. Дохд өгссөн мэт Балдан, Дамбадаржа нар нэг зэрэг хөдсөн хөнжилтэй халуун хэйтэшигэс яралтайгэр хувшалж, түргэн зүр гарч их чимэний зүг ажиглавал, үрийн харанхуйгэр шүрганд түгдсэн үй түмэн адүны түрүч нь бараг тулан ирэв.

Энэ олон адү аялгүд авал хил давчих нь э гэж хоёр хөрш нар бие биений бодсон саяг ганц үгэр хэдний мэдэл-

цэд, сумын төвийн тэр хот айлынхныг босгох гэж яран сангаан гүвэ. Удалгүй аймгийн төв рүү, бас хилийн пэргийн зүг рүү элч давхиж, салхинд урудаж явч маш олон адү хилийн зүг тэмцэн дайрч явна гэж мэдэгдхэр давхицгав.

Идэр залуу Балдан ойр хавийн малчинд хүндтэй өвгөн Дамбадаржа хоёр тэр өглө жарад хүнийг дайчлан цуглуулав. Нэгэн бяцхан баг, муртл хүн гулзалсан урт урга барьшган мордож, хоёр анги болод, хэдэн арван километр үргэлжилсэм, хоёр зах нь харагдахгүй их адүны өмнөр хашгиралдан давхицаж, тогтон зогсөх гэж орсодов.

Хэнтий, Төв, Дорноговь, Дундговь аймгас пан хөрөг болсон малчин ардуд, шүргана уруудулан алдсан адүныха хойнос цөхрөн явж байхад шүрганд торох тогтох мэдэлгүй замда дайралдсан амьтан бүхнийг хамран урудаж явсан далан мянган адүныха сургар ирэгэсэн эрэлчин, тэр сумын бяцхан төвийн хэдэн айлар дүрэв. Хүн айл цөнтэй тэр газар, олон амьтан хүрч ирсэн дэрэс эрэлчин, айлын гэрт, галын

дэргэд сүсанда тэсгэлгүй баярдалцай, багтан ядан чихэлдэн сүсан чигэрэ хонодог байв. Ардудын салхинд уруудан шогшиж явч хэдэн түмэн адүтай шөнө нойргүй ноцолдож байхад, Дамбадаржгийн гэрийн нэгэн зөлон сэтгэлт авгай, холбос өлсөн дэрч ирсэн эрэлчин зочлод халуун хөл хийж өг гэж өдөр шөнөгүй гал өрлөж тогтобо гал дэрэс авах чөлөгүй байв.

За, нэг ч адүг тэрлү алдалгүй тогтож авлаад гэж Балдан дун цаган шүдэ гялалзуулан ташуурра харийн газрын үл үзэгдэх хилийн шугам гарсан, манай будан татсан өргөн цаган талыг зэж хэлхэд олны хөрөнгийг хамгалж авлаад. Энэ бол бидэнд тусалсан, энэ олон ачтан ах дү нарын ачид. Тэр үгүй бол чи бид хоёр дийлж барахгүй сан гэж өвгөн Дамбадаржа, ерийн нэгэн ажил хийсэн байдалтайгэр жирийнхэ үгийг хэлэд, бие зэмлэн буруушах мэт ниймсэглэн, улс цас, намагт нас дарж дэ, бие баян яларчихсан байх шөнө Одо халуун цай үвал ютай сайхан байх бол? өтлөх гэж нийм л байдаг юм байна дэ гэж хэлжэ.

Б. РИНЧИН

Улаанбаатар. Монгол

улсын хэрлэх үндэстэй хэлүүлэв. Хариуцалатай эрхлэгч Ц. Дамдинсүрэн

「モンゴルの新文字は文化の大切な鍵—共に新文字を学ぼう—」

ツェンディーン (ダムディンスレン)

Монголын шинэ үсэг бол соёлын эрхэм түлхүүр юм.

### шинэ үсгийг сурцгъя

Манай монголчүд уйгүрын үсгийг авч хэргэлсэр долō найман зүн жил болов. Энэ монгол үсгийн дутагдалтай болох учрыг монголын сэхэтэн анх хэдийнэс мэдсэр байсан ба засамжилхыг оролдсөр иржэ.

Жишэлбэл: гадāдын Энэтхэг, Төвд, Хятадын үгийг бичиж болохгүй байхад фа, за зэргийн үсгийг нэмж зохиōжэ.

Яриāны үгийг тэр хэлдэг хэвэр нь монгол үсгэр бичиж болохгүй учрās барун монголчүд тод үсгийг зохиōжээ.

Гэвч өнөдөр монголын үсэг, аж амьдрал оргин хөгжиж бадран мандаж байхад түний хурц зэвсэг болж харāхан чадахгүй, харин зарим зүйлд бōгдүлах зүйл болж байна.

Ганц жишэг хэлбэл, хүчин монгол үсгэр бичсэн tede гэдэг үгийг, тэдэ, дэдэ, тата, дада, тэтэ, дэтэ, тата, дата, найман янзаар уншиж болох байна. Энэ бол нэгтэгүр хүнд сурхад хэцү болхōс гадна нөгөтэгүр үгийг тодорхой нарийн бичиж болшгүй болгож байна. Бас хүчин монгол үсгэр одōгийн яриāны зарим хар үгийг бичих аргагүй. Жишэлбэл: хāнās гэдэг үгийг qamiγa-аца (Хамига-аца) гэж бичхэс өр аргагүй.

Бас, од, от, одō гэдэг гурван ондō утгатай үгийг хүчин монгол үсгэр ялгаж бичиж болдоггүй. Түнэс гадна шинжлэх ухāны тō, химийн нэр томьё?лол, гадāдын хүний нэр зэргийг бичхэд бас бүдүлэгдэд болдоггүй зүйл олон бий.

Ийм учир монголын шинэ хөгжилд зохилдүлсан орос монголын соёлын найрамдлыг улмār зузātгасār байгāг анхāралдā авч олны сурхын хялбарыг бодож орос үсгийг үндсэлсэн шинэ үсгийг авч хэргэлхэр манай Намын Төв Хорō ба Засгийн Газрās 1941 онд тогтōсон байна. Түнэс хойш энэ хэдхэн жилийн дотор манай ојотан сурагч, малчин ард нийтэр шинэ үсгийг маш дуртайгār сурцгāj байна.

Шинэ үсэг бол манай хэлэнд чухам тохирсон нарийн сайн үсэг юм. Түнийг сурхад хялбар. Яриāны хэлэр бичиж болно.

Цэндийн.

Т. ルハグワー「小・中学校に新文字で印刷された教科書が」

**бага дунд сургүлинүд шинэ үсгэр хэвлэгдсэн сурах бичигтэй болжэ.**

1941 оны гуравдугар сард Намын Төв Хорō, Ардын Сайд нарын Зөвлөлийн хавсарсан хурлās монголын хўчин бичгийг шинэ үсэг дэр шилжүлэх тухай тогтōлыг гаргажэ.

Энэ тогтōлыг биелүлэх үндсэн дэр Ардыг Гэгэрүлэх ямнās бүх сургүлийн сурагчдыг үндэсний шинэ үсэгт сургах явдлыг онцлон үзэж, бага дунд сургүлинүдэд үзэх сурах бичгийг шинэ үсгэр хэвэлдэг болов. Бага сургүлийн сурах бичгийг бүгдийг шинэ үсгэр хэвэлсэн ба дунд сургүлийн зарим сурах бичгийг шинэ үсгэр хэвэлжэ. Жишэлбэл: 1, 2, 3, 4 дүгэр ангиүдэд үзэх хэлний зүй, үсэглэл, унших бичиг, арифметика, байгаль мөн 4, 7 дугār ангид судлах монгол орны газрын зүй, бас 5 дугār ангид үзэх ургамлын судлал ба сурагчийн дүрэм, багш нарт тусламж гэдэг сэтгүл, бага сургүлинүдын прогрāмм зэрэг 20 гаруй төрлийн номүд шинэ үсгэр хэвлэгдэн гарчэ. Түнчлэн 1945 онд бага сургүлинүдын бүх суралцах номүдыг шинэ үсгэр хэвэлж гаргах ба бүрэн бус дунд сургүлинүдын үндсэн хичэлүдийн сурах бичгийг шинэ үсгэр хэвлэн гаргахār бэлтгэж байна.

Нийт багш нар, хичэлийн конспект, үйлдвэрийн төлбөлгө, журналыг шинэ үсгэр үйлдэж хөтөлдөг болжэ.

Гэвч багш, сурагчдās шинэ үсгэр хэвлэгдсэн сурах бичиг, үгүлэл, шүлэг найрүлга зэргийг унших явдал хангалтгүй байна. Шинэ үсгэр хэвлэгдсэн бүх зүйлийг цуцалтгүй уншиж тус тусын соёл боловсорлын хөгжилтөнд алхам болсон шинэ үсэгт улам чанартай сайнār суралцагтун!

Т. Лхагвā